
3年B組ハーデス先生

トッシー 00

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3年B組ハーデス先生

【Nコード】

N2781M

【作者名】

トッシー00

【あらすじ】

この話は及びこの世界観は、2D対戦格闘ゲーム、「BLAZB LUE」の2次創作である……

「ブレイブルーしたらば掲示板の人気スレ」3年B組ハーデス先生”
を題材とした小説

ラグナを中心にブレイブルーのキャラクター達が学園で大暴れ！

「見せてやるよ・・・家庭の味を！！」

プロローグ：3年B組ハーデス先生（前書き）

こちらは暇があったら書いていこうと思っています。

ブレイブルーしたらば掲示板の人気スレッド”3年B組ハーデス先生”を小説にしてみました。

原版の方も、興味があったらぜひのぞいてみてください、私もたまに書いています。

プロローグ：3年B組ハーデス先生

ここはカグツチ市、ブレイブルー学園・・・

ブレイブルー学園の教師”ラグナ・ザ・ブラッドエッジ”は、今日も仕事に励んでいた。

「はい、授業始めつぞ〜」

ラグナの一声で、クラス委員長のノエルが号令をかける。

「規律・・・れい・・・着席!」

そして皆、席につく・・・

「はいよくできましたね、やったね”ない人”」

「先生、いきなり失礼じゃないですかそれ？」

ラグナ先生はいきなりノエルにつっかかる。

「あん？お前だつて乳がないだけの女だろ？乳がないのが仕事だろ、つっか乳無さすぎだなおい〜」

「いきなり失礼すぎるでしょ!! つつかさっきから乳無いしか言っていないよね!? 始まって早々胸の話しかしてないよね!？」

・ノエルは全力でツツコミを入れるが、ほかの人の反応はというと・・・

「うるさいぞない人、ないんだからしょうがないニヤス」
「ないのはな」

「授業が始まってますよ、ナイチチ先輩」

「う．．．うええええええええええええええええん！！」
「おゝ今日も元気だゝ」

今日も学園は平和です。

キャラ紹介？（前書き）

キャラ紹介です。

全員が原作のキャラです。私が小説で出したオリキャラは一切出てきません

設定はしたらばのハーデススレを参照にしています。

キャラ紹介？

？ラグナ・ザ・ブラッドエッジ

ブレイブルー学園の教師で3年B組の担任、銀髪でオッドアイと教師あるまじき恰好をしている。

ぶっきらぼうでめんどくさがりだが、生徒を一人一人大事にしたり、生徒も彼を慕っている。

ほかの教師たちとは仲がよく、特にハクメン先生と一緒にいる。

趣味は料理、主に家庭科の授業を担当している。

ノエルの料理に殺されかけた回数・・・プライスレス

？ノエル・ヴァーミリオン

ブレイブルー学園3年B組の生徒、通称”ナイチチ” この作品のツッコミ担当

とにかくおっぱいが無いため、よくラグナにバカにされている。

成績もあまりよい方ではなく、運動も特に得意という方ではないが元気だけはある。

趣味はインターネット、料理をよくしているが、作るたびに人が死にかけることで有名

怒ると変身する。

？ハクメン先生

ブレイブルー学園の教頭、時には厳しく時には優しい

”ハクメン”ではなく”ハクメン先生”である。後ろに先生とつけるのがデフォルト

口癖は「ズエア」、事あることに言っている。時々シニールなボケをかます。

顔文字（　　）のおかげもあり、ハーデススレでは屈指の人気と登場回数をほこる。

ハザマ先生や獣兵衛とは同級生、ちなみ学生時代は”ジン”と呼ばれていた（本人は即座に否定していたが・・・）。

キャラ紹介？（後書き）

とりあえず3人です。

まだまだいるのでそれは後日にでも

第1話：恋のカレーは殺人カレー（前書き）

第1話です。

タイトルがネタバレですね

第1話：恋のカレーは殺人カレー

ブレイブルー学園、家庭科の授業

今日のテーマは、みんな大好き”カレーです”

「というわけでこれからカレーを作る、ついでだから面白いことを考えた。」

「おもしろいこと？ いったいなんですかね？」

「ノエル、おまえにはまったくもって関係のないことだ。」

「ラグナ先生ひどー!!」

ノエルは少しだけカチンときた・・・

「俺はこれでも料理自慢だ、そこで、俺が最も気に入ったカレーを作ったやつを成績を少しだけあげてやろう!!」

この言葉を聞いて、生徒達は俄然やる気を出す。

「成績があがる・・・よし、私もがんばり・・・」

「ノエルは、今日はもう帰っていいぞ」

「なんでですかーーーーー!!?」

ラグナの一言にノエルは反論した。

「だってお前が作るカレーだろ？俺まだ死にたくないし」
「いやいや！今度は大丈夫ですって！！」

ノエルは念に念を押す・・・
まあ・・・押したところで彼女の料理がうまくなるわけでもないが・
・

「じゃあねえな、お前また殺人的な料理作ったら成績むちゃくちゃ下げるからな」

「が・・・がんばります！！」

「まあ俺だけ食うわけにはいかないんで、審査員を三人ほど呼んできたぞ」

「レイチエル校長です、みなさんおいしい料理を作ってちょうだい」
「ハクメン教頭だ、私も料理にはうるさくてな」

「熱き熱血教師シシガミ・バングでござるー！！」

「レイチエル校長、ハクメン先生、バング先生、そして俺、四人で評価するから」

「がんばります、そして・・・先生に認めてもらって・・・むふふふふ」

「教頭、ノエルの料理はあなたが全部食べなさい」

「はははは校長、学校の代表としてお前が食べるべきだろう」

「なら、間を取ってバング先生、あなたが飲み干しなさい」

「拙者がでござるかー！ー！？やはり代表のラグナ先生が・・・」

「いやいやいや、ノエルの料理はな、ぜひとも先生方に食べさせた
いなゝなんて」

「私ってそんなにだめですかね・・・」

「（四人そろって）ああ、まるでだめだ！ー！」

「ひどー！！」

そしてノエルの戦いは始まった・・・

全てを見返すために・・・

「えゝと、とりあえず材料はたくさんあるしゝ」

「あゝ、個性を出そうと思ってるんな食材集めたのがまずかった
なゝ」

「うゝん・・・とりあえず好きにやつちゃえ」

といいながらノエルが最初にやらかしたことは・・・
おでん汁を煮込み始めた・・・

「なんでじゃー！ー！ー！！」

「おお、ラグナ先生が珍しく突っ込んだぞ」

「ノエル、やっぱお前かえ・・・」

「ふふふん、ふふん」

「先生、彼女はもう自分の世界に入っているわ・・・」

「う・・・うう・・・」

「スパイスはどうしようかな、そういえば塩入れるといいつてツバキが言ってたような」

そう言つてノエルが取り出したのは・・・

”砂糖”であつた・・・

「・・・」

「先生！しっかりするでござるよ！！」

「ズエア！これは神に祈るしかないようだな・・・」

その後ノエルは自分を信じて料理を進めた。

ニンジン、玉ねぎは皮をむかずに鍋にダイブ

肉は半生

カレールーは自分で作ると言つて、できあがつたのは焦げの塊であつた。

「次は・・・いよいよノエルのカレーか・・・」

「バング先生、どこへ行くのかしら？」

「ギクウ！」

「お気を確かにでござる!!」
「今すぐ救護班を!!」

「そ．．．そこまでひどいの．．．かな？」
「ノエル!! ああもうこれだからお前は!!」
「す．．．すいませ〜ん．．．」

そう言つてラグナ先生は、その黒き獣よりも禍々しいカレーを捨てようとするが．．．

「せ．．．先生、その．．．せめて一口くらい．．．」
「ああ!?! こんなもん食えるわけねえだろうが!!」

ラグナ先生の一言に、年頃の少女は思わず涙を見せてしまった．．．

「う．．．うう．．．」
「う!?!」
「だってえ．．．先生のために．．．私．．．わたしい．．．」
「な．．．泣いたってなあ．．．」

その時、熱き熱血教師の一言がラグナ先生を突き動かす。

「先生、生徒が一生懸命作ったのでござる、それを食べてあげるの

が・・・教師のつとめではござらぬか？」

「バング先生・・・」

「そうよラグナ、教師失格よ？」

「校長・・・・・・・・マジかよ・・・」

そしてラグナ先生は覚悟を決めた。

「わあつたよ・・・・・・・・第666拘束機関解放！次元干涉虚数方陣展開！！」

「蒼の魔導書^{ブレイブルー}」、起動——————！！」

「ラグナ先生がブレイブルーを使ったでござるよ！！」

「本気なのね・・・ラグナ先生」

「いただきま——————す！！」

そして・・・

「ぐあああああああああ！ぐおおおおおおおおおおおおお
おおおおお！！」

[illegible]

ボタン・

「蒼の魔導書を使つても……耐えられなかつたでござるか……」

「……料理……勉強しよう」

そして今日もまた、ノエルの料理によって犠牲が出るのであった。

キャラ紹介？（前書き）

キャラ紹介？です。

キャラの設定はハーデススレを参照にしています。

キャラ紹介？

？ジン・キサラギ

ブレイブルー学園3年A組の生徒でBB学園の生徒会長

兄さんのラグナがとにかく大好きで、逆にノエルが大っ嫌い
ノエルたちから”先輩”と呼ばれているが、同じ学年である。

兄さんを見つけると叫びながら駆け寄ってきて、ラグナにシザーさ
れるのが日課。

世間的には（ラグナの陰謀で）ニューと付き合ってることになって
いる。

？レイチエル・アルカード

ブレイブルー学園の校長、これでも長生きしておりBB学園開校初
期から学校にいる。

DSで、嫌な事があったり、気まぐれで教師の給料を下げたりする。
奥底ではラグナの事が好きで、ツンデレなところがある。

ハザマ（テルミ）とは仲が悪い、人をからかうのは好きだがからか
われるのは大嫌い

小等部の生徒と間違われることが多々あり、子どもと間違われるの

が一番嫌なんだとか

？カルル・クローバー

ブレイブルー学園3年B組の生徒、姉さんが大好きなシスコン
明らかに小学生なのだが、ノエルやジン達と同じ学年、飛び級とか
ではない。

ニルヴァーナと呼ばれるでっかい人形をつねに持ち歩いているため、
見た目に反して力は強いのだろう

シヨタ要因だが出番は少ない、たまにその腹黒さで屈指のポケキャ
ラと化すことがある。

バレエ部に所属している。

？ニルヴァーナ（エイダ・クローバー）

カルルが常に持ち歩いているでっかい人形、通称”姉さん”

人形だが、たまにしゃべったりする。テレパシーみたいなものを使
えるので意思を伝えることもできる。

あげくの果てにはカルルの体に乗っ取って、無邪気なことをするこ
とまである。

カルルをいじめるものには容赦がなく、おぞましいオーラを放ちそ

の姿は怖い

バレエ部に所属している。

キャラ紹介？（後書き）

キャラ紹介？へ続きます。

第2話：困った時は立ちBとか振っとけばいい（前書き）

第2話です。

タイトルに特に深い意味はありません

第2話：困った時は立ちBとか振っとけばいい

ブレイブルー学園放課後、ノエルは一人補習を受けていた。

「しかし、お前は成績優秀そうに見えて案外駄目な子なんだな。一人だけ補習とか先生スゲー面倒くせーんだけど」

「・・・教師が生徒を駄目な子呼ばわりですか？そういうの思っても言いませんよ普通、いい加減、先生は教育委員会に訴えられてもいいと思います。」

ノエルの言うことはごもつともであつた・・・

「大丈夫だよ、この世界に教育委員会なんてあつたら俺なんかパツイチでクビだよ？大体主人公がいなくなつたらこの小説続かねーじやねえの」

ラグナの言うこともごもつともである。

「・・・言っておきますけど、先生の傍若無人な対応は逐一、この手帳につけてありますからね」

「あれ？お前、そういうキャラだっけ？」

そんな他愛もない話をしていた時、教室の外から何かが聞こえてきた。

ズンチャズンチャズンチャズンチャ・・・♪

「なんか廊下が騒がしいな・・・」

作詞、作曲：ジン・キサラギ

二人きりの時間許すまJIN

兄さんとの蜜月許すまJIN

僕がMUSOU

MUSOUが僕

ハイ、MUSOU！

ガラッ・・・

「霧槍おお！！」

ラグナは歌っているジンに容赦なく攻撃を仕掛けた。

「・・・あ」

「”あ”じゃねーよ、してんのお前こんなところで？」

「いや、違うよ兄さん！これは妨害とかじゃなく、ラップで兄さん

の放課後の沈んだ気分を盛り上げようと・・・」
「うるせえ！！」

ラグナはそんなジンにさらに攻撃を仕掛けた。

「グハアッ！・・・酷いよ兄さん・・・もはやツッコミがインフェルノディバイダーですらないなんて、そんなただの立ちBじゃないか・・・」

それを聞いてラグナは答える。

「バーカ、この世はリーチと早さなんだよ。立ちB振ったときや世の中、大概の事はうまくいくようにできてんだ。」

「まあ、兄さんのそんなところがたまらないわけなんだけど、たまらないわけなんだけど。」

「2回言うな、キメエんだよ。つか、何でよりによってラップをチョイスしたんだよ？意味がわかんねーよ、くたばれよ頼むからくたばってくれよ！！」

「兄さん、これはラップじゃないよ、これは”キサラップ”だよ」「キサラップじゃねーよお前！ラップに包んで窒息させてやるつか！！」

「兄さんのそういう態度、たまらないわけなんだけど・・・」

ジンの変態発言が飛び出したところで、ハクメン先生が現れた・・・

「取り込み中悪いが・・・」

「あ、ハクメン先生どうしたんだ？」

「ジンとノエルに話がある、悪いが職員室まで来てもらいたいんだが、大丈夫か？」

「あーどーぞどーぞ、こんな変態と乳の無い生徒はさっさと持っていつてくれよ」

ラグナは半分疲れた感じで答えた・・・

「すまないな、じゃあノエル、ジン、来なさい」

「あ・・・はい」

「ちっ、なんでこんな障害と・・・」

ジンはさっきとは打って変わって、無茶苦茶いやそうである。

「さて、ノエルが帰ってくるまでなんかおもしろそうなのないかな」
「」

ラグナがそう思っていた時、ラグナの目にあるものが映った。

「手帳・・・そういえばさっきあいつ俺の対応は手帳にメモっていらしたのか・・・」

人の手帳を見るのは、プライバシーの侵害である。
少し悩んだ結果、ラグナ先生が下した決断は・・・

「わかつちやいるが、こんな物が置いてありや見たくなるのが人の情ってモンよ。どれどれ・・・」

見ることにした。

この教師、本当に教師やっついていいのだろうか・・・

「予想に反して普通の手帳だな。つまんねー・・・・・・・・うん？これは！？」

ラグナはある一文に食いついた。

「これ一つでO K！！ノエルの究極レシピ」だど？ブフツ
！！」

ラグナはつい笑ってしまった。

本当にこの男、教師失格である・・・

「あいつ前回あんなカレー作ったのにまだ懲りてねえのか？究極レ

シビじゃなくて究極兵器の間違いじゃねえのか？」

そしてラグナはそこに書いてあるメモに注目する。

「メモがあるな、”焼いた子牛の骨と香味野菜をじっくり煮込み、肉料理に深いコクを与える。相手は死ぬ”……と」

（相手は死ぬ！？なんだこの一文は……何かいけないモノを見た気が……）

「これは……文字が隠されてますね……」

そんな時、カルルがひょっこりと姿を現した。

「うお！？お前いつのまに！？つか、隠されてる文字ってなにが？」

「気付きませんか？」これ一つでOK”……OとKの後に妙な空白がありますよね？」

「オツケーてのを強調したかったんだろ？そんなことより今の問題は相手が死……」

「ペロツ……これは……鉛筆などで軽くこすると文字が見えてくるアレですね」

「今舐めた？ペロツて舐めたよね？手帳舐めたよね？何で手帳舐めただけで鉛筆がどうこうとか分かるの？人間やめてるの？」

ラグナはこの状況でもツツコミをおろそかにはしていなかった。
というか今こんな長いツツコミを入れてる場合なのだろうか……

「そんなことより先生、文字が見えてきましたよ」
「そんなことつてお前、先生の今知りたい不思議第1位にお前の舌が急浮上なんだけど……」

ラグナの疑問は華麗にスルーし、カルルは語り続けた。

「これは……ワン……キル……？」 ONE KILL”!!」

そこに書かれているのは”ワンキル”という文字だった。
ワンキル……ワンターンキルの略である。

「は？ということはこの料理で相手をワンきれるってことか？」
「そういうことになりますね……」
「え？なにこれデスノート？俺は見えてないぞ……何も見てないぞ」

そこに、その手帳の持ち主であるノエルが帰ってきた……

「先生お待たせしました！どうしたんですか？」

「な・・・い・・・いや」なんでもないのでごわすよ」
「ごわす?」

先生は明らかに動揺していた・・・

「そうですよ、何も見ていませんから! けしてワンキ・・・」
「食われる!!」

そう言いかけたカルルを、ラグナはヘルズファングが如くゲンコツをかました・・・

「か・・・カルルくん大丈夫!？」

「こいつ何がワンキだよ、このやろうこのやろう」

「ワンキってなんですか? てかカルルくん白目むいてませんか？」

「大丈夫だから、マイルドだからマイルドだから!!」

ラグナは必死にごまかした。

「ならいいんですが、それよりも先生、ホームパーティーをするんです。お待たせしたお詫びと言ってはなんですけど・・・私、”腕をかけて料理”を!!」

その言葉に、ラグナは刹那よりも早く言い返した・・・

「いやゝなんつーの？先生、お前のその気持ちだけでお腹いっぱい
ってゆーかゝ、ドントキルミーってゆーかゝ」

「えー残念です！！じゃあ補習の方を・・・」

「あー！ー！大丈夫！うん大丈夫！！お前できる子だって信じてる
から！じゃあ気をつけて帰れよ！！」

そう言つてラグナ先生は、逃げるように教室を後にした・・・

「うゝん、料理について相談したかったんだけどな、そうだ！キサ
ラギ先輩につきあつてもらおうと！ラグナ先生の名前で釣れば
来てくれるはず！！」

その夜、ジンが地獄のような目にあつたことは・・・言つまでもない

キャラ紹介？（前書き）

キャラ紹介3です。

設定はハーデススレを参照にしています。

キャラ紹介？

？シシガミ・バング

ブレイブルー学園の熱血教師、愛と勇気と正義に燃える漢

学校に掲げる思いは誰よりも熱いが、その暑苦しさが原因で生徒からは嫌われ気味

口癖は「〜ござる」、ライチに恋愛感情を抱いているが大体は受け流されている。

そのキャラからなのか、ひどい目に会うことが多く、ライチの酒癖に振り回された回数・・・プライスレス

本職は忍者らしい、忍者なのに忍んでいない

？タオカカ

ブレイブルー学園3年B組の生徒、カカ族の戦士

知能は低いが運動能力は高い、食いしん坊で食べ物と聞くととっさに反応する。

口癖は「〜ニヤス」、ニユーやラムダと仲がいい

本編ではポケキャラだが、ハーデススレでは出番が異様に少ない、というより本編がポケキャラなのでこのスレでは個性が出にくいのである。

学校をさぼった回数・・・プライスレス

？ニユー・サートイーン

ブレイブルー学園3年B組の生徒、本作のヤンデレ2号

当初は引きこもりで寡黙だったが、とあるきっかけでラグナ先生に恋をするようになる。

ラグナを見かけるたびに「ラグナー！」と駆け寄ってきて、シザーされるのが日課

使いやすいからなのか、ハーデススレでは常時デレ状態となっている。

ラムダが出た後も（なぜか）ラムダより出番が多い。

キャラ紹介？（後書き）

キャラ紹介？は後日

第3話・引きこもりサーティーン（前書き）

第3話です。

第3話：引きこもりサーティーン

本日ブレイブルー学園では、早朝からある議題が持ち上がっていた。

「えー、ラグナ先生、あなたのクラスのニュー・サーティーンっていう生徒が、最近また休み始めているそうね？」

レイチエル校長はラグナに尋ねる。

「ああ、そういやそうだな、1学期が始まったばかりの時は姿を見せてたのに、最近はまた休み多くなってんな」

「とりあえず3学年まではなんとか進級できてるけれど、休みが多いのは困るわ」

「ということでラグナ先生、今日放課後彼女の家に行って彼女を説得してきて頂戴」

「えー？今日はちょっと用事があるんだよ・・・」

それを聞き、レイチエル校長は遠まわしにこう言った。

「あー、引きこもりの生徒よりもラグナ先生は私用を優先するのね、その私用っていうのも・・・ラブ。ラスなのに・・・」

「だぁーーーーー！わかったわかった行くから！！それ言わないでくれよ！！」

「なんだラグナ先生、お前もやっていたのか」

「ハクメン先生あんたもやってんのかーーーーい！！」

「ハクメン先生、あなたもやっていたのですか」

「私も、今ハマっている・・・」

「拙者も！ああ、拙者はそれでも・・・ライチ殿一途でござるよ、これはライチ殿といつか付き合った時のための・・・」

「バング先生、後で保健室へ来てくださいね」

「うう・・・！？」

ハザマ先生やティガー先生、バング先生もハマっていた。

「まったくこの学校の男たちは・・・とりあえずラグナ先生、放課後のむわね」

「うっす」

そしてニューが住んでいる家へ・・・

「なんで私も一緒なんですか先生？」

「俺一人じゃ説得に欠けるからだ、生徒からのアシストも必要なんだよ」

「いやいや、私だって暇じゃないんですよ・・・」

「うるせえどうせ暇じゃないとか言って家でネットとかしてんだろ
うが？つうかナイチチは胸ないんだからこつというのが担当なんだよ
！！」

「最後の胸無いはいらないよね！？絶対いつか目にモノ見せてやる
から覚悟しとけコノヤロオオオオオ！！」

とかなんとか言ってるうちに、ラグナとノエルはニユーの家に付い
た。

「まあなんつうか、普通の家だな」

「特にお金持ちとかではないみたいですな」

ピンポン・・・

「すいませ〜ん、ピザお持ちしましたー！！」

「先生違っでしょ！？家庭訪問ですよ！！」

「こつというのは先に空気を和ませた方が勝ちなんだよ、これだから
乳の無い女は・・・」

「また言っただなこの野郎！！　って・・・カギ空いてますよ？」

ニユーの家はカギが開いていた。

「んあ？ずいぶんと不要人だな・・・んじゃオジヤマっと」

「いやいや、これ立派な不法侵入ですよ？」

「家庭訪問だからいいの、そういう風に世間はできてんの」
「できてないですって先生」

「あの部屋か・・・」

「”ニューの部屋”って書いてますね」

「ニューの部屋って言うか、あいつ一人暮らしだろうが・・・」

コンコン・・・

「おいニュー、俺だラグナ先生だ、いるんだろ？」

・・・

「まったく反応ねえな・・・」

「やっぱり留守なんじゃ・・・」

「じゃあねえな、強行突破だ・・・」

そう言ってラグナ先生は、ヘルズファングの構えをとった。

「先生ストップ!!」

「んだよ止めんじゃねえよ、ナイチチの癖によ、胸が-Aカップの

癖によ」

「あんたいい加減にしるよおおお！！　じゃなくて！人の家勝手に壊しちゃだめでしょー！！」

「つつてもよお・・・」

その時、その閉じていた扉が、ゆっくりと開いた。

ギギギギギギイ・・・

「・・・・・・・・・・」

「あ・・・ああニューーか、最近休みがちだからな、そのなんだ、心配しに・・・」

「起動・・・起動・・・認識・・・」

「あ・・・あのお？ニューーさん？」

「対象をラグナ先生と認識、それと・・・ナイチチ」

「お前も言うのかそれをーーーーー！！」

「落ち着けてナイチチ！！」

「わああああああああああん！明日から学校なんか休んでやるーーーーー！！」

「お前まで引きこもってどうするつもりだ！？」

そんな会話をしていたら、開いた扉は閉じてしまった・・・

「あ！？おいニューー！！出てこい！！」

「やだ・・・出たくなかない」

「おいおい、学校は楽しいところだぞ！？レッツパーティーできるところだぞ！？」

「ニユーは、人と接するのが苦手・・・」

その言葉を聞き、ラグナは少々苛立って言葉を返した。

「人と接するのが苦手なあ？努力もしないでそんなこと言ってんじやねえよこら！！」

「せ・・・先生・・・」

「・・・・・・」

「人と人との繋がりを学ぶのが学校なんじゃねえのか？そうやっていろんなもん学んで、人は成長していくんだよ！」

「・・・・・・」

「学校に来もしないで、そんな甘いこと言ってんじやねえよこのバカ！！」

「先生！！」

ボタン！！

その扉は勢いよく開き、ニユーは走って家から逃げに行った・・・

「おい待て！ニユー！！」

学校の屋上にて・・・

「どうしよう・・・こんなとこまで来ちゃったし・・・死のうかな」

ニユーは今にも飛び込みそうな勢いだっただ、そんな時・・・

「困っている生徒の味方、ハクメン先生だ!!」

「ハクメン先生？」

「どうしたニユーよ、こんなところで落ち込んで・・・」

「今日ラグナ先生に怒られたんだ、甘えるなっただけ・・・」

「そうか・・・」

「だけど、私は人と接するのが苦手なんだ、それをどうしていいかわからないのに・・・」

それを聞き、ハクメン先生は答える。

「いきなり多人数の人間と接しようと努力しなくてもいい、人と接するのが苦手なら、まずは一人の人間に一途になっただけでいいんだよ？」

「一途に？」

「そうだな、お前が毎日学校にきて、一生懸命頑張っただけで人に声をかけて、この人なら信じられる、この人なら私は変わるって人を見つければいいんだよ。」

「で・・・でも・・・」

「おっと、とか言っているうちに、お前を変えてくれそうなやつが

来たな」

「え．．．？」

そこにいたのは、ラグナ先生だった。

「ニュー！探したぞ．．．」

「ラグナ．．．先生．．．」

「すまなかつたな、その．．．言いすぎたわ」

「先生．．．私こそ．．．ごめんなさい」

その素直なニューを見て、ラグナはこう返した。

「明日からきちんと学校に来いよ、先生はお前の味方だ、お前をいじめるやつがいたら守ってやるから．．．だから、もう人と接するのが苦手なんて言っんじゃないぞ」

「ラグナ先生．．．信じて．．．いいの？」

「．．．ああ」

その時、心を閉ざしていた少女の目から涙がこぼれた．．．

「う．．．わああああああああああああああん！！」

「おいおい……いきなり抱きつくんじゃねえよ……」

「私の出番は……ここまでだな」

孤独から解き放たれた少女を見て、ハクメン先生はそつとその場から去って行った……

そして次の日……

「ラグナー！ねえラグナー！！」

「ああもつつつせえなおい！俺は違う授業があんの！！」

「一緒に行こうよ、ねえラグナー！！」

「お前は自分の授業を受けろつての！！」

「貴様……兄さんは……僕のものだああああ！！」
「俺は誰のものでもねえ……………！！」

そう言ってラグナはジンとニューを二人まとめてシザーする。

「うん、まさかこのような結果になるとはな〜」

ハクメン先生は一人つぶやいた・・・

キャラ紹介？（前書き）

キャラ紹介4です。

設定はハーデススレを（ry

キャラ紹介？

？ライチ・フェイ・リン

ブレイブルー学園の保険医、美人でおっぱいがでかい。

どんな些細な怪我でも直し、誰にも優しく接し、時には厳しいことを言うこともある。

バングに好意を抱かれているが受け流している、タオカカとも仲がいい

酒を飲むと暴走する、その被害は数知れず、死にかけたという報告も多い（特にバング）

基本的に出番が少ないキャラの一人

？ハザマ（テルミ）

ブレイブルー学園の教師、帽子がトレードマーク

常に笑顔を絶やさないイケメン教師、温厚そうな外見で女子からは多少人気がある。

キレると無茶苦茶怖く（というかそつちが本性）、暴走するとチンピラみたいになる。学生時代は”テルミ”と呼ばれており、かなりのヤンキーであった。

ハクメン達とは昔の同級生、レイチエルの教え子であるが彼女とは

喧嘩が絶えない

本編ほど憎たらしくはなく、どっちかというと憎みきれないキャラにされている。

？アイアン・ティガー

ブレイブルー学園の教師、とにかくでかい

でかい上に体の一部が機械化しているが、本人は義手と言っている。ココノエ先生とは仲がよく、その性格から生徒から慕われている。

当初は「超電磁！」しか言わないキャラだった、ココノエが出てから出番は多少増えたが、後から出たココノエの方が圧倒的に出番が多い

こいつの活躍の場と言ったら、なんといってもA Aスレであろう

キャラ紹介？（後書き）

キャラ紹介5に続きます。

第4話：お酒は二十歳になってから（前編）（前書き）

第4話です。

今回は前編後編に分かれています。

第4話：お酒は二十歳になってから（前編）

ブレイブルー学園では、今とある計画が動いていた・・・

「はあ、保健室勤務は退屈ね。ここの生徒タフだから滅多に保健室来ないし。まあ良いことではあるんだけど・・・ん？」

「おいハクメン。」例の計画”、進んでるんだろうな？」

「順調だ。2%も遅れていない」

（例の計画・・・何のことかしら。ていうか。何故私は隠れたのか。盗み聞きは良くないわね。）

ライチは思わず気になり二人に声をかけようとした時、二人からこんな会話が流れた。

「そちらこそ、ライチ先生には気取られていないだろうな？」

（え・・・？）

「たりめーだ。奴にバレたら台なしだからな」

（いったいどういうこと？）

「そのとおりだ。では詳細はまた後ほど。教員達への伝達は頼んだぞ」

「任せとけ。ライチ先生と生徒以外には知らせとく」

その会話を聞いたライチは、二人に妙な疑問を抱く・・・

（生徒と・・・”私”以外？何よ？一体なんなの！？私が一体なにをしたって言うのよ！）

「おつといけねえ。じゃあそろそろ行くわ」

「ああ。楽しい一日になるよう全力で練ろう」

（私だけをハブいて楽しい計画・・・そんなの絶対許さないんだから・・・まず尋問ね。場合によっては拷問になるわよ？うふふふ、さあてどっちから吐かせてやろうかしら・・・）

ライチは心の中でひっそりと炎を燃やした。

「ハクメン先生は口が堅そうで面倒ね。となるとラグナ先生・・・下準備が必要だわ」

「ライチせんせゝ指切っちゃいましたあゝ」

「天は我に見方せり！！」

保健室に入ってきたノエルを見て、ライチの眼は光った。

「え？今なんて・・・」

「いえいえなんでもないわよ？じゃあちゃっちゃと手当てするわよ

」

「なんか今日のライチ先生怪しい・・・」

「えい、ベホマ」

ライチ先生はベホマを唱えた。

「ちょ！？怪しい！？」

「はい完治」

「マジでー！ー！？」

「怪我治したお礼にちょっと付き合っで欲しいんだけど・・・」

「保健医なのに生徒の怪我治してお礼要求するんですか？まあいいですけど」

「ニヤリ・・・」

ライチは”じごくへのかたみちキップ”をてにいった！

「ちょっと！？今凄く不穏なテロップ流れませんでした！？」

「気にしない気にしない」

そして放課後・・・

「ふ・・・今日も一日が終わったな。あつと、ハクメンのところに
行って最後の詰めを」

「ラーグナせんせっ！」

「うおっ！？」

「あゝら、どうしたんですか？声かけただけでそんなに驚くなんて・
・・・」

「ららら・・・ライチせんせい？な、なんでもねえよ。ちょっと氣
い抜いてたところから焦っ」

「そうですか。確かに放課後って一気に楽になりますよね。うふふ
っ」

ライチのそのなんとも言えない笑みを見て、ラグナは焦りを見せる。
・

（な、なんなんだ・・・なんか喋り方に少しとげを感じるような。
ま、まさかバレたか！？いやそんなはずはねえ・・・）

「お疲れのところに甘いクッキーはいかが？以前ラグナ先生が仰っ
ていた方法で作ってみたんですけど」

（一刻も早くこの場を離れたいが・・・不信感を与えるのはまずい
か）

「ラグナ先生？」

「あ・・・ああ、ただくぜ！」

パクリ・・・

そのクッキーを食べた瞬間、ラグナの中で何かがはじけた

「しょーへきかいふおおおう！？」

「あらやだ脊髄バースト」

「あ、あ、あんじゃこらあああああ！！俺はこんな核兵器の作り
方言った覚えはねえぞ！？」

「また大げさな、たかがクッキーじゃない」

「こんなもんクッキーじゃねえ！クッキーは、甘いとかサクサクと

かしつとりだろ！？これすっぱくてべとべとでぬめついてんでよ！
おまけにくせえ！」

「変ねえ。ちゃんと教わったとおりに作ったはずなのだけど・・・

”ノエルちゃん”が」

「あゝのゝクソアマアア！」

「ま、隠し味とか言っつてしめ鯖とかオリーブオイルとかペースト状にした納豆とか練りこんでたけど。」ライチ先生はラグナ先生と違ってレシピ強要しないから楽しいです！」って喜んでたわあ」

（なんなんだこいつ・・・一体何が目的だ！？）

「さて本題に移りましょう。ラグナ先生、私に何か隠し事してませんこと？」

「隠し事？そりやするさ。」仲間には隠し事なんてしない！」とか言い出すほど俺はK1やってない」

「あは、なかなか嘘が上手ですね。」隠し事なんて無い」とか陳腐なこと言わないのは好印象です。」

（こ、こええ。今日のライチ先生超こええ）

「でもねラグナ先生。私見てしまったの。こないだあなたとハクメン先生が私と生徒をハブいて”楽しい計画”を建てているところをね」

「な、なんのことだかさっぱりわからねえな。俺がなんであんなキモいお面野郎とお楽しみにならないといけねえんだ」

「やれやれ。どうやら武力行使の必要がありそうね」

「来るならきやがれ。こつちだつてCSでしこたま強化されたんだからな！？」

そついうラグナに、ライチ先生はこう言った・・・

「先生。貴方さっき”覚悟”しちゃったわよね？バーストで相手の攻撃を防ぐということは、もう一度相手にターンを取られた時に簡単にガークラされてしまうことを”覚悟”したってことよね？私は国士もろもろ使いやすい技にプライマ削りが追加されているのだけど・・・」

すでにラグナのブレイクバーストは尽きていた。

ラグナは確かに強化されたが、巷のゲーセンで荒れまくっているSランクとまで呼ばれているライチに
にわかSランクのラグナが勝てるはずもなく・・・

「き、貴様。あのクッキーはその為に!？」

「すでに設置は完了しているわ。あとは発動するだけ・・・」

「ま、待つてくれえ!!」

「いいや限界だ!押すね!『国士無双』!」

「ぎゃああああああああ!!・・・あ?」

「と、なりたくなければ洗いざらい吐きなさい」

「う、うええええん!!」

そして・・・

「で、結局楽しい計画って一体なんなのかしら?いくら私でもそういうものを隠されると流石に不愉快です!!」

「俺たちはただ、”飲み会”を企画してるだけなんだが」

「ツ・バ・メ・返しい！」

「いてえ！？何しやがる！」

「私差し置いて飲み会とかどういうこと！？唯一立ってるのん兵衛キアラなのに！」

「そ、それだよ！あんたやり過ぎたんだ！！あんたと飲み会に行くと酒量が半端じゃなくなる。飲み会最中はおるか二日酔いも酷い。俺たちはもつと楽しく飲みたいんだ！！」

「ふ、ふふふふ……うふふふふふ……」

「な、なあ。もういいだろ？俺の知ってることはもう全部言っただ見逃してくれよ！」

「まるで流悪役ね。斬る価値も無いわ。お行きなさい」

「どうせ俺はヘタレ主人公だよ！どっかのマイコーにも観客呼ばわりだよ！うええええん！！」

「さあて、これから楽しくなりそうね」

虚空陣奥義……夢幻！虚空陣奥義……夢幻！虚空陣奥義……

夢ap!ッ

「ラグナ先生からメールか。何々？「じいちゃんの寿命がストレスでマッハ。実家に帰るから飲み会は欠席する。」なんだアレほど楽しみにしていたというのに」

ピッピッピッ

「もしもし庄。カグツチ店ですか？すまないがブレイブルー学園御一行一名キャンセルで。はい……はい……日時は変更無しで・

・
L

そして、地獄の一夜は刻々と近づいていく・・・

第4話・お酒は二十歳になってから（前編）（後書き）

後編へ続く

第5話・お酒は二十歳になってから（後編）（前書き）

第5話です。

第5話：お酒は二十歳になってから（後編）

そして計画の実行日がやってきた・・・

「待ちに待ったぞ・・・この日を！」

「ああ、長かった・・・」

「まあ、たまにはこういうのも良いかしらね」

メンバーはハクメン先生、ティガー、レイチェル校長、ハザマ、コノエ、バング
ライチが来ないということがよほどうれしいのだろう、皆は盛り上がりを見せていた。

「飲み会にあいつが来ないというだけでこつも高ぶるとはな・・・正直自分でも驚きだ。」

「そ、そんなに凄いですかライチ先生の飲みっぷりは？そこまで言われると一度見てみたい気も・・・」

「止めておけハザマ先生、好奇心は蛇をも殺すぞ」

「コノエ先生、それを言うなら”猫をも殺す”では？」

「何を言う？私は死なん！！」

「もう訳がわかりません」

「珍しくはっちゃけてるわね」

そんな歓喜極まる状況の中、一人だけ罪悪感に見舞われている漢がいた。

「……………」

「どうしたバング。こんな楽しい日に沈んだ顔して？」

「うむ、自己防衛のためとはいえやはりライチ殿を除け者にしたのはやはり心苦しいでござる。」

「ふ、相変わらずだな。だが奴を参加させて一番被害を被るのはお前だぞ？」

「まったくだ。あいつのぶっ飛んだピッチに無理についていこうとするし」

「まあライチ対策はいずれまた考えるとして、今日はただ楽しもうじゃないか」

「……………そうでござるな！ライチ殿には申し訳ないが、今日は楽しむでござる！！」

「それでこそお前だ。さあ着いたぞ。ここが庄。カグツチ店だ！！」

そしてハクメン先生御一行は、庄。カグツチ店に入っていく。

「らっしやーせー！」

「ブレイブルー学園御一行で予約したハクメンだが」

「あ、ハクメン様ですね！お待ちしております！御席こちらになつております。」

「ああ、ありがとう」

そして皆は席につく

「ふう、では注文か。まあとりあえず全員ビールでいいよな？」

「あーすみません、私ビールは苦手なんですよ・・・カシスオレングジ頂けますか？」

「ハザマ先生好き嫌いやたら多いな」

「私もビールじゃなくてスクリュードライバーを頂こうかしら」

「はいかしこまりましたー！！」

皆が注文してる際、ここでココノエ先生の豆知識が飛び出す。

「ちなみにスクリュードライバーの名は昔低賃金労働者がカクテルを作る時にドライバーで混ぜたことから由来している。」

「さすがはココノエ先生、物知りだな」

「それほどでもない」

「飲み安い割にアルコール強いから女性を酔わせるのに良いらしいわよ。ロマ。ガで同名の小剣技に女性特効が付いてるのはそのため」

「流石レイチエル校長ネタが古い！伊達に歳取ってあばばばば！？」

「馬鹿な！CSのゲオルグは風が無ければよちよち歩きしか出来なくなっただけですよ！？」

「校長たる者CT仕様よバング先生」

「つまみは・・・まあから揚げや串盛り頼んでおけば間違いは無い
か」

「あ、言うまでもないですけどゆで卵もお願いしますよ」

「出たなゆで卵」

「5個ほど」

「多いなおい！」

「まあ最初はとりあえずそんなものでいいでしょう。足りなければまた頼めばいいですし」

「いったい何個食べる気だお前は！？」

ハザマ先生のゆで卵への愛をティガーが突っ込んでいる時、ココノエ先生が衝撃の一言を発した。

「どうでもいいが、メニューにゆで卵がないぞ」

「何故に！？」

「メニューに単品ゆで卵なんか載ってる店のほうが少ないと思うけど」

徐々にハザマ先生から邪気が漏れ出していく・・・

「そのメニューは嘘だ！嘘だらけだ！」

「メニューが嘘って何よ？」

「はぁ・・・ちよつと厨房・・・じゃなくてトイレに言ってきます。」

「あ・・・ああ」

そしてハザマ先生はオーラを発しながら歩いて行った・・・

「なんか今ハザマ先生の周りに緑色のオーラが見えた気がするでこ

ざる・・・」

「帽子の位置も普段より高くに見えたが・・・」

「な、何を馬鹿なことを。一人でに帽子が動くはずはない。それともなんだ。髪の毛に押し上げられたとも言うのか？」

卵なら冷蔵庫に腐るほど入ってんだろ！！

いいから茹でりゃいいんだよ！！

んだよ使えねえなこのゴミシェフどもがよー！！！！

「・・・なんか聞こえてくるのだけれど」

「まさか。ハザマ先生の声なはずが無い。あれほど温厚で柔らかな人間を私は他にライチくらいしか知らない」

「私は別にハザマ先生の声だと言った覚えは無いわよティガー先生」
「くっ、いいだろう。私の声紋識別機能ではつきり違うことを証明して・・・」

「止めるティガー！世の中知らないままでもいいこともある。」

そんな会話をしていたら、ハザマ先生が微妙な笑みを浮かべて帰ってきた。

「いや～お待たせいたしました」

「うぎゃあ！？」

「どうしたんですかあ～？変な声出しちゃって」

「い、いや遅かったでござるな」

「ああ、あのクソ料理人が話わかんねえもんだからよお」
「!？」

その言葉に、皆は多少驚く

「・・・じゃなかった。ちょっとコンビニまで出てゆで卵買ってきたもので。これが無いとダメなんですよ私」

「そそそ・・・そうか」

(詳しい話は聞かないでおこう・・・)

そして酒と料理がテーブルに運ばれてくる。

「さて、酒と料理も来たことだしぼちぼち始めようか」

「じゃあ乾杯は初飲みのハザマ先生にお願いしようか」

「え? いいんですか? 私なんかで・・・」

「勿論でござる。さあ景気良く!」

「では僭越ながら・・・ん?」

「どうした?」

「逃げ逃げ♪」

その時、天井から流星がごとく一人の酒に餓えた教師が降ってきた。
・

「ぎゃああああ!？」

「私抜きで乾杯しようなんて、10年遅いんじゃないかしら？」

お酒は二十歳になってからの意味で

「ららららら・・・ライチ先生!？」

「何故ここに!？」

「てめえらに会うために、地獄の底から舞い戻ったぜ!!」

「どうしてこの場所がわかったかとか天井ぶち抜いて入って来るなとか棒に乗ってくるなんてお前はタオパイパイかと言いたいことはいくつがあるが、まず一つ」

「なんですかココノエ先生？」

「いい加減降りてやれ。バングがあと一息で死ぬ」

「た・・・たすけてくれでござる・・・」

「おおバングよ・・・死んでしまうとは何事だ。」

「まだ死んでないから!!」

「じゃあトドメを・・・」

「刺すな――!!」

「それよりハザマ先生。貴方急襲に気づいたのに一人だけ逃げたわね？」

「はてゝなんのことやらあ」

そして・・・

「という訳で、私をハブにして飲み会なんてことに納得出来ずについ「ぶんっ!」として「びよっ!」っと飛んで来たのです。」

「事情はわかったがタオパイパイを擬音で表すな」

「さしずめ今の私は”タオツパイパイ”ってどこかしらね」

「自分で言うかこのおっぱいお化けは・・・出すな舌を！さほど上手いことは言ってない！」

そして皆は今一度覚悟を決めた。

だが、一つやることがある。

ここに酒豪のおっぱいお化けを呼び寄せたやつが一人思い当たる。それは間違いなくあの男である・・・

「もはや観念するしかないな・・・だが、その前に・・・」

「裏切り者に制裁を加えよと校長から勅命が出ています。」

「我が執事ヴァルケンハイン、”ラグナ”を拘束してきなさい。手段と生死は問わないわ」

「すでにここに」

「離せーーーーーーー！！！」

「さすがね、褒めてつかわす」

「光栄にございます。」

「ではこれより正義の名の下に弾劾裁判を執り行つ。裁判官は私ハクメン。被告はラグナ先生。弁護人は無し」

「ちよっ！？」

「判決・・・死刑」

「審理すら無しですか！？」

「せっかくの飲み会なんだから執行は別の日にしてあげて」

「そうね。では執行は明日。ノエルにクッキーを沢山作ってもらわなきゃね」

「ラグナ殿、今まで楽しかったでござるよ・・・」
「嫌だあああああ!!」

色々あったが、一行のお腹と欲求は限界に達していた・・・

「いい加減始めないか？料理が冷めてしまう」

「そうね！始めちゃいましょう！」

「食い付きがいいですねライチ先生・・・」

「それでは皆様グラスをお持ちになって。えーと乾杯の音頭ってどういうのだっけ？」

「あゝ、私の役目が・・・」

「あ、あれだ！はっけよい・・・」

「違うから！それよつばと9巻のネタだから！パクるな！」

「なによティガー先生、じゃあブレイブルーらしく行きましょ」

ブレイブルーらしくとはなにか、皆はしばし疑問に思った・・・

「THE wheel is turning」

「ああなるほどね」

「まあはっけよいよりはいいだろう」

「Rebel 1、アアアアクションッ!!」

ガシャーン！

「CS式！？力みすぎだろ！！」
「グラス欠けちゃったでござる・・・」
「普通に乾杯してくれお願いだから」
「はいではRebel 2」
「すでに飲み干してますよこの人！！」

そんな中、先ほど判決を下された男が目覚めた。

「俺もまぜろよおおおお！！」
「ああ、復活したのねラグナ先生」
「じゃ、一人増えたし仕切直しね。今回は普通に乾杯っ♪」

そしてライチは乾杯を告げ、皆はグラスを一齐に持ちよった。

「ぷはあゝ！効くゝ！」
「ライチ先生早くも2杯目を！？」
「乾杯とは杯を乾かすと書く！」
「いやだからそれ違う人のネタだから！」

ティガーのツツコミなどお構いなしに、ライチをはじめ、御一行は
どんどん酒を飲んでゆく

そして1時間後

「ほらほら、みんなピッチ遅いわよ？」

「まつらふ情けない。貴方たちそれでも男にゃの？」

「お前も微妙に呂律回ってねーぞ・・・うぷっ」

「ハイハイハイハイハイ！バングセンスのちよつとイイとこ見てみたたってかぁ！？」

ハザマ先生は普通に豹変していたが、皆はまるで気づいていないほど酔っていた・・・

「も、もう無理でござる・・・」

「私もバング先生のかっこいいところ、見てみたかったなあ」

「ライチ殿のためならどんと来いでござるううううう！！」

「それでこそバング先生だ！」

バング先生は調子に乗り、どんどん飲み続けた・・・

「うっ…俺がガキの頃はよお」

「あらラグナ先生、絡み酒？」

「今でこそ世界最強とか死神とか言われてるけどよお…わかるかあ？ガキの頃なんか俺術式使えなかったんだぜ！？才能じゃねーの努力だったの！」

「し、知っへるわよ！努力したのよね貴方は！！」

「そのとおりい！けどなあ！その努力だってアレだぞ？猫に教わってんだぞ？どんだけシュールな絵なんだよ！」

「でも相手は最強のナマモノ」

話の内容がブレイブルー本編になっているが、そんなこと今の彼らには関係なかった。

「そーだぜラグナ先生！もっと楽しくやれよ！ヒヤハツ、ヒヤハハハハハハッ！」

「ハザマ先生とんでもない笑い上戸でござる。」

「がはははあははははー！」

「テイガー先生お前もか・・・ぷっ、くくく・・・」

「ハクメン先生も変に我慢してないで思いっきり笑っちゃいなさいな」

「もうこうなったらジン・キサラギに戻るぞー！！！」

ハクメン先生が正体を明かそうが、今の彼らには関係なかった。

「だからよお、俺がガキの頃わよお」

「データにあるぞ！これが酔っ払い名物「会話ループ」だな！」

「言っておふけど私ループ大嫌いよ」

「拙者もループコンボは大嫌いでござる！」

「黙れ恥知らずの厨ループ使いが！」

「ヒヤッハーーーー！」

「うるせえーーーー！！！」

そして彼らの夜は明けていく・・・

翌日、御一行は全員二日酔いで、授業どころではなかったことは言うまでもない

キャラ紹介？（前書き）

キャラ紹介5です。

たまにはみなさん本家のスレものぞいてみてくださいね

キャラ紹介？

？ツバキ・ヤヨイ

ブレイブルー学園3年B組の生徒、容姿端麗、皆から慕われる完璧な生徒

ジンとは幼馴染、だけどラグナ先生とはあまり親しみはない
ジンを尊敬しており行為を抱いている。ノエルやマコトとは友達

真面目な性格とハーデススレの雰囲気ギャップが激しいため、意外とインパクトのあるボケをかますことがある。

出番は多くなく少なくはなく、微妙だが登場すると笑いを誘うキャラ

？マコト・ナナヤ

ブレイブルー学園3年B組の生徒、リスのような人間
ツバキやノエルの友人、運動能力が高い
イケメンには弱い

一言で言うそうですね、ものすごく出番が少ないです。なので設定はほとんど本編と変わりませんですはい。

本編はボケキャラなのに本編のマジキャラよりおもしろく扱えない
キャラ

？ココノエ

ブレイブルー学園の教師、主に科学担当

学校に研究室を作ってそこでもって研究するほどの科学好き

主にティガー先生と仲がいい

実験と題して様々なものを開発したり、生徒や教師に迷惑をかけた回数は計り知れない

マコトやタオカカとは逆に、本編通りにポケキャラとして成り立っているキャラ、狙ったギャグよりマニアックなギャグを本編でも多くやっているのだからそこがウケたのだろう

ティガーより後に出たのに、ティガーよりも出番が圧倒的に多くなつた。

キャラ紹介？（後書き）

キャラ紹介6へ続きます。

第6話：愛ゆえにカメラリア（前書き）

第6話です。

第6話：愛ゆえにカメリア

「御苦労さま、後は僕がやっておくから」

「でも・・・ジン兄様・・・」

「君は課題が忙しいんだろ？大丈夫、僕ならこれくらい1時間で終わるよ」

「で・・・では失礼します。」

「ツバキ、遠慮しないでいいんだからね」

「は・・・はい!!」

ツバキ・ヤヨイ、ブレイブルー学園の生徒

女子生徒の中ではトップクラスの成績と人望を持ち、この学校のマドンナとも言うべき存在である。

そんな彼女は、生徒会長であるジン・キサラギにゾッコンであった。

「ジン兄様・・・なんて優しくてかつこいい方なのかしら」

「おゝいツバキ」

「ジン兄様ーーーーー!!」

「おわーーーー!!」

「あらマコト、いたの?」

「いたよさつきから、てかまたキサラギ先輩のこと考えていたわけ?」

マコトはツバキの顔を見て（というかおもいつきり叫んでいたが）すぐに察した。

「も・・・もうマコトー！！」

「隠さなくていいじゃん、お似合いだよ」

「もう、はぐらかさないでよ・・・」

「でもキサラギ先輩って本当にパーフェクトなイケメンだよ」

「そうそう！私が小学校の時も一緒に掃除手伝ってくれたし！中学校の時なんかいつもテスト勉強を手伝ってくれたわ、あの人は唯一無二の・・・」

「そ・・・そうだね、じゃあ私いくわ」

「じゃあね、気をつけて帰るのよ」

そして次の日・・・

「やあツバキ、おはよう」

「ジ・・・ジン兄様」

「どうしたんだいツバキ？顔が真っ赤だよ？」

「あ、いやあの、大丈夫ですから！」

「どれどれ・・・」

ジンはツバキの額をやさしい手で触った・・・

「ジン・・・兄様・・・」

「熱はないみたいだから、でも無理はいけないよ」

「ジン・・・兄様・・・もうなんて素敵で美しくて完璧でかついい人なのかしらっ!!」

ツバキは毎度のことジンを美化する。

「ジン兄様は・・・私にとっての王子様・・・」

「兄さーーーーーん!!」

「・・・へ？」

「どわ!いきなり抱きついてくるなーーーー!!」

「何を言ってるんだい兄さん?これは僕たち兄弟の・・・愛の契りだろ?」

「シザーーーー!!」

「兄さーーーーーん!!」

「だぁ気持ちわりい・・・」

「ラグナーーーー!!」

「ニユーも勢いに乗ってくるなーーーー!!」

「にゅーーーーー!!」

そう、必ずしも完璧な人なんていないのである。

ジンは確かにツバキの前でこそパーフェクトなイケメン男子であるが・・・

ラグナを前にとすると、ただのキモイイケメン、略してキモメンになつてしまうのである・・・

(嘘・・・ジン兄様は私ではなく・・・ラグナ先生が好きなの?)

恋する乙女にとっては、この勘違いも仕方ない？であろう

（しかもあの様子だと、かなり入れ込んでいる・・・どうしよう・・・どうしよう）

恋する乙女、ツバキ・ヤヨイが下した決断は……

「……ラグナ先生を……殺るしか」
「まてー……い！」

ラグナは電光石火が如く体ごとツツコミをいれた。

「あらラグナ先生……ごきげんよう」

「おい、笑顔で包丁持って挨拶すんな怖い、てか握りしめないでくれその獲物を・・・」

「ところでラグナ先生とジン兄様はどのような関係で？」

「間違いないように分かりやすくなおかつ短く言うとな、兄弟だ。」

「輝閃！」

[illegible]

ツバキが振った包丁を、ラグナ先生は間一髪で避けた。

「先生、嘘が苦手なんですわ」

「嘘じゃないって！本当だってば！！」

「兄弟なのに全然似てないじゃないですか？しかも私とジン兄様は幼稚園の時から幼馴染ですよ？なのに私あなたとは全然顔を会わしたことはないんですが」

まあそこら辺は原作とハーデススレの矛盾設定なので詳しく決めるとネタが書きづらくなるのであまり触れません

「まあ俺らは離れて暮らしてたし、これじゃだめ？」

「先生？」

「わかったから笑顔で包丁向けるな！てかお前ヤンデレキャラじゃないはずだろうが！！」

「とりあえず、せつかくの完璧イケメンのジン兄様がああやってぶっ壊れるのは私としても見ていられません、なのでなんとかしてください兄として」

「俺だつてなんとかしてえよ、つうか俺的にはあんな変態でいいなら引き取ってほしいくらいだよ」

「ジン兄様は変態ではありません！！」

ツバキの中のジンはどうなっているのだろうか

というかジンはどこまでツバキの前では猫かぶっていたのだろうか

「というわけで、正義の名のもとにラグナ先生を成敗します。」

「嫉妬の名のもとにの間違いだろうが……わあつたわあつた！俺でいいならてめえらのキューピットになってやるよ」

「え？いいのですか？ジン兄様とラグナ先生は兄弟という設定での（ピー）で（ピー）な関係ではないのでは？」

「1%もあつてねえから！てかおめえそっちの趣味もあるな？」

「……ではラグナお兄様、よろしくおねがいますね」

「流したな？今話を大きく流したな？つかお前にお兄様とか呼ばれたくないんですけど」

そして……

「ジン、大事な話があるんだが」

「なんだい兄さん！？もしかして……僕と……」

「デイバイダーしてえが我慢だ我慢……お前さ、ツバキって子と仲いいんだってな？」

「ああ、僕とツバキはとも仲のいい幼馴染だよ、もしかして兄さん、彼女のこと好きになつてしまったのかい？」

（おっ？これは「だめだよ兄さん、ツバキは僕のだからね」とか言うフラグか？）

「もしそうなら、ツバキにも兄さんを好きになつてもらわなきゃね」

「へ？それってどういう意味だ？」

「兄さんと僕とツバキで、仲良く3人で暮らすためさ」

ラグナは兄としてとてつもなくガツカリしてしまった。

というか後ろで眼を光らせてこちらを睨みつけるツバキが気になる・

・

「あ、ああ、なあジン、もしさ・・・もしもだぞ」

「なぐに兄さん？」

「俺とツバキが、誰かに殺されそうになるとする。そんで絶対にどちらか一人しか助けられないという状況になったとしたら・・・お前はどっちを助ける？」

「・・・え？」

「よく考えればわかるはずだ、兄の気持ちが本当にわかるのなら・・・」

「うん・・・うん・・・」

2時間後・・・

「うん・・・うん・・・」

「早く決めるやーーーー！！！！いつまで悩んでんだこのバカ弟はー！！！！」

「兄さん！僕はたとえどんなことになってもあきらめない！僕は二人とも助ける！！」

「お・・・おい、そんな漫画の主人公みたいなことをここで言われてもな・・・」

「時にはあきらめてはいけないことだって、あるはずさ！！」

「う・・・うんそれはいい考えだと思うけどさ、だけどさ・・・」

「ラグナ……先生？」
「……………」

結局ジンには、ラグナもツバキも同じくらい大切だったようである。
どちらかは決めれない、もう少し時間がかかりそうだ。

「ラグナ先生、これからは私たちは恋敵です！どんなことしても・
・ジン兄様には私の方を振り向いてもらいますからね！！」
「その勝負をするなら即サレンダーさせてくれや、つつかマジで引き取ってくれるなら引き取ってくれ」
「情けはいりません！！」
（こいつバカか……）

ラグナの悩みの種は、また一つ増えたとき

キャラ紹介？（前書き）

キャラ紹介6です。

そろそろキャラもそろってきましたね

キャラ紹介？

？ミュー・トウエルヴ

ブレイブルー学園3年B組の生徒、常に不機嫌そうな顔をしている。その正体は、ラグナ先生が”ノエルをバカにしすぎた結果（主に胸のことで）、無茶苦茶怒って変身したノエル”一度表に出るとストレスを発散するまで見境なく暴れる。その矛先は主にラグナ先生。

変身していくにつれ沸点が低くなっていったのか、次第に自由に变身できるようになってしまった。

変身すると眼の色が変わるだけでなく、なぜか服の露出が多くなる。

？アラクネ

ブレイブルー園3年組の徒、少くも人ではい

→のように虫食い文字が特徴、意外にかわいいと人気がある。

人間時代は相当モテていたんだとか・・・

ハクメン先生と同じ顔文字（ ）人気があるが、上記の虫食い文字が”あまりにもめんどくさいため”出番が少ない

それでも出ると面白いボケをかます。

？ヴァルケンハイン

レイチエル校長の執事、紳士で博識でもある。

ハクメン先生やハザマ先生とは同級生であった。

他のメンツが個性的の生徒ばかりだったためか、当時担任だったレイチエル校長からは”普通で問題のかからない生徒”と見られ気に入られていた。

この人だけ生徒でもなければ教師でもない、めずらしい立ち位置である。無論出番の方はOTL

怒ると無茶苦茶怖いんだとか

キャラ紹介？（後書き）

キャラ紹介7に続きます。

第7話：胸が無いとか言いまくってたら彼女が変身しました。（前書き）

第7話です

7月7日に7話とかなんか偶然ですね。

第7話：胸が無いとか言いまくってたら彼女が変身しました。

「しかしお前胸無いな」

「いきなりかよおい!!」

始まって早々だが、ラグナ先生はいつものごとくノエルをバカにする。

「先生いい加減にしてくださいって、胸無いのは認めますけど毎度の如く言わなくてもいいじゃないですか」

「だって面白いんだもんお前の反応」

「あなた本当に教師ですか？先生いい加減私も怒りますよ本当」

「ほほぅ、もう怒ってるくせにな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ノエルの反応が、いつもより鈍く感じた。

「貧乳がステータスって言う言葉があるけど、お前にすら当てはまらないようだな、だって”無い”んだもんな、ぬはは」

「うー」

「まあこれも生徒と教師のスキンシップだと思ってよ、ツッコミ役として必死につっこんでくれたまえ」

「うーーーーー」

「てなわけで、授業始まるぞマイナスAカップ」

「うーーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

ドカ――――ン!!

「・・・・・・へ？」

ノエルの叫び、そして爆音と共に現れたのは、ノエルであってノエルでないもの・・・
透き通った蒼色の瞳、そしてなぜか知らないが露出度の高い服装

「起動・・・・起動・・・・起動・・・・」

「あの・・・・・・ノエルさん？」

「ラグナ先生が・・・・ラグナ先生が・・・・ラグナ先生が――！！」

「おい、ノエル？どうしちゃったんだ」

「憎い――！！！」

ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ！！

そして・・・

「お、どうしたラグナ先生、すごいケガだぞ？」

「いったいどこで転んだでござるか？」

「お前ら・・・これが転んだように見えるならそれは病気だぞ・・・
う・・・」

ラグナ先生はその場で倒れた。

「ズエ・・・ラグナ先生大丈夫か！？」

「しっかりするでござる！！」

「なるほど、いつものようにノエルをからかっていたらノエルが変身して返り討ちにあったと」

「ああ、これでこのザマだよ・・・」

「そうか、それは災難だったな」

「自業自得でござるなラグナ先生、というか変身させるまでセクハラ発言するとは最低でござるなラグナ先生」

ハクメン先生とバング先生はラグナを見捨てるように言い放った。

「おいー！さっきまで心配してくれたお前らはどこ行っただー！！
？」

「そんなこと言っただって、ノエルをバカにしたお前が悪い」

「これに懲りたら今後はナイチチ発言は控えることねラグナ先生」

「ライチ先生まで、ま・・・まあ俺が悪かったよ・・・けどよ」

「けどもクソもないでござる、そこまでされるほどストレスためたノエル殿の気持ちも考えるでござるよ」

ラグナ先生もさすがに反省しているようであった……

「にしても、お前は どうしてそこまでノエルに ちょうかいかけるの
だ？」

「そ……それは……あいつとそういう会話するのが楽しいんだよ」

「それはたぶん、ラグナ先生はノエル殿の事が好きなのでござるな」

[illegible]

「ん？拙者いまなんか空気を壊すことでも言ったでござるか？」

「バング先生、ちよつとこつちへ来てもらおうか」

「ほへ？何をすることでござるかハクメン先生」

「疾風！！」

「ぎよえええええええええええ！」

「空気を読めバング先生、お前はKY忍者なのか？」

「KY忍者が、データに加えさせてもらおう」

「ハクメン先生！ テイガー先生！ ちょっと待つでござる！！」

「俺はちげえよ！全然ちげえよ！違うからな！！」

「ほら戸惑ってるズエア」

「赤くなっているなラグナ先生」

「違うつつつてんだろうがお前ら――！――！」

「ラグナ先生？今の話は本当かしら？」

「校長まで入ってくるんじゃないやねえよ――！――！」

ラグナ先生がノエルのことが好きかどうかはさておき・・・

ラグナ先生が本気で反省している時、それを盗み聞きしていた一人の生徒が不気味な笑みを浮かべた・・・

「ノエルが変身を・・・これは・・・使えるわね・・・」

「ツバキ、なにやってんの？」

「え？いやなにもしてないわよマコト――！」

「？」

その放課後

「ノエルまた補習入ってるよ、あんな事があつた後だとやりにくいな」

「ラグナ先生――！」

「おわ！ツバキ――！」

「どうしたのですラグナ先生？元気がないですよ？」

ツバキは明らかになにかをたくらんでいた・・・

「おめえ、なぐにか企んでねえか？」

「いえいえ、それよりもまたノエルが補習ですか？」

「ああ、けどちょっと朝あいつとトラブってしまつてよ・・・」
「見てましたよ、ノエルが変身したところ」

そこでツバキは、とある一言を口にする。

「ノエルが変身した時、私思つたんですよ」

「何をだよ？」

「あのノエルは、ノエルの中に眠つてる潜在能力が全て解放された姿だと、そうは思いませんか？」

（なんかこいつ、すげえ怪しい感じ・・・）

「先生、今私を疑いましたね？」

「い・・・いやあなにも」

そしてツバキはたたみかけるようにこう言った。

「つまりあの怒ったノエルなら、どんな難問も一瞬で解いたり、体育の授業も全て完璧にこなしたり、ダメだったところが全てできちゃう気がするんですよ」

「ま・・・まあその可能性は無いとは言えんな・・・」

「これはチャンスですよ先生、ノエルがあのかをモノにできれば、これからノエルにとって役に立つものになります。」

「つまりなんだ？俺にもう一回あいつを怒らせると？」

「先生、なにを恐れているのです？悟空も最初は怒りにまかせていましたが、最終的には力を使いこなして地球を守り抜いたじゃないですか」

「なんの話をしてるんだお前は！！」

ボールを七つあつめて願いをかなえる話とはともかく・・・

「あーだめだ！これ以上変身させてあいつの身になんかあつたら大変だし！教師としてそれはできない！！」

「今まで散々バカにしてきたクセに自分に害が及び始めると逃げるのですか？」

「うー！！」

「ノエルのためですって？本当は自分のためじゃないんですか？何を正当化してるんですか先生は」

「うー！！うー！！」

「先生、愛あれば暴走する生徒も止められます。ノエルのため、ノエルのためのですよ」

ツバキは悪女が如くラグナにささやき続けた。

そして・・・

「・・・俺、もう一度あいつと向き合っよ」
「そうこなくては〜！」

ツバキの作戦は、まんまとうまくいった・・・

「だけど、今度もまたあいつを变身させるほど怒らせれるとは限らないぞ、失敗したらあいつは泣きじゃくるだけで俺の信用問題に発展しかねるし・・・」

「その点はご心配なく、いざって時はプロフェッショナルにお願いしてあるので」

「プロフェッショナル？」

「まあその時がくればわかりますよ、じゃあ頑張ってくださいねラグナ先生〜」

「あ・・・ああ」

「あとは・・・ノエルがラグナ先生を・・・・・・ククククク」

そして補習の時間

「うゝ、全然わからないよゝ」

「まったくこのバカが、こんなもん中学生レベルの問題だろうが!!」
「そんなこと言いましても」

「はぁ・・・そんなお前のために提案があるんだが・・・」

「へ？なんですか？」

そしてラグナ先生はあの話を持ち出す。

「ノエル、お前今日の朝、俺に対して変身するほど怒ったよな？」

「は・・・はい、あの・・・すいませんでした！私にながなんだかわからずあそこまで先生を傷つけてしまっただけ！」

（う・・・謝られるとますますやりにくい・・・）

「どうしたんですか先生？」

「あ・・・いやな、そんなとき俺思ったんだよ、きっとあれがお前の本当の力だって、あんなに戦闘能力が上がったんだ、きっと学力も上がってるはずだ。」

「は・・・はい？」

「つつわけで、怒れ」

「は？」

「怒れ！怒るんだノエル！そうすればおめえは全世界の誰にも負けねえ!!」

「私は悟飯ですか！？怒れって言ったってそんな簡単に怒れるはずがないでしょう!!」

「じゃあ俺が怒らせてやるよ、やゝいナイチチ、女じゃなくて男」

「む・・・むーーーーー!!」

そして・・・

「う・・・うう・・・えーーーーーん!!」

「泣いちゃったよ・・・」

「だってえ・・・だってえ!!」

「おい・・・ラグナ先生」

「まだ・・・懲りていなかったでござるか？」

「私たちもそろそろご立腹が近いわよ」

ハクメン先生とバングとライチはラグナ先生を敵視するように見る。

「そそそそ・・・そんな目で見るんじゃねえよ!!」

「わ・・・私・・・今度ラグナ先生を傷つけてしまったら・・・私・・・わたしい」

「ノエル殿・・・」

「なんという教師思いの生徒、ラグナ先生にあそこまで言われながらも・・・」

「それに比べて・・・」

「おゝいなんだこの空気はよーーーー!!」

「負けてはなりません!!」

「ツバキ・・・おめえ・・・」

「まだ最後の切り札が残っているのですよ、先生お願いします!!」

ツバキに呼ばれて来たプロフェッショナルとは・・・

「あの・・・私でございますか？」

「おいツバキ、これはどういうことだ？」

「プロフェツシヨナルのハザマ先生です。」

「ハザマ先生が人を傷つける人には見えねえんだけどな先生は！」

「ノエル君を怒らせてくれと言われてきたのですが、彼女はすでに泣いてますし、私こういうのは・・・苦手なもんでしてねえ」

「そうよ！ハザマ先生にまでとばっちりを受けさせるなんて！！」

「ラグナ先生よ、悪滅の準備はできているぞ」

「大噴火もでござるよ・・・」

「ツバキてめえ・・・」

「最後まであがいてみたらどうです？ラグナ先生」

「ぐ・・・こうなったらやけだ！！ハザマ先生でもいいからノエルを怒らせてくれ！！」

ラグナ先生は叫ぶ。

それはまるで悪役のようであつた。

「うゝん、気がひけますが・・・えゝと、あなた頭悪いですね」

「ひつく・・・ひつく・・・」

「これくらいの問題もできないなんて、どうしようもないですね」

「ひつく・・・う・・・」

「これを言ったらいいでしょう・・・バカを通り越して・・・ゴミですかね」

・・・ん！？

「お……おいハザマ先生？」

「それにしてもあなた聞いていた通り胸が無いのですね、あなたお嫁に行けないのでは？」

「う」

「ほんと、ゴミ貧乳で馬鹿でアホで間抜けで汚らわしいですね。」

「—う—」

「・・・なに唸ってんだ？クズの分際で睨んでんじゃねえよこのクソアマ」

ハザマ先生はどんどんエスカレートしていった。

「こんな人だったっけ？」と言わんばかりの眼でハザマ先生を見る人たち。

人は見かけによらないものである。

「ったくやつべえ腹立つてきたわ、おいクソアマ！悔しかったら怒ってみろよこらあ！！」

うー！ー！

ドカーン！！

「ヒャッハー！リミッターがぶっ壊れやがった――！！」

「は……は……ハザマ……先生？」

「さすがハザマ先生！ こういうのはお手の物ね。」

「起動・起動・起動・起動」

「今ですラグナ先生！ノエルにこの問題を！！」

「あ……ああ！さあノエル……いやミューよ！この数学の難問を一瞬にして解き明かし……」

「憎い・憎い・憎い」

「解き明かし……解き明かし……」

「憎い――！――！」

ぎゃ ああああああああああああああああああああ
あー！

「うわ、これはすごいな・・・」

「おお、ラグナ先生の中からいろんなものがわき出てくるでござる・
」

「これは私でも治療できないわよ、うぷ……」

「いや、やっぱり女性を傷つけるのは気がひけますね」

「（3人そろって）嘘つけ！！」

「うふふ……これで恋敵がまた一人消えたわ」

ラグナ先生はその後、全治1か月で長期休暇をとったとのこと・・・

キャラ紹介？（前書き）

キャラ紹介です。

キャラ紹介？

？ラムダ・イレブン

ブレイブルー学園3年B組の生徒、寡黙な少女
ニューとは違ってデレることもなく、常に上の空
ココノエ先生の家で暮らしている。

とまあ、ニューが人気すぎたためにこちらは出番が少ない。本編で
ニューが消えてもこちらではニューは出続けていたためにこの子の
個性は全てニューに奪われた。

愛称はラムちゃん。

？リンファ

ブレイブルー学園の職員、ライチ先生の助手である。

なぜかは知らないが生徒ではない、ノエルたちより年下のはずだが
生徒ではない

元気な女の子である。

タオカカやカルルでさえ出番が少ないのだから、この子はより出番
が少ない。一部の人が好んで出す程度である。一時はリンファを主
役にした話を書いていた人がいた。

毒舌である。

？レリウス・クローバー

ブレイブルー学園の教師、妙な仮面をつけている。

仮面をつけたおっさんなため、変態扱いされることが多々ある。

扱いがひどく、息子にも嫌われている。なんだかわいそうな人である。

まだ出たばかりのキャラなため今後どうなるかわからないが、今後の活躍次第では出番が増えるかもしれない。

イグニスという妻があり、ニルヴァーナと同じでカチカチである。

？トラカカ

全てが謎に包まれた人（猫？）、教師なのか生徒なのか・・・

容姿はタオカカと同じ、オレンジ色の髪をしている。

タオカカからは慕われている。

全てが謎に包まれたというより、7月9日現在一度も登場していないため設定がないのである。つっても生徒にもなりえるし教師にもなりえるため今後どうなっていくかはわからない

なんかいい設定があつたら助言ください、本スレの方でトラカカの話作りますんで

キャラ紹介？（後書き）

今回は出番少ない人が中心でしたね。
次辺りは残りの六英雄を書きます。

第8話：夜の学校は危険がいっぱい（前書き）

第8話です。

第8話：夜の学校は危険がいっぱい

「今日の議題は、最近生徒の間で話題になっている怪奇現象についてよ」

「か・・・怪奇現象」

「どうしたのラグナ先生？」

「な・・・なんでもねえよ」

「しかし怪奇現象とはどんなものがあるでござるか？」

「聞く話によると、学校においてある模型が勝手に動いたり、不気味な少女がスーツと現れたりするらしいわ。」

「つまりは幽霊の仕業ということか・・・」

「いやいや！きっと誰かの悪戯だろ！！」

ラグナ先生はやけに否定的に反論した。

「でも、この学校のセキュリティに反応しないということは、誰かの悪戯でないことは確かよ」

「ということだラグナ先生、人ならざる者の犯行かもしれんぞ」

「なななな」に言っちゃってるわけハクメン先生、幽霊なんているわけねえだろうが！！」

「そうね、それを確かめるために誰かに学校を見回してもらう必要があるわね」

レイチエル校長はそつと笑いながら言った。ラグナ先生をチラ見し

ながら・・・

「な・・・なんだこの悪寒は・・・」

「てことでラグナ先生頼めるかしら？」

「はあ！？なんで俺なんだよ！！」

「ラグナ先生が一番真相を知りたそうだったし、頼りになるからよ」

レイチエル校長は、あきらかに”面白そう”という顔をしていた。

「んだよ面倒くせえな、ハクメン先生かバング先生行けよ」

「なんて私が行かなくちゃならんだ。」

「同じくでござる。」

「ラグナ先生やけにいやそうね、もしかしてラグナ先生・・・」お化けが怖い”の？」

「そ・・・そんなわけねえだろバカ野郎！こんちくしょーう！！」

怖いのだろう、そんな気持ちににじみ出た叫びであった。

「おいテロップうつせえぞこらあ！！」

「まあまあラグナ先生、お化けが怖いなんてかわいい面もあるんですねえ」

「ハザマ先生てめえ・・・」

「そうかそうか、お化けが怖いのかあ」

「頼もしいと思ったでござるが、案外臆病でござるね」

ハザマ先生とハクメン先生とバング先生は立て続けにラグナ先生を追いかけていく。

これにはラグナ先生もたまらず・・・

「ああ、わかったよごらあ・・・その見回りだかなんだかしらねえが俺がやってやるよ!!」

(扱いやすいやつだ・・・)

(まったくね・・・)

そして深夜・・・

「・・・なんで私たちが先生の業務を手伝わなくちゃいけないんですか？」

「今何時だと思ってるんですか？子供は寝る時間なんですよ？」

「いやゝあれだよ、先生としては貴重な体験をさせようと思ってだな、夜の学校はミステリアスっていうか」

「それにしてもカルルくんまで引く張ってくるなんて先生はずいぶん憶病なんですね、夜の見回りなんて一人でできるでしょう」

「いやいや何言ってるんだよ、別にお化けとか怖くないよ、はっきり言っけどお化けとか怖くないよ」

(二回言った・・・)

(今二回言いましたね・・・)

「まったく暗いなおい、前が見えねえじゃねえかよ」

「先生、私の腕にしがみつきながら文句言つのやめてもらえますか？」

「というか僕を先頭にするなんて、先生ちよつと見そこないましたよ」

「……………」

今のラグナは、情けない大人ランキング第1位に入っているようなもんであった。

「つつかカルル、そのなんだ、なんで姉さんまでいるんだよ」

「僕と姉さんは一心同体ですから」

「それはわかるけど、怖いんだけど、こんな暗闇に無表情とか怖いんだけど」

「文句言わないでくださいよまったく」

「ギギギギ……………」

「だあー！触るんじゃねえよー！！」

「姉さんは本当にお茶目だなあ」

「なに？今のお茶目で通るの？馬鹿なの？お化け怖い人を脅かしてお茶目で通るの？」

「先生等々白状しましたね……………」

その時、一人の少女の影がラグナ達の前を横切った。

「い…………今の方を見た先生！！」

「見てない、いや俺はなんも見えてないぞ、あー！ー！見えないな！ー！ー！」

「あんたいい加減にしろよ！」

「ちよつと僕と姉さんで見えます。そこで待っていてください。」

「先生、カルルくんの方がよほどしつかりしてますよ、情けないですな〜」

「ああ？わかったよわかりました！なら”俺達”も見に行つてやるよ！行けばいいんだろうが！ー！」

”俺が”とは言えないラグナ先生であつた。

「おい・・・あれ・・・」

「スーッと動いてますね・・・」

「うゝ、私も怖くなってきた・・・」

フツ・・・

「き・・・消えた！？」

「いったいどこへ・・・」

「ラグナ先生たちを認識・・・」

「ぎゃあああああああああああああああああー！」

その後ろにいたのは、同じ学年の生徒であるラムダであつた。

「ららら……ラムダ先輩……」

「驚かさないでよラムちゃん！」

「ミス……ごめんなさい」

「まったく……ココノエ先生の仕業かしらないけど、少女の霊の正体はラムちゃんだったようですね先生」

「何も見えないよ何も見えないよ何も見えないよ何も見えないよ何も見えないよ何も見えないよ何も見えないよ何も見えないよ何も見えないよ何も見えないよ」

「先生しっかりしてください！！」

「つかラムダをセキュリティとして夜を見回りさせてんなら最初からそう言えよ、ココノエ先生ぜってえに絞める……」

「まあ多分返り討ちにされるでしょうね……」

「こんな情けない先生の姿を知ったら……」

「言うなよお前ら……」

「ラムちゃんの監視映像に写ってますから、我々が言わなくても・・」

後にココノエ先生は、その映像を見て爆笑したという……

「次は動く銅像か……」

「理科室の前……と聞いていますが」

「行ってみましょうか先生」

「心の準備が必要だ、外の空気吸ってくる。」

「逃がしませんよ先生」

「逃げたら僕と姉さんでCT仕様でバレーボール扱いですよ」

「
#"
#"
#"
#"
#"
•
•
•
•
」

「え
・
・
・
・
・
ええ
・
・
・
・
・
」

理科室前
・
・
・

「人体模型ではなさそうだが……」

「カルルくんの姉さんと似てますね、なんでしょうかねこれ？」

「僕も心当たりが……」

「じゃあねえ、勝手に動くなら、動かないように壊してやるまでだ。」

「なんでそうなるんですか、まず様子見ましようよ」

「いや！俺は待てねえよ！俺は早くこんな薄気味悪いところから離れたいんだよ！！」

「ああ、情けない……」

その時
・
・
・

「ギギギギイ
・
・
・
」

「う。」

「動いた――！！」

「カーネイジ！インフェルノ！ヘルズファンク！ガントレット・ハーデス！！」

ラグナ先生があわてて技を連発するが、まるで通用していなかった。

「利かねえ、なんで利かねえんだよ!!」

「先生そんなことやつてないで早く逃げましょー!!」

「くそ・・・デッドスパイクだけは使うわけにはいけねえし・・・」
「なんでですか!？」

デッドスパイクさん乙

「騒がしいな、いったいなんの騒ぎだ？」

「へ・・・」

「変態だーーーーー!!」

「仮面をかぶったおっさんの幽霊だーーーー!!」

「ずいぶん失礼だないきなり!!」

そして・・・

「なんだよ、レリウス先生かよ・・・てつきり黒ミサとかやりまくって英国で捕まった変態親父の幽霊かと・・・」

「ひどすぎだろ!なんでそんな例えしかできないのかな君は!!」

「仕方ないですよ、本当のことですから・・・」

「カルル!お前まで!!」

「にしてもこんなところで何をやってるんですか？それにあの人形は？」

「あれは”イグニス”、私の妻だ。」

「ずいぶんカチカチのダッチワイフだな、あんたの趣味は理解できねえや」

「違うわー！」

「とりあえず怪奇現象の正体はこれで全部わかりましたね先生」

「ああ、これで家に帰れるぜ・・・」

「結局怪奇現象って言うのは、かならずトリックがあるものなんですよ」

「何コナンぶってんの？毎度思っただけどなんでカルルはこんなに不思議キヤラ醸し出してんの？」

「まあまあ、カルルくんのおかげで今回の事件も解決できたわけですし」

「そうだな、それで思っただけだよ、ノエルにも怪奇現象あるよな？」

「はい？私ですか？」

「お前のその・・・”胸”が・・・」

ドカーーン！

「・・・え？」

「我が名は・・・クサナギ・・・全てを根絶やしにする・・・刃・・・」

「えーとノエルさん？ずいぶん変身すんのが早いような・・・」

「色々あつて簡単にこの姿になれるようになった・・・」

「え〜と、眼が怖いんですが・・・」

「オモイカネ!!」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ
あああああ!!」

「やっぱり一番怖いのはノエル先輩だね、姉さん」

「そうね〜」

「・・・・・・え!？」

そしてまた、不思議が増えた・・・

第8話：夜の学校は危険がいっぱい（後書き）

PVが1万を超えました。みなさん本当にありがとうございます。
これからもがんばっていきますので、温かな目で見てくださいね

キャラ紹介？（前書き）

キャラ紹介8です。

8月27日以降設定が追加されています。

キャラ紹介？

？ルナとセナ（プラチナ・ザ・トリニティ）

ブレイブルー学園3年B組の生徒、三重人格の少女
獣兵衛先生のこと大好きで、彼に近づくものは容赦しない。
そのため、ラグナ先生やタオカカとは相性が悪い。

トリニティ先生とは妙なつながりがある。そんな彼女とは仲がいい、
設定が使いやすいため今後も度々登場することだろう。

彼女を支持するファンは、変態的な人が多い。

？トリニティ・グラスフィール

ブレイブルー学園の教師、ゆつくりなペースを保っている。
メガネをかけた金髪の女性、紅茶が好きでよく他の先生にもふるま
っている。

「ですう」「ますう」といったしゃべり方が特徴、外見よりも意外
としっかりしている。

ルナとセナ（プラチナ）もトリニティであるが、こっちは別キャラ
として考える。今後の過去話もちらが登場することになる。

ルナとセナとは仲がいい

？獣兵衛

ブレイブルー学園の教師、立ってしゃべる猫

ハクメン先生やハザマ先生とは同級生、その後は彼らとともに教師をしており、ラグナ先生の担任を務めたこともあった。

時にはやさしく時には厳しく、ビジュアル面もあいまって生徒からは人気の先生である。

そんなこの人も出番が少ない、なんとなくだが扱いづらいキャラである。

プラチナには好かれていたが娘であるココノエには嫌われている。ナインとの夫婦仲は不明。

？ナイン（ファントム）

ブレイブルー学園の教師、魔法使いのような格好をしている。

グラマラスな美女で、ハクメン達が学生の頃は委員長でマドンナ的な存在であった。

ファントムと名乗っている時もあり、その時は一転して寡黙な感じになる。

姉御肌であり（実際妹もいる）頭もいい、ファントムの時よりもキ

ヤラが確立されているため今後はこちらで出てくる。

獣兵衛のことは最初に見た時からイケメンと感じ取っていたらしい。

キャラ紹介？（後書き）

続きます。

次からはサブキャラ続きになると思います。

第9話：六英雄学生時代物語（前書き）

第9話です。

今回はあまりギャグはないかもです。

第9話：六英雄学生時代物語

「すまんなラグナ先生、倉庫のかたつけを手伝わせて・・・」

「気にすんなよハクメン先生、暇だったし」

「そうか・・・うん？これは・・・」

「どうしたんだ・・・なんだこのファイルは？」

2110年 3年B組卒業アルバム

「これはまた懐かしいものが出てきたな」

「これって・・・ハクメン先生の学生時代か！？」

「ああ、華の90年前だ。」

「何が華だ、つうか90年前と全然変わってねえな、獣兵衛先生もハザマ先生も」

・・・

「てか、なんでお前ら普通に生きてんの？」

「あの頃は楽しかったな」

「何？無視なの？知らなくてもいいこともある的な感じなの？」

「まあ我々は俗に言う長生きだからな」

「あんたは素顔がしわくぢゃなのかしんねえけどハザマ先生とかどうなってんだよ・・・」

世の中知らなくていいこともあるのである。

「つつかあんたらの担任ってレイチエル校長だったのか？校長も変わってないな」

「ああ、せっかくだし学生時代の話をしよう、一休みのついでだ。」

「おっ、面白そうだな・・・」

・・・

90年前・・・

「やあ、おはよう”ジン”」

「獣兵衛か、というか私の名前はハクメンだ。」

「そうかそうかそれはすまんかったな、あっはっはっはっは!!」
「わざとだな・・・」

ブーーン!!

「おらあてめえらどきやがれこらあー!!」

「テルミよ、お前またバイク通学か？というか教室にバイクで入ってくるな」

「細かいこと気にすんなよハクメンちゃん、なんだ？バイク好きなのに乗れないからってひがんでんのか？」

「貴様・・・」

「んだこらあ、やんのか!？」

「お前たち・・・少し静かにできんのか？」

ヴァルケンハインの言葉で、場の空気が一斉に静まり返る・・・

「わあつたよ、相変わらず真面目だなヴァルケンハインは・・・」

「貴様との決着は放課後につけてやる。」

「上等だ、今度こそ俺が勝ち越してやんよ!!」

「大変だなお前達は・・・」

ガララララ!!

「獣兵衛様——!!」

「おわ!トリニティか!？」

「獣兵衛さま!ん!!」

「ちょ・・・頼むから離れてくれ・・・」

「大変なのはお互い様だな猫又」

「モテモテだな、獣兵衛よ」

「見てないで助けてくれ!!」

ふわ〜ん・・・

「・・・・・・・・」

「おっ、このクラスのマドンナ、ファントムがきやがったんじゃないかねか？」

「・・・・・・・・」

「ああ・・・ファントムか、おはよう」

「・・・・・・・・」

「おいてめえ！獣兵衛様に近づくんじゃねえよ！！」

「トリニティよ、少し空気を読むことを覚えろ。」

「てめえみてえな野蛮男女が、あんなおしとやかな女に勝てるわけねえだろが」

「んだとこの野菜頭！！」

その言葉を聞き、テルミは少しかりイラついた。

「おいてめえ、マジで殺されてえのかこらあ？」

「うつせえバーカ！！」

「ああやべえ殺してえ、マジで殺してえ！！」

「落ちて着けテルミよ、先生が来てるぞ」

気が付くと、レイチエル先生が教室にいた。

「あらテルミくん、また無様に叫び暴れているの？」

「あーすいませんね、ちょっと調子のつちやいましたわ」

「ふふふ、問題だけはおこさないでね」

「すいましてーん」

「怒られてやんの、キャハハ」

「てめえ後でマジでやるかな・・・」

昼休み・・・

「獣兵衛様！一緒にごはんを・・・」

「・・・・・・・・・・」

「あ・・・あすまん、今日はファントムと約束してるんだ。」

「そ・・・そうですか・・・」

「もうなんだよあの女!？」

「なんだあさびしいのか？一緒に飯食ってやろうか？」

「うつせえぞテルミ!!」

「ギャッハッハー！てかさお前いい加減気づけよな、猫又はファントムにゾッコンなんだよ、てめえみたいな野蛮女なんか眼中にないんだっての」

「テルミよ、女子の恋心をからかうものじゃないぞ」

「んだよやけに紳士的だなハクメンちゃんよ、こんなムカつく女に味方することなんてねえぞ」

「トリニティにもそれなりの気持ちがあるのだろう」

「むう、ハクメンに励まされるなんて、不覚・・・」

そして午後、レイチエル先生から学園祭の話がでた。

「もうすぐ学園祭です、とりあえずこのクラスでやることを決めて
ちようだい」

「んなもん決まってるだろうが、バトルロワイヤルしようぜヒヤッ
ハーーーー！」

「あなたは黙っていてちようだい」

「ペットショーとかすればいいんじゃないか？」

「獣兵衛、それはお前がショーをするってことか？」

「んなわけないだろうがハクメンよ」

そんなこんなで結局ハクメンのクラスは焼きそばを作ることになっ
た。

「……………」

「どうしたトリニティ」

「い……いや、なんでもねえよ!!」

「学園祭のことであつたらねえこと考えてんじゃないのか？」

「ち……ちげえよ!んなことねえよ!!」

テルミはうすら笑いを決め込んだ、ハクメンは相変わらずテルミに
あきれる。

「テルミよ、あまり女性の心につけこむもんじゃないぞ」

「ヴァルケンハインかよ、珍しいなてめえが話に入ってくるなんて
よ」

「女性が傷つくところを放ってはおけなかったものでな」

「どうせあれだろ？学園祭で猫又と一緒に学校回りたいとか淡い夢抱いてんだろ？」

「ち・・・ちげえよ！！」

徐々にトリニティの顔が強張ってくる、そしてもろく崩れそうであった。

「テルミ、言いすぎだ。」

「女性を傷つけるとは、落ちるとこまで落ちたな」

「うっせえ！女だろうが関係ねえよ！どうせ猫又も迷惑してんだろ
うがよ」

「・・・・・・う」

等々トリニティの眼から涙がこぼれた。

「テルミのバカ野郎――！うわ――！！ん！！」

「ちよおま！？泣くこたあねえだろうが！！」

「テルミよ・・・」

「最低ですな」

「最低、鬼畜の所業ね・・・」

「なんでレイチエル先生までいるんだよ！？」

「ひつくう・・・ひつくう・・・」

「だあー！おい”セナ”いるんだろう！？こいつじゃ話になんねえ
！！」

テルミがそう言った瞬間、トリニティの泣き声はピタッと止み、穏やかな表情の”セナ”が出てきた。

「はい、ここにいますよ・・・」

「あーなんだ、あいつを泣きやませてくれよ、その・・・俺が悪かったし」

「それは、あなたが直接”ルナ”に言ったほうがいいと思いますよ、今出しますねえ」

「待て！出したらうるせえからしばらくてめえが出てろ！！」

「もーう、しょうがないですねえ・・・」

「とりあえずだテルミ、あいつも悪かったかもしれないが、今回は100%お前が悪い」

「にしてもいくら同級生とはいえ、こんな小さい子と喧嘩するなんて、あなた脳内は小学生のままで止まってるんじゃないの？」

「うつせえよこのクソ教師！！」

「テルミ・・・」

「あ・・・悪かったよヴァルケンハイン、それと先生よ・・・」

「ルナは楽しみにしてましたよ、学園祭」

「お前・・・”3人目”か？」

「例え最終的にファントムとくつついたとしても、せめてこの時は獣兵衛様と学園祭を楽しみたいって・・・」

「そ・・・そうかよ」

「何せ最後の学園祭ですから」

そう、彼らはすでに3年生、学園祭も今年が最後なのである。

「……………」

「まあ学園祭は明後日だ、それまでにトリニティ……ルナの機嫌が直るといいがな」

「……………くそつたれ」

そして学園祭当日……

「ルナ、最後の学園祭だよお？」

「いいよ、どうせ獣兵衛様はファントムと一緒にだし、それにあのクソテルミの顔なんて見たくない」

「そんなことないよお、ほらあ」

「…………え？」

「探したぞトリニティ」

「獣兵衛様？なんで…………？」

「ファントムは運営で忙しいみたいだ、だから今日はお前と回ろう
と思ってな」

「い…………いいの…………？」

「ああ…………」

「あ…………う…………うわ……………ん!!」

（まったく、あの”バカ”にあんなことを言われるとは思わなかったぞ…………）

学園祭前日

「・・・・・・・・」

「そうか、じゃあ業務が終わったら一緒にパフェでも食べに行くか、
キャットフードでもいいぞ？」

「・・・・・・・・」

「どうした、ファントム？」

「はぁ・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・」

「テルミ・・・・・・・・どうした？」

「おい・・・・・・・・猫又、頼みがあんだけどよ・・・・・・・・」

「頼み？ずいぶんと珍しいな」

「学園祭よ・・・・・・・・そいつとじゃなくて・・・・・・・・トリニティと回ってや
つてくんねえか？」

「な・・・・・・・・なんで急に・・・・・・・・」

「実はよ・・・・・・・・」

（あのバカ・・・・・・・・だがまあいいか、ファントムは快く了承してくれ
たし）

「ふへへへん」

（最近こいつを遠ざけていたのは、事実だったしな・・・・・・・・）

「テルミよ、お前もやり手だな」

「意外と隅におけませんな」

「うっせえよてめえら！！」

「本当・・・・・・・・可愛いところもあるじゃない」

「せ・・・先生も・・・待てやコラァー！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「本当に楽しかったな、また生徒に戻りたくなってきたぞ」
「な～んか、いい話じゃねえかよ・・・・・・・・」

「そんなこともありましたっけね、やだ・・・恥ずかしくなってきた
ましたあ・・・」

「ハザマ先生、照れるな照れるな」

「お前は本当に隅におけませんな」

「・・・・・・・・」

「てかあんたら・・・いつの間に？」

「細かいことは気にするもんじゃありませんよラグナ先生」

「てかハザマ先生雰囲気変わりすぎ・・・・・・・・」

・・・・・・・・

「・・・なあ、一つ聞いてもいいか？」
「なんだ？」

「先輩として質問ならなんでも聞くぞ、ラグナよ」
「なんで・・・トリニティは”今もなお”3年B組の生徒をやつて
るんだ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・え？」

「ラグナ先生よ・・・」

「知らなくてもいいこともあるぞ」

「本当に、細かいことを気にするお方ですねえ」

「知らぬが仏ですぞラグナ先生」

「・・・・・・・・・・」

とりあえずこの話題は出さないほうがいいだろう、あの5人のオリ
ラグが一斉に解き放たれたのが見てわかった。

「何があつたのだろうか・・・」そう思うラグナ先生であつた。

キャラ紹介？（前書き）

キャラ紹介9です。

今回は主要人物1人＋モブの中のモブの人たちです。

キャラ紹介？

？帝（サヤ）

ブレイブルー学園の理事長、紫髪の少女で、その正体はラグナの妹。全てが謎につつまれており、会うことが出来るのはツバキやハザマ先生などごく一部の人間。レイチエル校長でさえ会うことを許されていない。

仕事は予算や給料を決めることくらいで、他はレイチエルに任せっきり。

一人称は「余」、ノエルのことを”塵”と呼んでおりなぜか嫌っている。

お年頃なのかお兄ちゃん萌え、自分に厳しくしているのだがお兄ちゃんへの欲求には勝てないんだとか、ツバキと仲がいいということになっている。

未だに謎が多いため本格的に出るのはもう少し立ってから。

？ギイ

レイチエル校長に仕えているマスコット、赤いコウモリである。とにかく扱いがひどい、引っ張られたり蹴飛ばされたりと散々である。

口癖は「ッス」。主にお茶の用意、イベントの司会などを担当す

ることが多い。

モブの中のモブであり、出番はほぼ無いに等しい。

イベントなどがあつたら多少出番はある。

？ナゴ

レイチエル校長に仕えているマスコット、でっかい猫
オネエな性格をしており、ギイの姉御的存在

レイチエルの椅子や傘になったり、ギイと一緒にイベントの司会を
担当することもある。

モブの中のモブであり、出番はほぼ無いに等しい。

イベントなどがあつたら多少出番はある。

？ゲオルグ13世

レイチエル校長のペット、意外としつかり者

ブレイブルー学園の相談室を設けており、そこで教師や生徒の相談
を受けることが彼の日課。

ズバツと短く問題を解決してくれる。

ここまでくると完全に趣味の範疇になってくる。もはや出番とか言
ってられない。

というかこいつだけキャラではなく”技”である。

キャラ紹介？（後書き）

これで全てのキャラが出そろいましたかな？

ラオチュウ？なにそれ美味しいの？

とりあえず後はキャラが増えるか忘れてるキャラがない限りキャラ紹介はここでいったん終わりです。

第10話：第1回ハーデス先生のお料理教室（前書き）

第10話です。早いですね、というか更新速度早すぎですかね私
今回の話は過去にハーデススレで人気を博した伝説とも言うべきシ
リーズ、「ハーデス先生のお料理教室」です。
それを今回転載し、小説風に私なりにアレンジを加えてみたいと思
います。

みなさんにもぜひ読んでもらいたいなと思っておりました。ふつつ
か者ですが頑張って書きたいと思っています。

第10話：第1回ハーデス先生のお料理教室

「ハーデス先生の料理教室が始まります。講師のラグナです。」

「料理教室語ってますがただの調理実習です。助手のノエルです。」

「ご安心ください。助手には何もやらせません」

「じゃあわざわざ私を選ばないでください！」

なにかやらせたらひどいことになるのは目に見えている。
そんな顔でラグナ先生はそう言った。

「そう、そのツツコミ力を期待しての起用だ。」

「嬉しくありません・・・」

そんなこんなで料理の準備するラグナ先生。

ノエルも手伝おうとするが、ラグナ先生は遠回しに断り続けた。

「今日は肉じゃがを作ります。」

「あら、王道ですね」

「誰が作っても美味しく作れる割に缶詰ソースの Pasta やカレーよりは料理でkinda ゼアピールができる良い料理です。」

「長い上に微妙すぎる枕詞はいりません」

ただの料理が下手な人にならもう少しスマートな説明を出来るのだからが

なんせん、ノエルの料理は下手を通り越して兵器にすらなりえる。

ラグナ先生は親切に丁寧に教えよう言葉を慎重に選ぶ。

「まずは材料の準備です。うどん乾麺、だし醤油、利尻昆布、厚削り本節、花鰹、煮干、塩、あとはスーパーでも惣菜のかき揚げを買ってきましょう」

「完ッ壁天玉うどん作るラインナップじゃないですか」

「乾麺の代わりにパック詰めされた生麺を使っても構いませんよ」

「もつうどんでもいいです……」

無駄なツツコミで体力を消費したくないノエルはあきらめるように了承した。

「用意するのは豚肉・たまねぎ・じゃがいも・にんじん・砂糖・みりん・醤油です。」

「結局肉じゃがだよ!」

結局肉じゃがであった、やはり遊ばれているだけだったのである。

「助手のノエルさん、砂糖取ってください」

「やっと助手らしい仕事ですね」

「塩と砂糖間違えるとかベタなボケはいらんぞ」

「わかってますよ！はい、どうぞ」

ラグナは一応注意した。注意したのだが……

「……これで出てくるのが砂糖でも塩でもなく”小麦粉”だからこの馬鹿はあなどれませんよ」

「えっ嘘！」

ノエルは侮れなかった……

「しかも天然」

「わ、私に助手させる方が間違ってるんです！」

「はいでは早速手順を過剰書きにしていきますよ」

「やっと調理実習っぽくなりました」

「？自分を信じる。」

「初っ端から出鼻をくじかれました……」

「ああ、お前の腕で自分を信じると言っても無理だったな。悪い悪い」

「気にするな。俺の中の人が主役をやった某シルバーソウルってアニメはパクリのオンパレードだったぞ」

「今しなくてもいいでしょうそんな話!」

「?じゃがいもは6つ切りにして面取りをし、水にさらす。」
「?じゃがいもの一粒一粒が・・・」
「もうそれはいいですから!」
「ちっ・・・これだから胸がない女は困るんだよ」
「関係ないでしょチクシヨーーーーー!!!!!!」

「たまねぎはくし形に、にんじんは半月切りにする。」

（本当なんでこのツラでこんなに包丁捌きが達者なんだろう・・・）

その姿は、息子のために料理をふるうお父さんという感じであった。

「？鍋にじゃがいもとたまねぎを入れて水に浸す。かなり多めにな」

「おお、どんどん出来ていく・・・」

「最初は強火で煮立たせて、その後中火だ。・・・よし、ちょうど良いな。次は砂糖とみりん大さじ1杯を加えて10分ほど煮る。」

（10分経過）

「そして豚肉を入れる。広げて入れるのがポイント。よしバッチリだ」

「うわぁ上手・・・」

ノエルは思わず感心した。

ラグナ先生は当たり前のような顔をしている。

「ここからが大事なところですがボケれる場所が無いので飛ばします」

「いやいや、これ漫才じゃないですから！調理実習ですから！」

どっから見ても漫才にしか見えないのが現状である。

そんな話をしていると、ラグナ先生はあるものを取り出した。

「隠し味にインスタントコーヒーの粉末を入れます。」

「え、そんなもの入れて大丈夫なんですか？カレーじゃあるまいし」

「大丈夫じゃないので絶対に入れないでください」

「さっきから私で遊んでますね」

「ああ、非常に面白いおもちゃだ。」

「帰りたい・・・」

ノエルは思わずつぶやいた。

ラグナ先生はヘラヘラと笑っている。

「それはそうと、よくカレーの隠し味にコーヒーなんて知ってたな」

「クッキングパパで知りました。」

「おお俺の愛読書！」

ラグナ先生は珍しく食いついた。

「うわなんか意外ですね・・・」

「蒼の魔導書より読み尽くしとるわ！」

「ダメだこの教師！早くなんとかしないと・・・」

「そっぴゃジンが以前カレー味のコーヒー飲まれたとか言ってたな。隠し味はちゃんと隠せ」

「ほっといってください！」

ノエルは顔を赤らめて言った。
さすがノエルはやるのがちがう、ジンも嫌うわけである。

「クッキングパパを再読したくなってきたからさっさと終わらずに、これをあれしてそれを煮込んで終わりたい。ね？簡単でしょ？」
「調理実習をそんな簡単に終わらせるな！！」

「さすがに早く終わるすぎるのはあれだから、ここでミニコーナーでもいっとくか」
「ミニコーナー？」
「ためになると思うぞ」

ゲオルグ13世のお悩み相談教室

（えゝ、どうもゲオルグ13世です。この学校の相談係をやってます。）

（今日の相談者は、ティガー先生です。）

「どうも……」

（ティガー先生、今日はどんな相談で？）

「え」と、ラムダやアラクネに負けまくっていて、対策とか無いですかね」

(・・・努力で補え!!)

ゲオルグ13世のお悩み相談教室・・・完

「おい――――――！！」

「どうしたノエル、胸を大きくする方法とか相談しに行くつもりか？」

「あんたはだまつとけ！相談になつてないじゃん！しかもくつだらない答えですなまた！！」

「細かいことに気にすんな、この世はシンプルイズ・ザ・ベストなんだよ、お前の場合はミニマム・ザ・バストだかな」

「黙れ――――！！」

そして・・・

「というわけでキサラギ先輩、ほぼラグナ先生が作った肉じゃがな

「……ですが、どうですか？」

「貴様……どうやって兄さんの肉じゃがをここまでひどく出来るんだ？」

「えーっと、やつは煮すぎている（似すぎている）とか？」

「自分で言うなこの障害が――――！！」

ひん！！

続く

第10話：第1回ハーデス先生のお料理教室（後書き）

というわけで伝説の第1回目でした。

第2回目や3回目も載せていきたいと思ってますんで、皆さんよろしく願いますね

第11話：入れ替わりヴァーミリオン（前書き）

第11話です。

第11話：入れ替わりヴァーミリオン

・・・う・・・ん

もう朝か・・・

今日も学校かよ、ったく・・・

さっさと支度すっか

あれ？俺ってこんなに部屋散らかしてたっけか？

それに俺の家はこんなに狭くないはずだぞ・・・

しかもなんかいつもとは変な感触が、まあいいや

さっさと顔を洗うか、えーと、鏡は・・・

「・・・え？」

その鏡に映っていたのは、ラグナではなくノエルであった。

「なんで鏡にノエルが写ってるんだ？いやいやおかしいだろ、俺はノエルじゃなくて”ラグナ”先生だ。」

そして周りを見渡すと、自分の部屋でなく、通販グッズで散らかった部屋であった。

(・・・これってまさか？)

その頃のラグナ家

「な・・・なんで私がラグナ先生になってるの？私がラグナでラグナが私、ラグナが私で私がラグ（ry）」

そう、二人は神のいたずらなのか体が入れ替わってしまったのだ。

この話ではラグナとノエルは入れ替わっています。

（いったい何がおこった・・・なんで俺がノエルの姿になってんだ？俺がこいつで、こいつが俺で・・・）

そんなことを思っていると、下からノエルの母の声が聞こえてきた。

「ノエル？早くしないと学校始まるわよ」

「え？やっべ、もうこんな時間じゃねえか！ったく時間があつたら少し掃除してやりてえところだったのに・・・」

学校にて・・・

「まずは俺を見つけないとな・・・」

「おうおはようノエルよ」

「ああハクメン先生おはよう。」

「・・・なんかいつもより挨拶が雑じゃないか？」

そう、今のラグナはノエルになっている。そのまま対応してると何かと厄介になるのである。

「あ・・・いえいえそんなことはありませんよ、なはっはっはっはっはっはっは！」

「そうか、それならいいのだが・・・」

「そんなことよりハクメン先生、ラグナ先生はもう学校に来ているんですか？」

「それがな、珍しくまだ学校に来ていないのだ。あいつが遅刻するなんて珍しい」

「ち・・・遅刻!？」

ノエルはラグナになっても遅刻する。ラグナ自身は迷惑であった。

「やろう・・・俺の評価が下がったらどうするんだよあのナイチチがー!ー!ー!」

「の・・・ノエルどうした急に？」

「しまっ・・・いえいえなんでもないですわ!さようなら!」
「なぐんかいつもと様子がおかしいような・・・」

「ったく、こうなったら俺の授業の時にあいつに接触するしかないな・・・」

「おはようのえるん」

「ああ、マコトか・・・おはよう」

「どうしたののえるん?なんかいつもより顔が険しくない?というか怒ってない?」

「そんなことねえよ」

「なぐんか、頼もしいつていうか・・・」

「どうせラグナ先生とまたケンカしたんでしょ」

「いやいやツバキ、それはないよ、けしてそれはないよ!」
「?」

なんとかごまかしたラグナだが、その後マコトがこんなことを言った。

「そついや今日って”午前授業”だよな」

「そつよ、今日は理科と英語と体育で終わりよ」

「は?ちよつとまって今なんって言つたの?」

「だから、今日は理科と英語と体育の午前授業よ、どうしたの?」

「放課後一緒に買い物行こうっていったじゃん」

「じゃあ俺の授業ねえじゃねえか—————」

「—————」

「!？」

運が悪すぎるラグナ、授業の都合上ラグナとなったノエルに会うことはできそうにない

そしてなんやかんやで理科と英語が終了・・・

（つたく早く終わってくれよ、どうせ明日になったら元に戻ってるってパターンでしょ？）

「のえるん？次体育だよ、早く着替えないと遅刻するよ」

「ああ、わかった・・・・・・・・・・」

次は体育、ラグナは体操服に着替えるべく女子更衣室へと向かう。
ラグナが女子更衣室へ・・・・・・・・

・・・・・・・・・・ん!？

（・・・・・・・・あれ？）

「どうしたのよノエル？」

「い・・・いや、だって・・・」

「なにキョトンとしてんの？今日なんか変だよのえるん」

（今俺の目の前で女生徒が着替えてる、あのさ、俺だって一応”男”だ。今の外見は女だが、中身は”男”だ。）

そう、体が女になっているとはいえ中身は立派な男

女子の着替えなど間近で見れるはずもない・・・

「あ、また胸がでかくなつたかも」

「モルスアアア！！」

「ちよちよちよ、どうしたののえるん！？」

「い・・・いやいやいやいやなんでもない！なんでもないからー！！！」

（つたく勘弁してくれよ本当、こいつの体はまだいいよ、ほとんど”無い”から・・・）

「のえるん、相変わらず”無い”ね」

「ああ、まったくだな・・・」

「あれれ、いつもと反応違うくない？」

「気のせいだよまったく・・・」

「ほら、元気出してよ」

そういつてマコトはノエル（中身ラグナ）の胸をもみ始めた。
はじめに言っておく、この小説にR指定はない・・・

「ちよ！何をする！？」

「よいではないかよいではないか」

「あ・・・ああ！やめろ！やめ・・・ああああ・・・」

「こうやつてもめば大きくなるかもよ」

「やめろ！ああなぜだろう、くやしいけど感じちゃう・・・あ・・・
ああああ！！！！つてなにやらすんじゃボケエー！！！！」

ゴチーン!!

「いったゝい!!」

「はぁ・・・はぁ・・・貴重な体験をした・・・」

「なにバカなことやってんのよ二人とも、早くしなさい」

「はゝい、待ってよツバキ」

「ったくなんなんだよいたい・・・」

そして体育の授業

今日の授業はバレーである。

「マコト、パス」

「ツバキ、トゝス」

（女の体操着やべーって!!）

「ノエル、ボール行っただわよ」

「やべ・・・うおおおおおお、ガントレッド・ハーデスボレー
!!」

もはやノエルになっていることなど忘れ、自分の技を使ってしまっ
た。

使えるかは別として・・・

「うおお、のえるんすこい・・・」

「はっ、どんなもんだ・・・」

「いやいやおかしいでしょ！それあなたの技じゃないでしょ！！」

「ラグナ先生から盗み編み出したのよ・・・」

「と・・・とりあえずボールが遠くまで飛んで行ったわよ」

「あ、私取ってくるよ」

そういつてマコトはボールを投げて渡さず、そのボールを抱えて走ってきた。

そのでかい胸を揺らしながら・・・

「た・・・たのむから普通に持って来い！！」

「いつくよーーーー！！」

そういつてマコトはラグナを押しつぶす。

そのでかい胸で・・・

「ぶ・・・ぶーーーーー！！！！！！」

「ちょ・・・大丈夫ノエル！先生ーーーー！ノエルが鼻血出して倒れましたーーーー！！」

ラグナ、ここで限界が来る。

男としては幸せなんだろうが、なにせ刺激が強すぎたのであった。

「ああ、あんなにムラムラしたのは久しぶりだ、快感を通り越して拷問だよ・・・」

こうなったら一刻も早くノエルを見つけるしかない、そう思い自分の時間割を思い出すラグナ

「今日ってなんかあったっけ・・・とりあえず俺を探すしか・・・」

「

「兄さーんーん!!」

「ん？」

突如ジンの声が”家庭科室”から聞こえてきた。

「家庭科室からジンの悲鳴・・・家庭科室・・・料理・・・まさか!!」

「兄さん！今日はいったいどうしたの!？」

「ひいゝん、ごめんなさゝい」

「兄さんってこんなに料理が下手じゃないはずだよ！まるであの障害じゃないか!!」

（しまったあ！今日は3年A組の調理実習の日だったーーーーー！）

時すでに遅し、ノエルはラグナの姿で授業を始めてしまっていた。
煙立つ家庭科室、そこに駆け寄る他の教師たち

「おいココノエ、いったい何があった？」

「なんでも今日のラグナ先生は調子悪いみたいで、まるであの”無い”やつみたいに料理で大失敗してしまったらしい・・・」

「今日も朝遅刻したしな・・・日頃のストレスか、はたまた病気がなんかだろう・・・」

「まずいよ、このままじゃ俺の評価が丸下がりだよ！おいノエル！今助けに・・・」

ラグナがその場に入ろうとした瞬間、ハクメン先生の手がラグナを強く握りしめた。

「おい誰だ！はなしやが・・・」

「貴様、こんなところでなにをやっている・・・」

「ハクメン先生！俺はただ、あの現場をなんとかしようと・・・」

「お前・・・それを本気で言っているのか？」

「ど・・・どういう意味だココノエ先生？」

「どういう意味も・・・お前自分を誰だと思っているんだ？」

「誰って俺はラグ・・・！！？」

そう、確かに中身はラグナであるが、外見はあの禍々しい料理を作り幾度なく人を地に沈めてきたノエルである。

ただでさえ料理関係のトラブルにノエルが入り込むとなれば、この

学校の崩壊につながる危険性もある。

「あ……でも……」

「貴様が、あの現場（調理場）に入って、なんとかなるわけないだろ!!」

「奇跡は起きます! 起こして見せます!!」

「だめだ! 貴様はさっさとここから立ち去れ!!」

そういつてハクメン先生は、ラグナ（ノエル）を退ける。

「違うんだ! 俺はラグナだ! ラグナ先生なんだぁー!!」

「あ、先生まってくださー!! い!!」

その後なんとか現場は落ち着いたようだが、ますます俺とあいつは近づけなくなった、こうなったらだまって明日を待つしかない……

そして次の日

う……ん?

昨日はいろいろあったな、さて俺は元に戻れたのだろうか……

お、ノエルの声がする

よかった、どうやら俺は元に戻れたよう・・・

カポッ！

・・・ん？

「まったく昨日はひどい目にあつたよ」

「ノエル、そんなバカな話あるわけないでしょ」

「本当なんだってツバキー！！」

あれ、俺なんで「ノエルの上」に乗つかつてるんだ？

これって、ノエルの帽子なんじゃ・・・？

その頃のラグナ家

「・・・」

「兄さん！いったいどうしたの！？今度はまったく動かない、まるで屍のようじゃないかー！ー！？」

「・・・」

はたしていつになったら自分の体に戻るのやら・・・

第11話：入れ替わりヴァーミリオン（後書き）

アクセスが2万超えました。ありがとうございます。
次は3万目指しますよ。

第12話：ラゲナ、記憶を失う。（前書き）

第12話です。

第12話：ラグナ、記憶を失う。

「さうで、これで買い物はすんだな」

キーーーーー！！

「うん？うわあああああああああ！！」

ラグナは今日の夜飯の調達に行っていた。
その帰りの道での出来事だった。

曲がり角からきたトラックにぶつかり、大けがをして病院に運ばれたのだ。

「・・・・・・・・うん・・・・・・・・うん？」

「先生！よかった・・・先生が目を覚ました」

目が覚めたラグナのそばにはノエルがいた。
どうやらたまたま外にいたノエルに助けられたようだ。

「あ・・・・・・・・ここ・・・・は？」

「病院ですよ、先生トラックに引かれて重症だったんですよ？」

「えーと、君・・・・だれ？」

「…………え!?!」

ラグナはどうやら記憶喪失のようである。
トラックに引かれたシヨックで、すっぽりと記憶をなくしてしまっているようだ。

「そ……そんな……私ですよ!ノエル、ノエル・ヴァーミリオンですよ!」

「え〜と、ナイチチ」

「ちげえよ!!—文字もあつてねえよ!!」

相手の記憶がなくともツツコミは欠かさないノエル
そこにジンとニュー、教師らが現れた。

「兄さん!大丈夫!?!」

「ラグナ!!けがしたって聞いたよ!!」

「おうジンとニューか、俺はピンピンしてるぞ」

…………あれ?

「まったく心配掛けさせよって……」

「相変わらずしぶといでござるな〜」

「てめえら、俺はトラックごときで死なねえっての」

「ちょ……ちよつとまったーーーー!!」

ノエルが会話に割って入っていった。

「どうしたノエルよ？」

「ラグナ先生が無事でいい雰囲気になっていたでござるのに……」
「障害、お前等々空気すら読めなくなったのか？」

「KYなのはよくないよノエルちゃん」

「いやいや確かにそうかもしれませんが！先生あなた記憶喪失じゃないんですか！？」

「え……え」とその……お前だけ誰かわかんないんだけど……」

「……左から順番に名前を言ってみてくれませんか？」

「ジン、ニユー、ハクメン先生、バング先生……」

「……」

「……誰？」

「なんで私だけ覚えてないんじゃないか！……！……！」

ラグナは（なぜか）ノエルの記憶だけ失っていた。

「おいてめえわざとじゃねえよな？からかってるんじゃないですよ
ね……？」

「ノエル殿、落ち付くでござる……！」

「そんな簡単に変身するな……！」

「おう、ミニューじゃねえか」

「なんでこっちはわかるんじゃ————！！」

ラグナは、ノエルの記憶だけをすっぽりと抜け落ちていた。

「いくらラゲナ先生が冗談好きでも、これは本当っぽいな」

「確かにやりそうではあるでござるが……」

「本当に思い出せねえ、冗談抜きで」

「な．．．．．なんで．．．．．」

「単純に嫌われていたからじゃないのか、障害」

「んな!？」

ノエルは予想以上に傷ついた。

「ジン、言っていることと悪いことがあるでござるよ」

「ちっ・・・」

「でもさ、ここにいるメンバーだけ覚えてて、ひよつとしたら数人くらい忘れてるかもよ」

「た……たしかに、いくらなんでも私だけってことは……」

「とりあえずだ、この程度の度の低い記憶喪失なら、明日になったら回復してるだろう」

「まあなんだ、俺もかんばつて思い出すからさ、ノエルちゃん」

「う・・・」

そして次の日

「おはようノエルちゃん」

(思い出してねえ……)

「さてと、みんなに会ってみるか」

「ツバキおはよう、マコトおはよう、ライチ先生にハザマ先生、テイガー先生にココノエ先生」

•
•
•
•
•

「タオカカ、アラクネ、カルルにニルヴァーナ、ラムダにレイチェル校長に（ry）」

ラグナは、ほかの全員を覚えていた。

「えと……その……」

「なんで私だけ忘れてるんじゃないか――！！」

「だから怒るなでござる!」

「一応ラグナも病み上がりだよー!!」

「.....」

「とりあえずまあ、ゆっくり思い出してくからさ、ノエルちゃん」

「……めてください」

「・・・え？」

「その、
” ノエルちゃん ”
” っていうのやめてくださいー!」

ノエルはいつになく強く言った。

「えゝ、じゃあナイチちゃんとか」

「それもちげえよ!!」

「じゃあ”ノエル”でいいのか？」

「そうです。なんか先生が遠くに行ってしまったみたいで、いやだつたんですよ」

「ノエル……」

ノエルは悲しそうに言った。

それもそうである。自分一人だけ忘れられてしまったのだから。

「うゝん、なんとかして先生に私の記憶を思い出してもらわないと……」

「ついでにノエルの胸もでかくしてもらわないとね」

「今言わなくていいよねその話! あゝいいよねマコトは! 胸でかくてさ!! 私にも少し分けてほしいな!!」

「えっへへごめんごめん、分けてあげられないんだよね」

「そっち!? そっちを謝るの!？」

「ツツコミを連発してる場合じゃないでしょ、そうね……やっぱり記憶を思い出させるにはショックを与えるのが一番ね」

「さすがツバキ、頼りになるゝ!!」

「ということは……先生を思いつきり殴りころ……殴ってみるのがいいわね」

ツバキは不気味な笑みを浮かべて言った。

明らかに別の目的があるかのように……

「その案はいいけどツバキはかわらないで」

「えゝ、なんでよノエル」

「私がやるから、ツバキに任せると先生が危ない」

「しょうがないわね、じゃあ”お願い”ねノエル」

その”お願い”は何を意味しているのだろうか・・・

「でもさ、教師を殴るのはだめだよ」

「マコト、これは一大事なのよ」

「仮に打ちどころ悪ければ、ノエルのことを思い出すどころかみんなのことを忘れちゃうかもよ」

「う・・・そう・・・だよね」

「だから、殴るよりも効率のいいショック療法を思いついたんだけど」

「え！？なにになに？」

「それはね」

「ラグナ先生、ちょっといいですか？」

「ああ、なんかいい案でも思いついたのか？」

「その・・・先生の記憶が戻るように・・・”クッキー”を焼いてきたんですけど・・・」

「！？」

その言葉を聞き、ハクメン先生がCSアンリミ式自動雪風でノエルを連れ出した。

「きゃ！何をするんですかいきなり」

「何をするんですかはお前の方だ。」

「おいしいものを食べさせればうまくいくってマコトが言ってたんですよ、愛情たっぷり料理で」

「ショック療法のことを言っていたんだろうがそれはずれてるようで正しい……否、ずれまくっているようですれまくっている！！」

ハクメン先生は意味不明なことを言った。

「とりあえず、これをラグナ先生に食べさせるくらいなら思いつきりラグナ先生を殴れ！！」

「なななな……なんでそこまで否定的なんですか！？」

「ひどいんじゃないですかハクメン先生」

「ラ……ラグナ先生！？」

「せっかく生徒が料理を作ってくれたんだ、食ってやるのが良心ってもんよ」

（しまった！こいつノエルの料理に関しての記憶も失っているのか！？）

「うーん、ちょっとどどめ色だが、見た目より味だろう……いただきます。」

……ドサッ

今度は、”ノエル以外の記憶”を失った。

「障害っ!!」

「ノエルちゃん!!」

「ひいっん!ごめんなさい!!」

その後ラグナが正常に戻れたかは誰も知らない・・・

第13話：兄を求めて十三歩（前書き）

第13話です。

第13話：兄を求めて十三歩

兄さ――――ん!!

ラグナ――――!!

うるせ――――!!

ブレイブルー学園では、今日もラグナ争奪戦が行われていた。
ジンが叫ぶ、ニューが抱きつく、ラグナが返り討ちにする。
その流れが毎日のように起こるのである。

「シザ――――!!」

「あ―――! 兄さんあ――――!!」

「にゅ――! ラグナにゅ――――!!」

「毎日毎日……いい加減に俺に付きまとうんじゃねえ!!」

「はあ……なんで兄さんは僕の愛情をわかってくれないのか
な」

「ラグナを幸せにできるのはニューだけなのにな」

「はあ? 貴様のような小娘が兄さんを幸せになんかできるわけない
だろうが、このクズが。」

「そついうジンこそ、兄弟だかなんだか知らないけど、ラグナは男
だよ、ジンに傾くはずがないよ」

二人はにらみ合った……

「同姓だからなんだ？兄さんと僕の兄弟愛に同姓などという壁はもろく崩れるんだよ」

「うつわキモく、そんなの幻想にすぎないよ、ラグナにはきちんとした女性が必要なんだよ」

「きちんとした女性？笑わせるな貴様のどこがきちんとした女性だ。ただの病んでるだけのガキ娘だろうが」

「病むほどに愛する恋だよ、それに病んでるのはジンだって同じでしょ？」

「貴様……切り殺されたいのか？」

「ジンこそ……私に刺し殺されたいの？」

「う……………!!」

「む……………!!」

「兄さんは僕のものだ！邪魔する者は……排除する!!」

「ラグナは私のものだよ……………!!」

二人はラグナを取り合い喧嘩をする。

この二人は犬猿の仲、ラグナを求めるもの同士なにかと喧嘩をするのである。

「はぁ……はぁ……このヤンデレ娘が……」

「はあ・・・はあ・・・キモメンめ」

「ちよつと二人とも、また喧嘩してるの!？」

そこにライチ先生が現れた。

「もう二人とも! 喧嘩しないで仲良くしなさい!！」

「うるさい! こいつが悪いんだ!！」

「いや! ジンが悪い!！」

「だまれ!——! 貴様みたいなやつが兄さんに触れるなんて許されないことだ!！」

「ジンこそいい加減兄離れしろ!——!！」

「あなたたち・・・」

「(二人とも) う!？」

「私・・・CSでは群を抜いてのSランクなんだけどな」

ライチ先生の(おぞましい)オーラで、二人は喧嘩を止めた。

「くつそあの小娘! 絶対やつより先に兄さんを手に入れる!！」

ジンは強く決心する。

「しかしそれならそれであいつと同じ作戦を使っているのは埒が開かないな、それなら・・・」

数日後

「さてと、ミスの１００円セールは今日までだったよな・・・

」

今、ミスドカグツチ店では、全ドーナツの１００円セールをやっていた。

「たくさん買って、家でアバター見ながら食うかな」と

「いらつしゃいませー!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

そこにいたのは、ミスドで働いているニューとジンであった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お客さん、どのドーナツをお取りますか？」

「お客ラグナ、私というドーナツをお取りますか？」

「さうて、今日はケンタにするか・・・」

「（二人揃って）ちょ・・・っと待ってーーーーー!!」

二人はラグナを逃がすまいと引き留めた。

「なんでてめえらがここにいやがる？」

「少々諸事情があつて」（なんでニューまで！）

「同じくだよ」（なんでジンまで！！）

それはセールの初日までさかのぼる。

「え〜と、ジン・キサラギくんだっけ？今日からよろしく」

「はい！少しの間だと思いますがよろしくおねがいます！！」

「いや〜よかったよかった、君みたいなイケメンくんが店にいてくれれば毎日女子高生がたくさん買いに来てくれるよ〜」

「そ・・・そうですね（そんなクソ女どもなんてどうだっていい！僕は兄さんを待つんだ！！）」

そう、ジンはラグナがミスドールでドーナツを買いに来ることを知っていたため、待ち伏せをしようと企んだのであった。

「本当、ほら〜このミスドってマツクとケンタに挟まれてるでしょ？だからいつも客がそっちに流されちゃってね〜」

「まあ、昼飯食べるところじゃないからな」

「それに、君とちょうど同時に”可愛い女の子”も入ってきてくれたしね〜」

「可愛い・・・女の子？」

「店長！ドーナツ揚げましたー！！」

「御苦労、ニューちゃん」

「いえいえ……ってジン!?」

「ニュー!?なんで貴様までそこにいる!?」

ニューもまた、同じことを考えていた。

「えー！ちよつと本気で落ち込むんだけど」

「それはこっちのセリフだ!!」

「えーと、二人とも知り合い？」

「恋敵だ。」

「同じく」

「は？”恋人”じゃなくて？」

「それはない!!」

「絶対ない!!」

「ひ……ひい……!!」

ジンとニューは必死に否定した。

「貴様がミスドだと?どうせ一番好きなのはエンゼルフレンチとかメジャーな答えしかできないんだろ?」

「私はクッキークルーラーが好きなの、ジンこそエンゼルフレンチとかつまらない答えしかできないでしょ?」

「エンゼルだと?何を下らぬことを……僕は根っからのポンデ派だ。」

「うっわ、ポンデとか……小学生のような趣味してるんだね」

「ポンデを舐めるなよ貴様！あの新食感を理解できないとはミスドで働く資格など無い！！」

「クッキークルーラーを語れるニユーの方がミスド愛が強いもん！！」

「あの・・・君たち今は仕事中だよ？」

「うるさい黙ってろ！！」

「黙ってて店長！これは私とジンの問題なの！！」

「は・・・はい！！」

とまあ二人はしばしミスド愛を語り続けた。

落ち着いたかと思えばお客は来る。そして店長の思惑通り・・・

「きゃー！可愛い女の子に美少年だーーーー！！」

「な・・・なんか多くないか？」

「私ミスドにここまで人が来たの初めて見る・・・」

「計画通り・・・さてジンくんニユーちゃん！どんどんドーナツを売っちゃって！！」

「そんな！僕は兄さんを・・・（まてよ・・・）」

「ラグナが来ると思ったのに・・・（ちよつとまって・・・）」

ジン（ニユー）よりドーナツを売上げ、自分の有用性をアピールする！！

「はいポンデお待ち！！」

「クッキークルーラー食べていってね」

ジンとニユーはどんどんーナツを売っていく
気がつけばポンデとクッキークルーラーだけが他のドーナツより無
くなっていた。

そんなこんなでセールの最終日、ようやく二人が求めたラグナが店
にやってきたのだ。

「……………」

「待ちわびたよ兄さん、初日や二日目には来ると思ったのに」

「まさか最終日に来るなんて、焦らしちゃってさ」

「ぶつとばしてえ…………ぶつとばしてえけど…………店の中だちくし
よー……………」

「さて兄さん、どのドーナツにする？ポンデ？それともポンデ？」

「いやいやクッキーだね？クッキー……………」

「とりあえずエンゼルだな。」

「な……………」

「え……………」

ラグナは迷わずエンゼルフレンチを指名した。

「…………兄さんエンゼル好きなの？」

「一番スタンダードだしな、いっつも頼むよ」

「……………う……………うわ…………兄さん僕の好きなドーナツと一緒にだな

んて」

「はあ？ ジンはポンデが好きなんでしょ？ 私はもちろんエンゼルが好きだよラグナ」

「なに？ そういうお前はクツキークルラーが好きとかほざいてただろうが、僕の方がエンゼルが好きだ！！」

「ふざけないでよ！ さんざんエンゼル馬鹿にしてたくせに！！」

「馬鹿にしたのは貴様のほうだろうがー！！」

「あのよ・・・早くしてくんねえかな？」

「あ・・・」

ラグナはポツンと立っていた。

いつもは的になってるのに、なんか置いてかれたような感じになっていた。

「とりあえずこんなもんかな？」

「ではお買い上げ・・・あれ兄さん・・・ポイント溜まってるね」

「ああ、そーい結構溜まってたな」

「そうだね・・・じゃあこのポンデバスタオルにしようよ、そして僕と兄さんが・・・きゃ」

「何が「きゃ」だ。このバカ！！」

「バスタオルで巻かれるのはニューとラグナだよ」

「どっちともしねえよ！ だあもう俺は帰る！！」

「あゝ兄さんー！！」

「ラグナー！！」

こうしてラグナはイライラしながら店を出た。

「まったくあいつらそろそろいい加減にしろよ……」

「あれ？ラグナ先生じゃないっすか？」

「おう、マコトじゃねえか、それにノエルとツバキも……」

「先生もドーナツですか？」

「いいですよねドーナツ！もう100円セールを今日この日まで忘れていたとは……マコト一生の不覚！！」

「何が一生の不覚よ、というかあなた放課後の居残りが忙しくてミスドに来れなかったでしょ」

「えっへへ、そうでしたそうでした」

「マコト、ツバキ、早く買いにいきましょう」

「……この際だから少しあいつらに痛い目みせてやるか」

「え？今なんか言いましたか先生？」

「お前ら、実は……実はな」

ミスドにて……

「くっそ！お前さえいなければもう少しうまくいったんだ！！」

「それは私のセリフだよ！！」

ピロピロピロ

「ぐ……客か……いらっしやいませ」

「いらっしやいませ」

「ジン……兄様……」

「おや……ツバキ……君たちもドーナツを買いに来たのかい？」

「ジン……キャラ変わりすぎ」

「貴様……あとで覚えてる……」

「うつわ〜ラグナ先生が言っていたことは本当だったんだ〜!!」

「正直……驚きました……」

マコトは眼を光らせ、ノエルは顔を赤らめ、そしてツバキは無茶苦茶落ち込んでいた。

「……なんだ？何かが変だ。」

「マコトちゃん、ラグナがなにか言ってたの？」

「もうもう！隠さなくてもよかったのに！隅におけない二人とも！！」

「な……なんの話だ？」

「ラグナ先生が言ってたんですけど、お二人……本当に”付き合って”たん……ですね」

「はあ——————!？」

ジンとニューは声を揃えて叫んだ。

「息もぴったりだよ！ラブラブだな〜」

「ちょ！君たちそれは大きな間違いだ！」

「私がなんでジンなんかと付き合わなきゃいけないの!」

「それはこっちのセリフだ!」

「うつわゝ照れてる照れてる!それに喧嘩もしてるし!」

「ち・・・違うってば!」

「とつてもお似合いですよ」

「黙れこの障害!」

ラグナは二人がそろってバイトをしていることをいいことに、二人が付き合つてるといふ嘘をついたのである。

「兄様・・・」

「つ・・・ツバキ!これは違う・・・違うんだよ!」

「・・・兄様・・・兄様」

「ツバキちゃんもさ!私がジンと付き合うはずが・・・」

「・・・勝者の・・・余裕か?」

「は?」

「ニュー・・・ニュー・・・ニュー!」

「ちょ・・・え!」

「これはニュースだよ、明日のBB学園ニュースの特賞狙えるよこれ!」

「いやまて!だからこれは違う・・・違うんだ!」

「ふっふっふ・・・これでしばらくは俺に襲いかかってこないだろ・・・」

ラグナはその夜、笑顔でドーナツを食べたという……

第13話：兄を求めて十三歩（後書き）

実はこの話12話より前に思いついた話でした。
だけどニューが活躍するので、13話にしたかったので。

第14話：第2回ハーデス先生のお料理教室（前書き）

3万アクセス超えました。

ブレイブルーのこれからの発展を祈りながらガンガン書いていきますよ〜

今回は伝説の料理教室の2回目でございます。がんばって書きますんでよろしく願います。

第14話：第2回ハーデス先生のお料理教室

「はい、ハーデス先生の料理教室第二回。講師のラグナです」
「助手と書いて相方と読む、ノエルです。」

今日もまた、後先不安の料理教室が始まる。

「助手は何もしませんのでご安心ください」
「どうせ私の料理はポイズンクッキングですよ」
「えゝ今日の実習品目は丸焼きです。これは先生の得意料理ですよ」
「教科書では肉じゃがの次はピラフになってますよ」
「ピラフって作るのつまらないんだもん」

ラグナ先生は気まぐれで物事を決める。

「丸焼きだつて焼くだけじゃないですか…」
「士郎！貴様に丸焼きの何がわかるというのだ！」
「誰が士郎か！！」
「真面目な話、丸焼きを美味しく作るのは結構コツがいるんだぞ」
「でも丸焼きなんて教わっても家で作る機会とかないと思うんですが」
「じゃあお前、前回教えた肉じゃが作る機会あんのか。その腕で」
「丸焼きでいいです・・・」

ノエルは即答する。

「学校で教わった物を使いたいなら二次関数を日常生活で使ってみるや!」

「うわぁ・・・子供だこの人・・・。見た目は大人頭脳は子供だ。」

「ばーか、男って言うのは人生いつまでも少年の心を持ってるもんなんだよ」

「少年というかがキじゃないですか」

「すっかり前置きが長くなってしまったが、ノエル、丸焼きで一番大切なことってなんだと思う?」

「なんでしょう。やっぱり焼き加減ですか?」

「まあ大体あつて。正確には素材にあつた焼き方をするということだ。」

「と、いいますと?」

「丸焼きと言っても何を丸焼きにするかによって大分変わって来るもんだ。豚、牛、鶏、ジン、ノエル、魚・・・」

「ちよちよちよちよと待ってください!今なんか焼いちゃいけないのが一つ混じってましたよ!?」

ノエルは受け流さずに指摘する。

「一つ」というところが引っかかる。

「ああーそうだな。ジンは丸焼きじゃなくなてなますの方が良さそう

だ」

「違くて！というか先生の中で丸焼き優先度が私>少佐なんですか！？」

「冗談だよもしれえな。しかし焼いちゃいけないのが”一つ”ねえ？お前も馬脚を現してきたな」

「い、いやこれは、その先生が少佐を毛嫌いしてるのは前から旧知の事実であるからでしてね？」

「あーはいはい。そーいうことにしといてやんよ」

ラグナはノエルをからかい笑みを浮かべながら話を進める。

「そ、それで今日は何の丸焼きですか！？」

「全力で話題をそらしてきたな。まあ話が進まないからいいだろ。今日は鶏の丸焼き」

「へえ。鶏が一番簡単なんですか？」

「学校の調理室で牛丸焼きに出来ると思うか？」

「・・・無理ですね」

学校が炎上する以前に、そんな牛などこの学校にはいないのである。

「はい、前振りに大分使ってしまったので今回も手順を箇条書きにしていきますよ」

「ボケは無しでお願いしますよ」

「？鶏に向けて黙祷」

「初っ端から・・・」

この話、ボケなしでは進まないのである。

「ばっかお前動物霊が一番怖いんだぜ!？」

「今度私が「おぼけなんてないさ」を歌ってあげますから次に進めて下さい」

「あれはお化けが怖い子供が強がる歌だろ!」

「通称死神のクセに・・・」

「本編の話を持ってくるなつての、続けっぞ」

「?オーブンを200度程に温めておく」

「ほうほう・・・」

「?天板を”素手”で持って火傷する」

「ほうほう・・・ってあっちゃああああ!」

「お前馬鹿か?普通天板にはキャッチャーが付いてるもんだぞ」

「あんたがやれ言っただけでしょうが!」

「常識だろうがそんなもん」

ラグナは謝るそぶりも見せずそのまま話を進める。

「ホントこいつおもしれえな。?天板にクッキングペーパーを引いて輪切りたまねぎ・人参・パセリなどお好みの野菜を敷く」

「た、たまねぎ?」

「なんだノエル、たまねぎ苦手か。子供だなー」

「食べれますよ!食べれますもん!」

ノエルは必死に否定する。

「？若鶏の表面を塩胡椒で味付け。ここを濃い目にしてソースを使わないのが先生の好みです」

「？おなかの穴にニンクスライスを満遍なく」

「なんかぽっかり空いてますね。何ですか？」

「そりゃ肉屋で売ってる鶏つてのは内臓とつてくれてるからな」

「う・・・私内臓とかそういうのちよっと苦手です。」

「そうか、ならこの作業はノエルにやってもらうか」

ラグナはノエルが嫌がるものならその作業をやらせた。

「そんな良い笑顔でパワハラしないでくださっ・・・あ・・・いや、離して！ぎゃあああああ！」

「よし上手く出来たな。偉いぞノエル。やれば出来るじゃねえか」

「出来なくても良いからやりたくない・・・」

「そろそろ佳境だぞ。？手足を縛る。これをやらないと熱が伝わりすぎて焦げてしまいます。」

「・・・貴方を、拘束します。」

ノエルはボソつと言った。

「ん？なんか言ったか？」

「いえ、何でもありません」

「そうか。じゃあこの拘束した鶏をオープンに・・・」

「聞こえてんじゃねーかチクショオオオ！」

ラグナはこういうことを聞き逃さない男である。

「200度で40分ほど焼いたら・・・」

キンコンカンコン・・・

「先生、チャイムになりました。」

「温度を180度に下げてまた20分ほど焼きます。」

「先生・・・チャイム・・・」

「安心しろ、今は放課後だ。」

「不等拘束・・・」

「貴方を拘束します。」ってか？」

「人の決め台詞取らないでください！」

「あーもう20分ぐらいでぎゃーぎゃー言っな。こっちは焼き加減見てひっくり返したりして忙しいんだぞ・・・お、よしバッチリだ！」

「うわ良い匂い・・・」

「よし、あとはそれ勝手に食え。解散！」

「超投げやり」

ラグナ先生はまたもやぶつきらばつに終わらせる。

「まだクツキングパパ全然終わって無いんだよ。今から荒岩主任とリーさんが最強タッグ組んでペチキン作るんだよ」

「鶏の丸焼きにしたのはそのせいだよ！こんなの私一人じゃ食べ切れませんよぉ」

「じゃあそれジンに持って行ってやれ」

「あら珍しいですね。どういった風の吹き回しですか？」

「まあ、たまには兄貴らしいこととしてやろうと思ってな」

「いいところあるんですね。えへへ、きっと少佐泣いて喜びますよ」

そして・・・

「と、いうわけで今回はラグナ先生が最後まで作ったのできつといいですよ」

「ああ、まさか兄さんが料理を僕にご馳走してくれるなんて！もう二度とないと思っていたのに！」

「よかったですね少佐。はいっ！ジャン、なんと鶏の丸焼きですよ！」

「・・・貴様今なんと言った？」

ジンの表情が突如笑顔から怒りに変わる。

「え、あれ？鶏の丸焼きですよ？とっても美味しそうですね」

「僕は肉料理が嫌いだと知っていなかったか？」

「あ・・・そういえば。で、でも肉じゃがは食べ・・・ましたよ・・・ね？」

「じゃがいもだけ食べたに決まってるだろうがーーーーー!!」

「ちよちよちよちよ・・・先輩!？」

「貴様貴様貴様障害障害障害イイイ!貴 だけ兄 と樂 そう
理しや ってええ!」

「ぎゃああ!少佐がアラクネ風に襲ってきたあああ!」

「あゝ、本当にノエルをからかうのは面白いな」

ラグナは笑顔でこの幕を閉めたとき・・・

第15話：夏のクワガタ大戦争（前編）（前書き）

第15話です。

第15話：夏のクワガタ大戦争（前編）

ブレイブルー学園は夏休み

だがノエルはテストで悪い点数を取り続けていたため補習を受けていた。

「はいこれで夏休みの補習は終わりだ。」

「うう・・・熱いよ」

「この馬鹿ノエルが、夏休みも仕事してるこっちのほうが熱いよ、お前はこれから家帰ってのんびりできんだろが」

「ご苦労様です。さて帰ってエアコンバリバリかしてる部屋でのんびりしよう」

「夏休みだからって浮かれやがって、どうせ家でネットしたり、自作のポエム書いたりして1日をすごしてるんだろ？」

「ぎくう!!」

図星であつた。

「そんなんだから今の学生はだらしねえんだ。」

「すいませーん」

「つたく、ノエル明日空いてるか？」

「・・・え？いやあの・・・それって」

「空いてるよな、空いていないはずがないもんな、だもんな」

「ひっどー!!」

ラグナはノエルがなんの用事も無く家でダラダラしていると勝手に決めた。

「それで先生、明日なにかあるんですか？」

「明日俺達職員が全員休みなんだ。だからだらけきってるお前をいいところに連れて行ってやるよ」

「え・・・それってもしかして・・・デー」

「違う違う、それだったらお前夏休み終わるころにはジーンとニューに殺されてっぞ」

「そ・・・そうですね、でもいいんですか先生？せっかくの休みに家でゆっくりとアバターを見てダラダラダラ過ごしたいんじゃないですか？」

「俺はてめえとは違うんだよこのダラチチが」

「誰がダラチチじゃー!!」

そんなこんなで翌日

「山・・・ですか？」

「ああ、ここカグツチ山の大自然は地元の人たちの人気スポットだ。」

「

「でもなんで山？先生のイメージとはまるでかけ離れた場所ですよ」

「俺にどんなイメージ抱いてんだよお前」

「それで先生、この山で何をするつもりです？」

「ここのキノコは絶品でな、たくさん採って食いたいと思って」

ラグナの答えに、ノエルは疑問を抱きながらこう返した。

「キノコ採りなら、先生一人でもできるんじゃないですか？」

「ば・・・ばつかてめえ！せっかく先生が時間を割いて連れてきたのにその返事はねえだろ！」

「・・・・・・・・先生、なにか隠してませんか？」

「な・・・・・・・・何言っちゃてんのお前！」

「先生？」

「・・・実はな、先日ハクメン先生とどっちがガリガリくんの当たりを引くか勝負して」

「で？」

「金を無駄に使いすぎてしまい、食費がピンチに」

そう、ラグナ先生は今金欠に等しい状態であり、この夏を少ないそうめんで毎日をすごしていた。

ちなみにガリガリくんの当たりを引いたのはハクメン先生である。

ハクメン先生は4個目のガリガリくんで当たりを引き、勝負はそこで終わるはずだったが

ムキになったラグナ先生はお腹を痛めながらもガリガリくんを買い続けた。

結局当たりは出なかった・・・

「どんだけ運悪いんですか、そしてどんだけ金遣い荒いんですか」
「というわけで、家には今安売りで買ったそうめんと大量のガリガリくんだけ、少しでも多くキノコを採ってもらおうと」

「別にいいですけど、そのキノコ少しはもらいますからね」
「鬼——！！」

「あんたのほうが鬼だわ！！」

そんな会話をしていた最中、遠くから聞き覚えのあるキモイ叫びが聞こえてきた。

「兄さ————ん！！」

「げ……」

「兄さんどうしたのこんなところで……どうして……障害と一緒に？」

「せ……先輩違います！別に深い意味はありません！！」

「ノエル・ヴァーミリオン……貴様！！」

「まあまあ兄様、落ち着いて」

ジンは当たり前のようにノエルを睨み叫んだ。

ジンと一緒にいたツバキがそれを抑える。

「俺が頼んだんだよ、ジンお前もキノコ採りか？」

「え？なんの冗談だよ兄さん、隠さなくてもいいよ」

「は？なんの話だ？」

「兄さんも狙ってるんでしょ？今話題の”スーパーベルヴェルクメ
ガサンシャインハリケーンオーバーベルヴェルクオオクワガタ”を」
「なんだその長い名前のオオクワガタ！しかもベルヴェルク二回言
ったよね？二回言ったよね！？」

それはどこかのアニメに出てくる卑猥な大砲に似たような長い名前の
クワガタであった。

「んで、そのスーパーベルヴェルクメガサンシャインハリケーンオ
ーバーベルヴェルクオオクワガタってなんなのツバキ？」

「ええ、スーパーベルヴェルクメガサンシャインハリケーンオーバ
ーベルヴェルクオオクワガタはこのカグツチ山に一匹しかいない幻
のクワガタなのよ」

「それで僕たちは、そのスーパーベルヴェルクメガサンシャインハ
リケーンオーバーベルヴェルクオオクワガタを採りに来たのだ。」

「お前らそれわざと言ってない？略せよ長いなおい、それでそのス
ーパークワガタ取ってどうするつもりだよ」

「あれ、兄さん知らないの？そのクワガタを取ったものには”賞金
”が出るんだよ」

賞金という言葉に、ラグナは食いついた。

「賞金？どれくらい？ねえなんぼ？何円？何ドル？」

「ちよちよちよ落ち着いてください先生！」

「確か、50万円だったような気がするよ。」

「うううううう・・・50万ーーーーー！？」

金欠のラグナは大いに叫んだ。今のラグナにとって50万は、何よりもでかく見えたのである。

「…………ノエル、予定変更だ。」

「先生……まさか」

「そのクワガタを、なんとかしても手に入れる!!」

「先生無理ですって、そんな幻のクワガタ見つかりませんって!」

「やる前に諦めるのか!? 先生そんな生徒に育てた覚えはないわよ!!」

「なにそのお母さんみたいなセリフ!？」

ラグナはやる気だった。

全ては50万円を手にするため

「か……仮に見つけたとして、分け前はとうするんです?」

「ぎく……」

「先生?」

「俺45万、お前5万でどうだ?」

「何その理不尽な分け方! 25万ずつでしょ!？」

「先生としては、生徒にそんな大金あげるなんてできるわけないだろ!!」

「なに都合のいい時だけ教師ぶってるのこの人!!」

「お前んち金持ちなんだからいいだろうが、わかったよじゃあ10万」

「……もうそれでいいです。どうせ見つかりっこないですし」

「ははは、兄さんにいい思いをしてほしいのは山々だけど、スーパー以下略クワガタを手にするのは僕たちだ!!」

ジンはラグナに宣戦布告する。

「んだと、てめえらは50万手に入れてどうするんだよ？」

「20万くらいは、ツバキを含めた親戚の夏のパーティーの資金にするよ」

「ジン兄さまぁ・・・私のためにそんなぁ」

「残りの30万はどうするんですか？」

「ふふふ障害、障害の分際でいい所に気がついたなぁ」

「ひつど!!」

「残りの30万で、僕は兄さんを買ひ付ける!!」

「・・・はぁ？」

それはまた、大胆な発言であつた。

「30万で兄さんを僕の好きなように使う、一度やってみたかったんだよねえ!!」

「いや、普通に30万ください」

「だめだよ兄さん、それでは兄さんを満喫できない、ふふふふふ・・・あはははははは!!」

「くそ・・・それだけは避けなければならねえ、人間としても!!」

「先生、先輩が賞金手に入れたら買われる気満々ですね」

「それは最後の手段だ!!」

「さぁ、勝負だ兄さん!!」

「ああ、スーパーベルヴェルクメガサンシャインハリケーンオーバーベルヴェルクオオクワガタを手に入れるのは俺だ!!」

真夏のクワガタ戦争が今始まる。

第15話：夏のクワガタ大戦争（前編）（後書き）

続きます。

第16話：夏のクワガタ大戦争（後編）（前書き）

第16話、クワガタウォーズ後編です。

はたしてスーパールヴェルクメガサンシャインオーバーベルヴェルクオオクワガタは誰の手に渡るのだろうか・・・

第16話：夏のクワガタ大戦争（後編）

「どこだ！スーパーベルヴェルクメガサンシャインハリげふ！」

ラグナ先生、いきなり囃む

「先生初っ端から囃んでどうするんですか？」

「言いづらんだよ、見つけたらもつと簡単な名前にしてやる。」

「生物の名前をつけられるのは新種の生態を初めて発見した人だけなんですよ、そのスーパーベルヴェルクメガサンシャインハリケーンオーバーベルヴェルクオオクワガタは新種ではなく元から存在する生物ですから無理ですよ」

「お前よく囃まずに言えるなそれ」

「おや、ラグナ先生のノエルではないか」

そこにいたのはハクメン先生だった。

「おつ、ハクメン先生じゃねえか」

「こんにちは先生」

「うむ、なんだお前たちも探してるのか？」

「な・・・なんの話かなあ」

「とぼけなくていい、お前たちも”スーパーベルヴェルクギガドリルブレイクサイクロンオーバーベルヴェルクオオクワガタ”を探してるのだろう？」

「おいなんか名前変わってねえか！？なんか天元突破しそうな感じ

「なってねえか!？」

「第一次魔導大戦で唯一黒き獣の侵攻から逃げだせたという、”黒い稲妻”と呼ばれた誇り高き昆虫と世間では言われている。」

「なんか設定ついちゃったよ!しかもそんな化け物俺たちに捕まえられるのか!！」

クワガタの話は大きく膨らむばかりであった。

「お互いに健闘をつくそうではないか、ではそっちもがんばるのだぞ。」

「ラグナ先生、とりあえず簡単には捕まえられそうにないです。」

「くっそ、だが50万がかかってる。今の飢えてる俺ならそいつにだって・・・」

「あれ、ノエル先輩にラグナ先生じゃないですか」

「奇遇だなラグナ先生・・・」

今度はクローバー親子に出会った。

「んだよてめえらもかよ、てか親子で行動とか珍しいこともあるもんだな」

「たまには親子水入らずですよ」

カルルはそうは言ったが、顔は嫌そうであった。

「そんでお前らもクワガタ探してんのか？」

「ええ、先生と先輩も探してるんですか？」スーパーハイスクールオブザデッドリビングオブザデッドベルヴェルグオオクワガタ」を「おいなんか最初に聞いたのと大幅に名前変わってっぞ！しかもてめえらさりげなく自分が出演してるアニメ宣伝したろ！！」

「私がイグニスから聞いた話では、イカルガ内戦で次々と>奴ら<になっていく忍者たちを一瞬で沈めた、”白い彗星”と呼ばれたとてつもないクワガタらしい」

「さっきの話どこ行っただよ！しかもさりげなく別の設定入れんじゃねえ！！」

「本当は父さんと行動するのは嫌だけど、父親の誇りを守ってやる事こそが、息子たるの矜持スタイルなのだ。」

「うるせえよお前！てめえらクワガタ探してる暇あったら終末の世界でゾンビと戯れてろ！！」

「まったく、勘弁してくれよ・・・この調子だとうちの学校の連中のほとんどがクワガタ探してるぞ」

「先生もうやめて素直にキノコとりませんか？」

「あいつらに50万なんて渡してたまるか（特にジン）、それにキノコならもうこんなに集まってるぞ」

「いつのまにそんなに採ってたんですか！？」

「スキあらば採ってたよ、ちなみに毒キノコは全部取り除いてある。」

「この人すげえ・・・」

ポタ・・・ポタ・・・

「・・・なんか聞こえね？」
「まさか>奴らくじゃ・・・」
「もうそれいいって!!」

そこにいたのは、蜜を体に塗りつけて金色に輝くバング先生であった。

「・・・おいくぞ」
「先生あれ」
「見るな、見たら病気になる。」

その時、突如遠くから叫び声が聞こえてきた。

「いたぞーーーー!!」
「スーパールヴェルクメガサンシャインハリケーンオーバール
ヴェルクオオクワガタだーーーー!!」
「なに!？」
「先生早く行きましょう!!」
「待つでござる、拙者も一緒に・・・」
「てめえはくんじゃねえ!!」
「ぎゃふうーーーーん!!」

バング先生は金色に輝きながら星になった。

「あゝブラッドサイズにはちみつがべつたりい・・・」

「先生早く早く!!」

「だぁー!!今行くぜクワガタ!!」

「待てー!!クワガター!!」

「虚空陣奥儀・・・疾風!!」

「カンタービレ!!」

ブブブブー!!

「ぐわー!!」

「姉さー!!ん!!」

「馬鹿な・・・カルルとハクメン先生がやられただと・・・」

「レリウス先生あんたは下がってる・・・」

「し・・・しかし・・・」

「プレイヤーキャラでもないくせに!!」

「わかりました・・・」

クワガタは素早くあちこちを移動し、攻撃を仕掛けたカルルとハクメン先生は振り返ちにあつた。

「おいジンこれはいつたい・・・」

「兄さん!あれが噂のスーパーベルヴェルクメガサンシャインハリ

ケーンオーバーベルヴェルクオクワガタだ!!」

「あれが・・・50万・・・うおおおおお!!」

「先を越された、だが手に入れるのは僕だ!!」

だがクワガタは2人の攻撃を意図も簡単にかわし、あざ笑うかのよう
に宙を舞っている。

「くっそなんだあれ!クワガタという名の悪魔か!？」

「くそ・・・氷翼月鳴!!」

ブブブーーン!!

「ぐあーーーーー!!」

「ジン兄様!!」

「ぐ・・・ツバキ・・・すまない・・・」

「兄様・・・兄様ーーーー!!」

「どんっだけ強いあれーーーー!!」

ブブブーーン!

「この・・・ぐあああああああ!!」

「先生!しっかりしてください先生!!」

「う．．．．．うん．．．」

「先生、大丈夫ですか？」

「ああ．．．．．ただクワガタが．．．」

クワガタは結局逃げてしまった。

ラグナ先生にとって最後のチャンスが消えた瞬間であった。

「先生、やっぱり無理だったんですよ」

「くそ．．．夜飯、いったいどうすれば．．．」

「キノコがこんなにあるじゃないですか」

「つつたつて、この程度の量じゃ．．．あれ？増えてる．．．」

「私が少しでも多くと思って採って来たんです。」

「そうか、すまなかったな」

「先生、今日は楽しかったです！」

「そりゃあよかった、また一緒に行くか」

「はい！今日はお礼としてがんばってキノコ料理を作りますから！」

「うん、それはやめてくれ」

「ひつどー！！」

翌日

「いやゝ偶然落ちた先に珍しいクワガタがいて、それをマニアシヨ

ツプに持って行ったら50万円もらえたでござるよ」

「・・・・・・はあ？」

「バング先生、お前もそのクワガタ見つけにカグツチ山に来たのではなかったのか？」

「いやいや拙者は普通にカブトムシやクワガタを取りに行ったのでござるよ」

「んで、その50万は？」

「恵まれない子供たちのため寄付したでござるよ、いやいいことをしたでござるなあ」

「ふざけるな――――――！！！」

「ぎゃふう――――！！！！！！ん！！！」

ラグナ先生は今日もキノコを食べている。

第16話：夏のクワガタ大戦争（後編）（後書き）

余談：クワガタの名前の由来は銀魂の卑猥な大砲”ネオアームストロングサイクロンジエットアームストロング砲”です。

カルルが言ったバージンは同じく銀魂の結野アナの愛犬”ラストオブモヒカンリビングオブザデッドマクガフィン”に今やってるアニメがプラスされたものです。

今回はパロディ要素多めだった気がします。

第17話：ブレイブルー学園校内放送（前書き）

第17話です。

第17話：ブレイブルー学園校内放送

ピンポンパンパンポン

『お昼の放送の時間でーす。今日の流す曲は・・・』

お昼の時間、今日の担当はラグナ先生とティガー先生であった。

「・・・おい、CDどうした。」

「私は知らないぞ、それに忘れた時用にここに1枚置いておいただろ」

「なんでないんだよ！どうすんだよティガー先生、このままだとお昼時間が無音だぞ！」

「しかたない、最終手段だ。」

きゅっきゅっきゅるるっきゅー！

ひたすらあいつを超電磁♪

ぐるぐる回して超電磁♪

ジエネシク♪エメラルド♪ティガー・・・バスターーーーー！！

YO♪ひたすらあいつを・・・

「シザーーーー！！」

「ぐわーーーー！！！！！！！！！！」

ラグナ先生はその巨体をシザーで吹っ飛ばした。

「誰が歌えつつったよ！誰がそんな安っぽいラップ刻めつつたよ！！」

「仕方ないだろう、だから私が長年貯めこんでいた超電磁ラップを・・」

「いらねえよそんなの！誰が喜ぶんだよ！田舎のヤンキーくらいだよ！！」

しかし話を聞くとこれが意外とウケがよく

二人の掛け合いも入っていたためみんな大笑いしていたという。

「というわけで昼休みの校内放送について改めて検討しましょう。」

「前から生徒が音楽を流すだけじゃつまらないって言ってたでござるし、この際にリニューアルしてみるでござる。」

「まったく面倒くさいことになりやがったなあ」

「お前達の放送のウケがよかったからだろラグナ先生、お前が立役者だ。」

「勘弁してくれよマジで、んで校長、検討って具体的にどうするんだよ、毎日一人ずつラップ歌わせる気か？」

「ラップオンリーでなくてもいいわ、学校のニュースとか、面白い話とか、人の弱みを流すとか」

「なんか最後無茶苦茶なこと言わなかったか？やめるよそいつの」

ラグナは素早く注意する。それもそうだ。校長がやることはすべてラグナ先生に行くのだから。

「おもしろくないわねラグナ先生、家畜以下よ」

「んだとてめえ！そんなもん流したら嫌な思いするから否定するに決まってるじゃねえか！！」

「ラグナ先生よ、そうやって安い挑発に乗るからろくな目に合わないんだぞ」

「つつたつてよ！」

「弱みを握られるような隙だらけなラグナが悪いのよ、前だって私を肩車した時に思いっきり観たくせに」

「お前が花火大会の花火見れないから肩車しなさいって言ったんじやねえか！！」

「それで肩車する方もする方だけどな、意外と下心あったのではないか？」

「だまれハクメン先生！その仮面ごと割るぞてめえ！！」

「あん・・・ラグナだめえ、そんなとこ見ないでえ・・・」

「見てねえし！そんな想像してねえから！！」

そして翌週の放送

『はい始めました、お昼の放送の時間です。』

『今日は私ハクメンとレイチエル校長がお送りします』

教室にて・・・

「お昼の放送今日から変わるみたいだから、私楽しみにしてたんだよねえ」

「マコト、変わるって言ったってそんな大層な放送じゃないわよ」
「でも前からお便り結構募集してたよね」

『まずは、” B B 学園のすべらないような怖いような微妙な話”です。』

『なんか中途半端な企画だなそれ、結局微妙な話ではないか』
『では最初の話から・・・』

ある日、生徒の指導にあたっていた時の話です。

女子生徒が数名、男子生徒が数人、まあ女子生徒に比べて男子生徒が少し少なめだったんですね

その生徒たちは補修で来ていたわけです。私はたまたま空いていたという理由でその指導に駆り出されたわけです。

まあ生徒方は熱心に授業を受けているんですよ、その生徒の胸元が視界に移ったとき、はっ！と気づいてしまったんです。

他の女生徒は、” ある ” のに、たった一人の女生徒だけ、男子生徒と見間違っくらいに ” ない ” ですよ

教室にて…………

「それ私のことじゃねえか——————！！」
「ちょ……ノエル!？」

「おい誰だそんなくだらなひ話投稿しやがったのは！大体予想付くけど誰だー！！！」

「ペンネーム」 史上最高額の賞金首、R先生」の投稿です。

そのころ職員室では・・・

「ラグナ先生、こんなところまで抜け目ないでござるな……」

「いつか彼女に殺されますよラグナ先生」

「大丈夫だってハザマ先生、俺は不死身の賞金首」

ガタン！！

「ラグナ先生はどこだー！ー！ー！」

「噂をすればノエル殿でござる。ラグナ先生ならっていない――！」

「あれさっきまでこの机に!？」

「くっそ！今度絶対にラグナ先生の弱みを握って投稿してやるんだから！！」

ボタン！！

「おもしろかったでござるが少々気の毒でござるな」
「まったくだなあ、ノエルは本当にからかい甲斐があるわ」
「確かにそうですねえ……っていつのまに!？」

ノエルは鬼の形相で去っていったという。

『私好みの面白い話だったわ』

『ペンネームの必要性が皆無だったな、たぶん今頃、”話のネタにされてる本人がそいつの元へ行ったが、そいつは雲隠れしてまんまとやられた。”みたいなことが起きているだろう』

『いつものことね、ちよつとうらやましいわ……』

『何か言ったか校長』

『いいえ、では次の話です。』

ある日、私がある人と花火大会に行った時の話です。
夏の熱さと仕事疲れもあり、久々の休日でした。

でも私は少々背が低いこともあり、なかなか花火が見れませんでした。

私は若干躊躇しましたが、花火が見たかったので、そのある人に肩車を頼んだのです。

その人は”鼻の下をのばして”、「ああいいぜ、幼女の肩車最高!」
!」といいながら肩車をしてくれました。

その人は終始、私のアソコという花火を見ていました。

後にその放送は学校の伝説となった。
ちなみに好評だったので今もこのようなカオス放送は続いている。

第18話：ラムダの休日（前書き）

第18話です。

第18話：ラムダの休日

日曜日、ラムダ・イレブンは河川で空を眺めていた……

「……………」

「あん？ラムダじゃねえか？こんな河川でなにやってんだ？」

「ココノエ先生に……休みをもらった。」

ラムダは毎日ココノエ先生の手伝いをしている。
自身のメンテナンスも相まって、あまり休みがないのである。

「休みか、じゃあなんでこんなところで空をぼーっと見てるわけ？」
「やることが……ない」

「ああそうかい、休みにやる事が無いなら、のんびりするのが一番よ」

「のんびり……のんびり……」

「じゃあな」

……………

「……………」

「……………」

ラグナ先生はその場を離れたかと思っただけ戻ってきた。
そして少し沈黙した後……

「はぁ……俺も暇なんだわ、一緒に行くか？」
「……うん」

カグツチ中心部にて……

「んで、どこ行きたい？」
「どこでもいい……特にやりたいこともない……」
「というか、楽しみのなものも知らないんじゃないのか？」
「……うん」

「ここは？」
「ペットショップだ。俺も一度働いたことがあるが、いい所だぞ」
「ペット……動物……生き物……」
「うちの女子生徒なんかよくここに来てるみたいだけどな、かわいい犬や猫を見るに……」

ラムダは無表情で動物を見ている。
何を思っているのかわからない、ただ動物を見ていた。

「生きている……この子たちは……」

「・・・・・・・・やりにくい」

1時間後

「ここは？」

「カラオケだ。お前が歌を歌うのかは知らねえがな」

「歌、そこら辺は大丈夫。」

「お？なんだよよく行くのか？」

「私の中の人は・・・歌がうm」

「中の人なんていませーーーーーん!!」

中の人とか言うとき色々厄介になるのである。
そういうものである。

「とりあえず歌えよ、中の人関係なく」

「わかった・・・・・・・・」

きゅっきゅっきゅるるっきゅ

ひたすらあいつを超電磁♪

「おい待てーーーー！それティガー先生の長く貯めてた超電磁ラップ
じゃねえかーーーー！！」

「収録されて・・・ないの？」

「してるわけねえだろうが！あいつプロでもなければアマチュアで
もねえよ！てかなんで前話で出たネタを今回もやってんだよ!!」

「ティガーがよく歌ってた。私それしか知らない」

「あいつとんだだけこの歌に愛情込めてたんだよ!!」

2時間後

「どうだ？少しは息抜きになった。」

「うん、私こうやって楽しむこと・・・あまりないから」

ラムダはぼそつと答えた。

「ふうん、ココノエ先生と遊んだりしないのか？」

「たまにゲームとかはやる。あとピーとかピーとかピーーーーーー」

「」

「もういい！なにあの鬼畜メガネそんな趣味あったのか!？」

「結構・・・たのし」

「言わなくていいから！男してそれはムラムラする・・・」

「なあ？ココノエ先生で思ったんだけど、お前ってココノエ先生と繋がってたりする？」

「・・・うん」

「ってことは・・・今の俺たちの行動って全部・・・」

「・・・筒抜け」

そう、これまでの行動はすべてココノエ先生に知られているのであ

る。

「なんだとー！っていうかそれだもん自由に遊べないわな！！」

「ちなみに・・・いるよ」

「・・・は？」

「う・し・ろ」

「・・・ま・・・まさか、お前も冗談を言うもんだ」

「楽しんでるかラグナ先生？」

「いるー！ー！！」

ココノエ先生は確かにそこにいた。

「い・・・いつ・・・から？」

「お前がラムダをデートに誘って、ペットショップに向かうところから・・・か」

「ていうか、ストーキングとはますます趣味が悪いな」

「お前がラムダをあらぬ方向へ連れて行かんようにな」

「連れてくか！てかお前は娘が心配な母親か！？過保護か？過保護なのか！？」

「似たようなものだ。実質あいつには母親と呼べるものはいないしな」

「それは・・・そうだが。」

ココノエの言葉にラグナは複雑な気分になった。

「とりあえずまだ時間があるし、アツチな店に連れて行かぬのなら遊んででもいいぞ」

「だから行かないって！てかお前に見張られてるんじゃ行動しにくいわー！」

「そうか、じゃあ遠くでもモニタリングを・・・」

「同じだ！とりあえずここで解散だ。十分楽しんだらうし・・・」

ガシ・・・

「ラム・・・ダ？」

「・・・」

ラムダはラグナ先生の腕にしがみつく。
離れたくないかのような反応だった

「・・・はあ、こういうの苦手なんだよな」

「ほう・・・ラムダがそんな反応をするとは、めずらしいこともあるもんだな」

「確かに、いつもこいつ無口で無表情だからな」

「・・・いい機会だ、仕方ない私は見張るのをやめるからもう少しそいつと遊んでやってくれ」

ココノエ先生は少し黙った後そう言った。

「あ・・・ああ」

「くれぐれもラ。ホとか・・・」

「行かねえつつってんだろぅが!!」

その後ラグナはラムダを連れ、ゲームセンターやカフェなどいろんな場所に行った。

だがラムダは、相変わらず無表情であった。

「もう5時か・・・そろそろ日が暮れてきたな」

「・・・うん」

「今日は楽しかったか？」

「・・・うん」

「本当か？まあ楽しめたんならいいわ」

「ラグナ先生・・・今日はありがとう・・・ございます。」

ラムダは感謝の言葉を言った。

その表情は少しやわらかなものだった。

ラグナの目には、そう見えた気がした・・・

「じゃあな、明日学校でな」

翌日学校にて・・・

そこには友達に囲まれ、笑顔を見せるラムダがいた。

彼女はなにかを得たのか。それとも元から持っていたものなのか・・・

・

「なんだ・・・ちゃんと笑えるじゃねえか」

「あ・・・ラグナ先生・・・」

「・・・」

「昨日は・・・楽しかった・・・」

その言葉にラグナは静かに手を振った。

そしてその顔には、達成感のような笑顔がほほ笑んでいた。

「・・・ラグナ先生、感謝するぞ」

「どうしたココノエ？うれしいことでもあったのか？」

「ちよつとな、さてまた忙しくなるぞテイガー！」

「いつもより張り切ってるな、やれやれ・・・」

今日もブレイブルー学園は、笑顔に包まれている・・・

第19話：コラボカレーは死神のカレー（前書き）

第19話です。

第19話：コラボカレーは死神のカレー

夏休みの企画として、BB学園では3年生と教員合同での林間学校が企画されていた。

「二人一組で御飯を作ってもらうぞ。決める方法はくじだ。」

「ハクメン先生、なぜくじで決めるのかしら？」

「好きなもの同士で組むと余りが出る。んで結局先生と組む羽目になるという苦い経験をさせては教育に悪い」

「ほう、ラグナ先生にしては最もな正論だな。」

「ハズレを押しつけられたらたまんねえからな」

「私！？私ですか！？」

ラグナ先生が言うハズレと言えば、一人しかない

「ノエル、わかってんじゃねえかこのやろー」

「それなら、出来る人と出来ない人で組めば良いのでは・・・」

「ライチ先生よ」

「それじゃあ」

「面白くないでござる」

「あなたたちはまったく・・・」

「よし決まったな。ハズレと組んだ奴はラグナ先生を恨むようにな」

「ハズレ言っな！」

こうしてハズレありのご飯作りが始まった。

ラグナ&ハクメンペア

「さてキャンプ食の定番といえば・・・」

「牛の丸焼きだな！」

「カレーだろうが、そんな牛はこんなところにはいない」

「つまんねえこと言うんじゃないよ」

ハクメン先生のユーモアの無さにラグナ先生は少しばかり呆れた。

「ここは私が暖まる優しい家庭の味カレーを作ろう」

「いや俺が本格派スパイシーカレーを作る」

「料理は凝れば良いというものではない。貴様それでもクッキング
パパ読者か！」

「うるせえ！俺は美味しんぼも好きなんだ！」

二人は互いにこだわりを譲らない

料理というのは自分色に染めたくなるものである。

「こう言うのは兄さんにまかせろ！！」

「お前などもう兄ではないわ！！」

「んだとこら！昔のてめえは病的なまでにブラコンだったくせによ
！！」

「消すぞ悪夢が！」

「上等だハクメン先生！」

両者とも譲らず、結局肉野菜炒めになった。

ジン&タオカカペア

「やれやれ、まさかお前と組むことになるとは」

「おー先輩、中々器用ニヤス」

「お前も何か手伝え」

「手伝ってもいいけどー、たぶん出来上がる頃にはカレー無くなってるニヤスよ」

「ほう、お前そんなこと考えるキャラだったか？」

「どうせ出番が少ないんだニヤス、そんなこと知ったことないニヤス」

「お前根に持っていたのか・・・」

タオカカは若干むくれながら言った。

そんなわけで、ほとんどジンが一人でカレーを作った。

「ほらできたぞ」

「美味そうニヤス。ではいただきー」

「ああ・・・うん、我ながら美味い、兄さんと組めれば最高だったな」

「確かに美味しいニヤスが・・・肉入ってないようニヤ？」

「肉なんぞ入れたらカレーが死ぬ」

「死なないニヤ！カレーは強いニヤ！肉の入って無いカレーなんか偽者ニヤ！」

「文句があるなら自分で作れまったく」

ツバキ&ニューペア

「兄様の彼女兄様の彼女兄さまの彼女兄サマの彼女……」

（なんだろう・・・ものすごい邪悪な視線を感じる・・・）

「それでニューちゃん、あなた料理とかできるの？」

「実は苦手なんだよね」

「勝った!!」

「なにが!？」

ツバキはこの手で勝利をおさめた瞬間であつた。

というか勝負する意味は特にないのだが・・・

「しょうがないわね、私がメインで作るからあなたはサポートして」
「わかった。」

「にしても料理くらいできなきゃだめよニューちゃん、好きな人を支えられないわよ」

「そうだね、ラグナを支えるためにも頑張つて覚えるよ」

「くそ・・・この後に及んでまだシラを切るつもりか・・・」

「ツバキちゃん、なにかすごい誤解をしてない？」

マコト&ラムダペア

「さあ心配しなさんなラムちゃん！この私にまかせればおいしいカレーができるよー！」

「もうできてる・・・」

マコトが叫んだ時にはすでにテーブルに料理が並んでいた。

「はつや！いつのまに作ったの！？」

「あらゆる料理のデータはインプットされている。後は素材があればものの5分・・・」

「む・・・まあいいか、私を作るよりうまそうだし」

「おいしい？」

「おいしいよ！さすがは高性能だねー！」

「・・・よかった。」

レイチエル&ハザマペア

「なぜあなたと組まなければいけないのかしら？」

「仕方ないでしょう、くじで決まったわけですし」

レイチエルは今すぐここから逃げ出したいと思った。

「まあいいわ、早くご飯を作りなさい」

「さっそく命令ですか、さすがは姫様なんでも人に命令すれば済む
と思つてらっしゃるゝ」

「ムカつくわ・・・」

「にしても私、料理はゆで卵しかできないんですよゝ」

「ゆで卵は料理とは言わないわよ!!」

「そうですね、ならあなたのそばにいるマスコットに頼むとしまし
よう」

ハザマ先生はギイを指差した。

「オイラっすか!？」

「ギイ、私とハザマ先生とその他下僕の分全て作りなさい、ハザマ
先生のはとびきり辛くしておいて」

「あっはっは、私辛いの得意ですよゝ」

「腹立つ・・・」

その他のペアも順調に料理を作っていく
全員楽しい時間を過ごしていた。

バング&ライチペア？

「うおおっ！まさか麗しの君、ライチ先生と組めるとわあ！」

「あらバング先生、結構器用なんですのね」

「はっはっは、拙者も男の一人暮らしですからな。人参の皮むきくらいお茶の子さいさいでござる」

「バング先生の奥さんになる人は楽が出来て良いわね」

（こ、これは！？まさかふらぐというものでござるか！？）

バング先生は幸せを感じていた。

今日一番の”あたり”を引いたのである。

「今度バング先生の部屋で先生の手料理をご馳走してもらいたいなあ……」

「ラ、ライチ殿！当たってる！当たってるでござる胸が……！」

「当たてるのよ」

「うはあ……幸せでござる……！！！」

アラクネ&ライチペア

「……バン 先 がノエル カレー 味見 てから目 覚ま ない」

「あらあら可愛いそうに。ほらできたわよアラクネ」

「美味そ」

「さてみんな食い終わったか？では片づけが終わった班からテント

に戻るように」

ハクメン先生の号令の最中、一人後悔の叫びをする生徒がいた。

「バング先生が戻ってこれない場所に！助けてくださいい！」

「ノエル・・・てめえやつちまったなあ」

「ち・・・違います！ラグナ先生違います！！」

そう、ノエル（ハズレ）と組んだのはバング先生であった。

幸せは夢の中だけ、現実で彼は死と隣り合わせであった。

バング先生が目を覚ましたのは、この日の三日後だったという

続く・・・

第20話：プレイブールのじかん（前書き）

第20話、部数で言うと30部です。

5万アクセスということ、みなさん本当にありがとうございます。
これからも限界までネタ書いていくんでよろしくお願いします。

第20話：ブレイブルーのじかん

「授業すつぞ〜」

「ラグナ先生、授業なんてめずらしいですね？この小説初じゃないですか？」

学園物なのに授業シーンがないこの話では珍しいことであった。

「ノエル、てめえそれだと俺がサボりまくってるみてえじゃねえか、どうすんだよ今の俺の評価ガタ落ちだよ」

「なにがガタ落ちですか、元から自由すぎるクセに」

「うつせえんだよ、カタブツな先生よりこういう先生の方が評価されるんだよ、お前の乳はカタブツだから理解できないのかもしれないかもしんねえがな」

「さりげなくおっぱいネタ振らないでください！乳がカタブツってどういう意味ですか！？」

ノエルのツツコミなど軽くスルーし、ラグナ先生は授業に入る。

「はい、じゃあ今日はブレイブルーのストーリーについて勉強すつぞ、この小説呼んでる人の中にはBBのキャラしか知らないって人がいるかも知んねえからな」

「いやいや、たぶんいないと思いますよ」

「んなもんわかんねえじゃねえか、”学園”で釣られて読んでるだけかも知んねえぞ、そんで興味持って調べたら、「こいつ銀さんを

中二病にしたようなキャラじゃねえか」とか言われてるかも知んねえぞ」

「先生、さりげなく他の作品出さないでください、中の人も相まってあなたは常に銀さん銀さん言われてますから安心してください」

ノエルの言うとおりかもしれない、実質この小説はそんなノリで書いています。

「はいじゃあ教科書開いて」

「せんせーい、机の中にお魚しかないニヤス」

「よしわかった。タオカ力は廊下に立ってなさーい」

「はーいニヤス！」

「えーとまずは触りだ、世界最強の賞金首、ラグナ・ザ・ブラッドエッジがカグツチにやってくるわけだ。」

「せんい、トレ行っ来ていですか？」

「おう言ってこい、あと戻ってこなくていいぞ、お前の言葉文字にすんのめんどくせえから」

「ひどい・・・」

「んでこいつがラグナだ。けして銀さんではないからそこら辺メモっとけ、テストに出るから」

「先生、さりげなく気にしてるんですか？」

「んでこいつがジン・キサラギ、カイだと思っいたら後に痛い目

みるから気をつけるように」

ラグナは他作品ばかりを並べる。ノエルは呆れた顔で授業を聞いていた。

「んでこいつがヒロインのノエル、しかしヒロインが男っていうのも斬新な作品だな」

「先生、胸がないって言うのは我慢できますが男って言うのだけはやめてもらえますか？」

「とりあえず主要人物はこの3人だな」

「無視かよ・・・」

「ラグナ、ニューはラスボスだよ？あと主人公の恋人だよ？主要人物じゃないの？」

「そこら辺はあとで説明する。あとさりげなく恋人とか言うんじゃねえよ、ちげえよヤンデレとかご勘弁だよ」

その時、レイチエル校長が教室に入ってきた。

「ラグナ、私が主要人物に入っていないんだけど？」

「校長、そんなもん全員が全員紹介してったらキャラ紹介だけで時間使っちゃう、あとで補足しておく」

「それならいいのだけど、あと主人公の恋人は私よ」

「ちげえよ、誤解を招くようなこと言うんじゃねえよ、主人公が口リコンだと勘違いされてたまるか！」

「つつわけでラグナはカグツチへやってきた。目的は世界をぶっ壊すことだ。」

「ずいぶんとぶつきらぼうな説明しますね」

「細かいこと気にすんじゃねえよ、いちいち説明してたら文字数がえらいことになるだろうが」

ラグナはそう言うが、単にめんどくさがっているだけであつた。

「途中アラクネという魔素の化け物に会うこともあつた。猫に飯をたかられることもあつた。主人公はとても優しい人なのでお金が厳しくてもその猫を救つたりしてきた。」

「自分で言いますかねそれ、最初はおごる気なんてなかつたくせに」
「そんなこんなでラグナの宿敵である世界虚空情報統制機構のカグツチ支部になんとかたどり着いた。こつから先は本編な感じでお送りします。」

．．．．．
．．．．．

「誰も．．．いねえ．．．」

支部には誰もいなかった。

おかしい、統制機構の支部が無人なんて話は聞いたことがない
ラグナは戸惑いながらも進んだ。そして奥の扉を押す。

「おおおおおおおおおおおおおおおー！」

雇の向こうに待っていたのは、三日月のように微笑む忌まわしき弟・

•

[illegible]

「にーん！」

「ってジン！何しにこの教室に！！」

「兄さんが僕の話をしてくれている様子だから、つい授業を抜け出してきちゃった」

「うっせえ、てめえはA組に帰れ、今すぐ帰れ頼むから」
「そんなこと言わずに兄さん、ここは僕に授業させてよ」

それは意外な一言だった。

「なんだと？」

「僕の輝くシーンなんだから、本人の僕に語らせてよ」

「まあいいか、終わったら帰れよ」

[illegible]

「ふふふふふ．．．久しぶりだね、兄さん！」

「ジン！てめえ．．．」

「やっぱり．．．ラグナ・ザ・ブラッドエッジは兄さんだったんだね．．．ははは」

ジンの狂気に満ちる瞳は、ラグナを映していた。

そしてその笑いは、すべてを納得するような狂わしい声であった。

「てめえには関係ねえ！てめえには聞かなきゃなんねえことが山ほどある！だがその前に一回ぶった切らせろ！！」

「無茶苦茶なことを言うじゃないか、せつかく会えたのに．．．」

「ジン．．．てめえ．．．」

「いいねえ．．．いいよこの感覚忘れてた！また兄さんに会えるなんて．．．また．．．殺せるなんて！！」

その凍てつく空気、狂気あふれる邪気が、ラグナを突き立てた。
ラグナとジン、二人は剣を構えた。

「さあ．．．やろつか．．．兄さん！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「あ．．．ああ．．．」

「兄さん！もつと！こんなんじゃ楽しめないよ！！」

「や．．．やめろ．．．ああ．．．そこは．．．」

「兄さんの責め・・・なかなかだね!!」

「ああー!ー!らめえ!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ってなに途中から話大幅に変えてんだよ!ー!ー!ー!」

「ぐはあ!」

ジンは自分の好きなように話を作ったので、ラグナに肅清された。

「ひ・・・ひどいよ兄さん、シザーで来ると見せかけてハーデス？
下段ガード読みかい？」

「うつせえよ!てか全然ちげえよお前の説明!このゲーム格ゲー!
BLゲームじゃねえから!!」

「そのツツコミも・・・たまらないんだけど」

「帰れ!!」

「ぐはあ!!」

「つつわけで本当は俺が奴を倒して、トドメをさせないまま統制機構の地下へ向かったんだ。」

「先生、先輩がガラス窓からこっち見てます。」

ラグナはそんなジンを見て、「こりゃあ後でシザー2発だな」とい

った感じの顔をした。

「ほつとけ、そんで地下に行った俺が出会ったのは、元六英雄のハクメンだ。」

「呼んだかラグナ先生？」

「とまあこの話では気さくで優しい教師だが、本編では人の話を聞かないカタブツキヤラだ。」

ハクメン先生は意味がわからず首をかしげていた。

「よくわからんが、本編で私が出ているシーンの話をしているのなら私がしよう」

「おっ、頼むわ、先生なら安心だろ」

.....

地下へ向かったラグナが見たのは、白い仮面をかぶった武士であった。

「なにもんだ・・・あいつ」

「.....」

男はいつさい反応しない

発するのは、強力なオーラだけ・・・

「俺がびびってるだと・・・蒼の魔導書か・・・くそてめえは黙ってる！！」

その時、そこにいる男が口を開いた。

「久しいな・・・黒き者よ」

「久しい？なに言ってやがる。俺は知らねぞてめえのことなんざ」
「吠えるな小僧、貴様に言ったわけではない」

「わけわかんねえし、邪魔だどけ、仮想パーティなら他の場所でもんな！悪いけど時間がねえんだよ！うだうだしてつとぶった切るぞ」

「では何故・・・剣を抜かない」

「・・・うっせえぞ」

ラグナは明らかに恐怖していた。

その男に、その男の背中に移る大きい何かに・・・

「それが恐怖だ、ラグナ・ザ・ブラッドエッジ、貴様の中に眠る者が、私に戦慄する。」

「俺がびびってるだあ？んで、その陶醉しきつた前口上は終わりか？いいぜ・・・かかってこいよ！！」

「我は空・・・我は鋼・・・我は刃・・・我は一振りの剣にて・・・すべての罪を刈り取り・・・悪夢を滅する！」

その時、ラグナはあることに気づいた。

「刃・・・おいてめえ・・・まさか？」

「!？」

そしてハクメンは、その仮面をはずした。

「ジン・・・てめえどうして・・・」

「兄さん・・・これが私の選んだ道だ・・・」

「・・・そうか、でかくなつたな」

「兄さん・・・私を許してくれるのか？」

「ああ、いい弟を持ったぜ」

「兄さん」

「ジン」

「兄さん・・・あ兄さん・・・」

・・・
・・・
・・・

「っててめえもかいーーー!!」

「ぐわーーー!!」

ハクメン先生もまた、話を好き勝手改ざんした。

「おめえ結局立派になっても色々欲求残ってんのか!？」
「たまにはいいだろう? たまにははっちゃけたっていいだろう!？」
「うっせえ! 俺に聞くな! もう弟に振り回されるのはたくさんだ!」
「!」

そう言ってハクメン先生は満足気味に教室を出て行った。

「なんで満足気味に帰って行ったんだろうあの人・・・」
「ったくどいつもこいつも好き勝手しやがって・・・」

ラグナ先生は少々疲れていた。そして今だにガラスに貼り付いているジン。

その時A組で授業していたティガー先生がジンを捕まえた。ラグナ先生は疲れが少し吹き飛んだ気がした。

「本当はハクメン先生が言い訳してその場を立ち去り、その後CTのラスボスが出てくるわけだ。」

「はいラグナー! ここはニューの出番! 出番だよ!」

「いいです。遠慮します。」

「ちょ・・・なんでさ」

今まで二人がああ調子である。ラグナの顔はニューに任せられるかと言わんばかりの顔であった。

「大丈夫だよラグナ、ちゃんとやるからさ、ねえラグナ！」
「ああ、もう好きにしてくれ・・・」

・・・

「うち・・・精錬が終わっちまったか」

窯が開き、中から少女が出てくる。

「起動・・・起動・・・あゝラグナだーーーー！！3回目だっけ？」

冷めた少女の顔が、狂わしい笑顔に変わった。

「3回目だ。うん・・・あってる？」

「どっちでも同じことだよ、さあラグナ、やろっよーピーしてピーして、ピーするのー！！」

・・・

「この小説R - 18つけてねえからーーーー！！」
「にゅーーーー！！！！」

ラグナは待っていたかの如くニューにとつく
ニューもなにかとうれしそうだ。

「おいマジ勘弁してくれ、今んとこれじゃあブレイブルーがマニアックなゲームになってんぞおい」

「細かいことは気にしない気にしない」

「うつせえよしゃべんじゃねえ！頼むから黙ってくれ」

「というか・・・私が全く出ていないのですが・・・」

ノエルは若干テンションが下がっていた。

「うつせえなあ、お前は影が薄いヒロイン、ウスインなんだから気にすんなって」

「ウスインってなんじゃー!!」

「というわけで、なんやかんやでトゥルーエンドに行くわけよ」

「校長まだいたの!?!」

「トゥルーエンドはこんな感じよ」

.....

「しゃっはっはっはっはー！ラグナ君よ、てめえのレイチエルは俺の手の内だぜ・・・」

「テルミーーー!!」

「ラグナ！はやく私をたすけなさい！」
「ってなんで命令口調！？」

そこにはなぜか、ノエルも捕まっていた。

「きゃー！ー！助けてー！ー！！」
「なんでお前も捕まってるんだよ！！」
「出番が欲しくて・・・ごめんなさーい！」

そしてなぜか、ジンも捕まっていた。

「兄さん！助けてー！ー！！」
「おい・・・こんなに人質いたっけか？」
「いや、さっきから増えて・・・」
「ラグナー！ー！！」

そしてニューも捕まっていた。

「え・・・ええ・・・」
「ま・・・まあいいや・・・おいラグナ君！助けたかったら俺を倒して・・・」
「いや・・・いいです。」

ラグナは疲れた表情でその場を立ち去ろうとする。

「ちょっとラグナ！ヒロインを助けないつもり！？」
「ちょっとレイチエルさん！ヒロインは私です！！」
「ふざけるな障害！CTのヒロインはこの僕だ！！」
「三人とも、CTのヒロインはニューなんだよ！！」

4人とも自分がヒロインと主張する。

テルミ（ハザマ）も正直お手上げ状態だった。

「あの・・・もういいです。あなた達今すぐ帰りなさい」

「私はラグナが助けに来るまでここを離れないわ」

「同じく、ラグナさんに助けてもらうのは私です！！」

「兄さんが助けるのは百発百中僕だ！！」

「ラグナはニューのものなの！！」

「ラグナくん！早くこいつらを救い出してやってくれ！！」

「どいつもこいつも・・・てめえら・・・馬鹿かーーーー！！！！

.....

「というわけで、ラグナが助けたのはレイチエルよ」

「いや、ノエルです。」

「ぼぐだぁ〜（ガラスに貼りついていきます。）」

「ニューなの～!!」

「てめえらしい加減にしるよ・・・」

こうして授業は終わる。ラグナ先生はいつになく疲れを見せていた。

ちなみにブレイブルーはこんなハチャメチャな話ではありません。

第21話：第3回ハーデス先生のお料理教室（前書き）

21話です。

19話の続き＋料理教室シリーズの続きとなります。

第21話：第3回ハーデス先生のお料理教室

林間学校が終わってから数日後・・・

「先生・・・」

「なんだノエル深刻そうな顔して」

「ラグナ先生に折り入ってお願いがあるんです」

「無理だ諦めろ。お前の胸はもう大きくならないぞ」

ノエルは何も言っていないのだが、ノエルの相談とくれば胸のことだろうと勝手に解釈しラグナ先生は答える。

「違っ！ていうかひどっ！」

「まあ男に胸の相談するやつなんざいねえよな。そんな痴女いたら警察に突き出すわ」

「いい加減話聞いてください・・・」

いつになく真剣な表情のノエルを見て、ラグナ先生は少しだけ真面目になった。

「まあなんだ。一応教師だからな、”出来る”ことなら手伝っぞ」

「わ、私の料理下手を直してください！」

「はっはっは、人の話を聞かない奴だな。”出来る”ことならっつ

たろうが」

「せめて普通に断ってください、その言い方はマジでへこみます。」

「なんだよ、お前のポイズンクッキングは料理で人が殺せる稀有な才能なんだぞ？もつとその無い胸張って誇れ」

「それが嫌なんですよ！せめて食べた人が失神しない程度に・・・ハッ！？」

そう、あの日ノエルと組んだバング先生はノエルのカレーを食べて天の国へ行く寸前だった。

いくら自分の料理の腕を知っているとはいえ、ノエルにとってそれは後悔深きものだったのである。

「そうか、お前林間学校でバング殺したの気にしてんのか？」

「うっ、殺して無いですよ！ちよつと失神させただけで・・・」

「ちよつと失神ねえ？バングあれから三日間生死の境を彷徨ってた言ってたぜ」

ラグナ先生の悪い癖、思わず笑いながらノエルを追い詰めるように言う。

ノエルの顔がどんどん青くなっていくのがわかる。

「・・・」

「確かになあ、カレーで人をあそこまで壊せたら危機感も持つかもな・・・」

「うっう・・・」

「顔が真っ赤になったかと思ったらすぐ真っ青になって、その数秒

後青通り越して真っ白になって痙攣が止まんなかったもんなあ?」

「うつつ、うつつうつつう……」

「え、あれ?ノエルさん?」

「うわああああん!」

ノエルはとうとう泣いた。全ての線がちぎれたように泣き始めた。

「げっマジ泣き!?!」

「だって、あの時、うつつ……バング先生目が覚めなくてえ……うぐっ、死んじゃったかと思ってえ……」

「ちょ、ごめん、ふざけすぎたから!謝るから!」

「だから、ちよっとくらい、えぐっ、まともなの作れるようにって」

「えーと、うん、とりあえず泣き止もう。なっ?」

「あれから、何かある度に、あう……バング先生のあの顔が浮かんで、怖くて、えぐっ……うわああああ!」

ラグナ先生もさすがに焦りを見せる。

ノエルに泣きやむよう頼むが、こうなったらもう泣きやまない……

「マジで俺が悪かったから!泣き止んで!やべーよこんなところ誰かに見られたら……」

「うわあ!ラグナ先生がノエル殿を泣かしてるでござる!」

「タイミング悪すぎんぞチクショーーーー!」

タイミングの悪い所に等の被害者であるバング先生がやってきた。

バング先生を見たノエルは、さらに泣き叫ぶ。

「うわぁぁん！バング先生が、バング先生が死んじゃうう！」

「拙者！？拙者が死ぬ！？」

「ああもう！ほらノエル調理実習室行くぞ！だから泣き止め！頼むから――――！！」

そして・・・

「つーわけでハーデス先生の料理教室・・・えゝと4回目だっけ？」

「3回目です先生」

「間隔空きすぎるとすぐ忘れるよねこういうこと」

「1話から読んで来い」

「サーセン」

オープニングの漫才も終わり、作業に取り掛かる二人。

「じゃあ今回はノエルたつての希望で”カレー”だ。誰でも簡単しかも美味しい！」

「誰でも簡単で美味しい料理で私は2話も使って人を殺したんですよ・・・ぐす」

「いやいやいやいや！泣くなよ！？」

「泣かないもん！」

殺した？のは事実だが、いちいち言われるたびに彼女の目から涙がたれそうになっていた。
食った方もトラウマだが、食わせた方もそれなりのトラウマのよう
だ。

「もん” ってお前・・・なんか調子狂うな、まあいいや。カレー
つてのは簡単で美味しいだけじゃなく、練習にも良い料理なんだ。」
「それはまたどうして？」
「材料を切る、炒める、煮る。料理の基本ともいえる要素が多く入
っている」
「なるほど・・・」

ラグナ先生の発言一つ一つをノエルはメモしていた。

「なんだそれ、メモってんのか？今回は気合はいつてんな」
「さすがに自分の下手さに嫌気が差したので・・・」
「じゃあボケは無しですぐ材料の確認に行こうか」

ボケなしで材料の確認に行こうとしたその時、一人の教師が調理実
習室に入ってきた。

「ほう、それは感心だ。」
「・・・なんでいるんだハクメン先生。ハッ、面が黄色い!？」

「そう今の私は・・・カレー大好き、”キメン先生”だ!!」

そう、入ってきたのはハクメン先生・・・もとい面が黄色いキメン先生だった。

「キメンだよ!このお面野郎が!」

「キメンではない。”キメン”だ。」

「いはずれえよこのバカ」

「カレーの香りとノエル君の熱意に誘われてな。こう見えて料理も結構得意なので私も入れてくれ」

ハクメン先生の申し出に、ラグナ先生は面倒くさがり一回断った。だが、「タダとは言わない。ノエル君の味見は私が受け持とうじゃないか」

と言うハクメン先生に、ラグナ先生は笑みを浮かべて「採用」と即答した。

ノエルは二人のやり取りに涙が出そうになったが、こらえた、ここで泣けばあの銀髪の思惑通りなのだ。

「乱入者のせいで遅れたが材料の確認だ。ジャガイモ、人参、玉葱、肉はそうだな、豚肉にしようか」

「ふむふむ、なるほど」

「あとはバー。ンドカレー。本当はカレー粉からしっかり作った方が美味しいんだけど初心者という名の悪魔もいるし」

その発言一つ一つにノエルとハクメン先生は納得しながら聞いている。

「ほう、カレー粉から作るとは・・・ラグナ先生の料理の腕前は相当のようだな」

「ラグナ先生の料理のレベルってどれくらいのものなんです？」

「海原雄山以上リユウマオシン以下くらいだ。」

「クッキングパパや美味しんぼだけでなく中華一番まで読んでは・・・」

ハクメン先生は思わず感心する。

「さて今回はノエルにも美味しく出来るようにってのが目標だからなとことん簡単に行こう」

「よろしく願います！」

「まず鍋に水を一杯入れてお湯を沸かす。」

「・・・できました！」

ノエルは一つ一つ、どんな作業でも全力でやった。

彼女の場合気を抜けば一瞬にして料理が兵器に変わるのである。

「よし、次はこの秘密の袋を湯に入れる。」

「銀色で綺麗ですねこれ」

「ちよっと待てお前・・・」

その銀色の袋を見て、ハクメン先生は気が付く。
その袋はボンカレーと書いてあって、3分湯に入れとくだけでカレーができるという魔法のカレー
というかレトルトカレーである。

「レトルトカレーじゃねえか！ボケ無しって言ったくせに！」

「お前でも簡単にしかも美味しく作れるだろうが」

「それ作るとは言わねえよ！！てかさっき用意したジャガイモとかはなんだっतんですか！？」

「ラグナ先生これは辛口ではないか！ボンカレーは中辛以外認めんぞ！」

「黙ってるキメン！」

「じゃあねえな、普通にやるか・・・」

「頼みますから今回はボケなしでやってください」

ノエルにとってこれは大事な授業

今回はさすがにツツコミに専念する余裕はなさそうである。

「まず一番重要なのがタマネギの扱い方！こいつの甘みを引き出せばカレーは美味しくなる」

「おお、料理っぽい！」

「まず野菜を全部適当な大きさに切ろう。形はこだわらなくて良いからお前にも出来るはずだ。」

「これくらいなら・・・何とか・・・」

「おいハクメン先生、野菜の量多いんだ。お前も手伝え」

「ズエイアアア！！ズエイアアアアアア！！」

ハクメン先生は大声を出しながら野菜を切っている。

「普通に切れねえのかてめえは！！」というラグナ先生のツッコミなどお構いなしである。

「うう、タマネギが染みる・・・」

「おい、不器用なのに目瞑りながら切るな。ほれコレ使え」

「ゴーグルですか。準備良いですね」

今回は真剣な料理教室。

用意周到、すべてはノエルがまともなカレーを作れるようになるためである。

「ふ、お前にまともな料理させるのが今回の目標だからな」

「先生・・・ありがとうございます」

「うつつ、私も染みる・・・」

ハクメン先生が玉ねぎにやられている。

「てめえお面つけてんじゃねえか！！」というラグナとノエルのツッコミなどお構いなしである。

「・・・先生、ゴーグルつけてもあんまり効果ないんですけど」
「タマネギの染みる成分は鼻から来るからな。プツ・・・ゴーグル着けながら野菜切つてるとか笑えるわ。」

「ちよつとでもこの人良い人とか思つた私が馬鹿でした。」

ノエルはさきほど言つたありがとを返してほしいと思つた。

「ちなみに染みる成分は冷やしておくとか飛ばないし、熱にも弱いから蠟燭等を立てておくと染みないぞ」

「ハクメン先生の言う通りだ。じゃあコレ炒めてくぞ。鍋に油を敷く。バター使つても風味が出て美味しい」

「なるほどなるほど・・・」

「カレーは手順無視しても割といけるけど、野菜炒める時はなるべくタマネギから炒めること。タマネギから出る汁が甘くて良い味出すんだわ」

「目に見えて縮んで飴色っぽくなったときが頃合だ。」

ラグナ先生とハクメン先生はわかりやすい説明をしながら順調に料理を進めていく。

「次に人参、肉の順番に。多少炒めが足りなくても煮込むから火は通る。」

「私にも出来る気がしてきました!」

ラグナ先生の説明にノエルも自信をつけていく。

「で、水を入れる。目安は肉が沈むか沈まない程度だ。」

とラグナ先生が言えば

「慣れてきたらこの時煮込みながらジャガイモを炒めておくといい。油で炒めておくことで煮崩れしにくくなる。」

とハクメン先生が付け加える。さすがにノエルも・・・

「難しくなつてきちゃった・・・」

「大丈夫だ、ちょっとくらい失敗しても旨いから」

ラグナ先生はきちんとフォローをかかさな

「煮えてきたな・・・ではジャガイモとカレールー投入」
ハクメン先生は穏やかに言う。

「これでほぼ完成だ。あとは煮込むだけだ。」

ラグナ先生ももう少しといった感じでカレーを見て言った。
こうしてカレーは完成間近のところまできた。

「どれくらいの間煮込めば良いんです？」

「短すぎなければ適当で良い。あんまり長く煮過ぎると煮崩れ起すが、それもまた味が合ったりする。不安なら人参一欠け喰ってみて判断だ。」

「なるほど、わかりました！早速今日帰って作ってみます！」

「なんだ、このカレーバングに持っていかないのか？」

「いいえ、全部自分で作ったのでお詫びしたいんです！じゃあ今日はありがとうございました！」

「おお、頑張れよ」

「はい！」

ラグナ先生の言葉に押され、ノエルは自信を持って家に帰った。

翌日

「バング先生！」

「お、ノエル殿。どうしたでござる？」

「あの・・・林間学校ではすみませんでした。だから、ラグナ先生に教わって一生懸命カレー作ったんです！」

「えっ！？」

その「えっ！？」は、どちらかというと「げっ！？」に近かった。

「やっぱり、迷惑ですか？私みたいな料理怨痴のカレーなんか・・・」

「あついや！喜んでいただくでござる！」

「ありがとうございます！下手なりに頑張ったんですよ！」

優しい熱血教師のバング先生に女生徒の申し出は断れず、どうにでもなれ！といった感じでそのカレーを口にした。

「どうですか？」

「お、美味しいでござる。飛びぬけて美味なわけではないが、普通に美味しいでござる！拙者びつくり！」

「や、やったあ！う、うえええん！！」

初めて、初めて自分が作った料理で人が喜んでくれた。
ノエルは思わず泣く、喜びの涙であった。

「な、なぜで泣くでござる！？」

「だって、私なんかが上手く出来るかずっと心配で・・・けどよかったあ・・・」

「ま・・・まあよくわかってござるが、よかったでござるなあ」

その光景を、ラグナ先生とは遠くから見ていた。

「よかったじゃねえかノエル・・・だが、なんだ今の歯がゆさは・・・」

「ほう、そんなにノエルのことが気になるのか？」

「キメン！？てめえ一体いつのまに！？」

いつのまにか別カラーのような黄色のハクメン先生がそこにいた。
そして今ラグナが思いたくないような一言を投げかけた。

「ふ、今の私は神出鬼没の生活指導＋教頭のハクメン先生だ。で？
ノエルが気になるということは否定しないのかね」

「ばっかお前そそそそんなことあるわけねえだろ！」

ラグナ先生はあきらかに動揺していた。

それを見たハクメン先生は思わずニヤケる。

「ふーんそうかーへえー」

「あつてめえ待ちやがれ！ちげえって言うてんだろぅが！」

「雪風！！」

「あ！てめえいつのまにアンリミ仕様に！！くっそ待てやこのお面
野郎————！！」

ラグナ先生、そしてノエルの思いはこの先どこへ向かっていくのだ
ろぅか……

キャラ紹介0（ゼロ）（前書き）

久しぶりのキャラ紹介です。

今回は小説”ブレイブルーフェイズ0”のキャラ達です。

ネタバレありなのでそういうのが嫌いな人は注意してください。

キャラ紹介0（ゼロ）

？セリカ・A・マーキュリー

ブレイブルー学園3年B組の生徒、誰にでも優しく振舞う少女だったりおばさんだったり

ラグナやジンの育ての親であるシスター、ナイン先生の妹でありコノエの叔母

なのだが、時には若い少女時代の姿で3年B組の生徒をやっていたりする。

自由なこの作品ならではの立ち回りを演じる。また極度の方角音痴。

姿が2種類あるため、いろんな話にいろんな形で出てくる。そんなもってメタ的な発言をすることもある。

ラグナ先生のこと、教師としても息子としても大事に思っている。

？クラヴィス・アルカード

ブレイブルー学園初代校長、気品溢れる老人

ハクメン先生らが学生だったころの校長で、学園のことを第一に思っていた。

レイチエルの父親でもあり、ヴァルケンハインとはその時から面識があった。

現在は死んでいるため、ほとんど過去の回想のみ登場する。

校長室には現在も写真が飾られているんだとか

？ブラッドエッジ先生

BB学園に語り継がれる、3年B組の伝説の教師
グレートティーチャー

その正体はラグナ先生である。だけどラグナであってラグナではない。

基本的にはラグナ先生と同じ、かつての獣兵衛先生の親友だったという。

ハクメン先生たちとは違い長生きではないためとっくの昔に死んでいる。

伝説は今も生き続けている。

キャラ紹介0（ゼロ）（後書き）

近々小説キャラを使って話を作る予定です。

フェイズ0はとても面白いので、興味があつたらぜひ買って読んでみてください。

第22話：時をかけるシスター（前書き）

第22話です。

ここからフェイズ0のキャラが登場します。

第22話：時をかけるシスター

空には青色が広がっていた。

そして近くには緑が広がっていた。

そんな場所で、ラグナ先生は目を覚ました。

「う．．．ここは．．．」

ラグナ先生は体育の授業で怪我を負ってしまった。

大した怪我ではなかったが、すぐさま保健委員の生徒に運ばれたらしい。

そして目を覚ましたラグナ先生のそばには、その保健委員の少女がいた。

「あ．．．ラグナ先生気がついた？」

「あ．．．ああ、え〜とあんたは．．．」

「先生のクラスのセリカだよ、といっても授業にはあまり出ていないけど．．．」

セリカ・A・マーキュリー、3年B組の生徒

なんでも特別な力を持っているらしく、保健委員に抜擢されたという。

「ああセリカか、まったくバング先生の野郎、本気で俺にボールぶつ

「けやがって・・・」

「ラグナ先生とバング先生のドッジボール、みんな釘つけだったよ」

「次はぶっ倒してやる。って・・・セリカよお」

「なに？」

「ここ・・・どこだ？」

ラグナとセリカがいたところは保健室ではなかった。

どうやら庭のようであった。

そう、セリカはけが人のラグナを保健室に連れて行かず、校舎から遠く離れた庭に連れて来たのであった。

「・・・なんで、俺達こんなところに？」

「先生を保健室に連れて行こうとがんばったんだけど、知らないうちにここに・・・」

「ここって、確か今は使われていない棟だよなあ？ずいぶん離れたところまで連れてきてくれたなあおい」

セリカはてへつと言わんばかりの顔をした。

体育館から保健室までの距離は1分とかからないところにある。

ところが彼女が連れてきたここ棟は、体育館どころか校舎から20分は軽にかかる距離にあるところであった。

「あ・・・あはははは」

「あんたよ、方向音痴もいい加減にしろよ」

「ごめんなさいラグナ先生」

だが怪我は直っており動ける状態ではあった。
校舎に帰らなければならぬため、二人は動き出した。

「俺もここらへんの場所は詳しくねえんだよ・・・ちつ、携帯も圏外だし」

「とりあえず来た道に戻ってみようよ」

「うゝん？」

「ど・・・どうしたのラグナ先生？」

「あんた、来た道をちやゝんと覚えているのか？」

ラグナ先生は疑いの眼差しでセリカを見た。
セリカは少し目をそらしたが、だまっけては始まらない

「だ・・・大丈夫だよ安心して！」

「ったく、まあほかに方法はないしなあ」

1時間後

「セリカ？」

「びくっ!!」

「気のせいだと思いたいんだけどよお、遠ざかってね？」

「ま・・・まっさか」

遠ざかっていた。事実であつた。

セリカに付いていくままに進んだ道は、すでに学校の敷地を離れ町でもない、というかわけのわからないところまで来ていたのである。

「・・・とりあえずここまで来た道に戻つてみて」

「やめてくれー！これ以上あんに付いて言ったら学校どころか家付近にも戻れねえからー！！」

「うう・・・ごめんね」

「ああ・・・とりあえずここまでの道のりは覚えてるから、学校の敷地まで戻るぞ」

「さすがラグナ先生！きちんとしてるねー！！」

「あんたの方向音痴が異常なんだよ！」

ラグナは若干苛立っていた。

そんなこんなでラグナたちはなんとか学校の敷地まで戻ることができた。

「まったく、あなたは昔っからそうだ。」

「ごめんね先生、私本当に方向音痴で・・・」

「俺達3兄妹をディズニールランドに連れて行くと豪語して、ついた先は富士急ハイランドだったじゃねえか」

「そんなこともあつたねえ・・・」

ラグナは少年時代の嫌な思い出を盛り返す。
にしても、この話には不自然な点が数か所あるのだが、気にしては
負けである。

「さて、どうやら携帯の電波が直ってきたみたいだ。旧校舎のこと
はハクメン先生辺りの方が詳しい、迎えに来てもらうか」

ラグナ先生はハクメン先生に連絡した。
15分くらいで付くからおとなしく待っていると言われた。
ラグナ自身は言われた気はしていない、注意を受けるべきはセリカ
なのだ。

「さて、おとなしく、おとなしく待つとするか。」

「ラグナ先生も意地悪だなあ」

「うっせえよ、あんたの方向音痴が悪いんだろうが」

ラグナの言葉にセリカは顔を赤らめながら落ち込む
彼女にとっては気にしたくはないのだろう。

「つつかお前の出席日数の少なさも、授業が始まった時にB組の教
室に到達できないからだろ？」

「というかそれ以前に、学校にきちんと到達できるのが3日に1日
だけなんだ。」

「どんだけ！それ方向音痴ってレベルじゃねえよ！学校の位置くら
い覚える！てか学校のすぐ近くに家建てる！！！」

セリカの度を超えた方向音痴にラグナはツツコミを連呼する。
寝坊とかではない、彼女は毎日早々と起きているのだ。

「お姉ちゃんがいた時は一緒に学校行つて、教室まで連れてつても
らつてたからよかったんだけど」

「ああ、お姉ちゃん今諸事情でしゃべれなくなってるもんなあ」

「トリニティ先生でもよかった。けどトリニティ先生、今設定が不安定で登場しづらい状況だし」

「そのうちプラチナとトリニティの区別はつけるから安心しろ。」

と、作者が気にしている設定事情を話していた時、ハクメン先生がやってきた。

「まったく、生徒を連れて逃避行か？」

「ばっかちげえよ、こいつが俺を保健室に運ぼうとしてここまで連れてきやがったんだ。」

「うう・・・ごめんなさい・・・」

「セリカよ、保健委員の仕事をする時は3人で組めといっただろう、お前の治癒魔法の力は認めるがな」

こうしてハクメン先生のおかげもあり、二人は校舎に戻ることができた。

気がつけば放課後、ラグナ先生が受け持つべき午後の授業はバング先生が責任を持って受け持ったそうである。

「まあ午後の仕事サボれたからよしとするか」

「先生だめだよお仕事しなきゃ」

「あんたもきちんと授業出るよ、とりあえず学校の玄関まで来てくれれば俺がしばらく案内してやる。」

「え、いいの？ラグナ先生やっさしー！！」

セリカはラグナ先生に飛びついた。

ラグナ先生は恥ずかしそうな顔をして、セリカを弱い力で突き放す。

「にしてもお前を見てたら、なんだか久しぶりにシスターに会いたくなってきたなあ」

シスター、それはラグナ、ジン、サヤの三人を今日まで立派に育ててくれた育ての母

本当の母親ではないが、優しくも厳しいその人は、ラグナにとっては親も同然

「明日お休みだし、会いに行ってみたら？」

「そうだなあ、土産でも持って会いに行ってみるかなあ」

「そうしなよ、」 待っている」 からさ」

セリカの” 待っている ” という不自然な発言をもスルーし、ラグナは土産を買いに行った。

そして翌日、ラグナ先生は久しぶりにシスターの顔を見た。
初老の女性であった。優しくも厳しい、けどその笑顔はどんな荒んだ心をも癒してくれる。

その姿を見て、ラグナ先生は昨日のセリカを思い出す。

「なあばあさん、ばあさんの名前ってなんだったっけ？」
「セリカよ」

ラグナの休日・・・
ラグナとセリカは、紅茶を飲みながら些細な会話をしていた・・・

第23話：六英雄学生時代物語？（前編）（前書き）

第23話です。

第23話：六英雄学生時代物語？（前編）

ハクメン先生が学生だった時代。

今の時代よりも結構前の話である。

「おはようハクメン」

フードをかぶった猫、獣兵衛がハクメンに話しかける。
ハクメンも挨拶を返す。

「おはよう獣兵衛、え〜と今はミツヨシだったか？」

「いやあどちらでもかまわん、それにお前は俺のことを”猫”と呼んでいるだろう」

「ふっ、そうだったな」

そしていつものように、テルミがバイクで教室に入ってくる。

「おらおらどけやてめえらよおー！！！」

「テルミ、お前いい加減バイクで教室につっこんでくるのをやめろ！」

「うつせえな猫又、これが俺の生きがいなんだよ」

なにが生きがいだ、と言わんばかりの顔のハクメン

テルミもその視線に気づきにらみを利かせるがすぐに目をそらす。
テルミもケンカではハクメンには勝てないのだ。

「まったくまんねえな、てめえら優等生組はよお」

「今どき昭和のヤンキーみたいなキャラのお前の方がつまらんわ」
「んだとハクメンちゃんよ！」

「ストーッブ！二人ともそこまでよ！」

二人の言い争いを止めたそこにいた女生徒こそ、このクラスの委員長
長のナイン

そのそばには副委員長のトリニティがいた。

「げ！委員長、今日は喋れんのか！？」

「言ってる意味がわからないわよテルミ」

「おめえ9話じゃファントムって名前で無口なマドンナだったじゃ
ねえか！」

そう、9話時点ではナインの設定はファントムのままであった。

今回は小説”ブレイブルーフェイズ0”によって設定が明かされた
ため、ナインとしての登場である。

あ、宣伝みたいになってごめんね

「テルミさーん、あまりみなさんに迷惑をかけてはダメですよー」
「てめえトリニティか？9話じゃ現代版だったが今回はそのキャラ
で行くつもりか？」

同じく設定があかされたトリニティ
彼女の登場が作者にとつては結構悩みのタネであつた。
だが、せつかく昔版が出たので今回はこの設定で登場する。

「あまりそういうことを気にするのはよくないと思いますよお、テルミさん」

「くそ、そのぶりっこキャラも違う意味で腹立つなこのやろう・・・」

「まあなにわともあれこれで六英雄は全員そろつた。ナインもトリニティも過去以外の話で出られるとよいな」

「ハクメンの癖にいきなこと言つてくれるじゃない、まあ私としてもナインの方がキャラが安定してるからこっちの方がいいわ」

そんな会話をしていると、レイチエル先生が教室に入ってきた。

「おはようあなたたち、相も変わらずその下品の緑がざわついてるわね」

「おはようございまゝす先生、いつもよりガキ臭いなあ」

「中身の方はいつもと同じだから心配ご無用、あなたはハザマの方が少しばかりマシよ」

「あは、なんですかハザマだと可愛い教え子感が出てるんですかあ？」

「憎たらしいわ」

いつものように皮肉を言い争う会話始まる。
そして終わった後、レイチエル先生から発表があった。

「今日朝のホームルームでお知らせするのは、1週間後に行われる
体育祭についてよ」

体育祭、それは学園生活においてみんなでスポーツをして汗を流そ
う的な行事である。

めんどくさいことこの上ないが、授業がないこともあり生徒達の反
応はイーブン

「先生、俺達のクラス人数が少ないのだが、別に六人しかないわ
けではないがどうなるんだ？」

「そのことなんだけれど、1種目だけ出るということで話がついて
いるわ」

獣兵衛の質問にレイチエル先生は答えた。

1種目だけ、とはいえ野球は9人いなければならないしサッカーに
いたっては11人

全員でなければいけないことを考えるなら卓球やテニスなどの個人
種目は出れない

「今回は野球ね、六人はいるわけだし後三人なんとか探してきなさ
い」

「まったく無責任だな先生よ、先生も出ればいいんじゃない？」

「私が野球なんて汚れるような運動をやると思つかしらテルミ？」
「わかってねえな、野球は努力と友情の塊だぜえ」

お前がそういうことを言うな、と他の生徒は心の中で思う
レイチエルが出れないのはまあ予想ついていたため、とりあえず
人あつめることにする。

「野球って、私たちもやるわけ？」

「私運動とか苦手ですよ」

「文句言わないの、それに今回は校長、私のお父様の事情もあるのよ」

「クラヴィス校長が？ いったい何があった？」

「英雄さん、それを今説明するわ、ヴァルケンハイン！」

「かしこまりましたレイチエル先生！」

と今まで出番がなかったのがあれかはわからんが、いつもよりヴァルケンハインは張り切っていた。

すぐさま用意をし、説明にとりかかる。

「今回体育祭実行委員の方々がいろんな先生にどのクラスが勝つかの予想を聞いて回っていました。」

「ほう、ずいぶん大層なことを・・・」

若干くだらなそうにハクメンは口に出したが、問題はここからである。

校長の予想VTR

「クラヴィス校長、今回はどのクラスが優勝すると思いますか？」

「そうじゃな、私はレイチエル先生率いる3年B組が優勝すると思
っている。」

「ああ、あのアブノーマル学級ですか」

どうやら他の生徒からはアブノーマル学級と呼ばれているようである。

まあ確かに異常な学級であることは事実である。

「私は信じている、あの者たちが今回勝つことを」

「もし、予想が外れたらどうするのですか？」

「もし……あの者たちが破れたりしたら……ごほうごほう！」

「校長先生大丈夫ですか？」

「その時はショックで・・・死んでしまいかも知れんごほつごほつ
 ！」

「校長先生——！！」

「……と、いうわけよ」

「なあ、それって一種の脅しじゃね？」

テルミの言葉に、レイチエルとヴァルケンハインはスルーした。

「というわけで、今回は我々の生徒に絶対に勝ってもらわなければならないのです。」

「ヴァルケンハインよ、いくら我々がアブノーマルの集まりとはいえ、絶対に勝てるとは限らないぞ」

「ハクメンの言う通りだ。事実今俺達の人数は九人に満たしていない、九人そろっても本番は一週間後、パワースピードが異常でも野球などやったことなどないからな」

ハクメンと獣兵衛は現実感あふれることを言うが
レイチエルとヴァルケンハインは二人を睨みつけ、ヴァルケンハインがとどめの一言を放つ。

「もし勝つことができず、校長が死ぬようなことがあれば・・・私はあなたたちを絶対に許さない」

その言葉に他の5人とその他いるのかいないのかわからない生徒たちは凍りつく

「おおお・・・おめえら！ぜってえ優勝するぞこらあー！」

「わわ・・・わかっておるわこんちくしょうー！」

「俺たちはここ・・・こんなところで死にたくはない！」

「私だつてままま・・・負けてたまるもんですかー！」

「がんばりますっ！」

こうして3年B組は一致団結する。はたして彼等に希望はあるのだ
ろうか・・・

第24話：六英雄学生時代物語？（後編）（前書き）

第24話です。

第24話：六英雄学生時代物語？（後編）

レイチエルとヴァルケンハインの強烈な脅しがあった翌日
3年B組の面々はグラウンドに来ていた。

「つつかよ、これで全員ってことはやっぱり俺達のクラス6人しかないんじゃないかね？」

「テルミよ、悲しくなるから思っ^ていてもそう^いうこと^いうもんじやないぞ」

こうなつた以上後3人は他のクラスから引^つ張^つてくるしかない。
そして集めるだけでなく優勝しなければなら^ない、メンバーを集めるのが先か練習するのが先か

「とりあえずメンバーを集めま^しょう、出場する前に棄権なんて話にならないわ」

「ナインの言う通りだ。追加メンバーだ^つて野球経験者が助^つ人に来るとは限らない、き^つとお荷物を押し付けられるに決ま^つている。」

「そうですね、とりあえず学校中のクラスにお願いに行きますか」

ところが現実^は甘くはなかつた。
お荷物を押し付けられるどころか、どのクラスも助^つ人を出してくれないのだ。

野球経験がないとは言え3年B組のアブノーマルな能力は他のクラスにとつては障害になりうる。
メンバーが足りずに棄権してくれるのならありがたいことこの上ないのである。

「つたく1年もだめかよ!!」

「私達に関わりたくないという輩も多い、これは絶望的だな」

テルミはイラつき、ハクメンも諦めかける。

そこで獣兵衛がひらめいたようにこう言った。

「こうなった以上、外部から助っ人を頼むしかあるまい」

「外部？獣兵衛それはどういうことだ？」

「今の学校以外のところから助っ人を引っ張ってくるということだ。」

「

「それは名案だけれど、学校関係者以外の参加を認めてくれるのかしら？」

ナインの質問に獣兵衛は、にやりと笑いながらこう返した。

「はっはっは、俺はさっき”今の学校以外”と言っただぞ」

そして・・・

「痛てえ!!」

時空が揺らぎ、その穴から出てきたのは、はるか未来の学校の人物
そう、ラグナ先生である。

「おい・・・ここはどこだ？」

「おお、本当に成功するとはな・・・」

「獣兵衛？にしては若いような・・・」

ラグナは今一度状況をつかめずにいた。

ラグナの視界には若いころの六英雄がいたのだ。

「私の空間転位能力をこんな風に使うなんて、ご都合設定もいいところだわ」

「そう言うな先生、今回は仕方ないのだ。」

「おい、なにがどうなっただ？」

「ラグナ・・・でいいのか？すまないが我々に協力してほしい」

「ハクメン先生・・・なのか？」

こうして皆はラグナに状況を説明する。

その間にも、時空の穴からポンポンと人が出てくる。

「痛つたいなあ、おいここはどこだ？」

「ルナ、なんかここ見たことあるよぉ」

次に出てきたのは現代版トリニティ、ルナとセナである。
何気に過去編2度目の登場である。

「あゝ、今回はめえらのムカつく顔を見ないで済むと思ったのに
よぉ」

「んだとおまえ！」

「どうやら情報がリセットされてるみたいですね」

9話の記憶はプラチナの中から消えていた。
トリニティが若干申し訳なさそうに現状を説明する。

「これで8人そろいましたね」

「というか、一人足りないわよ？」

「心配するな、俺達過去編にはもう一人登場人物がいる。」

獣兵衛の発言と同時に現れたのは、この時代の1年B組の生徒、セ
リカである。

ナインの妹であり、ハクメン達の後輩でもある。

「セリカ！？あなたどうしたの!？」

「ミツヨシさんに頼まれたの、私でよければ力になるよ」

「だめよセリカ！あなたがヒットを打つても1塁に行けないじゃない！」

「どこまで方向音痴なんだよ！」

ツツコミどころが大幅にずれてるナインにラグナがつっこむ。

こうして9人がそろった。これで彼等は初めて戦えるのである。

こうして彼等は一週間練習を重ね、ついに体育祭本番を迎える。

彼等は野球経験こそ乏しいが、己の能力をフルに発揮し、野球部所属の生徒率いる他のクラスをも圧倒した。

ナインが炎や雷、氷等の魔球を投げる。ハクメンが疾風で球を打ち雪風で塁まで移動。

テルミが相手の打った打球をウロボロスでキャッチ、獣兵衛は全体的な身体能力でよい働きをする。

トリニティが防護壁をスタンドに張ることで相手はホームランが打てなくなり、ヴァルケンハインは狼に変身して相手を威嚇

セリカが毎回メンバーに治癒魔法をかけることで無限のスタミナを確保するなどもはや完璧であつた。

「つつか、それ卑怯くさくね？」

「べつつにいいじゃん、ルナ達には関係ないね」

「てかよ、俺達呼ばれた割に出番なくね？」

「ゲストなのに出番求めるとか、主人公とかこのさえ関係ないじゃん」

ラグナとプラチナは、今になって「いなくてもいいんじゃない？」と思ったという。

六英雄にとって彼等は、人数合わせでしかなかったのである。

だがそれが通用したのは準決勝まで、決勝で待ち構えるのは優勝候補の2年A組

野球部所属が最も多く、ブレイブルー学園野球部を甲子園まで導いた強敵

3年B組の異常な能力にも負けないその”闘志”
野球にかける”青春”は魔法や技をも恐れない。

「ま・・・まさかテルミが言ったことが現実になるだと・・・」

ハクメンは今になって、「わかってねえな、野球は努力と友情の塊だぜえ」というテルミの言葉を思い出す。

野球を愛す2年A組の面々からは赤いオーラが沸き立つ。

目には炎が移り、その姿はスポ根マンガのキャラのようであった。

2年A組の打つ球は魔法の壁をも、ウロボロスの鎖をも打ち破る。
対する3年B組も能力を最大限に発揮して応戦する。

「10対9、9回ウラ、2アウト万塁で我々が1点負けている・・・」

それは野球の熱いシーンそのもの、10対9で2年A組が一步リードしている。

そして9回ウラで3年B組の攻撃、2アウトだが万塁である。

抑えられたら負け、打てば逆転で勝てる……

そしてバッターはこの作品の主人公、ラグナである。

「ここは……俺が打たねえとな……」

ラグナは覚悟する。そして決心する、ここは俺が決めると……

「黒き者よ……打てよ」

ハクメンの言葉がラグナに突き刺さる。

それは言葉のバトン、ラグナは自信たっぷりの顔で首を縦に振った。

「うおおおおおおおおおおおおおー!!」

結果は……三振、ラグナは打つことができず優勝は2年A組。

何をやっているんだ主人公、といった感じに終わった。
ベンチに戻ると誰も口を聞いてくれなかった。これって殴られるよりつらいよね……

そして……

「……校長」

3年B組の生徒達はスタンドの校長の元へ向かった。
校長は目を閉じ、その体は動くことはなかった。

「まさか……こんなことになるとはなあ……」

「普通こういうのって私たちが勝つもんじゃないのか？」

といってハクメンとテルミはレイチェル先生とヴァルケンハインをちらつと見る。

二人を見てこう思った。「殺される」と……

「覚悟は……よろしいですか？」

「ああ、もう好きにしてくれ」

数分後

「ふあゝ、体育祭は終わったのかね？」

「ええ、とつくに終わってしまいましたわお父様」

「寝とつたんかい――――――――――！！」

傷だらけのハクメンとテルミは全力で吠えた・・・

第25話：ノエルのモヤモヤ（前書き）

第25話です。

第25話：ノエルのモヤモヤ

「出席とるぞ」

朝のホームルーム、ラグナ先生が教室に入ってきた。
その横には、方向音痴でお馴染みのセリカがいた。

「ラグナ先生ありがとう、もう大丈夫だよ」

「そっか、あんたの机は窓際だろ？どうして廊下側に向かってるんだ？」

「あ・・・あははははは」

もはやここまでくれば、方向音痴などというレベルではなくなりそうである。

「にしても先生、朝から女子生徒連れ回すとは、委員長としては見過ごせませんよ」

「仕方ないだろツバキ、こいつを一人で行動させたら教室にたどりつけないんだから、少しの間だ。」

といいながらラグナ先生は教壇に立つ、そして出席簿を開いた。

「はいじゃあ出席取るぞ、ツバキ、マコト、タオカカ、カルル、ア

ラクネ、ニユー、ラムダ、プラチナ・・・」

はい、はい、ニヤス、はい、は、はい、はい、はい、あいよ
とみんなが返事をする。

今日も全員出席しているようだ。

「そしてセリカ」

「はい先生！」

「よし、じゃあ今日も一日・・・」

「っておーーーーーいい！！」

一日が始まろうとした時大きな反応をした女生徒、そうノエルである。

準レギュラーの割にここ最近3話も出ていなかったのだ。

「一人忘れてませんか！？私呼ばれていません！先生私呼ばれていません！！」

「一人呼ばれてないだあ？俺は全員呼んだはずだが？」

「あんたの目は節穴か！？ノエル！ノエル！ヴァーミリオン！！」

「ノエル・・・ああ！ノエル！！」

「その「ああ！」は何なのよ！！」

その掛け合いも久しぶりな気がした。
ラグナはすまねえといった顔をした。
ような気がした・・・

「そっか、いたなそう言えば」

「「いたな」じゃないでしょ！私今までハクメン先生と並んで結構出まくっていたはずなのに、最近になってなんで空気化してるのよ！！」

そう、ノエルのここ最近の出番のなさ、その理由こそ”ブレイブル―フェイズ0”である。

その小説は読み終わった際、作者がノエルというヒロインの存在を”思いっきり忘れた”ほど面白かったのである。

それだけセリカが正統派ヒロインだったこと、ヒロインとしての仕事を完璧にこなしたということである。

「つつてもおめえよ、小説読んだか？あれがヒロインってやつだよ、なあセリカ？」

「う・・・うん、あんまり言わないでよはずかしいなあ」

「な・・・なにこの・・・モヤモヤしたものは・・・」

ノエルに比べればヒロインだったセリカの存在は、色々といれギョラーであった。

「確かに私も小説読んだわ、あれは・・・仕方ないわよ」

「ラグナ先生に抱きついたり、「私待ってるから！」って発言したり、あげくの果てには頬にキスしたり」

ツバキもマコトも小説を読み、セリカのヒロインとしての役目を評価していた。

それ以上中身を言っているとネタバレになるので、どうなったかはお近くの書店で買って読んでね。

「それに比べたらおめえ、本編でヒロイン？、CTじゃレイチェルどころかジンの方がヒロインやってたわ」

「うつ・・・」

カラムティトリガーにて、主人公とヒロインの絡みは、トゥルーエンドだけという有様

もはやヒロイン詐欺である。

「そしてCSでは、どっちかというとラムダがヒロインだったわね」
「多少改善されてたけど、キサラギ先輩とレイチェル校長もそれなりのことやってたもんねえ」

「ツバキに・・・マコトまで・・・」

「主人公がさらわれたヒロイン助けるっていうのはきちんとしてたがよお、おめえの場合さらわれたというより、」さらわれに行った
「だもんなあ」

ラグナの言つとおりである。

ピーチ姫でさえきちんとさらわれるという役目を全うしているのに、ノエルの場合はほとんど自爆である。

それも主人公のラグナなどまるで関わりもせず、ラグナではなくジ

ンを探しに行つて、相手の口車に乗つて操られる。
はたしてそれがヒロインなのだろうか・・・

「あ・・・あああああああ」

「まあお前も小説読め、貸してやるから」

「わーーーーーん!!」

ノエルは走つた、セリヌンティウスを助けるメロスがごとく走つた。
からかつたラグナも若干罪悪感を抱いた。そしてセリカも少しばかり罪悪感を抱いていた。

「・・・え」と

「先生・・・」

「最悪」

「いくらなんでもよくないと思うよ」

ツバキ、マコト、セリカは一斉にラグナを責めた。
他の生徒の目も汚物を見るような眼になっていた。

「あとで謝っておく」

それでよし、といった感じで生徒は教科書を開いた。

数時間後

「あ、ノエル」

ノエルは廊下の端でぶつぶつ言っていた。
やばい、早く謝らなければといった感じでラグナは焦る。

「すまねえな、ついお前との絡みが久しぶりでヒートアップしちゃったわ」

「いいですよー、どうせ私はヒロインじゃないんですよー、この作品でも準レギュラーどころか胸のない処女ですよー」

もはや色々と崩壊気味であった。

ラグナ先生も思わず本心から謝る。

「悪かったって、だからよお・・・これからも、俺の相手として・・・」

「先生・・・はい！こちらこそよろし・・・」

その時、遠くからセリカが近づいてきた。

「先生」

「おう、どうしたまた迷ったのか？」

ノエルは思わず震えた。セリカに優しくするラグナ先生を見て不可解な震えを感じた。

「あははは・・・ばれた？」

「「ばれた」じゃねえよ、ったくあんたは・・・」

「んで先生、理科室ってどこ？」

「あつちを左に・・・って言っても迷うか、暇だし一緒に行つてやるよ、セリカ」

ラグナ先生がその名を口に出したとたん、ノエルの周囲の空気が大きく揺れた。

それはラグナ先生やセリカにもはつきりと感じ取ることが出来た。

ガクガクと震えるノエルに、ラグナ先生は思わず放っておけない感じで話しかける。

「・・・ノエル、ど・・・どうした？」

「あ・・・う・・・いえ・・・なんでも・・・ないです。」

ノエルは絞り出すように答えた。

そしてどうとも言えない空気を醸し出しその場を離れた。

「・・・なるほど」

「どうしたセリカ？」

「ううん、先生やっぱりいいや、私一人で頑張って理科室行ってみるから」

いやしかし、とラグナ先生は付いて行こうとしたが、セリカは親切に断った。

セリカは何かを感じ取ったようにその場を後にする。そしてラグナ先生には嫌な何かが残る。

そして・・・

「はあ・・・はあ・・・何・・・これ・・・」

ノエルは頭をかかえる、複雑な気持ちを感じながら廊下をとぼとぼと歩いている。

そんな時、またもやセリカに遭遇する。

今度はジンと話しているようだ。

「ははは、ここから左、そこをまっすぐ行って・・・」

「ありがとう、キサラギ先輩」

「先輩って、シスターからそう言われるのは、なれないな」

なんだか仲良く話している。あのキサラギ先輩が心を開いて話して

いた。

「でも、今の姿でジンって呼ぶのは・・・」

「まあそこらへんは気にしてないよ、そうだね今度兄さんと紅茶でも飲みに行くから、その時はシスターの姿で待っててよ」

「わかった。待ってるよ」

話の内容がよく聞こえなかったが、二人とも笑っている。情けなかった。この気持ちはなんなのだろうか・・・そんな時、ハクメン先生が後ろから声をかけてきた。

「話を盗み聞きとは、あまり感心しないぞノエルよ」

「は・・・ハクメン先生！」

ノエルはびっくりして思わず声を上げる。

頭の中が真っ白だったのだろう、少しばかり色が戻った気がした。

「どうした？確かにここ最近のお前は出番が少なかったが、まさか気にしてたり・・・」

ノエルの表情を見て、凶星だと判断したハクメン先生は話をやめた。

「すまんかった。それより休み時間がもうすぐ終わるぞ。」

「ハクメン先生、教えてください」

「何をだ？」

「私、別にセリカちゃんの場合は嫌いじゃないです。でも彼女がラグナ先生と一緒にいるところを見ると、モヤモヤするんです。」

それを聞いたハクメン先生はにやつとしながらこう返した。

「それは・・・出番を、ヒロイン（準レギュラー）の座を奪われかねないからか？」

「わかりません・・・」

その直後ハクメン先生は笑いだした。

「ふっふっふ・・・」

「ど・・・どうしたんですか!？」

「いやすまん、今お前が少しかわいく見えたぞ、胸は関係なしでなあ」

「胸は関係なしってどういうことですか!..」

ノエルは珍しいハクメン先生のちょっかいに反応する。
ハクメン先生はおもしろくてたまらないようだ。

「ノエルよ、安心しろ。」

「な・・・なにがですか？」

「ラグナ先生とセリカは、お前が思うような関係にはけしてならない、彼等はずっと別なつながりがある。」
「は……はい!？」

ノエルは思わず疑問な顔を浮かべた。
ハクメン先生はその場を離れた。

「……ねえ？ねえってば」

頭が真つ白なノエルにセリカが話しかけてきた。

「ひい！なんですか!？」

「理科室まで連れてってくれない？やっぱり迷いそうだし、次同じ授業でしょ？」

「う……うん……」

ノエルはセリカを見て、またもやあのモヤモヤな感覚が蘇る。
意味のわからないまま彼女と一緒に理科室へ向かう。

「ねえ？私とラグナ先生が仲良くしてた時、あなたどんなこと思い浮かべてた？」

「へ？べ……別にそんなやらしいことは……」

くすくすと笑うセリカ、ノエルは赤くなっていた。

「応援するよ、ノエルのこと」

「はあ！？いやだからそんなことじゃなくてえ！！違っつて違っつ！！」

そしてセリカは衝撃の一言を放った。

「私一応、ラグナ先生の義母さんだしねえ」

「いやいや、ラグナ先生の義母さんだったにしても・・・お・・・義母さんーーーーーー！！？」

何を言ってるんだこの人は、といった感じでノエルはセリカを見る。だが詳しいことを言わずセリカは理科室に着いたことを確認すると、お礼を言って理科室に入って行った。

「ありがとう、これからも友達でいてね」

「う・・・うん、でも義母さんって・・・どういつとーーーーー！！！！！！！！！！」

ノエルの抱くモヤモヤは、少し薄くなったという・・・

第26話：妹ゆえにカメラリア（前編）（前書き）

第26話です。

第26話：妹ゆえにカメラリア（前編）

本日は晴天、熱い日が続くのはブレイブルー学園も同じこと
そんな日にこの学園のマドンナ的存在、ツバキ・ヤヨイは今日も可
憐な振る舞いを見せていた。

「ジン兄様——————！！！」

可憐な振る舞いを見せて・・・いた。

「ツバキ、始まって早々何を叫んでんのさ？」

「あ、ごめんなさいマコト、今日はなんだか妹の血がいつも以上に
騒いで騒いで」

マコトは意味がわからなそうな顔をしている。
というのも今日9月6日は”妹の日”、BBの妹属性代表のような
ツバキはそれが原因で張り切っているのである。

「妹属性代表ねえ」

「マコト、なにか不満でもあるの？」

「こ・・・こわ・・・いやあなにもないよ、あっはっはっは」

朝のホームルームも終わり、授業までの中休み

「さて、今日の放課後の生徒会の仕事の件でジン兄様に・・・」

そんなことを思っている最中、そのジン兄様が叫びながらこっちに向かってきた。

その目先には、ジン兄様の兄を自称する（というか兄だが）ラグナ先生がいた。

ジン兄様の目的はすぐさまわかった。

「ジン！てんめえ最近おとなしいと思ったら！！」

「なに言ってるのさ！小説が発売したせいで若干空気化していたんだからしょうがないだろう？だから今日はいつもの3倍、いや・・・30倍兄さんを」

「シザーーーー！！」

「あ兄さーーーーーん！！」

容姿鍛練、成績優秀、とてもお優しいお兄様がぶざまに飛んでいくそんな姿をツバキは右から左に受け流した。

「・・・ジン兄様は本当に素敵なお方だわ」

「どこがだよ！！おめえの目は腐ってんじゃないのか！！」

ラグナもたまらずツツコミを入れた。

そしてツバキの笑顔はラグナ先生に向く、その笑顔から漏れたすの

は・・・殺気

「いやおかしいおかしい、俺なんにもしてないよね！ふっ飛ばしたのが悪かったの！？ねえ！？」

「ジン兄様を求めるもの同士のいざこざですわ」

「いざこざですわ、じゃねえよ！求めてねえし、あっちが俺を求めているんだし！！」

「それも問題なんです！」

気品あふれるジン兄様がB.Lなどという汚れた道に走るのは妹たるツバキとしては見逃せるものではない

・・・まあ男同士の愛というのも汚れの中に美しさがあるのだけれど

「なにを言ってるのこの子！馬鹿なの？ねえ馬鹿なの！？」

「とりあえず障害となるものは、虐殺です。」

「虐殺です、じゃねえよ！」

そんな時、いつもは一回ふっ飛ばされたら2～3時間のインターバルを設けるジン兄様がこっちに向かってきた。

長い間の欲求が溜まっていたのだろう、インターバルが分単位になっている。

「兄さーん！今日の僕はちよつとしぶといよー！！」

「あんのクソ弟が！ツバキよあいつのどこがいいんだ？・・・」

おいツバキ、目え逸らすんじゃないやねえぞこらあ」

そんな時、普段はジンがふっ飛ばされた後に襲ってくるはずのニューがこっちに向かってきた。

長い間の欲求が溜まっていたのだらう、ありえないコンビネーションを仕掛けてきた。

「ラッグッナッ！！」

「なに！？まさかのダブルアタックだと！？」

「ダブル？ジン兄様と・・・ダブル？」

ジンの所業に目を逸らしていたツバキがゆっくりと反応した。

「おい貴様、どういっつもりだ？僕が兄さんにふつとばされた後に来るという”約束”をしただろ？」

「約束・・・？」

どうやらジンはニューと”約束”をしたらしいくだらない内容であるが、男子が女子と”約束”をすればそれなりの関係があるということ・・・

「たまにはいいじゃん！私だってしばらく出番なかったんだよ！たまには”二人がかり”でもいいじゃん！！」

「二人がかり・・・？」

「どうやらニューは今”二人がかり”と言ったらしい
くだらない内容であるが、男子と女子が”二人がかり”となればそ
れなりに仲がいいということ・・・」

「二人がかりなんか知るか！！てめえらは仮にも”付き合ってる”
んだからてめえらで適当に遊んでやがれー！！！」
「付き合ってる・・・？」

「どうやらジンとニューは付き合っている（ことにされている）らしい
仕組まれたことではあるが、仕組まれたとしてもそれは・・・
幸せ

「ったくあいつらあ、おいツバキ・・・お前からもなにか言ってお
いてく・・・」

「ふふ・・・ふふふふ・・・フフフフフフフフフ・・・」

「・・・ツバキ？」

ツバキは笑っていた。笑っていたのだ。
時には小さく、たまに大きく、さすがのラグナ先生も恐怖を感じる
ほどに・・・

「ねえ・・・先生、私はジン兄様の・・・妹ですよ」

「まあ妹って言うか従妹だけだな、それが・・・どうした？」

「なのに・・・兄様は全然・・・私のことを見てくれていない!!」

ツバキの欲求がここにきて頂点に達した。

妹の日、妹である自分が兄にかまってももらえないというむなしさそれがくやしくて、ツバキはただ悔しかったのである。

「ん、まあ確か俺やノエルやニューに対する病的な接し方はしてくれてないが、普通の兄貴としてはきちんとお前のことを見てくれるじゃねえかよ」

「輝碎閃!!」

「あぶね——————!!」

審剣・風ヲ凪グ剣、Dボタンの最大タメを放ち、少し落ち着くそしてツバキはラグナ先生の問う。

「先生、妹ってなんですか？妹ってどんなんですか？妹萌えってなんですか？」

「最後なんか別なの混ざってたが、しらねえよ、確かに俺とジンにも妹がいたけど・・・」

「・・・先生、今なんと？」

「あん？妹がいた・・・って言ったんだが」

「これだ!!」

ツバキは何かを察したのか、笑みを浮かべてラグナ先生に背中を向ける。

「お・・・おいどうしたんだよ、てかおめえ授業は？」

「先生、授業は少しお休みします。課題は後で受け取りに向かいますから!!」

「はぁ!? ちょ・・・どこ行くだよーーーー!!」

ツバキが思いついたこと、それは実際に”妹属性を持つ人物”からアドバイスをもらうことである。

一人いるのである。ツバキ以外に妹属性を持つ人物が・・・・この学園に・・・

「・・・・ブレイブルー学園理事長、^{ミカド}帝」

こっからはネタバレありかもです。

第26話：妹ゆえにカメラリア（前編）（後書き）

続きます。

最近前編後編が多くなってきましたが、ネタ切れってわけではありませんよ

嘘です。

第27話：妹ゆえにカメラリア（後編）（前書き）

第27話です。

9月8日はブレイブルードドラマCD「運命の輪」の発売日ですね。
ツバキが好きななら買えばいいじゃない、ちなみに私はハクメンが好きです。

第27話：妹ゆえにカメリア（後編）

「ブレイブルー学園のどこかに存在する”理事長室”

レイチエル校長でさえその場所を知らない、知っているのは帝に認められたごく一部の人間のみ

ツバキは悩みを抱えながらそこへと向かっていた。

「あらゝツバキさん、理事長室へご用件ですかあ？」

そこにいたのはハザマ先生であつた。

彼もまた、理事長に認められた人物

いわば彼もまた、特別な存在なのです。（ヴェル。ースオリジナル風）

「理事長は今大丈夫でしょうか？」

「あゝ理事長ですか、申し訳ありませんが私も用事がありましてねえ、私の方が先客ということ・・・」

「戒めの光よ！裁きを！」

「ぎよえっへーーーーー！！！」

ツバキはハザマ先生に対し、審罰・天ヲ刈ル焰の全インストールゲージ消費をお見舞いした。

大きくふっ飛ばされたハザマ先生が星になる光景が見える。

「・・・・・・・・確かここね、久しぶりだわ理事長にお会いするのは」

ツバキはその大きな扉をノックした。

その扉の奥から伝わってくる重い空気、それがこのBB学園の理事長が醸し出すオーラなのだ。

「・・・・・・・・どなたじゃ？」

重いノック音が響き、その後帝の音がする。
その声には気品があり、偉大であった。

「お久しぶりです理事長、ツバキ・ヤヨイでございます。」

「・・・・・・・・あれ、ハザマではないのか？」

そう、ツバキはアポを取っていなかったのである。
理事長的にはハザマが来ると思っていたのだ。

「あ・・・ハザマ先生はちょっと用事があると・・・」

「用事じゃと？というか先ほどハザマの叫び声が聞こえたような気がしたのじゃが・・・」

「気のせいでございますわ!!」

ツバキは大声で否定する。

武力によって順番を譲ってもらったなどと言えたものではない

「そうか、まあ仕方無い入れ、アポを取ってはおらぬが今回は特別じゃ、お前は余のお気に入りだしの」

「ありがとうございます理事長！」

大きな扉のロックが外れ、ギギギと重く扉が開く

そしてその奥にいるのがこの学校の偉大なる理事長、帝様その人である。

「久しぶりじゃのツバキ・ヤヨイ、ソチと会うのは一か月以来かの」

BB学園理事長、”帝”

その姿は美女というより少女である。紫の髪に綺麗な赤の瞳見た目はツバキよりも幼いが、そのお姿はなによりも大きく偉大である。

「お・・・お久しぶりです帝様、そして申し訳ございませんでした。もう少し時間があればアポを取ることができたものを」

ツバキは震えていた。一言一言を噛みしめながら言う言葉は慎重に選び、相手を敬う。相手はこの学園で最も偉いお方である。

「そう固くなるでない、ソチと余は友人みたいなものじゃ、それにその急ぎよう・・・よほど大きな事情があるのだろうか？」

「はい、今日は理事長にどうしても相談したいことがあります」「そうかそうか、それでその相談とは？」

そしてツバキは、重い口を開いた。

「あの、妹ってなんですか！？」

「・・・・・・・・・・・・はい？」

帝は困惑した感じで答えた。

思わず身にまとっていた重いオーラがなくなったような感じがした。

「・・・・・・・・え〜とツバキ、お主はそんなことを聞くためにここにきたのか？」

「重要なことなんです！私の大事な従兄が私より胡散臭さ120%の銀髪を兄と呼びそちらに向かって行ってしまうのです！！」

「ん〜、というかその大事な従兄も胡散臭さ120%の銀髪も余の兄なのだけれどな」

そう、この理事長、正体はラグナ先生とジンの妹である”サヤ”

昔は金髪でノエルそっくりの少女だったが、なんやかんやのわんやかんやで紫髪の理事長になってしまっているのだ。

はたして彼女が本物のサヤかどうかは今後のブレイブルーでわかる

ことなのだが、今は今わかつている設定で登場する。
ちなみに、ラグナ先生とジンはこの事実気づいていない、という
か彼らは理事長の姿を見たことがないのである。

「つまり、お前は私に妹のあり方を聞きに来たと・・・」

「なんとかお願いします。ジン兄様と関わる時間をもう少し増やしたいのです。ドラマCD的な意味で」

「というかお前、あの変態のどこがいいのじゃ？昔から「兄さんがやるなら僕もやるハアーーーーッ！！」の度が付くほどのブラコンだぞ？」

「ジン兄様はブラコンではありません！！シスコンです！！」

ツバキにはジンがどういう風に映っているのだろうか。

というかジンはどこまでツバキに対して猫かぶっていたのだろうか

「まあ、余も結構お兄ちゃんっ子だったしの、気持ちわかるが、
というかお前結構よくしてもらってるではないか」

「やっぱり理事長もラグナ先生と同じことを言うのですね」

「そりゃあそうじゃ、本物の妹である余の扱いなんか、「サヤは兄
さんを独占するな！貴様なんか障害！障害だハアーーーーッ！！」だ
ったぞ？」

ジンからしてみればサヤは大好きな兄さんを独占する嫌な奴であつた。

それが今ノエルに対して発動しているわけだが、似すぎている的な意味で

「まあなんだ、そう悩む必要もない、ソチはきちんと妹としていい扱いを受けているよ」

「ほ・・・本当ですか？私も「ツバキハアーーッ！」とか言われてみたいです。」

「それラグナ先生と同じ感情を抱くことになるぞ、うざったくてこの上ないぞ、というか・・・」

理事長はそんなツバキを見てこんな一言を放った。

「お主、たぶんそれは妹として意識しているというより、異性として意識してるのではないか？」

「い・・・異性としてですか!？」

今までの言動を見るに、妹として関わってほしいというより異性として見てほしいという風な感じだった。

むしろ、”妹としか見てもらえない”と言ってるようにも取れる。

「異性として・・・私がジン兄様を・・・」

「そうじゃ、それは妹としてではなく異性としての恋心じゃ、認めたくなかったのだろうそれを」

「そんな、私とジン兄様は親戚です！恋をするなんてご法度です！」

ツバキが珍しく戸惑っていた。今まで隠していた思いが漏れてしまった結果である。

そんなツバキの発言に、理事長はこう返した。

「そうかな？じゃあなぜお主はニューや塵^{ノエル}に嫉妬をするのじゃ？」

「うっ！ニューはともかくノエルには・・・」

「まあ確かに一部の作品には兄の恋人に殺気を抱く妹が出てくるやつもあるが、そんなのよほど兄に餌付けされた妹くらいじゃ」

俗に言う、ヤンデレというやつである。

この作品にも数多く出ております。

「その嫉妬は恋人に殺気を抱く妹のものではない、ジンを異性として意識している女の恋心じゃー!!」

「り・・・理事長・・・私・・・」

ツバキは崩れ落ちた。認めざる追えないこの状況というか帝はこんなキャラなのだろうか・・・

「去ね、テルミ」とか「塵が・・・まだいたか」とか言っちゃうキヤラなのはわかってるが。

「とまあ、余がキャラ崩壊する前に去ねツバキ、お主は最初から妹としてのことなど考えることなどなかったのじゃ」

「帝理事長、私うまくできるでしょうか・・・」

「余に聞くな、余は恋などできぬし妹としてももはや機能せぬ、余

は全てを捨て去りこの理事長という位置を得たのじゃ」

兄を捨て、自らの人生をも捨てこの学校に全てを捧げることを決めた。

まだ年頃の少女だというのに、その覚悟は尊敬に値する。それこそが偉大なる帝、理事長の姿であつた。

「では理事長は、もうラグナ先生に、ジン兄様に会わなくてもよろしいのですか？」

「確かに会おうと思えば会える。じゃが一度会ってしまえば決心が鈍るかもしれん、それが怖くてな……」

「理事長……」

理事長のその言葉一つに重み、だがそれと同時に悲しみが垣間見えた。

決心に満ちたその言葉一つ一つに、ツバキはただ聞くしかできなかった。

「……もう私は、サヤであることを捨てたのだ。」

「……本当は？」

「……そりゃあめちやくちゃ会いたいには決まってるじゃないの！お兄様——————！！——」

……と言っても、彼女は年頃の少女
欲求には逆らえないのである。

「……ごほん!! 去ね、ツバキ」
「はい、ではお元気で理事長」

翌日……

「兄さんハアーーッ!!」
「ラグナゝラグナゝラグナゝ!!」
「ブラッドカイン! 闇に喰われる!!」

今日もまた、ジンとニューはラグナを襲う
ツバキはそんな兄様を黙って見るしかできなかった。

「まったく、闇喰いしねえと体力がもたねえ……」
「……」
「あつ、おいツバキ、んでなにか得られたのか?」

ラグナはたたずむツバキを見て声をかける。
ツバキは少し黙った後、こう返した。

「はい、とても良い言葉をもらえました。」
「一体誰に相談しに行ったんだよ? カウンセリングの才能があるん

だったら俺もあいつらのことで相談してえわ」

「ふふふ、先生」

「あん？」

ツバキは少し間を空け、ラグナにこう言った。

「あなたの妹さんって、とてもしっかりしてるんですね」

「はあ！？いや意味わかんねえし」

「それでは授業がありますから、あまりジン兄様をふっ飛ばさないであげてくださいね」

「あ・・・ああ、っておい！さっきの言葉はどういう・・・」

ツバキの顔は笑顔だった。

今まで抱え込んでいた重い何かが抜けた気がした。

相談にのってくれた”友人”が、その思い何かをふっ飛ばしてくれたのだから・・・

「さてと・・・」

ドン！

「あっ！！」

ツバキは誰かとぶつかった様である。
抱え込んでいた書類が地面に散らばる。

「いたたた・・・」

「大丈夫か？」

「あ・・・あなたは・・・」

どうやらぶつかった相手はハクメン先生であつた。

別にぶつかった理由が前が見えないからではない、ハクメン先生は360°どこでも見渡すことができるから安心してほしい

「すまぬな、はいこれ書類」

「あ、すいません私がよそ見をしていたのに・・・」

「気にするな、日頃の疲れが溜まっていたのだろっ、それか何かいいことがあつたか・・・」

その言葉一つ一つが優しさあふれる。

その言動はまるで・・・

「ではな、授業に遅れるなよツバキ」

「・・・ハクメン・・・先生・・・素敵」

ツバキがハクメン先生に抱いたこの気持ち・・・

それはジンに対するものと同じであつたことを後に知ることとなる。

第27話：妹ゆえにカメラリア（後編）（後書き）

帝は多分こういうキャラではないと思います。

第28話：部活に入ろう（前書き）

第28話です。

第28話：部活に入ろう

ある日ノエルは、ラグナにこんな一言を言われた。

「ノエル、おめえ部活入ってねえよな？」

「ふえ？」

ノエルは不意を突かれたかのような反応をした。

「「ふえ？」じゃねえよ、一応学校の規則としては生徒会か部活、同好会に入ることになってるんだ。」

「でも、前に料理研究会に入りたいって先生に言っただけ先生が断ったじゃないですか？」

当たり前である。

ノエルを料理研究会、料理関係のサークルに入れる教師がどこにいますか

あまり正直に言うのは良くないが、邪魔を通り越して文字通り”障害”である。

「お前一人に20人近い部員をやめさせられるかこのバカ」

「ひつど！こういうのって料理が下手な人がうまくなるために入るもんじゃないんですか！？」

「”料理が下手”ならいい、”料理が兵器”ならそれは拒否る。」

ノエルは若干涙目になる。

言われ放題なのと実際に料理が兵器なのが自分に刺さる。
料理研究会は正直に諦めた方がいい。

「じゃあパソコン同好会にしようかなあ」

「お前な、パソコン同好会がインターネットしまくる活動って勘違いしてねえか？」

ノエルはドキッとした顔をした。

「ＩＴ関係、プログラムとかやってんだよあつちは、お前なんかブログやツイッターで満足してるだけじゃねえか」

「う・・・うう・・・」

「つつかさつきから運動関係が出てきてねえぞ、お前は運動しかできない、すまん・・・運動すらできなかったな」

「いくらなんでも言いすぎでしょ！..!」

実際にそうだから困る。

ノエルのいい所と言われると、少しばかり品のいい外見とこの話では意味をなさない戦闘能力だけだろう

元々人付き合いは苦手、勉強はできない、おつちよこちよい、すぐ泣く、家ではネットしたりポエム書くことしかない
そんな奴に部活などできるのだろうか・・・

「さつきから語りがものすごくひどいことを書いているんですけど
！！」

「事実だから仕方ないだろうがこのバカ」

「うう・・・ううええええ・・・」

「ほら、すぐ泣く」

とまあラグナ先生のノエルいじめはそのくらいとして
本題へと戻る。

「とりあえず運動関連にあたってみろ、できないつつても完全に
運動音痴つてわけじゃねえだろ？戦闘能力高いし」

「でも・・・夜遅くまで動くのはいやだなあ・・・」

「楽をしたいと思うんじゃないやねえよ、それでお前が不細工だったら
人生クソゲーだぞ」

ラグナはまたノエルをいじるが、遠まわしに外見はいいと言ってる
ようなもので気にはしなかった。

「クラスの奴にもお願いして、なんとか部活に入れ、部活に入っ
てないのお前だけだぞ？」

「私だけ・・・ですか？タオちゃんやアラクネくんやニューちゃん
は？」

「タオは忍者同好会、アラクネは科学部、ニューはオカルト部に”
きちんと”入ってるよ」

以外にも部活や同好会と無関係な人たちが”きちんと”活動していた。

「というか忍者同好会にオカルト部って、この学校はどこまでバリエーション豊かなのだろうか・・・」

こうしてノエルの部活、同好会めぐりが始まった。

バレー部

「はい、皆さん一度休憩しますよ」

バレー部にはカルルがいた。しかもキャプテンである。

その他体育会系の部員が数名いた。

この話では高校生扱いではあるが、小学生同然のカルルに従うのはどうなのだろうか・・・

「あれ？ノエル先輩どうしたんですか？」

「ラグナ先生に部活に入らせて言われたの、だからこうして部活を見て回ってるんだ。」

「そうですか、でも女子バレー部は少し前に無くなってしまいましたよ」

「へ？そうなの？」

「でも少しくらいは役に立つかもしれません、せっかくなんで見ていってください」

こうしてノエルはバレー部を少し見ることにした。
カルルはサーブやスパイクこそあまり得意ではなかったが、レシーブとパスが絶妙にうまかった。
さすがはCT時代に全国2位だっただけはある。ああ今は関係ない？よく見渡すと奥の方に顧問なのかレリウス先生がポツンといた。恐らく息子にせがまれた（脅された）のだろう。

剣道部

「よし、残鉄100回やったら休憩だ。」

剣道部の顧問はハクメン先生である。

にしても残鉄100回って、剣道の練習に関係あるのだろうか（ちなみに椿祈100回とかもあるらしい）

なお、部活の歴史としては練習前に部員全員で「我は空（以下略）」を言うらしい

「む？ノエルか、どうしたこんなところに？」

「今部活を見て回ってるんです。」

「ほう？だがこの剣道部に女子部員はいないぞ？マネージャーと言ってもお前はお断りだ。」

「さりげなくひどいこと言わないでくださいよー!!」

ハクメン先生のさりげないマネージャーお断り発言にノエルは思わず反応する。

お断りの理由は言わなかったが、大抵予想できるであろう

「だがせっかくだし、今後の役に立つかもしれん、練習に参加させてやろう」

「え？いいんですか？」

「うちには”銃道部”はないのでな、せめて剣は使えるようになれ」

柔道部の”柔”と”銃”をかけたのだろうか、文字なのでノエルにはわけのわからない一言だったであろう。

ちなみに柔道部はあります。（ティガー先生が顧問でマコトがかけもち。）

「とりあえず残鉄10回！」

「はい！残鉄！！」

ガシャーーン！

ノエルが振った竹刀がすっぱ抜け、あるうことかその竹刀が壁を突き抜ける。

どこまでおつちょこちよいなのだろうか、そして何気に力強いノエルであった。

「・・・・・・え」と
「帰れい」

「・・・・・・はあ、運動関連はやっぱだめかあ」

ノエルは先ほどの事件で運動系に入るのを諦めた。
恐らく野球にしろバットがすっぱ抜け人を怪我させることだろう、
サッカーにしろボールがあらぬ方向に飛んでいき学校のガラスを割
ることだろう。

途方に暮れたノエルがたどり着いたのは、ニューが属する”オカル
ト部”であった。

オカルト部

「あゝ、ノエルちゃんどうしたの？」

ラグナ先生の言うとおり、数名の部員の中にニューはいた。
魔女のような格好をして、怪しげな壺やら藁人形やらが教室中に散
らばっている。

藁人形に貼られている写真が”シン”で、壁には「ラグナ大好き」

とびつちり書かれている。

「いろんな部活を見て回ってるの・・・んでニューちゃん今なにやってるの？」

「惚れ薬の研究だよ　完成したらラグナの口の中にダイブ！」

どうやらニューがオカルト部に入った理由はラグナ関連であるらしいオカルトな力を使いラグナを我が物にするつもりである。

「へ・・・へえ、それで黒魔術でキサラギ先輩とかを・・・」

「一応試しにね、効果が発揮してラグナに近づけなくなれば儲けものだしねえ」

（わ・・・私も気をつけよう！）

ノエルは少しばかり危機感を覚えた。

「そういえば私、ノエルちゃんにも少し興味を持ってたんだよ」

「へ？私に？」

「ノエルちゃんって”二重人格”でしょ？その仕組みが興味深いの」

「あ・・・あまりミューのことは言わないでよ・・・」

ノエルにとってミューは少しばかりトラウマであった。

あれになるとラグナ先生を傷つけてしまうからだ（と言っても悪い

のは100%ラグナ先生なのだが)

「でもすっごいことだと思うよお、どこかの王様もその力を利用してゲーム王になったって言うし」

「どこかの王様ってどこの王様よ、しかもあれ二重人格って言うの？王の意志とかじゃなくて？」

作者が好きなカードゲームの話である。

「ノエルちゃんも入りなよオカルト部、どうせできるなら楽な部活に入りたいとか思ってるんでしょ？」

「ぎくう・・・で・・・でも怖いし」

「大丈夫だって、実験とかだってそんなに成功しないよ」

そんな非科学的なことなど起ることはまずない

心霊番組や呪いの特集などほとんどがヤラセであるのも事実、霊能力者だって質のいい役者だって話もある。

「とりあえず、そのミューちゃんを自由に引き出せる実験をしてみたいなあ」

「え！？だ・・・だめ！彼女は永久に封印しておいて！！」

「大丈夫だって、実験したいってだけで成功するとは思ってないし」

「で・・・でも・・・」

「最近裏サイトで買ったの、「人の本質を覚醒させる呪文セット」

つていうのを」

ニューはそれをなにに使うつもりだったのだろうか

たぶんだが、ラグナに使ってニューへの本物の思いを述べさせる・

・とかなのだろうか

「ほ・・・本当に大丈夫なの!？」

「大丈夫だつてえ、いつくよ!」

といってニューは無茶苦茶な言葉を述べ、ノエルにあやしい球をポコポコとぶつける。

若干痛かったが、ノエルはこらえた。

「・・・・・・うゝん、成功しないね」

「よかったあ、まあこんなんでも実験が成功する方があり得ないけれど・・・・」

・・・・私・・・・私

「びく!!」

「ノエルちゃん?どうしたの?」

「へ!?!・・・・いやなんでもない!!」

こうしてノエルは、とりあえずオカルト部に仮入部ということで話は方付いた。

部活にも入ったし、これで全てが解決である。

その夜

『世界が嫌い……こんな世界クソゲーだ……あゝ、ひさしぶりに表に出たいな』

（なに！？頭の中で声がする！！）

『久しぶりにハンバーガーをガツガツ食べたいな、あつとラグナ
の野郎……毎日毎日貧乳貧乳いやがつて』

「い・い・やー!」

次の日

「うーん」

「・・・ノエル？な・・・なんかあったのか？てか目の色が・・・青いぞ」

ラグナはノエルに少しばかりの違和感を覚えた。

この日からノエルは、たま／＼に記憶を失うらしいんだとか。

第29話：真夜中のミリオンセラー（前書き）

第29話です。

今回は若干小ネタ風にしてみました。

第29話：真夜中のミリオンセラー

午後3時・・・・・・・・

「・・・・・・・・寝れねえなあ」

ラグナは寝れなかった。

明日は朝早くから会議がある。

教師が遅刻など聞いたことがない、社会人としてやってはいけな
ことである。

「ったく、今日の自習の時間に暇でつい寝ちまったからな、寝ちや
いけないってことはわかってんだけどなあ」

ブレイブルー学園の教師はみんなこんな感じである。

特に最近ポケ。ンが発売したこともあり、ほとんどの生徒や教師
がポケ。ンをやっているのだ。

「じゃあねえ、卵の厳選でもするか・・・」

そう言っただけでラグナはDSを取り出しポケ。ンをやり始めた。

ちなみにラグナはブラックを買った。ラグナはイメージ的にブラッ
クなので違和感はないだろう。

「まったく高個体値が出ないなあ、ココノエ先生に頼んで6Vのメタ
オンをもらったのによ」

ゲーム大好きココノエ先生はどっちのバージョンも買ったらしい。
もっぱらの改造厨で、デメリットなども得意の頭脳できちんと突破
している。

余談だが、ラグナはもっぱらの伝説厨である。努力値などもつい最
近までは気にしていなかったそう

「そついやあ今日もハクメン先生に負けたなあ、伝説は1体までつ
て馬鹿じゃねえのかあのお面野郎」

馬鹿はラグナ先生なのだがあえて言わないでおこう

ちなみにハクメン先生はイメージ通りホワイトを買った。ハクメン
という名前でブラックを買うのはいろいろ反感を買うことだろう。
だがホワイトを買うとブラックなモンスターが出てきてしまうので、
最初は悩みに悩んだそう。

結局ラグナ先生ホワイトなモンスターと交換することで解決した。
ラグナ先生もそちらの方がよかったとのこと

「ああ、くつそ辛いなあ、だけどこのままだとバング先生やティガ
ー先生にも勝てないしな……」

と、このまま行くとポケ○ンの小説になってしまつので、ポケ○ンの話はここまでにしよう

ちなみに私作者はマイナーチェンジ待ちです。こういうのって後から出た方が得するようにできてるんだよね……

「明日にするか、早く寝ないといけねえし……」

30分後……

「……眠れねえ」

ラグナ先生は眠れなかった。

この時間に寝れないのが一番キツイのである。

面白い深夜番組もやってないし……

「くっそふざけんじゃねえよおい、明日も仕事あるんだよ、明日が日曜日っていうならわかるよ、明日は火曜日っていう一番テンションが下がる曜日なんだよ」

火曜日、それは週末の休みも遠く感じるそれはそれは微妙な曜日である。

月曜日なら休み明けだから始まった感があるし、水曜日なら折り返しこの”火曜日”という曜日こそ、なによりつらい一日

「ああ寝れない寝れない寝れない……誰かに電話でもしてみるかな」

とても大人とは思えない一言を漏らし、ラグナは携帯を手にする。
電話先は、ジン・キサラギである。

ぷぷガチャ

「……なに兄さん？こんな時間に」

「いやあなんだ、その……眠れないんだよ」

「いやいや兄さん、僕だつて疲れてるんだよ、今日はどうやって兄さんを襲おうとか、兄さんにどうやれば好印象を与えられるとか、ついでに生徒会のこととか」

生徒会はついでののか、てかその襲う相手にカミングアウトしてんじゃないかねとか

ツツコミを入れるところはたくさんあったが、いかんせん時間が時間である。

「兄さんもいい加減大人なんだから、寝るべき時はきちんと寝た方がいいよ、おやすみ」

と、いつもの変態弟とは思えないまともな言葉を言ってジンは電話

を切った。

てんめえいつもは人の嫌がることばっかしやがるくせに・・・とラグナは心の中で思ったが微妙な睡魔のせいで声に出なかった。

ぷぷガチャ

「ふあゝ、今何時だと思ってるの・・・ってラグナあ？」

「あゝニューか、まあその眠れなくてよ、少しだけでいいから電話付き合ってくんねえか？」

次にかけたのはニューである。

普段こういう一言を言えばすぐさま笑顔を見せて乗ってくれるニューであつたが。

「いやいや、うれしいんだけどさ、私ものつすごい疲れて眠いんだけど、今日ラグナをどうやって襲おうとか、ジンをどうやって出し抜こうとか、ついでにポケ。ンの努力値どう振り分けようとか」

おめえもかよ、とツツコミを入れたところだったが、いかんせんこんな時間である。

てかおめえら、いつもこんなこと考えてんのか、俺はいつになつたらてめえらの呪縛から解き放たれるんだよ
とか思つたが、ラグナは口には出さなかった。

「ラグナも、夜中に女の子を口説くのはよくないよ、おやすみ」

そう言つてニューも電話を切った。

あいつらでも夜中では特に反応をしないんだな、そう思ったラグナであつた。

「あゝ、気がつけば四時すぎか、次でラストにするか」

ぶゝぶゝガチャ

「……今何時だと思つてるんですか？」

電話に出たのはノエルだつた。

いつものノエルとは思えないような低い声だったので、ラグナは少し驚きつつ……

「寝れないんだよ、なんとかしてくれ」

「知りませんよ」

といいながらノエルは今までの二人よりも早く電話を切った。

もう少しなんとか……と思つたが、今になつて自分がやってることが最低なことだと知つた。

眠れない夜中というのはここまで脳がマヒするものなのだろうか

「ああ・・・こうなったらもう起きてるしかねえな、シャワーでも浴びて、出勤時間までポケ○ンやるぞー！！！！！！」

こうしてラグナは気合を入れて、目覚めのシャワーを浴び、ゲームに明け暮れたのであった。

そして・・・

「あら？ラグナ先生が来てないのね」

とレイチエル校長

「あいつめ、ポケ○ンのやりすぎで寝坊でもしたか・・・けしからん」

そついうハクメン先生も目の下？のクマがひどかった。恐らくラグナ先生ほどではないが遅くまで起きてやっていたのだろう。

結局ラグナ先生はあの後急激な睡魔に襲われ、めざましも聞かないほどの熟睡、起きたのは午後の1時だったという……学校には一応行っただが、ハクメン先生に思いっきり叱られた。

第30話：小説を書こう。（前書き）

ハーデス先生も30話までいきました！
とりあえず目標は50話くらいですか？

第30話：小説を書く。

B B 学園の昼休み、ラグナ先生は調べ物のためPC教室に向かった。ラグナ先生とはいえアナログな人間ではない、家にはきちんとしたデスクトップパソコンが置いてある。

「さてと、早く調べ物をしてっと……」

PC教室に入ると、そこにはノエルがパソコンをやっていた。ノエルがパソコンに熱中することは珍しいことではなく、たまに放課後は学校でパソコンをやっているのだ。のぞき見してみると、文章のようなものを打っている。

「ふ〜んふ〜ん……ってラグナ先生!？」

ラグナに見られていることを気づき、すぐさま画面を隠すノエル。

「おめえなにやってんだ？あれかポエムか？巷では公開処刑と言われてる噂のポエムか？」

「せせせ……先生には関係ないでしょう!~!」

どうやら似たようなものだったようである。ノエルの顔が赤い。

「ふうん……あ、あんな所に苺のミルフィーユが!!」
「え!?!どこどこ!?!」

ノエルが席を立った一瞬の隙をつき、ラグナはノエルの書いていた文章をマジマジと見た。

ノエルは「しまった!」と言わんばかりにラグナを突き飛ばし、画面を隠す。

「ちよつと先生! プライバシーの侵害ですよ!! PTAに訴えますよ!」

ノエルはPC教室の中であるというのに大きな声で怒鳴る。

周りの生徒からはいやな視線で見られている。ノエルはあれやこれやでさらに顔を赤らめる。

「そんな怒んなって、少し見たところ小説を書いてたみたいだな」
「うう……先生のバカ」

ポエムではなく小説であったようだ。似たようなものではあるが……

「にしてもおめえ、小説の中で小説書くか? てか小説の中で小説にふれるってありなのか?」

「ラ。べ部って言う作品があるんですよ先生、だから十分ありだと

思います。」

とまあ他作品の名前を出してしまったが……大丈夫だ、問題ない。おつと、またもや他作品のネタを出してしまったが……まあいいラグナは無理やり納得させられ、ノエルが隙だらけのうちにその小説の内容を読み上げる。

「えつとなになに……」「フランソワはお花さんを見て、思わず見とれてしまった……」

「わーーーーー！わーーーーわーーーー！！」

ノエルはまたもや大声を出す。

再び周りの生徒からいや々な視線で見られるが、今のノエルはそれどころではなかった。

「おめえな、フランソワって……今時そんなクソダサイ名前誰がつけるんだよ」

「ううう恨みますからね先生……」

ラグナ先生の行いに、ノエルは涙目で睨みつけていた。

さすがにやりすぎたと思ったのか、そのままノエルの元を離れる。ちなみにノエルの書いていた小説の内容は、”主人公フランソワが花に恋をして、その花を刈り取ろうとする悪い悪魔をやっつける……”というなんとも言えない作品であった。

ラグナ先生は指定されたパソコンに向かう最中、なんとジンに鉢合わせした。

「あゝ兄さん！どうしたんだいPC教室に？なにか調べ物でもあるのかい？」

ジンは大喜びでラグナ先生に声をかけるが、肝心のラグナはめんどくさそうな顔をしている。
こいつにはどんなところでも会いたくないと言わんばかりの顔でジンに問う。

「てめえこそ、こんなところでなにしてんだよ？おめえあんまりパソコンしないじゃねえか」

それを聞かれ、ジンは画面を見せながら答えた。

「最近小説を書くのにハマっていてね、結構自信作なんだ。お気に入り登録もつい昨日で100件突破してね」

と、作者のこの作品がまだ50件もいつてないのにいけしゃあしゃあと自慢してくれるわこの変態が
まあ作者は作者なりにがんばります。お気に入り登録とか関係なく、

楽しく書いていこうと思っています。

「なんだてめえもかよ、最近は小説ブームなのか？」

「まあアマ。ン出版とかでかなり儲かるって話もあるからね、オリジナルの作品に限るけれど」

ジンの「かなり儲かる」発言にラグナは若干反応する。

「今度俺も書いてみるかな……」とラグナが小さく呟いたのは内緒である。

「ふうん、で？どんな話書いてるんだよ？」

「あは、なに兄さん、僕の小説に興味があるのかい？いいよお、兄さんには特別今書いてあるできたてホヤホヤのネタを見せてあげるよ」

ラグナは若干イラっときたが、興味があるので少し読んでみると……

「い……いくぞ、ジン！」

「に……兄さんだめだ……まだ、僕の準備が整ってないよ」

兄さんはすでに限界まできていた。

僕はまだ準備ができていない、弟ともありながら、兄さんのスピードについていけないなんて……

「うつせえ！俺はもう我慢できねえんだよー！」

「んもう、兄さんはせっかちなあ……」

「うつせえー！愛してるぜ……最愛の弟よーー！」

兄さんの愛の言葉に、僕はイキそうになった。

耐えられない、僕はとうとう大声を出した。高らかに叫んだ。

「あ……あー……兄さん……！……らめえ……」

僕は絶頂だよ……ああ兄さん！！

「てめえのそのふざけた幻想をシザー……！！！」

ラグナは小説を読み終わると同時にジンに超高速のカーネイジシザーを放った。

ジンは教室のパソコンを3台ほどぶち抜きふっ飛んでいく。

「ぐっはあ！！やだなあ兄さん、もしかして小説を読んで……責める気持ちが高まったのかい？」

「うるせえ！なにが絶頂だ！てめえの変態指数が絶頂なんだよ！！」

と、ラグナ自身も顔が若干赤くなっていた。

まさか自分の弟が自分とのBL小説を書いていようとは思っていなかった。

というか、そこまでのレベルに達していたのが驚きであった。

「消せよ、帰ったら今まで書いた分全部消しとけ！もし消してなかったら明日から一切口きいてやんねえからな！！」

「ああ兄さん！せめて1作目と2作目は残させてよ！」

「これ3作目だったんかいーーーー！！！」

ラグナはもう一度ジんにシザーを放ち、PC教室から出て行った。

「あんな野郎がいる中で調べ物なんてできるか！！」

翌日、ラグナに壊れた大量のPCの請求書が届いた。

半分はジんに払わせたが、それでも今のラグナにとってはキツすぎ

る金額であつた。

「アマゾン出版……考えてみるかな」

第31話・あべこべカフェイン（前編）（前書き）

31話です。

第31話：あべこべカフェイン（前編）

「あゝひと段落ついたわ……」

ラグナは今日も大忙し、授業も終わり職員室でぐったりとしていた。

「お疲れだなラグナ先生、ほらコーヒーだ。」

ラグナにコーヒーを差し出したのは、以外にもココノエ先生だった。いつもいつも気だるそうにしている彼女が人にコーヒーを振る舞うとは珍しいことである。

「おうココノエ先生って、てめえこのコーヒーに変なもの入れてないよな？」

ラグナは思わず聞いた。

ココノエ先生といえはなりふり構わず実験をするそれは困った人物である。

どさくさにまぎれてコーヒーに変な薬物など入れられたら最後、何が起こるかわからない。

「ははは失礼だな、今回はいいコーヒーが手に入ってな、せっかくだからお前たちに差し入れしてるんだよ。」

見たところ他の先生方も飲んでいる。

特に異常もなさそうだったので安心してラグナも飲んだ。

「ふう……どうやら普通のコーヒーみたいだな、ありがとう」

「礼はいらない、ではな……」

ココノエ先生はそう言って、自分のラボに帰って行った。

「さて……今回は普通に振る舞っておいて、隙を見せた時にでも実験をやってみるか……」

と、最低なことを呟いた後、ふと机を見てみると

ラグナ先生のコーヒーに入れたはずだった角砂糖が置いてあった。

「……あれ？ということはラグナ先生のコーヒーに入っていたのは………」

翌日……

「あゝ今日も一仕事すつか……」

ラグナ先生が職員室に、「どっこいせ」と重く椅子に座り、ふと周りを見渡すと……

「……うん？なんでカルルやタオカカやノエルやツバキやマコトが机に向って作業してるんだ？」

周りには先生方……ではなく、普段見慣れている生徒達が机に向って作業していた。

普通ならバング先生やライチ先生やハクメン先生など、先生方がいるはずの席に、生徒達がいるのである。

ぽかんとしていると、ノエルが席を立ち話かけてきた。

「おうラグナ先生、おはよう」

「お……おはよう」

いつもとは違い、大らかに話しかけてくるノエル。

「お前こんなキャラだったか？」と一瞬思ってしまったが、問題はそこだけではなかった。

語尾に「ござる」をつけて仕事をする”カルル”、やけにキリっとしている”タオカカ”、「ワンセットだ」と言っている”レイチエル”。

ラグナの頭の中はすでにパニック状態になっていた。そんな時……

「おいラグナ先生、ちょっといいか？」
「あ……ああ」

ココノエ先生に呼ばれ、とりあえずラグナ先生はその場を後にした。
ココノエ先生のラボに向かう最中、生徒たちをチラッと見たが
そこにいたのは普段職員室にいるはずのハクメン先生やバング先生
更に教室内を見ると、女生徒が授業をする光景など、不思議な光景
が広がっていた。

「さて……何から話せばよいか」
「おい、てめえいつたい何しやがった？」

ラグナが睨みをきかした後、ココノエ先生はその口を開いた。

「いや、わざとじゃないんだ。そこは謝っておく、昨日のコーヒー
にちよつとした実験物を入れてしまった。」
「デッドスパイク!!」

ラグナはその言葉と同時にデッドスパイクを放つ、ココノエ先生は
ひょいと避けたあと話を続けた。

「まあ聞け、少なくともここにいるココノエ先生は本物だ。そこだ
けは理解しておいてくれ」
「ったく、んでどうなってんだよ？俺の中で何が起こってやがる？」

ラグナの質問に、ココノエ先生は答える。

「あべこべカフェイン」と言ってな、飲んだ者の脳と視覚を麻痺させ、相手の外見と中身がぐちゃぐちゃに入れ替わって見えるようにする。というものを昨日間違ってお前のコーヒーに入れてしまった。」

「ヘルズファング！！」

と、再びラグナはココノエに技を放つが、ココノエ先生はまたも避ける。

そしてラグナが落ち着いたのを確認し話を続ける。

「とりあえず効果は1日で切れる。お前が誰が誰に見えてるか私は知らないからデータを作ってやることはできんが、なんとか直感で、努力と根性でなんとかしてくれ」

「うるせえよ！今のてめえに努力と根性とか言う資格はねえからな！！もう二度とてめえの差し入れは受け取らない！！」

ラグナはカンカンに怒っている。当然と言えば当然だが。

とりあえず先ほどのノエルやカルルは、恐らく別の誰かということになる。

そしてそれはラグナにはそう見えているだけであって、他の人から見ればいたって普通に認識できているようである。

なんとか問題を起こさないよう、振る舞わなければならない。いち

いち誰が誰かなど考えると脳がパンクしそうだったが、そうするしかなかった。

職員室にて……

「とりあえず、事情がわかりそうなやつに話して、協力してもらうか」

とため息をつくラグナの元に、ノエル……の姿をした誰かが話しかけてきた。

「どうしたラグナ先生？ 辺りをチラチラ見て、何かあったのか？」

そのノエルの態度を見て、ラグナはこのノエルが誰かなのか大体予想がついていた。

いざというときに頼りになる。信じ合える飲み仲間であるあの教師……

「ハクメン……先生……なのか？」

「なにを言ってるんだ？ まさかとは思うがお前私の姿を忘れたのか？」

その言葉を聞き、ラグナは安堵の表情を浮かべぐったりと肩を落とした。

少し間を置き、ラグナ先生は話を始めた。

「なあノエ……ハクメン先生！今から俺が話すことを笑わないで聞いてくれ！そして信じてくれ！！」

「な……なんだ急に？なにかあったのなら話せ、私はなんでも聞いてやるぞ」

ラグナはあべこべカフェインの話を一から十までハクメン先生に話した。

その結果……

「……ラグナ先生よ、少し疲れているのではないか？」

信じてくれなかった。

ラグナ先生は泣きそうな顔で何回も訴えかけるが、説明が悪いのだろう、ハクメン先生の表情がなにやら哀れむような表情になっていく。

しかもそれがノエルの顔なのだからますます悲しくなってきた。

「あーもう！昨日のコーヒーあるだろ！！あれにココノエ先生が変な薬を入れたんだって！！」

ココノエ先生の名前が出たとたん、ハクメン先生は表情を変え、すぐさま信じてくれたという。

あの先生ただけ人様に迷惑をかけているのだろうか、ハクメン先生にも思い当たる節があるらしい

「つまりは、今の私がお前にはノエルに見えているということだな？」

「そうそう、しかも周りにはカルルとかタオカカとかツバキとかアラクネとか！」

ラグナ先生はそうとう困っていると感じ取ったのか、とりあえずハクメン先生は誰が誰なのかをラグナ先生に教える。

一度には全部覚えられなかったのか、とりあえずなじみの深い人だけを覚えた。

「まあ1日で効果が切れるのなら、今日乗り切ればいいだけだ。私も協力してやろう」

「ああ心強い、だけどハクメン先生……」

ラグナ先生は少し顔を赤らめてこう言った。

「あんまり顔を近づけないでくれ、その……今のあんたはノエル……だし」

その言葉を聞き、ノエル顔のハクメン先生は笑って一歩距離をとった。

こうしてラグナの奇妙な1日が始まる。

第32話：あべこべカフェイン（後編）（前書き）

第32話です。

第32話：あべこべカフェイン（後編）

とりあえず、他人の中身と外見が異なって見えるというヘンテコな一日が始まってしまったラグナ。

今日一日はハクメン先生（ノエル顔の）と共に行動することにした。後に、「ハクメン先生とラグナ先生は意外にできてる」なんて噂が少しだけ流れたというがそんなことを考えている暇などなかった。

「しっかしココノエ先生め、へんなものばかり開発しやがってよお」
「私にも覚えがある……」

かつてハクメン先生は、「欲求タマール」という薬を飲まされ、ジンに戻りかけたことがあるという。

テイガー先生は変な変形を……ノエルは胸がでかくなる薬（でかくなりすぎて大変なこととなった）……ニユーは「にゅー」しか言えなくなる薬と……あの先生は数々の迷惑を起こしていた。

「少しは慣れてきたし、一日だけならなんとかなるだろう……」

そう余裕のぶっこいた発言をしていたその時、第一の試練がラグナを襲った。

「兄さ〜ん!!」

「ラグナーーーーー!!」

とこちらに思いっきり突っ込んできたのは……バングとハクメンであつた。

「シザー――――！！！」

ラグナはいつにも増して超高火力のカーネイジシザーを放った。

おそらく先ほどの二人はジンとニューだったのだろう……

だが考えても見てほしい、もし”仮面をかぶった変人”と、”ムサイ忍者”が自分の名前を叫びながら突っ込んできたら。

この小説を読んでくれている人たちも、知らず知らずに火事場のクソ力……普段出しているよりも大きな力を出してそれらを撃退するはずである。

「……まあいつものことなのだろうが、気のせいかもしれないがUPしてないか？」

「てめえとバング先生が兄さんだのラグナだの言つて突っ込んでくればそりゃあ誰でも威力がUPするわ！！」

それを聞いて、ハクメン先生は静かに答えた。

「私とバング先生が、ジンやニューみたいに突っ込んできた……か」
「おう、それがどうしたんだよ？多分お前にはいつものジンやニューに見えていたんだろうが……」

「……今度の飲み会でノリに任せてやろうとしていたネタだったのだg」

「なんか言ったか？」

どうやらハクメン先生はリアルで兄さん突撃をやるうとしていたようだ。

だが先ほどのラグナ先生のシザーを見る限り、結構痛そうだったの
でやめることにした。

「にしてもラグナ先生、家族は大事にしなければだめだぞ」

「あいつらがあんな変態じゃなかったらたまに相手くらいしてやれるんだがよお」

とラグナは言う。

ハクメン先生は少し昔を思い出すかのように語り始めた。

「弟が抱く兄への感情というのは予想以上のものだ、ましてや彼は昔からのお兄ちゃん子だったはずだ、突っ込んでくるのもわかる。」
「ど……どうしたよいきなり？」

ハクメン先生にも覚えがあるようだ。

突っ込む側にも、突っ込まれる側にも……

「だから私は、大事な義妹にも優しく振舞っていたぞ」

「まああんたは心が広いからなあ」

「大変だったがな、「ジン兄様……ああジン兄様！！だめですよジン兄様、生徒会には参加してくださいジン兄様、私にはあなたの全てを知る義務がありますジン兄様、ジン兄様……ジン兄様……」

「……………！！」と毎日毎日毎日

ハクメン先生の黒歴史である。

恐らく兄と呼んでいた男に襲いかかっていたのは、ストレスだったのかもしれない。

「そんな昔のことを覚えてるんだから……相当だったんだろうな……」

……

「そうだ、ジンも大変なのだ。」

「次はシザーじゃなくて、デッドスパイクにするよ……」

ハクメン先生は納得がいかなそうだったが、まあネタ技になったのだからよしとした。

「あ、ラグナ先生」

と、こちらにかけよってきたのは……ジンであった。

「ブラッドカインからの闇に喰われる……………！！」

「きゃああああああああああああ！！」

あれ？デッドスパイクにするのでは？

ハクメン先生は啞然とした顔でそれを見ていた。

「ぶっはっは！！兄としては弟にはしつけが必要なんだよ！！」

「お前……気でも狂ったのか？」

と、よくよく考えてみると、今最大限に攻撃を仕掛けた相手はジン……の顔をした別の誰かであった。
すっかりあべこべカフェインの効果を忘れ、赤の他人に最大クラスの攻撃をしかけてしまったのだ。

「……って、あれがジンってことはジンじゃない誰かってことだよなあ、ハクメン先生、あれは誰だった？」

「知らぬが仏」

「いや、教えてくれよ、謝らなければならんし……」

「今の貴様に教えることなど無いわ」

と、怒ってハクメン先生はどこかへ行ってしまった。

こうして一日が終わり、ラグナ先生のあべこべカフェインの効果は切れ、平和が戻った。

次の日……

「はぁ……みんながそのままの姿でいやがる……これが普通の生活
ってことなんだよなぁ」

「どうやら戻ったようだな」

とハクメン先生が話しかけてきた。

「おう、昨日はサンキューな、おかげで平和が戻りそうだな」
「そうか、まあお前にはまだ一つ地獄が待っているのだがな」

と、意味不明な一言を漏らし、ハクメン先生は自分の席に戻って行
った。

「地獄だあ？ココノエ先生に気をつけてればもうあんなヘマは……」
「先生……」

と、重苦しいテンションで話しかけてきたのは、ノエル……あべこ
べカフェインの効果は消えているので、ハクメン先生ではなく本物
のノエルである。

「おうノエル、久しぶり？だな……どうしたそんなにおびえて……」
「先生、なんで昨日私にブラカイコンボを仕掛けたのですか？」
「え………は!!」

そう、昨日ジンだと思って攻撃した相手は、ノエルであった。
思いがけないとばっちりを受けたノエルは、怒りと悲しみに満ちて
いたという

「あ……あつはつはノエルよお、それには海よりもふかいわけが
……」
「私が先生になにかしましたか……ブラカイコンボをされるほどな
にかしましたか……？」

邪悪なオーラを出しながら、ノエルはラグナに近づいていく。

「あ……違うんだよノエルちゃん、だから、昨日のお前はジン
だったわけ」
「死ね――――！！」

天国の後に地獄があるとはこの事を言うのだろうか……

第33話：容疑者シシガミ・バンゲ（前書き）

第33話です。

第33話：容疑者シシガミ・バンゲ

ブレイブルー学園の職員室……

なにやらライチが困り果てた顔で机に座っていた。

「おう、どうしたんだライチ先生？」

ラグナがそんなライチを見かねて、話しかけてみる。

するとライチは真剣な顔でラグナに相談を持ちかけてきた。

「実は……下着を盗まれたみたいなのよ、昨日私が寝てる間に」

「は？下着？なんだよ今どき下着泥棒なんていんのかよ」

下着泥棒、世の中には女性の下着を見つめてははあはあしている輩がいる。

ライチも昨日その被害にあっただけ、ライチほどの美人なら狙う男も数多いだろう。

その話はすぐさま他の先生にも伝わり、みんなで犯人を見つけようという話になった。

「まったく、女性の下着に手を出すなんて、下衆の極みね」

とレイチエル校長、淑女の代表ともいうべき彼女はその行いが許せ

ないようだ。

「見つけたら即悪滅だな、我ら同僚を困らせた罪は重いぞ」

「そうだな、見つけたら即GETBだな。」

ハクメン先生とテイガー先生もアップを始めたようです。
そんな中、ラグナがこんな一言を言い放った。

「てかよ、もうこの犯人わかったようなもんじゃね？」

「ほう、思い当たる節があるのか？」

とハクメン先生がラグナに問う。

ライチを狙っていて下着泥棒をしそうなムサイ男が一人思い当たる。

「とりあえず今日の夜そいつの家に行つてはかせてくるわ、タオカカ、ノエル、ついてこい！」

「ニヤス！」

「はい、つてなんで私まで!？」

と、なぜかその場にいたタオカカとノエルを強引に誘い、作戦を決定する。

その夜……

「タオカ力、ノエル、準備は万全か」

「了解ニヤス！タオはいつでも準備おつけ、ニヤス！」

「こちらは大丈夫です。」

抜き足差し足忍び足、相手は結構手ごわい相手なので、ラグナたちは慎重に行動を開始する。

そして目的地へ、カグツチ市から少し離れた場所、浪人街にそいつはいる。

ターゲットの家に潜入し、まずラグナたちが行ったことは……

「タオカ力は周りの搜索、ノエルは冷蔵庫を物色！」

「ニヤス！」

「はい！」

タオカ力は家の隅から隅へと見回り、ノエルは冷蔵庫から材料を取り出す。

ラグナはいつのまにかエプロン姿となり、料理の準備をしている。

「よし、こんくらいあれば大丈夫だな、じゃあ俺は食料の調達、ノエルは別で何か作っておいてくれ、それがこの作戦の最終兵器となる。」

「なんか聞き捨てならない一言が飛んで来たような気がします……
…わかりました！」

と、ラグナとノエルは別々に料理を開始する。

ラグナはエプロン姿にガスマスクとなくとも言えない格好である。たぶん隣でノエルが料理という名の兵器を作っているからだろう。タオカ力はそのまま放置、料理の最中に手を出されるのはラグナ的には耐えられない。

「よし！料理完成！では……いただきます！」

「ただきヤス！」

「いただきます、わく先生の料理美味しそう!!」

「おいしそつでござるな……っとお主らさつきからなにやってるでござるか——！！？」

と、料理に手をつけようとした瞬間、いつのまにかいたバング先生の全力のツツコミが飛び散った。

ラグナたちは冷静にバングの方を振り返った。

「なについて、腹が減っては戦ができぬっていうだろう」

「いやいや、確かにそうでござるが何を拙者の家に勝手に入り拙者の冷蔵庫を勝手に物色して、これはいつたいなんでござるか!？」

とまあバングが混乱している最中、ラグナは冷静にこう言い放つ。

「まあ細かいことは気にすんなや、つてことで犯人逮捕」

「は？逮捕……？」

と何が何やらわからぬ間にバングの腕に手錠がはめられる。
そして何食わぬ顔で連行しようとするラグナを見て、バングは我に返る。

「いやいやちよつと！拙者が何をしたでござるか！？拙者何もしてないでござるよー！」

「はんにんは、みくんなそいうニヤスよ」

タオカ力の冷たい一言にバングは尚更否定する。

状況説明を大声で求めるバングに、ラグナは仕方なさそうに説明する。

「とぼけんじゃねえよ、昨日ライチ先生の下着が何者かに盗まれたんだよ」

「なぬ！？ライチ殿の下着が盗まれたとな！？どこの誰でござるかその悪党はー！」

「だから、そこにいるじゃないですか」

と、叫ぶバングを指差しノエルが答える。

「拙者！？拙者はそんなことしないでござるよー！」

「ライチ先生のことをいつもストーリーカーして、ライチ先生のことか

好きで、下着を盗みそんなムサイ暴漢って言ったらもうお前しかないだろうが」

「ってちよつとー！それは決めつけがすぎるでござる！てかストーカーなんてしてないでござるよ！！」

全力で否定するバングに、ラグナは冷ややかな目でバングを見てこ
う言った。

「自分では気付かないもんなんだよね、ストーカーってさ、守って
やってるって思ってるんだから」

「だから違うでござる！ーーーーー！！！」

等々バングの目にも涙が浮かんできた。

だがラグナは一切容赦なく、バングに詰め寄る。

「じゃあねえな、これだけは使いたくなかったが……」

そう言つてラグナは、嚴重にロックされてる箱から黒い物体を取り
出し、バングに付きつけた。

「なぬ！？なんでござるかそれは！？眼にしみるでござる！！」

「ノエルが先ほど開発した料理という名の未元物質だ。ダークマターこれを食
たくなければいい加減口を割れ」

と、後ろでノエルがこめかみをぴくぴくさせていたが、ラグナはあえてノエルの方を振り向かなかった。

バング先生はそれでも否定する。やってもいないのに見かけだけで犯人にされてはたまったものではない

というか、仮にこのまま犯人扱いされれば、ライチ先生に完全に嫌われてしまう。

「拙者はやっていない！漢シシガミ・バング！神と殿下とライチ殿に誓って下着泥棒などやっていないでござる！！」

「じゃあねえな、タオカカ！バングを抑えろ！今から未元物質ダークマターを使用する！危険極まりないのでガスマスクの装着も許可する！！」

「了解ニヤス！！」

と、後ろのノエルの瞳が徐々に蒼く染まっていつているが、ラグナはまったくノエルの方を振り向かなかった。

バング先生は覚悟を決めたのか、眼を強く閉じ、自ら口を開ける。
漢バング、哀れバング、そしてさよならバング……

「いいだろう！これで拙者の疑いが晴れるなら……さあかかってくるでござる——！！」

そして……

「ほ……星が見えるでござる……」

バングは自らの信念を貫き散った。

これにはさすがのラグナとタオカカも心打たれ……

「せんせい、ムサイ人は多分犯人じゃないニヤスよ」

「そうだな、あの未元物質を自ら口にする奴が犯人であるはずがない」

「おい」

と、何事もなかったかのようにその場を立ち去ろうとしたラグナとタオカカを、ノエルは重くのしかかる声で止める。

さすがに限界だとラグナとタオカカはノエルの方を振り返ると、恐怖の笑顔を浮かべるミュー・トゥエルブがそこにいたという……

次の日……

「ごめ〜んみんな〜、下着の件ね、あれ私が一人酒で酔って下着をかぶってばらまいていたみたいなの、探したら全部あったわ〜」

と、下着泥棒など最初からいるわけがなく、全部ライチ個人のせいであつた。

「……ラグナ先生、タオ」

「はっはっはバング先生、おまえは漢のなかの漢だな」
「ニヤスな」

「……キレてもいいでござるか？」

第34話：トリックオアトリート（ラゲナ編）（前書き）

第34話です。

本日10月31日は誰の誕生日でしょうか。

35話もすぐに上げる予定です。

第34話：トリックオアトリート（ラグナ編）

10月31日……

今日はハロウィンです。

「トリックオアトリート」とかいうわけのわからん言葉でお菓子を貪りとられる日です。

そんな日に外を出歩けば、まあ出歩かなくなっただって部屋まで襲ってくる奴はいるが……

とにかく外を出歩けば、あの変態弟やヤンデレ赤目眼帯が、「トリックオアトリートだよハァー！！」とか言っただけ襲いかかってくるのだらう。

ラグナは幸い日曜日ということで、今日という日は家に引きこもることにした。

「ただでさえ人にやるお菓子を買う金はない、今日は家でポケ。ンやったり、パソコンやったりしてのんびりすごすか」

というぐうたらプランを計画していたその時、一通のメールが来た。差出人、レイチェル校長。

「あん？レイチェル校長からのメール？なんだよいったい……」

ラグナがめんどくさそうにそのメールを開くと……

『今日は私の誕生日、ラグナ、普段から私のお世話になっているのだから、なにか私の喜びそうなものを買ってきなさい』

そう、10月31日はレイチエル校長の誕生日でもあった。なんとあの校長は、自ら誕生日プレゼントをラグナに要求してきたのだ。

「誕生日プレゼントをよこせだあ？ふざけんな！金もねえしてめえにやるもんざねえ！！」

と、携帯の電源を切ろうとした時、またメールが来た。

「んだよ！しかもまたレイチエル校長から！？」

『今「おまえにやるプレゼントなんかねえ！」とか言っているラグナへ、もしそんな態度を取るのだったら……ヴァルケンハインの高火力コンボが待ってるわよ』

脅しだった、脅しでした。

あの校長はラグナにプレゼントを要求したのだった。少しだまったあと、ラグナは覚悟を決め……

「わかったよ！！買っててめえのところに届けりゃいいんだろ！！」

あゝわかりましたよ!!」

こうして、ハロウィンという戦場へとラグナは駆けて行った。

外を出ると、かぼちゃの帽子をかぶったクソガキ共が数人いた。

中には悪魔の言葉、「トリックオアトリート」を連発するクソガキもいた。

「見るなよ……今の俺はお菓子なんざ持ってねえ、あゝでも前にハクメン先生にもらったちんすこうくらい持って歩けばよかったかな」

どうやらラグナの口に”ちんすこう”は合わなかったようだ。と、そんな事を思いながらふらふら歩いていると、待っていましたの如く、もうみなさんご存じのあいつがやってきた。

「兄さん！トリックオ」

「ブラックオンスロット!!」

ジンがしゃべり終わる前にラグナはカーネイジシザーのさらに上のブラックオンスロットを放った。

ラグナは悟っていたかのように、ゲージ100パーセントとバーストアイコンを温存していたのだ。

それはガンマンがごとく刹那のごとく早かったという。

「もうみんな飽き始めてるんだよその展開はよ!!」

「ぐふ……だって僕にはこれくらいしかボケをかますことが……」
「うっせえ! いい加減普通のイケメンキャラになれ!!」

兄は弟にそれらしいことを言ったあと、ジンの次に出てくるであろうあいつが来る前に挑発ボタンを押して……

「ラグナ〜! トリ……」

「ブラックオンスロットその2!!」

ニューがしゃべり終わる前にラグナはカーネイジシザーのさらに上のブラックオンスロットを放った。

挑発ボタンを押したのはゲージを100%にするため(アーケードモード仕様だよ)、そしてバーストアイコンは2個あったのだ。

まあこれでバーストは使えなくなったが、もう俺を襲う輩はいないだろう。

「お決まりすぎるから対処されるんだよ、少しは学びやがれ……」

「ぐふ……これがニューの愛の形だよ……」

「ギャグの形の間違いだよ……」

教師は生徒にそれらしいことを言ったあと、少しのお金を握りしめ、校長への誕生日プレゼントを買いに行く。

これでもう障害はいない……はずだったのだが……

「ラグナせんせー！とりつくおあんなたらにやすー！！お菓子くれニヤスー！！」

意外な伏兵がそこにはいた。

タオカ力である。あんまりこの小説には登場しないあのタオカ力である。

「げえ！まさかてめえが待ち構えているとは！！」

「ラグナせんせーい、10月31日はとりつくおあんなたらーとか言ったらお菓子がタダでもらえるらしいニヤスな」

変な知識だけは身につけやがって……

と、ラグナは困りはてながら、なんとかこの場を振り切る方法を模索していた。

バーストアイコンは無い、ゲージもない、インフェルノディバイダーをラピキャンでフォローすることもできない。

「それは迷信だ、先生はお菓子なんて持ってないし貴様にあげる食べ物もねえ」

「それなら……せんせいを食べるというのもありニヤスね」

人に向って食べるとかいただくとかはしたないことを言うもんじゃない……

ラグナ先生は走って逃げることにした、だがタオカ力のダンシング

エッジは走るラグナをあつという間に追い抜く。

「お菓子くれお菓子くれお菓子くれー!!」

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

走るラグナ、追うタオカカ……

こんなところでこいつに金を貪られて……たまるかよおおおおお!!

そして……

「わーい、肉まんニヤス」

「お菓子じゃなかったのかよ……」

ラグナは負けた、ジンとニューに本気を出しすぎたみたいだ。

肉まんをお菓子の如く食い散らすタオカカ、ラグナはその隙を見て全力疾走でその場を離れた。

「まったくコンビニの肉まん全部食いやがって……金はまだ少しあるな……くっそあのウサギ校長!!」

ラグナはあの高飛車な校長をここまで恨むことはなかった。

だがお世話になっているのも事実、安い茶葉くらいは買えるだろう、プレゼントは金じゃねえ、気持ちだ。

と、心の底では思ってもいないことを思いながら、ラグナはまた駆けて行った。

「おやゝラグナ先生、奇遇ですねえ」

珍しくハザマ先生にあった。

相変わらずの格好で買い物に出ていたのだ。

「おうハザマ先生、あんたもお菓子よこせとかで困ってんじやねえか？」

「ははゝゝラグナ先生ですかゝ本当にウザいですよねえ、マジで超ウゼエわゝ」

若干裏の顔を見てしまったような気もするが、同じ思いをした教師がいることにラグナは同情の思いを浮かべた。

だがハザマ先生はラグナよりもお金の管理をきちんとしているだけあって、金銭の方に問題はないという。

「そんでどんだけ持ってかれたよ？ポ。キー？ポテチ？キャンディー？」

「いえいえ、私があげるお菓子と言えはこれですよゝ」

ハザマ先生がこう言って出したのは、白くて特徴的な形のあれ……

「……これ……ゆで卵だよねえ？」

「ええ、トリックオアトリートと言われればゆで卵を出すのがハロウィンの風習だと……」

「ちげえよー！」

ハザマ先生は大きな勘違いをしていたみたいだった。

「ラグナ先生、ゆで卵こそ至高のお菓子ですよねえ！」

「お菓子じゃねえよ！つかなんだその風習！どんだけ卵好きなんだよ！？」

「ラグナ先生、ゆで卵というのは簡単そうで奥深いものなんですよ、半熟からきちんと熱を通したもので、ちなみに私は半熟派です。」

「しらねえよー！」

と、ハロウィンという日にゆで卵を熱く語るハザマ先生。ひよっとして金の使い道ってゆで卵しかないのでは？

「ちょっとラグナ先生、ゆで卵がお菓子じゃないとしたら、いったいゆで卵ってなんなのですか！？」

「茹でた卵だよー！」

まともなことを大声で言うラグナ。

こうしてハザマ先生はゆで卵を食べながらどこかへ行ってしまった。

「あゝなんだよあのゆで卵への執着、すっげえ疲れた……」

はたしてラグナはこの疲れ切った体で、レイチエル校長に誕生日プレゼントを渡しに行けるのだろうか……

後編へ続く……

第35話：ハッピーハロウィン（レイチェル編）（前書き）

第35話です。

姫様誕生日おめでとございます。

第35話：ハッピーハロウィン（レイチェル編）

ラグナはジンを倒し、ニユーを倒し、タオカカには負け、ハザマ先生のゆで卵の熱論を聞きながらも、ハロウィンという地獄を生き抜いていた。

しかもこのあとにレイチェル校長に誕生日プレゼントを渡しに行くというのだから大変である。

もうこれ以上はなにも起こりませんように、と思っていた矢先……

「先生、トリックオアトリート」

ノエルである。

お前はお菓子もらう前にその貧相な胸をライチ先生にでも分けてもらった方がいいのではないだろうか。

と、心の中で思うラグナであった。

「まあてめえならまだマシな方か、わりいけど今から校長の誕生日プレゼント買いに行かなきゃなんねえから、お菓子はまたにしてくれや」

「そんなことだろうとは思っていましたが……でも先生真面目ですね、いつもお世話になっているレイチェル校長にきちんとお誕生日プレゼントを渡すなんて」

ノエルの尊敬のまなざしの前に、”脅された”の一言を言えなくなつたラグナ。

できることならあの校長のために金など使いたくなかったわ、と心の中で叫んだ。

「安物だけだな、俺だって礼儀くらいわきまえてるよ」

金に振り回される男の言うセリフではなかったが、そういうことにしておいてラグナはその場を去る。

気がつけば午後5時、まあ学校はここから近いし時間はたつぷりある。

ジンとニューとタオカ力を撃退した今、彼に立ちふさがる強敵はいないはず。

「あらゝラグナ先生じゃない、元気なさそうね」

途中ライチ先生に出会った。

おかしいな、今日はやけに人に会う日だ。

そのそばにはハクメン先生とバング先生、ついでにナイン先生とトリニティ先生もいた。

「ああ、これから校長のところに行かなきゃいけないんでな」

「ほう、お前も校長にプレゼントを渡しに行くのか……」

お前も、ということはハクメン先生もプレゼントを渡す予定のようだ。

と思い先生方に聞いたところ、すでにみんな渡しに行った帰りのようだ。

「先生方の中で校長にプレゼント渡してないのはあなただけよ、校長が怒っていたわよ」

「ラグナ……あなたが一番私のお世話になってるはずなのに……」
「つてこめかみをひくひくさせてましたよお」

ナイン先生とトリニティ先生曰くそう言うことらしい。
いやなことを聞いてしまったと立ち去ろうとした時だった。

「ところでラグナ先生、まだプレゼントを買えていないようでござ
るが？」

「金もないんでな、それに急がなきゃいけないし……」

バング先生の言うとおり、ラグナは未だプレゼントすら買っていない状態だった。

それを見かねてライチ先生は……

「なら、私達がプレゼント選びを手伝うわよ」
「え？ いいのか？」

思わぬ助け舟、あの校長が好むプレゼントなど見当もつかなかったラグナにとってはありがたい言葉であった。

他にもハクメン先生達も手伝ってくれることになった。

こうして無事にプレゼントを持ち合わせている金額内で買ったラグナ。

だが色々探し歩いて疲れていた。時刻も午後8時。

少しばかりどこかでリラックスをしてもいいだろう、とラグナは他の先生方に持ちかける。

「そうだな、お前のことだ。今日一日に色々あったんだろう」

さすがはハクメン先生、俺の辛さを分かってくれるわ。

金もほとんどないため他の先生方が少しばかりだしてくれるだろう、校長はずっと学校にいるから10時くらいになっても大丈夫だし。

しかし、この油断があの子の悪魔の一言を引き出すことになった

……

「なら、ちよつとだけ飲みに行かない？」

そう言ったのはライチ先生だった。

その一言に他の先生方は耳を疑った。

「い……いやぁライチ先生よ、俺はこれから校長に会いに行かなきゃならないんだぞ？さすがに酔って行ったら礼儀に反したりするだろう」

「そそそそ……そうだぞライチ先生、さすがにそれはやめよう！」

「い……いくらライチ殿の意見とは言え、拙者もそれはちよつと勘弁でござる……」

「そ……そうよ！私たちはプレイヤーキャラじゃないわけだし……」

「わ……私もそれは遠慮願います……」

先生方はそれぞれの意見を心の底から言い放つ。

これからライチ先生と飲みに行く？死亡フラグのなにものでもないしかしライチ先生は少しばかりの欲求がたまっていたのか、SSランクの強さを最大限に生かし強引に飲み屋に連れて行くとする。

「大丈夫、大丈夫よ！ちよつとだけだから、1時間くらい」

ラグナ達は半分覚悟を決め、仕方なくライチ先生の付き合うことにした。

少しの希望を抱き、近くにあつたちいさい飲み屋に直行。そして……

「も……う、だめんよおらぐなせんせ……い」

だめだった。酔った。酔いましたよライチ先生が。

気がつけば1時間とか言っていたのがウソのよう、すでに午後11時30分。

あれ？このままだと11月1日にならね？それってもう誕生日すぎ
てね？

ラグナ先生は必死に抜け出そうとがんばる、だがライチ先生が回り込み恥から恥へのコンボを決めてくる。

それを見かねたハクメン先生とバング先生は、同僚を守るため必死に盾になったという。

「ゆけ！ラグナ先生——！！」

「拙者たちの屍を越えていくでござる――――！！」

「おまえら……ありがとう！うおおおおおおおおおお
おおおおおおおおお！！」

こうして傷だらけの体でラグナ先生は学校へと向かう。

走って走ってひたすら走った。タクシー代もなかったラグナは学校まで必死に走った。

そして……

「つ……ついたあ……」

ようやく今日の使命を果たす時がきた。

レイチェル校長にプレゼントを渡すために……

すでにプレゼントの箱はボロボロになっていた、ラグナはそれを強く握りしめ……

学校へと足を踏み入れた。

「はあ……はあ……はあ……校長室……」

ドアに手をかけたと同時に、ラグナは意識を失った。
今まで受け続けたダメージ（80%はライチ先生）がここにきて限界を迎えたのだ。

気を失ってどれくらいだったのだろうか……

ゆっくりと眼を開けると、周りは暗かった。

月が照らしだす小さな光、そして周りには立派なテーブルや椅子があった。

そう、ここは校長室だった。誰かが気を失ったラグナをここへ運んだのだ。

「そうか……俺は……」

そう考えたと同時に、急いで時計を見る。

午前4時、すでにハロウインは終わっていた。

ラグナは使命を果たすことができなかった。

「……やっちゃったなあ、校長にばれる前に早くここをはなれて」
「誰にばれる前に離れるですって？」

その相手がまさかものすごい近くにいたとは……
寝ているラグナをずっとそこで監視していたのか、レイチエル校長

は立派な椅子に座りこちらを見ていた。

「……もしかしてずっとここにいたのか？」

「いたわよ、ハロウィンが始まってからずっとここに、あなたがここに来るのを待って……ね」

怒っていた。

レイチエル校長の言葉から感じ取れる怒り、それは明らかなものだった。

殺されんじゃねえかな、とラグナが思った時、レイチエル校長はロボロの箱を取り出した。

「それで、時間にも間に合わず、気を失って私に迷惑をかけたあげくのプレゼントが……これ……」

なかには小さなかぼちゃのキーホルダー。

アンティーク物だったので少々お高いやつだった。

それをレイチエル校長はずっと見つめていた。

そんな姿を見かね、ラグナはどうにも言えなくなった。

「……………」

「なにを黙っているの？罪悪感？それとも自分が情けなく思っているの？」

正直言うとそれもあつた。色々な障害が立ちふさがつたのも事実だが、それらを突破しきれなかった弱さもあつた。色々考えだまっていたが、とうとうふっきれたラグナは……

「だぁー……！ああそうだよ！俺が悪かつたよ！来年はちやんとその日のうちに渡すからよ！てかプレゼント要求してきたのはおめえじゃねえかよ！！」

ラグナのそんな乏しい叫びを聞いたレイチエルは、小さく笑みを浮かべこう言った。

「へえ、来年も私にプレゼントをくれるの？うれしいわね」
「……あ」

2011年のハロウインの予定が決定してしまった。
そしてレイチエルは半分呆れた顔でラグナの元へと寄ってきた。

「な……なんだよ？」
「……まあ、今回はこれで良しとしてあげるわ、あなたにはよく頑張りました。」

めずらしく素直なレイチエル校長。
ラグナは少し気味悪そうにしていた。

「んだよ……おめえらしくねえぞ」

「いいのよ、私はうれしいのだから……すべてを良しとするわ、だから……」

レイチエル校長がそう言った直後、ラグナは再び意識を失った。

レイチエル校長は何を言いたかったのだろうか、そして次に目を覚ますとすっかり朝になっていた。

学校で目を覚ましたのでそのまま出勤、ハクメン先生とバング先生は、なんやら魂が抜けたような顔をしていた。

ライチ先生はピンピンとしていた。ナイン先生とトリニティ先生もなんやら寝不足気味であった。

「ったくよ……校長、いったい何を言おうとしてたんだろう……まあいいか、さて授業だ!!」

ラグナ先生は今日もまた、大事な教え子の元へと向かっていく。それを後ろの方で、レイチエル校長は静かに見ていた。

「……だから……あなたはずっと私の下で働きなさい……ラグナ」

ハッピーハロウィン……
レイチェル校長はそっと笑みを浮かべ、校長室へと戻って行った。

第36話：ラゲナ、結婚について考える。（前書き）

36話です。

第36話：ラグナ、結婚について考える。

「ラグナ先生、そろそろ結婚とか考えないの？」

「ああ？」

学校で突如セリカに言われた一言。

ラグナ先生も結婚するお年頃（多分）、このまま行けばこの男は自ら結婚活動などせずそのまま独身な勢いである。

生徒として、育ての親としてセリカはラグナが独身でいるのはできる限りやめてほしかったのである。

「つつても今忙しい時期だし、何しろこの生徒はみんなひと癖も二癖もあるからそんなことやってらんねえよ」

「夜遅くまで起きてる人のどこが忙しいのさ？独身だとつらいよお？歳とってから大変だよお？」

とまあ未だ独身のセリカが言うのもなんだが、彼女は年をとらない方なので特に不自由はないという。

ラグナは年をとっていくので、将来のためにも結婚は考えるべきだったのである。

「まあ一応頭の隅に入れておくわ、それに俺はもう立派な大人だ、親離れして生徒役に徹しろよ」

「いつまでも放っておけないから心配してるのに、知らないからね」

と、セリカは少し怒って職員室を後にした。
それから少しの時間が経ち、ラグナは小さく呟いた。

「結婚か……」

「おっ、ラグナ先生もいよいよ考える歳でござるか？」

ラグナの小さな呟きに反応したのは、遠くにいる蟻のくしゃみも聞き逃さないと豪語するバングであった。

「親がうるさくてなあ、せめてうちのクラスの連中が卒業してからとも思ってたんだが……」

「いやいやラグナ先生、善は急げとも言うでござる。それに今結婚することを考えなくとも、準備は万全にしておくに越したことはないでござる。思い人を見つけて徐々に親睦を深めるとか……」

とまあ思い人に遠回しに避けられているバングが言うこともなんだが、一理はあった。

ラグナは再度考えなおし、とりあえず今カグツチで評判の結婚相談所に行ってみることにした。

翌日……

カグツチ市結婚相談所、『ホワイトウエディングホワイト』

「なんでホワイト二回つけるんだ？何をそこまで白にこだわってんだこの相談所は……」

と、小さい疑問を抱きつつ、ラグナは意を決して足を踏み入れた。そこでラグナを待っていたのは、なにやらどこかで見たことのある背の高い従業員であった。

「お客様いらつしやいませ、私本日ラグナさんの相談相手を勤めさせていただきます、ハクメンタロウ白面太郎”と申します。」

「なんか滝廉太郎タキレンタロウみたいな名前だなおい、てかあんたハクメン先生だよな？そうだよな？」

名前も容姿も似ていたが、面太郎先生は首を横に振る。

否定するが、白い仮面を被っている従業員があ先生を除いて誰がいるというのだろうか……

この際ハクメン先生だろうが気にせず、さっさと相談を受けることにした。

「よほど私とそっくりのイケ面がいるのでしょうかね、お恥ずかしいぜエア」

「あ、今ゼエアつつたぞ？てか自分のことイケメンっておめえ恥ずかしくねえのか？お前はイケメンじゃなくてハクメンじゃねえか」

しょうもないことを言うラグナであつた。

「ところでラグナさん、後ろの窓に張り付いているお二人はお連れ様かなにかでしょうゼエアか？」

「へ？俺は一人でここまで来たんだg」

よく後ろを見ると、ジンとニューが張り付いていた。

耳を澄ませると、「にいしゃん」や「らぐなけつこんとからめえ」とか聞こえてくる。

ラグナは華麗にそれらをスルーし、面太郎先生の方へ首を向ける。

「あいつらは放っておいてください、最悪飢えて死んでもいい連中なんで」

「そうですか、にしても生徒に好かれるということはなかなか人望は厚いようゼエアねえ、これなら第三者の意見を交えながら話し合った方がいいかもしれませんゼエア」

「え？つまりあいつらを中に入れるってことか？」

「いえいえ、あれらはいても邪魔にしかないでしょう、あれらには悪滅して退場させます。そのあとこちらでリストアップした人たちをお招きしますので、ではゼエア」

と、面太郎先生は外へ出るなりハクメン先生顔負けの悪滅をジンとニューにぶち込み、何事もなかったかのように去って行った。

数分後、面太郎先生は四人の人物を相談所へ連れてきた。

一人目はラグナの育ての親である”セリカ”、二人目はラグナの恩師でもある”獣兵衛先生”。

三人目はラグナのことをいつも厳しく見ている” ヴアルケンハイン”、四人目はラグナを一番慕っている” ノエル” である。

「どうです？ 私のリサーチは？ あなたのことをきちんと理解している最高のメンバーでしょうゼエア」

「んゝ人選は悪くないんだがよ、なにかと六英雄編の人物が多い気がするんだが……」

「ぶっちゃけそのうち二人には脅さ…… 最近出番が少ないみたいなのでこの際役に立つてもらおうかとゼエア」

脅されたと聞こえた気もしたが、気のせいだろう、天下の六英雄の二人がいくら出番が少ないからって人を脅すことなどしないだろう。…… まあハクメン先生が準レギュラーみたいな扱いを受けてる今、ヴァルケンハインと獣兵衛が出た回数は数えたほどこかないのだが……

「はははラグナよ、俺はお前の恩師だ。大船に乗ったつもりでいroy、がはははは」

「小僧の悪いところは隅から隅までチェックしている。レイチエル様の言いつけなのでな……」

二人の言葉には覇気が満ちている。

久しぶりすぎる出番なのか、心の底から物凄くうれしそうである。

「ではラグナさん、あなたはまずどのような女性が好きですか？ や

はり結婚するからには好みの女性としたいでしょう?」

面太郎先生の質問に、ラグナは少し考えた後こう答えた。

「そうだなあ、やっぱり”料理”はきちんとできる女性がいいな、
やっぱ”料理”だよな!人を殺すものじゃなくて人を喜ばす”料理
”!!」
「ムキー!!」

わざとらしく”料理”の部分だけ大きくしゃべるラグナ。

近くにいたノエルは怒りを露わにしている。それを抑えるセリカと
獣兵衛。

「なるほど、要は家庭的な女性がいいということですね?料理を兵器にしない程度のお嫁さんが欲しい……と」

「さりげなく私のこと馬鹿にしてませんかハクメン先生?」

「いえいえ、ちなみに私の名前は白面太郎ですよノエルさん。ちなみに白面 太郎ではなく、白 面太郎です。」

「知りませんよそんなこと!どこぞの二世ですかあなたは!?」

と、ノエルが少々マニアックなツッコミをしたところで、面太郎先生はノエル達の方を向き質問をする。

「では今度はオーディエンスの意見をお聞きますぜエア、ラグナ

先生の印象を述べつつ彼に合いそうな女性のタイプを言ってみてください」

最初に指名されたのは、ラグナの育ての親であるセリカ。

「そうだね、ラグナはぶっきらぼうでめんどくさがりでだらしくてついでに無駄遣いで金銭面もよわいけど」

「い……いいすぎだろこのババア……」

ラグナも半分覚悟していたが、いざ言われる立場になるとぶっちゃけ凹む。

今になってノエルの気持ちがわかるわ、とノエルの方を向くと、そっぽ向かれてしまった。

「でも、実は優しいんだよねラグナって、ものすごく優しいの、ブレイブルーフェイス0を見てもらえるとわかるんだけど、悲しむ私を何度も慰めてくれて、かつこよくていざって言う時に頼りになるだからどんな女性でも幸せにしてくれると信じてるよ」

「ぐす……シ……シスター……あんたマジでシスター……」

感動のあまりわけのわからないことを言うラグナであった。

「では続いて、獣兵衛先生お願いしますぜエア」

次に指名されたのは獣兵衛先生。

「そうだな、こいつは小坊の時から面倒を見てるが、なんとなくか迷惑ばかりかけるやつだったなあ、補修はサボるわ掃除当番サボるわ日直サボるわ」

「そんなこともあったなあ、それはすまねえと思ってるよ」

ラグナと獣兵衛先生は小さい頃から師弟のような関係、時には父親のような存在でもあった獣兵衛先生。
その一言一言に重みがあった。

「だが、セリカの言うとおり、いざって時はいち早く動いて、みんなを引っ張って行ってくれるやつだったよ、勉強はできんがそれに勝る根性と男気がある。ラグナに合う女性って言われれば、か弱い女性かもしれんなあ」

「獣兵衛先生……もしあんたの娘を貰う時は……」

「お前にココノエは”絶対”にやらんからな」

信頼されてるのかと思えばそうでもなかった。

まあ獣兵衛先生は娘を溺愛してるから、ティガーにも同じことを言っただけかもしれない。

一方娘の方は父親のことは未だに嫌っているそうなの……

「じゃあ次は執事さん、思う存分言ってくれぜエア」

次に指名されたのはヴァルケンハイン。

「小僧は口のきき方も口クにできない、今だに子供みたいなやつだ。自分が一番だと思っている身分も弁えない愚かものだ。」

「執事……言わせておけばてめえ……」

今までの中で一番ラグナに突き刺さるヴァルケンハインの言葉の嵐だが徐々にそれが収まりつつあり、良い方向へと行っていく。

「だが、そのような愚かな所にある小さな優しさ、レイチエル様もどうしてこのような男を気に入っているのか私にはわからないが、ひよっとすればその小さな優しさ……ピュアなところかもしれない。んなあ、小僧にはレイチエル様のような女性がお似合いかと……」

「執事……あんた俺のことよく見てくれてるよ……でもあんたのところの校長は正直お断りな」

さりげなくレイチエルを遠ざけるラグナ。

みんななんだかんだとラグナのことをよく見てくれていた。ラグナ自身、意外な意見を聞けて何かと嬉しそうである。

「そうですかそうですか、ではそれらの意見をまとめて考えてみることにしましょうゼエア」

「ちょ……ちょっとまったー……！……！」

そう大声で叫ぶのは、ノエルであった。

心温まる話の連続で誰かを忘れていたような気がしていたが、ノエルだったか。

「ってナレーション？まで私のことをわすれてたんかい！！」

「正直よここまで聞ければ俺は十分、それにおめえさっきの腹いせに俺のこと悪く言いまくるつもりだったんだろぅが」

「うっ……」

図星であった。

今まで散々料理だの胸だの言われた腹いせに言い返せるチャンスだったのだが。

世の中甘くはなかった。

「正直ノエルさんの意見は聞かなくても、そのオーラでわかりますよ、あっはっは」

「ああああああん！私だけハブられてるわああああああああああん！！」

相当悔しそうなノエル、準レギュラーで出番ありまくりの彼女にはちょうどいい処置であった。

本当にノエルはスルーして、相談は次の段階に行く。

「ではラグナ先生、最終関門、ずばりプロポーズの練習ですよ」
「プ……プロポーズの練習!？」

それはいきなりだった。

プロポーズと言えはとて大事な一言、人生を左右する男が通る人生の試練。

いざという時に言えず、大事な人にかつこの悪いところを見せてしまう場合もある。

ここホワイトウエディングホワイトでは、本番さながらのシチュエーションでプロポーズの練習ができるのである。

「まああくまで練習ですけど、本番だと思ってやってみてくださいエエア」

「つつても……恥ずかしいな」

若干照れるラグナ。

しかし練習というと、相手がいなければならない。

ここで面太郎先生（実質ハクメン）、ヴァルケンハイン、獣兵衛相手で練習するとあまり結果にならないだろう、それどころかマイナスになる恐れがある。

となると、練習相手は実質女性でなければならないのだ。

「練習相手は、セリカさんかノエルさんということになりますねゼエア」

「や……やだなあ、私、思い人はいたけどプロポーズを受けた経験は……」

「わ……私もいつかは受けるんでしょうけど！でも……正直……その……」

なんやら嬉しそうな二人であった。

そして、ふたりのうち選ばれたのは、先ほど不遇な目にあつたノエルであつた。

「わ……私ですか！？どどどどどどうしょお〜」

「ノエルさんの場合はこれからということもあるのでゼエア、セリカさんは完全に婚期逃しちゃってるので〜」

「あはは……私も怒ることはあるんだけどなああははははは〜」

そう言うセリカは、正直とても悔しそうだった。

なぜ悔しいのかは、ブレイブルーフェイズ0を買って読めばわかるさ！

「ラグナ、練習だが頑張れよ」

「ノエル殿も、恥ずかしがらずリラックスですよ」

獣兵衛もヴァルケンハインも応援してくれている。

こうなったらやるしかない、ラグナとノエルは互いに顔を赤らめながら、シチュエーション通りに言葉を交わす。

「ノエル……き……君はとても優しい女性だ……料理は殺人的だが

とてつもないお声を発しながら私をたどって転位してきたのです…
…」

ヴァルケンハインも見たことがないほど焦るレイチエル校長とは、
いったいどのようなものだったのだろうか……

「あ……あれかあの……ジエラシー？」
「違うわよ——！」

ジエラシーでした。

恐らくずくつとヴァルケンハインを通して見ていたのだろう。
そして練習とは言えラグナがノエルに告白しようとした寸前で、焦
りを感じて大急ぎで転位をしてきたのだろう。

「ま……まああれだ校長、これは練習だよ練習、俺がおめえノエルの
こと本気になるわけねえじゃねえかよ」
「そ……そうですね……でも少しくらい本気にしてくれても
………」

そう言って、再度プロポーズの練習に移る。

レイチエルも半場納得して、物凄く睨みながらこちらを見ていた。

「まあ……あれだ。とりあえずノエル……俺と……けっ……けっ……
……けっこ——！」

どがしゃーーーーーん!!

今度は正面玄関を突き破って、先ほど悪滅を食らったハズのジンとニューがゾンビのように這い出てきた。

「しょうがい~~~~~」

「のえるちゃ~~~~~ん」

「ひ……ひい!!」

さすがのノエルもそれには恐怖を抱いた。

悪滅の壁をも超えたジンとニューの目は血に染まっていたという……

452

「兄さんだめだ！練習とは言え兄さんの大事な一言をこの女に言い放つのは僕が許さない!!」

「練習でしょ！なら私に向かって言うて!!こっとなつたらもう練習でもいい!!」

練習でもいいんだ……

ニューがプライドを捨てたようにも見えた。

「ああ……面太郎先生、どうすりゃいい？」

「とりあえずわかったことがある、お前は愛されすぎている。今結婚するのは危険かも知れんな、ヤンデレ的な意味で」

「……………うん」

ラグナの結婚は、まだまだ先になるかもしれない……………

第37話：ハザマ先生がこんなにいい人なわけがない。（前書き）

第37話です。

投稿日がテイガー先生の誕生日……

第37話：ハザマ先生がこんなにいい人なわけがない。

ブレイブルー学園生徒会……

一癖も二癖ある生徒達をまとめる多分、というか結構つらい仕事をする人たちである。

そんな生徒会の顧問をしている……押しつけられているハザマ先生は、今日も生徒会メンバーを集め会議を行っていた。

「それでは、本日は学内予算についての会議を行います。キサラギ会長、後はお願いします。」

「わかった。それでは一から十まで説明する。一度しか言わないのできちんと聞くように特に障害」

「へ？あああはい！ちゃんと聞きます！！」

と、よだれを垂らして虚ろになっていたノエルが生き返ったような顔をした。

ここで、ハザマ先生視点によるブレイブルー学園生徒会のメンバーの紹介。

ジン・キサラギ会長

容姿端麗、スポーツ万能、成績優秀、いやあ実にすばらしい！！この人あつての生徒会なんでしょうねえ……まあでもちよつと生意気で腹立ちますけどねえ……

ツバキ・ヤヨイ副会長

こちらもとても優秀で、それに加えてお美しい……まあ私にとっては不幸にまみれた小娘にすぎないんですけどねえ……

ノエル・ヴァーミリオン雑用担当

おつちよこちよいで仕事はできないし、元から何か抜けてるし、でもこういう人に限って生徒会のムードメーカーとか……まあそんなこともなくぶっちゃけ言うと使えねえただのお荷物です。なんで生徒会にいるのやら……

マコト・ナナヤ物運び

肉体労働なら彼女に任せればOKって感じですね、ムードメーカーで良く働くい子ですよ……まあ若干空気ですけど……

とまあこんな癖のあるメンバー率いる生徒会の顧問をしているのが、私ハザマ先生です……ああマジでめんどくせえわ

「というわけでそれぞれの部活にあてる予算は今のところ問題ない」「そうですね会長、みんな部活動がんばって結果出してますし」

ジンの言葉にツバキは頷き肯定する。
他の人たちもジンを慕っているのか、ジンが優秀すぎるのかほとんどジンの意見で成り立っている。

「だが……中には学校の予算を無駄に使っているところもある。特にこの……ブレイブルー学園の科学部」

ブレイブルー学園の科学部とは、みんな大好きココノエ先生がいるあの科学部である。

実はこの学校で一番お金を使っている。最新設備で最新の科学を研究、近未来的な開発をしている。

のだが、問題はココノエ先生にあり、彼女の開発するものはくだらないものが多く、人に迷惑をかける始末である。

ほとんどの教師がそのとばっちりを受けており、正直学校の予算を使つて人に迷惑をかけ続けるのなら予算を大幅に減らしても問題ないはずである。

「とまあ、今まであらゆる手を使つて予算を減らすよう交渉を続けてきているのだが、あの教師……相当手ごわい」

「ははは、なんとなく私もわかりますよお」

ハザマ先生もなんとなく嫌な思い出があるようだ。

普段から二人は仲が悪い、原作通り仲が悪いのでハザマ先生にココノエ先生を語らせれば悪い部分しか出てこないだろう。

「僕やツバキやマコト、無駄と分かっているながらもノエルに行かせたこともあったが……今のところ全滅だ。」

ノエルのことを話す際に一言余計につけたあたり嫌悪感に魂入ってる。

ここまで生徒会フルメンバーでココノエ先生に挑んだが、みんな返り討ちにあったという。

「というわけで、今回はハザマ先生に頼みたいのだが」

「わかりました〜ってはいいい！？なんで私があんなくそ猫のラボに足を運ばなければならないんですか！？」

ハザマ先生はとてつもなくいやそうな顔をした。

「僕たち4人がだめだったんだから残っているのはハザマ先生だけだろう、多分返り討ちにあつてノコノコ戻ってくるのがオチだと思うが少しばかり期待しておいてやる。」

「こ……このクソガキ……人に仕事押し付けたあげく言いたいことをペラペラと……」

ハザマ先生は心の中で思った。

このガキいつか殺す、と……

「……まあ言われっぱなしではこちらも黙ってるわけにはいきませんからね、その交渉やらに行ってくださいすよ」

こうして、ハザマ先生は意地と怒りが混ざったようななんともいえ

ない顔で生徒会室を後にした。
数分後、理科室の奥の奥にあるココノエ先生のラボについた。

「まったくこんな猫臭いとこんなざ来たくなかったんですけどねえ、まあちゃっちゃとビビらせて帰りますかね」

と、ハザマ先生はドアの横にあるチャイムを鳴らした。

「ハザマです。少しばかり用があつてきました」

ハザマはそう言うが、ラボからは一切反応がない……

「……ハザマですけどお、ココノエ先生……おいココノエ……
クソ猫こらあ……居留守使ってんじゃねえぞこぎよえ！」
「うるさいぞこの変態緑髪……」

さすがにうるさいと思ったのか、ココノエ先生は思いっきりドアを開けた。そのドアが見事にハザマ先生の顔面に命中。

ハザマ先生はたまらず鼻を押さえなんとか痛みを堪える。

「まったくいつもいつも人の顔面狙ってドアを開けるのやめてもらえますかねえ、てかそのドア横開きじゃないんですか？」

「横にも縦にも開く万能ドアだ。」

「どんなドアだよ……」

ハザマ先生は心の中でそう呟いた。

「それで、私になんのようだ？悪いが私は貴様と話すことなどにもない、というか今すぐここから消え去れ」

「私だつてあなたとなんてこれーーーーーっばちも話したくなんですけどねえ！でもまあ仕事なんで一応……」

「そうか、じゃあさっさと話せ」

「科学部にあてられている予算の件でお話g」

”予算”という言葉が出たとたん、ココノエ先生は刹那の速さでドアを閉めようとする。

ハザマはその瞬間を逃さず、セールの手口でお馴染み？のドア足ばさみ（勝手に命名）をする。

「ちょ……なんか変な感触が……」

「ココノエ先生……話も聞かずにドアを閉めないでくださいよぉ……てか足挟まって痛いんですけど……」

痛がるハザマなど気にせず、ココノエはその足を引きちぎってでもと言わんばかりにドアを無理やり閉めようとする。

「いだだだだだだだだだだだだだだだだ……」

「しつこいぞ貴様！本当に足引きちぎるぞ！！」

「だから話聞けつつってんだろぅがこらぁ！！てめえんどこにあてられている予算の話だよ！」

「その話を聞きたくないから必死にドアを閉めようとしてんだろぅが！！」

ドアを閉めようとするココノエ、足に激痛が走りながらも耐えるハザマ。

ココノエもある程度わかっているのだろぅ、予算を減らされることを……

「ぎゃああああああ！ちょ……いったんその力を抑えてもらってもよろしいですかねえ……あのマジでお願いしますマジで！！」

「ちっ……変な足の断片残されても困るし……入れ」

と、なんとかラボに入ることができたハザマ先生。
足を必死に抑えながらもなんとかラボ内を進む。

「お茶やお菓子など一切出さんぞ、貴様に出すだけもったいないかな」

「私だって猫臭い菓子なんて手もつけたくないですよ」

「ぶち……」

ココノエ先生の血管がちぎれる音がした気がした。
どれだけ仲悪いのだらうかこの二人は……

「それで、その予算がね、あなたところが一番使ってるわけですよ、なのにその予算の使う先が変なものの開発、つうかくだらねえおもちゃよ、みんな迷惑してるんですよ、なので60%減らします。」

「ちょ……60%も減らされたら、設備の維持すらできないじゃないか！」

「本当なら100%カットしてえよ！！てか大量の予算使って人に迷惑かける所にそこまでの予算はやれるわけねえだろが！！」

ハザマは変な手を打たれる前に強引に話を片つけようとする。

ココノエ先生も引き下がらない、あつという間に10分、20分、1時間と時間ばかりが経っていった。

「頼む！せめて20%カットだ！」

「だめだ！60%カット！！これは生徒会だけじゃありません、校長を始めとする教師一同の意見でもあるんですよ！」

現在分はハザマ先生にあるようだ。

どうやら今までの4人は部屋にすら入れなかったらしい、以外にも言い争いになると弱いココノエであった。

「テイガー先生や獣兵衛先生だって予算のカットには賛成してましたよお、まあ獣兵衛先生は30%にしてやってくれと相変わらず親馬鹿だったけどなあ」

「ぐ……」

「おいクソ猫、いい加減素直になれや……教師が生徒より金使ってどうすんだよ」

今までの恨みを晴らすかのように言いやるハザマであった。
本編顔負けで攻めまくった結果、なんとココノエ先生は……

「う……うう……ひどいぞハザマ先生……ひつくう」

「……へ？」

泣いた。泣きましたよ泣き脅しですよ。

まあ一種の作戦だろう、ココノエ先生がこんなに泣くわけがない。

「お……おいココノエ、俺は騙されねえぞこらあ……てか泣くとか卑怯だろうが……」

「研究は私の人生だ……確かに迷惑かけてるのはわかってるさ……
だけどいつか人の役に立つようなものを開発できると信じて……私は頑張っているんじゃないかあ……」

意外とマジ泣きであった。

戦況は一気に逆転した。

「お……おいふざけんじゃねえぞ、ああゝ頼みますから一回泣きやんでくれますう？」

「私は……お前が引き下がるまで……泣きやむのを……やめない！
！」

「うっぜえこいつ……！」

と、ココノエ先生の鳴き声が聞こえたのか、ティガー先生と獣兵衛先生が現れた。

とてつもなく怖い顔をしていたという……

「ハザマ先生……」

「ちよつと、表に出てもらおうかテルミよ……」

「ああゝはわかりました……くそがああああああああああ
ああああああ……！」

こうして二人によって撃退されたハザマであった。
結局予算は20%カットされただけで終わった。

「……意外と泣けばなんとかなるもんだな、ラムダも覚えておけよ」
「了解……」

こうしてハザマ先生の戦いは終わった。

生徒会室に戻った後、ジンに鼻で笑われたという。

マジギレしたい気持ちを抑え、ハザマ先生は一人職員室に戻った。

「はぁ……誰か生徒会の顧問変わってくれませんかねえ」

「ずいぶんと元気なさそうだなハザマ先生」

「ああラグナ先生、私は意外にも女の涙に弱いということがわかりましたよあとほほ」

「何言つてんだよ、今日飲みに行くか？元氣出せよ」

と、それでもこの二人は本編では無茶苦茶仲が悪いのだが、この話の中ではそれほどでもない。

ハザマ先生は少しばかりうれしそうに、天井を見て呟いた。

「ああ……こういう人生もいいかもしれませんねえ」

第38話：ノエルは胸が少ない。（前書き）

第38話です。

リクエストがあっただんでそれに答える形で作りました。

第38話：ノエルは胸が少ない。

「えーと、近々身体測定があるんで、その日は動きやすい恰好で来いよー」

近いうちに、ブレイブルー学園では身体測定があるらしい。

身長体重その他もろもろ今の状況が分かる日である。

よくあるのが、「お前身長なんぼだった？」などと友達と見せ合うあれである。

「うつわーお前太ってんなあ」という心無い一言に傷ついた人もいるのではないだろうか。

「身体測定前に無理して痩せようなんてバカなこと考えんのやめろよ、まあそこまで太ってるやつはいないか」

3年B組の生徒は大抵質のいい少年少女が多いので、そういうことをする輩はいないであろう。

”体重に関して”は……

「ああそうだ、もう一つ言い忘れていたなあ、身体測定前に”バストアップ”なんて、”するやついないだろうが”万が一だ、やめておけよお」

「ぎくうー!!」

ラグナはノエルをマジマジと見ながらいい放った。
いや、こう言った方がよろしいか、ノエルだけを見て言い放った。

「バストウエストヒップも計るが、そう胸をよく見せようと意地を張るやつがいるわなあ、ま……そこまで追い詰められてるやつなんかいないか、なあノ・エ・ル？」

「先生、ほんつとくに意地糞悪いですね」

クラス一の貧乳、貧乳はステータス代表のノエルは、毎年この時がいやであった。

一時期は身体測定 of 教職員に、「ちよつと君男でしょ？あっちの列だよ」と言われたことがあるという。

胸が人より”無い”、下手すれば男より”無い”ノエルである。

「さすがに男よりはあるわ!!」

「仕方ないニヤスよお、無い人は”ついてる”んだからニヤス」

そんな。

とんでもないことを。

言った。

「ついてねえよ!!何よ等々性別まで疑いが出てるの!?私、女ですらねえの!？」

嘆くノエルであった。

あまりの胸の無さに男性疑惑が出始めたのである。

「まあまあノエル、そんなに自分を責めないで」

「のえるんはきちんと女の子らしいところあるじゃん、ね」

ツバキとマコトは親友として必死にフォローする。

だがそんな二人に対し、感謝とは違う眼でノエルは見る。

「……………」

「ノ……ノエル？」

「余裕だ……余裕だわ……ある側の人間の余裕だわ……」

嫉妬するノエルであった。

ツバキは普通にあるし、マコトは有り余るほどある。

ライチ先生にいたっては、配り歩いたって減らないほどある。

「とまあノエル、前向きにがんばれ、俺は胸のことなんて気にしてないからな、バストアップなんて無駄なことは考えず素直に男子の列に並べ」

「フォローになってねえよ……………」

ノエルは「びえ……………」と泣き叫び教室から出て行ってしまった。

プロローグでもこんな展開あったような気がする。

「先生、言いすぎですよ」

「先生はノエルをからかいすぎだよ」

ツバキとマコトから見ても、さすがに度を超えたナイチチ攻めだったようだ。

ラグナも頭をボリボリ書いて困った表情をしている。

「はあ……さすがに俺も言いすぎたかな、反省するわ……あとタオカカグツジョブ」

「反省してねえよこの教師」

静かにツツコミを入れるツバキであった。

そして……

「くっそあの銀髪教師……今にアツと言わせてやるんだから!!」

妥当ラグナを誓うノエル（Aカップ）であった。
ラグナに勝つ方法を模索しながら学校中を放浪していると、ばったりとココノエ先生に出会った。

「うん？お前こんなところでなにやってるんだ授業中に……」
「コ……ココノエ先生！？」

ココノエ先生……発明好きだがあまりいい噂を聞かない先生。
この人に頼めば何か解決するかもしれない、だがリスクが高すぎる。
危ない橋とはこのことを言うのだろうと思い、ノエルはその場を後にしようとした。

「い……いえなんでもありません！すぐに教室に戻ります！！」
「待て……い」

走り去ろうとしたノエルを、ココノエはどこまでも伸びるマジック
ハンドで捕まえた。

「んぎゃ！な……何をするんですか……！？」
「お前今……確実に悩み事をしているだろう」
「ぎくう……！？」

ばれた。否、ばれる定めであった。

「恐らく胸のことだな」
「ぎくぎくう……！」

悩みの種まで見抜かれた。

探偵ココノエの推理はこうだ、身体測定が近い↓体計る↓胸が無い。
……多分ココノエでなくてもたどり着いたとは思う。

「なんだそういうことなら早く言えばいいじゃないか、この天才博士ココノエちゃんが悩める乙女を助けてやろう、な」に遠慮するな金などとらんぞ」

「結構です！いやです！助けて……たすけてー！！」

そしてあつという間にココノエのラボに。
そこには中の下の胸を持つラムダがいた。

「博士……なんかノエルが怖い」
「嫉妬してるだけだ。というかラムダに嫉妬してるようでは人生終わりだな……私に嫉妬してないところがちょっと気に障るが……」

どうやらココノエはノエルに同類と思われるようであった。
ココノエ自身は心の中で否定していたという。

「というわけでノエル、どうしてほしい？」
「いやいや別にいいですって、先生に任せたら胸が破裂するまで膨らむとかそういうオチでしょうし」

まあココノエ先生が手を貸せば大抵そんなオチであろう。
胸が成長して本体が小さくなるとか、変な結末しか思いつかない。

「信用されていないのか、私もまだまだだな……ちなみに言うが私
はお前の胸を大きくする気などこれっぽっちもないぞ」

「ふえ？じゃあなんで私を拉致したんですか？」

ノエルの質問に、ココノエは待つてましたと言わんばかりに張り切
って言葉を返した。

「ふふふ……お前は目先のことはかりを考えている。もっと考えを
ひっくり返してみたことはないのか？」

「え？どういうことですかそれ？」

ココノエの言っていることは、ノエルにはいまいち良くわからなか
った。

「だから、”胸がないから大きくする”のではなく、”胸がないこ
とを生かす”ということ考えたことはなかったのか？」

「え？と……いいいますと？」

次の瞬間、ココノエはノリノリにとんでもないことを言い出した。

「YOU、男になっちゃいなYO」

そんな。

一体この人。

何を言い出すの。

「……は？」

ノエルの全身全霊の「は？」であつた。

「胸がないんだから性転換して男になつてしまえばいいだろう、元々美形よりの顔立ちだし」

「いやいやいやいや！簡単にそんな重い内容を言わないでくださいよ！！私は女です！女であることを捨てる気はありません！！」

ノエルは頑なに断つた。

まあ普通は断るのが普通であろつ。

「そうか……ならお前は胸が無い女という苦しみをずっと味わい続けるがいい」

「う……」

ココノエ先生の冷たい一言がノエルに突き刺さる。

「胸がないから大きくしたいとか甘えたことを、そうではないだろうがこのアンポンタンが！」

「アンポン……！」

「補うのではなく生かすのだ！なぜそう考えようとしなない！！お前はただ欲にまみれているだけではないか！！」

ココノエ先生は珍しく熱く語っている。

ノエルも次第にココノエ先生の言葉に呑み込まれていった。

「ラグナ先生をあつと言わせたのだろうか？だからこそ、”性別を変えるほどの覚悟”を見せれば、ラグナ先生を一步出し抜くことができるんじゃないのか？」

「た……確かに……この方法を使えばラグナ先生を……」

元々通販などにめっぼう弱い、ノエルはすでに9割洗脳されていた。

「さあノエル、私が付いてる……新たな道を切り開こうではないか……」

「は……はい！！私がんばります！！」

「よくぞ言った！！（ちよろいなこいつ）」

こうしてノエルは、自分を捨て新たな道を切り開くことに成功した。

これでラグナ先生にかつる！
意気込み教室へと戻るのであつた。

教室にて……

「えゝとこの文章を……」

「先生！！」

「ん？ノエ……ル……？」

そこにいたのは、髪が伸びただけのジン共言つべき変貌を遂げたノエル（CV：柿原徹也）であつた。
凜々しい美形の少年は、ラグナ先生にどや顔をする。

「……………」

「どうだ先生！わた……オレの覚悟は！！」

みんなノエルの方を啞然とした顔で見ていた。

数秒固まった後、ラグナが冷めた表情でノエルにこう言い放つた。

「うゝん……とりあえず一言……てめえは馬鹿か？」
「んな！？」

強くではなく、哀れむようにいい放たれたラグナの名言。
あつと言わせるどころか、心配されているではないか。
徐々にノエルの目から涙がポロポロこぼれ落ち、そして……

「先生の……ばか……」

ノエルは「びえ……」と泣き叫び教室から出て行ってしまった。
さっきもこんな展開あったような気がする。

「あいつ……ココノエ先生にでも捕まったな……アーメン」

ラグナは何かを悟り、小さく合掌した。

「……」
「ん？どうしたツバキ？」

ツバキの様子が変わったので、ラグナは思わず尋ねると……

「……私好みのイケメン」
「え……」

どうやら、男になったノエルはツバキにとってストレートだったようである。

結局その後ノエルは女に戻ることに成功、身体測定も普通に受けたという……

第39話：狩りゆえにカメラリア（前書き）

第39話です。

CS2稼働ということで、強化が期待されているツバキがメインとなっております。

そして話のメインは今話題のあのゲームです。ひと狩り行こうぜ！

第39話：狩りゆえにカメリア

「先生！ご相談があります！！」

そうラグナの元にかけてよってくるのは、恋する乙女ツバキである。
今までジン関連の話で色々と暴走してきた彼女だが、今回はいつも以上に真剣であった。

「ああ？んだよまたジンについてか？最近減ってきただろ俺への襲撃も」

「いえ、今日はジン兄様についてではありません、ハクメン先生についてです！」

ツバキの口から意外な人物の名前が出た。

そう、ツバキは今ハクメン先生の事が気になっているのである。
今の彼女のことを勝手のいい女など言っではいけない、遠まわしに一途であるのだから。

「ハクメン先生だあ？なんだおめえジンに愛想尽かしてハクメン先生に鞍替えか？」

「人聞きの悪い言い方をしないでください、そのお……ちょっとハクメン先生の優しさにキュンときちゃったかなあって感じで」

案外デレデレなツバキであった。

「ああ……レイア狩り終わってからでいい？」

「輝碎閃！」

「がはあ！！」

毎日狩りばかりやっている皆さん、忘れてませんかCS2が稼働しますよ

CS2で強キャラになると言われているツバキはラグナに一撃を食らわせ、レイアを狩らせる余裕も与えずラグナを引きずって行った。

「では先生、人生相談です。」

「何が人生相談だ。キャラ的にはハザマ先生にでも相談してみりやいいだろうが、あの人一応ハクメン先生と同級生らしいし」

と言いつつもラグナはしぶしぶ聞く準備をする。

ちなみに等のハザマ先生本人は、バング、ティガー、獣兵衛先生と一緒に狩りに出かけていた。

「ハザマ先生はその……苦手というか嫌いです。」

「ああわかるわ……俺はこの話の中じゃあそこまで嫌ってはいないが……」

どうでもいい話を終えた後、ツバキは真剣な顔つきで本題を語り始めた。

「ごほん……というわけでラグナ先生、ハクメン先生とうまく接したいのですが、どう話しかければいいですかね？」

「普通に話しかければいいんじゃない？ あいつ普段は近寄りがたいオラバリバリだけど話すとむっちゃいい人だぞ」

普段からハクメン先生と仲のいいラグナにとっては日常茶飯事だが、ツバキのような一般生徒となると話は変わる。

ハクメン先生は生徒からは厳しめの先生と思われており、根はやさしいのだが少々話しかけにくい人である。

「先生からすればでしょう？ 私はあまりあの人と話したことないし……でも落ちたプリントを拾ってくださった時は……素敵に写ってしまったわ」

「お前のその思いが絡まるインフィニティーなのは充分わかった。しゃあねえな後でハクメン先生と狩りに行く予定だからそんな時にかけ合っというてやるよ」

「あ……ありがとうございます先生、先生たまにはいいところ見せますよね！」

「はっはっは、いっつもだぞいっつも」

ラグナ先生は苦笑いをしながら、その場を去って行った。

ツバキも生徒会の仕事が残っているらしくそっちへと向かった。

そして……

「さてラグナ先生、HRでもあげるか？」

「俺はHRは自分一人で上げる主義なんだよ、素材集め手伝ってくれよ」

「承知した。」

発売日に買って上位クエスト満喫中のハクメン先生と、予約し忘れた一週間後に買って未だに下位クエストで留まっているラグナ先生であつた。

若干キリのいい所で、ラグナはあの話を持ちかけた。

「ああそうだハクメン先生、ツバキがなんか用あるんだつてよ」

「ツバキが？どのような要件だ？彼女は出席日数も大丈夫だし成績の方もトップのはずだ。それに私は生徒会関係者ではないし……」

女性の熱い眼差しもまるで感じ取れない部分もジンにそっくりなハクメン先生。

話しながらでも華麗に太刀を振り回すハクメン先生にラグナは話を続けた。

「要件つうか……（普通に話したいじゃあ流石に呆れられて終わるだろうしなあ）」

特に要件などない、このままだと正直流されてしまいそうである。失敗するとまた何かされそうだったので、ラグナ先生は適当に用件を作り話した。

「一緒に狩りしたいってよ」

ラグナは自分のPSPを見て思いついた通りのことを言った。そもそもあのツバキが狩りをしているのだろうか、ゲームしてるイメージすらない。

「ほう……まあ困っている未熟ハンターを助け続ける英雄ハンターと噂されている私のことだ。その噂を聞きつけたのだろう」

そんな噂いつ流れたんだよ……
とラグナ先生は心の中で呟いたが、どうでもよかったのですぐに考えることをやめた。

「まあそんなところだ。つてことで明日話してやってくれや」
「承知した、たまには生徒とのんびり狩りに行くのも良いだろう」

そんなこんなでツバキとの約束を果たしたラグナ先生は、そのことをツバキに報告しに行った。

「先生、私はハクメン先生と少しお話をしたいって言ったのに、なんでそれが一緒に狩りに行きたいになるんですか？」

ツバキは怒っていた。

狩りの最中に乙女の熱烈な話をしろって言うのかこの先生は、という感じで怒っていた。

「だってそんな話がいじや流されんだろうがよ」

「普通に相談事があるらしいでよかったじゃないですか、あの人一応教頭兼教育指導係でしょう？」

アドリブの効かないラグナにツバキの怒りは止まらなかった。

「まあこうなつた以上その用件で行け、てかそれ以前にお前狩り行つてんの？まあよく考えればお前がゲームするわけg」

「一応今HR5ですけど」

（やってんのかいー！！！！）

ツバキもハンターの一人であった。

しかも結構進んでいる。予約済みの勝ち組と呼ばれる者の一人であった。

「マコトに頼んでヨド。シで早朝2時から並んで買ってきてもらつたんですよ」

「確かにあの日のマコトは午後から来た上に目の下真っ青だったな、てかおめえ鬼だな」

自分で並ばず友達に頼んだツバキ。
マコトもマコトでよくやる方であった。

「つつわけであ、後は二人でティガでもレウスでの狩ってくれや、愛の共同作業……でな」

「うわ臭」

「リアルに引くんじゃねえよ！」

自分でも恥ずかしかったのか、顔を赤らめて話すラグナであった。

そして翌日……

「やはり狩りはみんなで行くものですねえ」

「拙者は貴重なガンナーでござる!!」

ハクメンのそばには、ハザマとバングがいた。

「まあ人は多い方が良さと思ったのだが、というか話に聞いていたよりやけにツバキがやり込んでいるような……」

「ああ……そうだな、ああそうだな俺ノエルの手伝いしてやらねえとーっと」

「待てやこの銀髪……」

そしてラグナは、CS2で強化されたツバキに狩られましたとさ、
続く……

「続くのこれ？」

「続きますよ」

続く？

第40話：魔法少女はオセロが好き。（前書き）

第40話です。

CS2稼働ということで、ペロペロでおなじみプラチナがメインですよ。

全国のペロリストのみなさん喜んでくれるだろうか。

第40話：魔法少女はオセロが好き。

「ルナ！お腹すいたよ」

「うっさいぞセナ！あと10分で昼休みだろうが！」

一人でぶつぶつとしゃべっているが、可愛いそうな子ではない。

ブラチナ・ザ・トリニティは、二重人格である。

いつも腹が減ったとうるさい男の子のセナ。

短気で怒りっぽいやんちゃな女の子のルナ。

ちなみに、本体の性別は多分女の子なのでルナ。

多分というのは、同じ会社が出している某ゲームに女の子にしか見えない男の娘がいるため、断言できないからである。

「じゃあ今日はここまで、気をつけ、礼、着席、さして狩り行こうと」

「先生最近は授業を早く終わらせたくって必死ですね、少しは教師としての自覚を持ってください、狩りなんて行ってる暇ないですよ」

「うっせえぞナイチチハンター」

「誰がナイチチハンターだ！なんでもナイチチつけりゃあいってもんじゃねえぞ！」

いつものように、ラグナとノエルはくだらないことで喧嘩をしていた。

「さうて喧嘩ばかりしてる無い金髪とチャライ銀髪は無視して」
「誰が無い金髪よ!」
「誰がチャライ銀髪だ!」

ルナのさりげない一言に、二人は揃ってツツコミを入れた。

「学食行こうそうしよう!」
「しよ〜っ」

ルナとセナは元気いっぱい食堂に行こうとするが……

「学食って、今日はおめえ学食休みだぞ」
「ふえ?」

ラグナの指摘に、ルナは気の抜けた反応をする。

「三日前に連絡しただろ、今日は弁当持参だって」
「へ?へえ?」

聞いてないぞそんなのと言わんばかりのルナ。
セナも時々出てきては、なにやら言葉にできなさそうな顔をしている。

「そういえばルナちゃんとセナくん……プラチナちゃんでもいいつか、寝てたもんね。」

ノエルが若干呼び方を訂正した後、少し意地悪そうにそう言った。周りの弁当を広げるみんなを見た後、状況を把握してあらためて焦りはじめた。

「ふええええええええ！じゃあルナ達昼飯抜きか！？」

「抜きだな」

「お腹がすきました、ご飯食べれないんですかあ？」

「食べれないね」

困り果てるルナとセナにラグナとノエルが冷静に言い放った。

「なあラグナ先生！ごはんよこせ！半分にしてみてもいいぞ！」

「やだね、狩り行く前に腹ごしらえは必須なんだよ」

喚くルナをラグナは冷たくあしらう。

普段から色々因縁があるらしく、ラグナはここぞとばかり意地悪をする。

「うー！わかった、じゃあご飯食べさせてくれたら、ぺろぺろさせてやる！」

「するか!! それ求めてんのはてめえの熱狂的なファンだけだろうが!!」

普段からプラチナが出るたびにペロペロと団幕が流れる某動画サイト。

これからコンボムービーとか出てくるのに、ペロペロは止まりそうにない。

「ルナ、僕死にそうだよ、一か八かでシヨタで攻めてみる？ 口リじゃだめそうだったし」

「俺はロリコンでもショタコンでもねえよ!!」

あらぬ疑いをかけられそうになり、必死に否定する普段からやけに
幼女と接する機会の多い主人公。

「お腹すいたお腹すいたお腹すいた――！」

「先生、少し分けてあげたらどうです？私も今日朝作った卵焼きの半分でいいなら……」

「あ、お前のはいらない」

「どういふことだそれは――――！！」

さつきまでお腹すいたとわめていた子供にあっさり拒否されるノエルの弁当。

拒否される理由はこの小説をここまで読んでくれたみんなには、わかるだろうか？

「もういい！トリニティ先生のとこ行く！！」

「おう行け行け、ちなみにルナ、さっきのノエルの弁当の下り……
よかったぞ」

「なに島田紳助みたいなフォローしてんだあんたは――！！」

職員室にて……

「あらあらそれは大変でしたねえ、ちょうど良かったです。先生今日ちよつと作りすぎていたんですよお」

「わーいトリニティ先生やさしい！！あんのクソ銀髪とは違うなやっぱりー！」

トリニティ先生の弁当を3分の2ほど平らげ（ちなみにトリニティ先生曰く3分の1でも多いらしい）、お茶をもらい満足な顔を見せた。

「でも二人とも、人の話はちゃんと聞かなきゃだめですよお、ラグナ先生も悪いかもしれませんがあなたがあなたたちも悪いんですからね」
「はーい、わかりましたあ」

と、返事するのは気楽なセナ。

「よろしいです、せっかくですしオセロでもやりましょうか、私狩りとかわかんないですしい」
「狩りはいいぞ」

と、横から割り込むは英雄ハンター（自称）のハクメン先生。

「私みたいな女の人にそのような難しいゲームはできませんよハクメン先生」

「トリニティ先生よ、女の人ならナイン先生だってやっているぞ」

「娘よ！ここでシビレ罠はおかしいぞ！！」

「母よ！私の計画に狂いはないのだ！！」

と、奥で母娘でなかよく狩りに行くナインココノエ親子。

「でもお、私にはちよつとむずかしいかな」

「まあ近いうちに2nd Gを貸してやろう、それで慣れたら3ndを買うのだぞ」

「んもうわかりました。じゃあ狩りがんばってくださいね」

ハクメン先生はラグナ先生たちの元へPSPを持って去って行った。

「じゃあ最初はどっちと対戦しましょうか？」
「ルナがやる！ルナすっごい強いぞ！！」

自分で言うだけあって、トリニティ先生に勝ちまくるルナ。セナも交代でやるが、セナもまた強い。

「んー先生はこの手のゲームも苦手ですね、ごめんね相手にならなくて」

「いやいや、先生はすごい優しい！ラグナ先生なんかと全然違うもんね！」

「おい聞こえてっぞ！！ってうつわやられたしー！！！」

「ラグナ先生3死とはいいい度胸だな」

ラグナの悲痛な叫びが響き渡る。

「うつわだっせー！ぎやははー！！！」

「てんめ殺す！！待てやこらあー！！！！」

「ぎやははこのロリコンハンター！！！」

「だあー！！！！マジで殺す！！！」

挑発するルナを子供のように追いかけるラグナ。その光景を見て皆が笑っていた。

「さうて、私の学園の1ページを刻んでやる――――！！！」

天真爛漫なプラチナであった。

第41話：クリスマス+誕生日Ⅱプレゼントは1つ（前書き）

第41話です。

ノエルはその分誕生日が2回来るので大丈夫ですね（1月7日も忘れないでね、忘れたらハバヤさんが飛んでくるぞ〜）

第41話：クリスマス+誕生日「プレゼントは1つ

12月25日クリスマスは、ノエル・ヴァーミリオンの誕生日でもある日。

クリスマスが誕生日の人って、プレゼント1つしかもらえないから少し損してるよね

「つつわけでノエルに家にご飯食べに来ないかと誘われたわけだが……あいつが料理作って話なら華麗に断りを入れる予定だ。」

ノエルも自らの料理を振りたいのは山々だったが、自分の誕生日に人を殺すのは非常にまずい。
それを見越してか、料理のうまいツバキとマコトも誘っている。

「大丈夫ですよ先生、私たちがいますから。」

「料理ならあたし達にまかせちゃってくださいよー！ー！！」

ツバキとマコトもえらく張り切っていた。

親友を喜ばすため、楽しめるためにと色々物を用意していた。

「マジで頼むぜ、あいつが料理手伝うとか言い出したら全力で止めるんだぞ」

「大丈夫ですって、ノエルもさすがにいつも失敗してるんですからそろそろ学習してるでしょう」

そのころのノエル……

「うーん、少し手伝った方がいいかな」

学習していなかった。

「では先生、当日になってドタキャンはやめてくださいよ、ノエルにとつて誰が来て一番喜ぶのかわかってますよね？」

「わかってるよ、てめえらも来いよ」

こうしてツバキとマコトはプレゼントだのなんだのと準備をするため帰って行った。

ラグナも一息おき、そして腕を組みながらサプライズを考える。

「そうだな……せっかくだし”あれ”を持って行ってみるか」

そしてクリスマス当日……

「のえるーん！ハッピーバースデー&メリークリスマスー！！」

「わー、みんな来てくれてありがとう！」

先陣を切ったのはマコトであった。
それに続くようにツバキとラグナも家に入っていく。

「ノエル、誕生日おめでとう。」

「それとメリー苦しみます（料理的な意味で）。」

「先生、いきなり傷つくようなギャグ言うのやめてください」

ラグナは相も変わらず加減を知らないようである。

「今日に向けて、腹筋と肺と胃袋を鍛えてきた。ああやつべ、鍛えるのに夢中でプレゼント忘れたかしんねえ」

「先生、おめでたい日ですけどキレますよ、料理はツバキとマコトに任せますから安心してください」

「冗談だよ冗談、ほら早いけどプレゼントだ。感動すんなよ」

「あ、ありがとうございます。」「誰でも胸がでっかくなる胸パット」

……ってセクハラですよ！！」

ラグナは誕生日だろうとなんであろうといつものようにノエルをからかう、それでも一種の愛情表現なんだろうか……

それをやり取りを見ていたツバキは、少し微笑みながらもラグナの行動を注意した。

「んもう先生、今日はノエルの誕生日なんですよ、少しは限度というものを考えてください」

「にしても本当に二人は仲いいね」

マコトのその一言に、ラグナとノエルは少し照れていた。

「あゝ、赤くなったー！ー！！」

「う、うつせえよ！」

「んもうマコトもいじわる！！」

そんなやり取りを玄関でした後、ノエルに招き入れられてお茶の間へと移動した。

ノエルは「今日のためにかたづけました。」と自信満々に言っていたが、所々散らかっていた。

みんながクリスマスにまず最初にやったことは、部屋の掃除であったことは内緒だぞ。

「さて座る場所もできたことだし、台所もまあ綺麗になったわけだ。」

ラグナの発言からするに、ノエルの「かたつけた。」はまったくかたついてなかったのであろう。

「料理の前に、マコト、最初にノエルにプレゼントを渡しでしょう」
「そうだね、さっきラグナ先生がものすごいフライングで渡しちゃったし、しかもなにあれ〜プレゼントとしては最悪だったよ〜」

ラグナが渡した胸パットは、ノエルのコンプレックスは元より、基本的に男性が女性に渡すものとしてはダメなものであった。現実で女の子の誕生日会にプレゼントとして持って行ったら、多分引かれるであろう。

「からかうにも限度がありますよ先生、セクハラ以外のなにものでもありません」

「わ、悪かったよ」

ツバキに厳しく注意され、ラグナは少し落ち込む。

ノエルの方をちらっと見たが、ノエルもまだ少し怒っていた。

「まあ先生ですから仕方ありません、私ももう側ですから文句は言えないですけど」

「ノエル、こんなセクハラ教師のプレゼントなんて忘れて、私達のプレゼントこそ本当に心のこもったプレゼントよ」

「のえるん、誕生日おめでとー！！」

ツバキとマコトは、カバンからプレゼントを取り出した。

二人ともそれなりにデカイ箱だった。ネックレスや化粧品の類ではなさそうだ。

「ゲーム機？いやぬいぐるみかなあ？」

「さあ、開けて見て」

ツバキに言われるがまま、ノエルは嬉しそうにその箱をあけた。

「えーと、「電子レンジで簡単クッキング」……ってあんたも人のこと言えねえだろうがー！ー！！」

ツバキのプレゼントは、電子レンジで簡単に料理ができる箱的なあれであつた。

これは「料理下手くそだから最終手段としてこれで妥協して」とか言つた皮肉にもとれるプレゼント。

というか多分そんな感じだつた。

ラグナはそれを見て一人爆笑していた。

「ぎやははははははは！腹いてえ！！ツバキにまで料理のこと気にされてんじゃねえかぎやはははははは！！」

「ち……違ふのよノエル！ノエルのためを思つて、流石に詰めるだけ詰めて電子レンジでチンなら失敗しないかなと思つて」

「なに！？もう私それしか料理作れないの？ガスとか使っちゃだめなの！？インスタントで攻めろつての！？」

ツバキを信じてただけにノエルは、相当ショックであつた。

一番ショックだったのは、ツバキもノエルの料理の腕を気にしていたことであらう。

多分誰もが気にしてるとは思うが。

「ご、ごめんねノエル、そんなつもりでは」
「もういい！マコト！この人たち私をいじめるー！！」
「んもうツバキまでひどいなあ、のえるん私は大丈夫だから、私のプレゼントで全てを忘れ元気になって」

ノエルは一応プレゼントの箱を上下に揺さぶってみた。
結構重く、家電製品（料理関係の）可能性こそあったものの、お手軽料理グッズではなさそうだった。
これは期待できると、ノエルは希望に溢れた。

「マコト……ありがとう」
「いいってことよ」さき、開けてみなさうい！」

マコトの優しさを噛みしめ、ノエルはプレゼントの箱を開けた。

「え」と、「超簡単料理大百選」、「蛇でもできる料理」、「ありんこでも作れる料理」、「てか毒が入っていようとうまく調理できる料理の本」……………」

「のえるん、お気に召してくれたk」
「わーーーーーん！！」

ノエルは泣き叫びながら自らの家を出て行った。
三人とも慌てて家の外までダッシュで向かい、ノエルを保護して家

へと連れ戻した。

「はあはあ……のえるん大丈夫？」

「大丈夫じゃねえよ！！なにさこのプレゼント！？私の料理ってそんなにダメなの！？てか料理を超えて兵器なの！？世界破壊できるの！？」

「厳密に言うとそのまでのレベルだ。」

「うわーーーーーん！！」

マコトにも裏切られた。

そしてラグナの厳しい一言で、自分の誕生日なのにテンション下が
りまくり、怒りまくりのノエル。

「まあなんつうか、俺達3人ともお前のことを良く思ってるってこ
とじゃん」

「悪いとこしかみてねえだろ！！」

ノエルの言うことはごもつともであった。

「ち……ちなみに……誕生日プレゼントとクリスマスプレゼントつ
て……」

「「一緒になってるに決まってるだろ（でしょ）（じゃん）」「
わーーーーーん！！」」

クリスマスに誕生日を迎える人の宿命であった。
哀れノエル、悲しいかな……ノエルが友人に見られていたのは最悪レベルの料理の腕と胸の部分だけであった。

「とりあえずあれだ。プレゼントって言うのは”人の心”だ！物じやねえんだよ！！あれ、今先生いいこと言っただんじゃね？」

「そのプレゼントのどこに心が詰まってるんじゃ！？」

「ツバキ、マコト、料理できてるか？」

「もうすぐですよ、ああノエル、さっきの電子レンジのやつ、一から十まで教えてあげるからこっち来て」

「自分で覚えるもん！！」

ノエルは散々な目に遭いながらも、自分を祝いに来てくれていると
いうことだけを信じ、機嫌を直しテーブルに着いた。

そして数分後、料理が運ばれ、しばし平和で楽しい時間を過ごした。

「さて、料理も食った楽しい話もしたということだし、先生は今日
とおっておきのものを持ってきたぞ」

「お、先生のサプライズ！？熱いねえ激アツだねえ」

マコトがキラキラした眼でラグナを見る。

そしてラグナが奥から出したものはいった……

「じゃーん、”お酒”だ」

お酒であつた。

自分が飲みたかっただけなのか、未成年の生徒たちに先生自らが酒を振る舞うなどあつていいものなのだろうか。

でも、高校とかそういう時期の関わりやすいノリのいい男の先生とか、たまにはあるのかもしれないのだが……

「ちょっと先生！私たちは未成年ですよ！！そこら辺のマナーは守ってください！！」

案の定、生徒会副会長のツバキが黙っていなかった。

「んだよノリ悪いなツバキは、こういう楽しい時はルールになんて縛られなくていいんだよ、尾崎豊も言つてただろうが、なあマコト」

「うんうん！たまにはお酒とかもいいよねえ」

「知らないですよ、とりあえずそれは没収します。」

ツバキが怒るのもラグナは想定済みだった。

そう、想定していたからこそ、ラグナには秘策があつた。

「ああー残念だな、ハクメン先生も言つてたぞお、酒を交わせる女性とお付き合いたいなあ……」

「酒を持ってこいやーーーー！！！！！！！！！！」

ツバキは一転して、酒をグイグイ飲み始めた。
ツバキを取り入れるなら大抵、ジンかハクメンの名前を出せばいいのである。

「よし、ツバキの了承も得たし、のえるん飲もうよ〜！」

「え？でもいいのかなあ、私未成年だし……」

「関係ねえよ、ほら飲め！」

と、ラグナとマコトに押され、ノエルもしぶしぶ飲むことに。
ちなみに酒に強いのはマコト、他はそこまで強くなかった。
ツバキはすぐさま寝込み、ノエルもふらふら、ラグナはなんとか正気は保っている、マコトは本調子。

「ったく、これじゃあハクメン先生と、付き合うなんて無理だってえの！」

「先生も酔ってますね〜」

「マコトおめえ強いな、亜人ってみんな酒に強いのか？」

「うちの父ちゃんはどうだか飲んで酔わないよ〜」

マコトがあまりにも酒に強かったので、ラグナは少ばかり悔しそうにしていた。
ツバキはもはや朝まで起きないであろう眠りについていて、そしてノエルは……

「ふひゃ〜」

「ノエルも沈みそうだな……俺はこの程度で終わりにしておくか」
「じゃあ二人で朝まで……なにかします？」
「エロいこととか考えてんじゃねえだろうな？」

と、そんな事をしゃべっていた時、ノエルに異変が起こった。

「ふひゃ……う……う……」
「ん？おいノエルどうした？」
「あ……あ……」

少しばかり頭を押さえ、そこら辺を這いずった後、眠りにつくようにその場に倒れた。

「せ……先生、ノエル頭痛くて吐きそうになってるんじゃ……」
「そ、そうなのか？でもなんか様子が……」

その時であった。
虚ろだったノエルの目が、突如ハッキリと開いた。
そして、徐々に緑の目が……”蒼”へと変わっていく。

「あ……あれ？このパターンって……どこかで」
「……」
「お……おいノエル？」

そして、ノエルではない何かは答えた。

「ノエル？違う私は違う、違う違う、憎い憎い世界が憎い」

「ま……まさかおめえ、酔って意識無くして……裏に潜んでいた”ミュー”が……」

そう、ノエルは酔った末に深く眠りについいたらしく、その影響で奥で眠っていたミューがノエルの体を支配したらしい。

普段はラグナが怒らせると出てくるようになっていたのだが、時が経つにつれ、そしてニューが行ったオカルト部の実験（部活に入ろうの回を読んでね）の影響もあり。
結構ミューちゃんは出やすくなったのだ。

「あわわわわ、先生これって……」

「ただ大丈夫だろう、ミュー元気してたか？あは……あははははは」

「変なものばかり……」

「ふえ？」

「プレゼントとか言ってる私のコンプレックス決るようなことばかり、憎い憎い憎い……」

その怒りは、ミューにもビシビシと伝わっていたらしい。

「先生、どうしましょう？」

「死を覚悟するか、ああ俺は弱体化されたしなあ……」

「憎い……………!!」

「ぎゃあああああああああああああああああああ
!!」

こうしてノエルの誕生日、そしてクリスマスは終わった。

マコトはそれほどというほどダメージを負うことはなかった。8割がラグナ先生への攻撃だったという。

ツバキはそんなことにも気付かず、ぐーすかと寝ていた。

「えーと、先生どうしてそんなに傷だらけなんですか？まさかマコトとなにか……」

「おめえの中にいる奴の……がく」

これは果たして、自業自得だったのだろうか……

第42話：ハッピートリガー（前書き）

第42話です。

今年最後の投稿となります。

第42話：ハッピートリガー

大晦日

1年が終わり新しい1年が始まるこの日。

こんな忙しい日に誕生日を迎えた少女がいた。

「あゝ、明日から2011年かあ、そんな日に誕生日だもんなあ」

ニユー・サーティーンは、大晦日に誕生日を迎える。

プロデューサーがどうしてこの日にしたのだろうかと言うほどの設定である。

しかも銀髪眼帯っ子の誕生日の翌日が、ムサイおっさんの誕生日というこれまた因果もかけらもない。

そんなこんなで、せっかくの誕生日をいい日にしようと、ニユーは大好きなラグナにアプローチを仕掛けに行くのだった。

「ラグナ、明日から新しい年が始まるね」

いつもなら、「ラグナー！ー！」と叫びながら突撃をするニユーであつたが、今日は違った。

平然を装い、誕生日であることを遠目でアピールしながら近づく。

「今日は自分の誕生日」と自分の口から言う人はあまりいい印象ではないであろう、やっぱり他人から誕生日と祝ってもらいたいである。

特に大好きなラグナなら、自分の誕生日を覚えていてくれるはずと、

ニユーはそういう希望を抱いていたのである。

「ああそうだな、今日は早く帰ってダウンタウン見ねえとな」

と、現在のラグナにとっての優先順位は、ダウンタウン>ニユーである。

まあ最初は冷たくされることなど分かっていた。ニユーはラグナのその冷たい態度を

「ラグナったら焦らして焦らしてニユーのこと喜ばせるんだから」と脳内で変換して笑顔を浮かべる。

「ダウンタウンかあ、私は紅白かなあ、でもラグナと一緒に見るならダウンタウンでもいいかな、今日はその……あれだし」

「紅白か、別にどっちが勝っても関係ないしなあ」

ラグナにとって大晦日は、とりあえずテレビ番組が最優先のようであった。

「って、そうか今日は大晦日だったっけか……」

ラグナのその言葉に、ニユーは笑みを堪えつつ、早く自分の誕生日に気が付いてよといった感じに目をきらきらさせていた。

しかしラグナの沈黙は少し長く、自分から誕生日と言わなければ、気付かせる形じゃなければいいんだとニユーはラグナに振ることに

した。

「そうだよ、今日は大晦日……大晦日と言ったらあ……大事なこと
ってあるよね？」

ニユーにとって、最高の遠回し発言であった。
はたしてラグナの反応はと言つと……

「大晦日で大事なことが……あ、そついやあすっかり忘れてたな」
「うんうん!!」

ニユーはラグナに抱きつく寸前でスタンバっている。
ラグナは手をポンと叩き、こう言った。

「年越しそばの材料買ってねえや!」
「ずこー……!!」

ラグナにとっての大晦日に、年越しそばを食べるが追加された瞬間
であった。

「サンキューなニユー、お前もたまにはいいこと言っじゃねえか」
「あははははははは!ラグナにそう言ってもらえるのはうれし
んだけどさあ、あはははははははは!」

ニユーは壊れたように泣きながら笑った。

ラグナはそんなニユーを見て、特に気づくこともないように……

「おいおいニユー、そんなにそば食いたかったのか？」

「ちげえよ！ニユーにはそば以外にもっと大切なものがあるよ！！」

鈍感なラグナに、徐々にニユーは口調を荒げていった。

この人本当に私の誕生日忘れてるよ、といった感じで半分絶望気味であつた。

「ああそうだったな、明日のバング先生の誕生日プレゼント！まあみかん一個でいいか」

「それもちげえよ！てか誕生日まで出ておいてまだ気付かないんかこらーーーー！！」

ラグナはまだ気付かないようで、というかワザとなのだろうかすつとぼけている。

そりゃあいつも自分の名前を叫びながら襲ってくる奴の誕生日など、祝ってくれる方がお人よしだが……

愛情表現をしすぎたのか、ラグナは結局おめでとうの「お」の字も言わぬままそばの材料を買いにどこかへ行ってしまった。

「あ……行っちゃった……」

ニユーは激しく落胆する。

焦らすだけ焦らしといて、放置プレイってそりゃあないよラグナ、と心の中で思いながらひどく落ち込んだ。

「む、どうしたニユー、こんな道端でたたずんでは邪魔になるぞ」

と、そんなニユーの元に来たのは、年越しそばの買いだしをしていたハクメン先生であった。

ニユーはハクメン先生を見た直後、誰でもいいのでこの絶望の捌け口が欲しいと思った。

ニユーはしばしの間、機械モードでハクメンに対してソードサマナーをぶち込みまくったという……

「……で、ラグナ先生に誕生日を覚えてもらっていなかったあげく、年越しそばとテレビ番組に負けたと？」

「えーん！ラグナのバカーーーーーー！！」

まあ確かに話を聞く限りラグナが完璧悪いのだが、普段のニユーのラグナへの強襲っぷりを見ていたハクメン先生にとってはラグナを攻める気にはなれなかった。

やるせない気持ちになったハクメン先生は、とりあえずニユーを慰め、適当にあしらいつつその場を去ることにした。

「とりあえずまあ誕生日はめでたいことだな、では私はダウntaxウ
ンの録画があるからこれで……」

「待って、ニューを一人にしないで、このままだとニューは病ん
でしまうよお」

もう十分病んでるだろうが！とツツコミを入れようとも思ったが、
言うと機嫌を悪くしそうだったのでやめた。

ハクメン先生は一息つき、少し厳しめにこう言った。

「はあ、ニューよ、言うておくが今回はお前の日頃の行いが悪い」

「ぐす……でも私、がんばってラグナに振り向いてもらおうと……」

恋する乙女、ニューも必死に今までがんばってきたのだろう。

その結果が、ラグナを襲った上にラグナの目の前でジンと抗争を起
こす。

毎日ラグナはシザーを繰り返す毎日、なんとディストーションして
もゾンビの如く舞い戻ってくるニューとジン。

ラグナがこの年で使用したゲージはかなりのものだ。まあこの世界
でゲージはあまり関係のないものだが……

「アプローチするのは良いが、限度というものを知るのだな、異性
を好きになりすぎてトラブルを起こすというのは、行為を抱かれた
者にとってもキツイ出来事だ。」

「先生もその、思い当たる節とかあるの？」

ニユーのその問いに、ハクメン先生は少し間をおき、ゆっくりと自分の体験論をニユーに話聞かせた。

「昔、遙か昔だ。私の傍にある女性がいた。幼い頃からの知り合いでな、とても良くしてくれた。まあ、少々口うるさくもあつたがな。その女性は私と同じ道を歩んだ。教師としての道だ。」

そう、ハクメンにはかつて大事に思う幼馴染がいた。
ハクメンはともその女性を大切に思っていた。

「といっても何時でも私の傍らにいて予算やら日程がどうしたとかジン兄様とかジン兄様とかジン兄様……！とか、昔と変わらない関係が続いていた。」

「ずいぶんとその……モテてたんだね」
「バレンタインに貰うチョコの数は学校の子女の約9割だった。私が金髪美少年だった時の話だ。」

ハクメンはともよくモテていたという。
ちなみに白いお面をつけるようになってからは、隣の席にいた猫に抜かされたという……

”猫”に、学校一美人の魔法使いに「なかなかのイケメンじゃない」と言われた”猫”にである。

「だが、ある事件をきっかけに私はその女性の元を離れ、ある地に単独で赴いた。私の身勝手な行動だ。無論その女性も追いかけてきたよ、私を止める為に。」

とまあどこかで聞いたような感動的な話をつらつらとしていた。ちなみにまあ、この話は本編ではかなり泣けるのでおススメです。

「結局はまあ私に行為を抱いていたその女性は、私の兄と口論しまくったあげく、軽いスクールデイズ状態に……」

「しかも争った相手は男なんだ。てか先生って両刀？」

ニユーはもはや興味が無さそうな顔で話を聞いていた。

本編的にはこの話の元ネタをニユーにするのはなんというか辛い何かがあるであろう。

ツバキがノエルの服着てる表紙のドラマCDを聞けばなんとなくわかる。

「というわけだ。あまり行きすぎたことはやめるのだな……まあ私も言えた義理ではないのだが……」

「うん、わかった。やっぱりハクメン先生って頼りになるね、ありがと少し元気になったよ」

ニユーはハクメン先生に笑顔を見せ、そのまま夕陽の向かう方へと帰って行った。

ハクメン先生は教師としての使命を果たしたような顔で、夕陽に面

を向けしばらくの間一年を思い返していたという……

「年を迎えてもう90年くらい……か」

午後10時くらい、ニューは紅白ではなくダウンタウンを見ていた。

でで〜ん、ラグナアウトーーーーー！

「ざっけんなウサギ!」

「あつはつはつはつは！やっぱり面白いな〜!!」

と、そんな時に一本の電話が鳴った。

着信を見ると、「大好きなラグナ」と書いてあった。

ニューはうれしさの半分、夕方ハクメン先生に言われたことを思い出し、そっと電話に出た。

「あ、えつと……ラグナ？」

「おお、たった今思い出したんだがよ」

ラグナは一つ間をおき、簡潔に一言、ニューにこう言った。
それはとても優しさが満ちていた一言だった。

「誕生日おめでとう、来年はもう少し襲うの自重してくれよ」

その一言を言った後、ラグナからの電話は切れた。

「ニューにとっては、”その一言”が何よりの誕生日プレゼントだった。」

「ラグナ……ぐす……ありがとお……そしてごめんなさい」

「これでいいのかよ？ハクメン先生」
「ふっ……………」

第43話：ノエル、宿題を教わる。（前書き）

第43話です。

正月間に合わなかったOTL

しかも正月全く関係ないネタやんOTL

久々にハーデススレより1部ネタを引用しております。

第43話：ノエル、宿題を教わる。

ジン・キサラギは大好きな兄さんから、ノエルの冬休みの宿題の手伝いをしてやってくれと頼まれた。

年が開けてそうそう、近所の子供にお年玉をあげるといふ恐怖よりもつらい試練であった。

だが大好きな兄さんからのたのみ、断れるわけがない。

「というわけで、障害とはいえ卒業間近で単位が足りずに卒業延期なんてされたら兄さんが困る。なので今日で貴様がこの程度の宿題を完璧に理解できるまで僕がきつちりと教育してやる。」

ジンは今日という日が始まってから一度も笑っていなかった。

相手がノエルってだけでも不快だった。そしてそのノエルが3年B組での成績が下から数えられるほどの馬鹿なのだからさらに頭を悩ませる。

一方、こんな風に思われているノエルはというと……

「うふふ、先輩にワンツーマンで教えてもらえるなんて、今回は宿題早く終わりそう」

ジンの苦勞も知らずに呑気なことを言っていた。

ジンもそんなノエルを見て、先が思いやられるような顔をしていた。

「とりあえず、まずは国語だ。貴様は漢字はおろか日本語すら理解していないカスなのだろうが、僕にかかれば今日中に必要最低限の知識は得られるだろう」

始まって早々、ジンは言いたいことをぶちまける。

恐らくこうでもしないとやっていけないのだろう、ノエル相手なので普通に教えていてはストレスが溜まって先にダウンしかねない。

「先輩、私だってきちんとした日本語くらい理解してますよ」

その言葉を信じてもいいのか？とジンは一瞬疑惑の目をノエルに向けてる。

まあやってみればわかるだろう、ジンはさっそく宿題のページを開く。

問1

「そのむね」を使って正しい日本語を作りなさい。

「そのむね？」

ノエルはまず最初にハテナマークを浮かべることから始める。
この問題、”むね”の部分が重要になる。

”胸”……ではなく”旨”である。

正解の例を出すなら、「その旨を社長にお伝えしておきます。」辺

りが正解だろうか……

ちなみに作者の小説を見てくれればわかるとおり、作者自身あまり国語は得意ではないです。

「その”胸”か、先生も変な問題だしますね」これはノエルのセリフである。

「その”旨”、流石にこれは簡単だろう」「これはジンのセリフである。

漢字が違うが、互いには”むね”と聞こえているので違いはわからないであろう。

そしてノエルが出した答えはというと……

回答

「私の”そのむね”は、一部の人には認めてもらえます。」

やはりというべきか、旨を胸と勘違いしていたようである。

「ど……どうですか先輩！」

「見くびっていたよ。お前は僕が思っていたより障害らしい。帰っていいかな」

ジンはそう言って、静かにその場から立ち去ろうとした。

ノエルは焦ってすぐさま帰ろうとするジンを止めた。

「すみません。申し訳ありません。私がバカでした。どうかもう少し教えてください」

「ちっ……兄さんから頼まれていなければ、こんなことには……」

ジンもこんなやつに勉強を教えることに時間を使うくらいなら、カグツチの川で寒中水泳をやっていた方がマシだといった感じに顔を歪めた。

ジンは堪えた。これがうまく行ったら兄さんに1日中かまってもらおうと思った。

こんな辛くて苦しく大変な苦行を乗り越えたのだ、さすがのラグナもジンを見直し1日をジンのために使ってくれてもおかしくない。

「あ、今日は迷惑をかけるだろうと思って、お礼と言ってはなんです。クッキー作っておいたんです。どうぞ先輩」

「うんいらない、むしろその行為が僕に迷惑をかけている。」

ノエルのクッキーを食べるくらいなら、賞味期限が1年過ぎているおせちを食った方がマシだ。とジンは心の中で思ったという。

賞味期限切れはまだ料理、ノエルのは料理ではない、あれは……なんだろうか……

「今日は少しだけ甘めに見えたんですよ」

「とりあえず貴様が話を聞いていないことはわかった。あとそのド

ドメ色は嫌な記憶が蘇るからごみ箱に大事にしまっておけ」

「もうっ、好き嫌いはいけないんですよぉ」

「人の話を聞け!!」

ノエルはどうやら、自分が作ったその”何か”を料理だと信じて疑っていないようだ。

前から疑問に思っていたのだが、こいつは自分で作った何かを自分で食べた事があるのだろうか。

もし味見もしていないで人に食べさせているのだとしたら……なんだろう、6000ダメージくらい入れてもまだ足りないような怒りを覚える。

「頼まれたことだ仕方ない。本当にやりたくない。こんな奴に勉強を教える時間などなんの意味もない。しかし親愛なる兄さんの頼みだ。でも帰りたい」

「そこまでいいいますか……」

そこまで言わせているのはいったい誰だと思っているのだからこの障害で屑で頭のないついでに胸もないくそ女は……

ジンは心の中で帰りたい気持ちを抑え、一刻も早くこいつの宿題を終わらせようと思った。

問2

次の文の読みを答えなさい。

「「悪夢」よ、意識に還れ。寂寥を感じ乍ら、余燼に飢え乍ら、蒼に泪して、消えろ。」

「なんか難しい漢字が多いですねえ……」

ちなみにこの文は、CT時代のハクメンがラグナに勝った時に出る勝利メッセージである。

ハクメンが言う言葉は基本的に難しい漢字が多い。

ちなみに正解は、「「悪夢」よ、意識に還れ。寂寥を感じ乍ら、余燼に飢え乍ら、蒼に泪して、消えろ。」である。

「あくむ」、これは読める。」

「読めてなかったらさすがの僕も25ゲージを消費していたところだ。」

ジンはそろそろ攻撃に転じようとしていた。

そこまでに今のノエルが嫌でしょうがないようである。

「いしき……に……か……か……」 かん」

「ちっ……」

ジンは、思わず舌打ちをした。

ノエルはまるで背中から氷柱が飛んでくるかのような恐怖を感じたという。

「落ちつけ私……できる子だ私………を感じ”さく?”ら、
”さく”的な漢字よね」

おそらくノエルは、”作”↑と勘違いしてるのだと思われる。
隣のジンがどんどんイライラしていくのがわかる。それは見るより
もオーラで感じ取れるものであった。

「ああ、流石に私もブレイブルーのキャラだもの、蒼くらい読める
読める。」

と、ジンが怖いのかわからないが、自分に対していちいち確認を取
るようにノエルは問題に向き合う。

ジンからすれば、「しゃべらないでやれ」と言いたくてしょうがな
いであろう。

そしてノエルが出した答えは……

回答

「あくむよ、いしきにかんね、よじんをかんじさくら……」

ここらへんでわかるであろう、めちゃくちゃであった。

ジンは頭を押さえひどくうつむいていた。この先の人生絶望しかな
いと悟ったかのように。

ノエルは答えを見たが、「こんなのわかるわけじゃない」と放
り投げる始末。

ジンは国語の勉強をやめた。数学も社会も通り越して理科の勉強に

行く。

「貴様、周期表くらいはわかっているよな？」

周期表……

酸素とか水素とかのあれである。

HとかHeとかのあれである。

「た……多少は……」

「言ってみろ」

「えっと、”酸素”」

酸素、最初のこの一言がジンをどれくらい救ったのだろうか。

もし最初からそれ以外のヘンテコな答えが出ていたら、ジンもさすがにノエルを殺していたかもしれない。

「次は？」

「えっと……魔素？」

「もういいや」

ジンのほんの少しの希望が消えた瞬間であつた。

その表情に悲しみも哀れみもない、全てが当たり前で、受け入れべき運命。

そんな遠くを見るような顔であつた。

「まずは周期表からだ。」

そう言つてジンは、沢山のアルファベットが書かれた1枚の紙をテーブルに置いた。

そう、HとかHeとかNaとかのあれである。

「おっと、謎の表の登場ですね!!」

「……………」

ノエルはこの重い空気をなんとかしようとしてテンションを上げたつもりだったであろう。

だがあまりにもバカっぽかったのか、ジンは言葉を失った。

「…………え？」

「とりあえず貴様のおつむの程度だとネオンまで覚えていれば上出来だろう」

ノエルにとっては何か馬鹿にされたような気がしたが、ジンにとってはこれでも必死に講師をしているつもりであった。
もうこれ以上、ジンは後には引けないのだ。

「H H e L i B e B C N O F N e。復唱しろ」

「すみません、日本語をお願いします。」

「水素ヘリウムリチウムベリリウムホウ素炭素窒素酸素フッ素ネオン」

ジンは無理に抵抗するのはやめ、障害の望むがままに日本語で言うてあげた。

変に罵倒すると、逆にこの地獄の時間が延びるだけだった。

もう……1分でも1秒でも早く帰りたいかった。

「ありがとうございます。」

「……覚え方は、水兵リーベ僕の船、だ。これなら復唱できるだろう」

みんなも覚えがあるだろう、水兵リーベ僕の船。

理科のテストで周期表が出てきた時は、これを歌のように呟いて点を取っていたものである。

「水兵リーベ私の船？」

「何故一人称が変わっているのかな？」

「だ、だって私、ボクっ娘じゃないですもん！！」

ノエルの言っていることは、まったくもって理解できなかった。

ジンの顔もさすがに怒りの表情に変わって行く、それはもはや怒りを通り越して、“殺意”であったことは誰も知らない。

ジンは殺意を抱きながらも、ノエルに周期表を覚えさせるため、水

兵リーベ僕の船を復唱した。

「水兵リーベ僕の船、リピートアフターミー」

「水兵リーベ僕の船……先輩、リーベって何ですか？」

「僕の兄さんに対する気持ちのことだ。」

ジンはノエルの意味不明な質問に対し、適当な答えで返した。
「というか多分答えそのものがない気がする。なんやリーベって……」

「え？ 水兵さんが私の船にヤンデレるってどういう状況ですか？」

「帰っていいかな？」

「すいません調子に乗りましたごめんなさいお願いします。この学習能力のない貧相でみすばらしい障害めにどうか勉強を教えてください」

帰ろうとするジンを、ノエルは必死に止めるパート2

「よし、ならさっきのを何回も言って覚えろ。」

ジンに言われたとおり、何回もそれを繰り返し繰り返しひたすら言い続けた。
多分十回程度じゃ理解しないだろうから、百回は言わせることにしたという。

「水兵リーベ僕の船！水兵リーベ僕の船！水兵リーベ僕の船！水兵リーベ僕……僕リーベ水兵……！……あB L ひゃっはああああ……！！」

途中わけがわからなくなり、腐女子全開になるノエル。

「そんなカップリング聞いたことないぞ……！！」

「水兵さんが少年の船を眺めにくる度に少年の中で水兵さんへの思いが募ってきたのですよ」

「ノエルポエム！？」

ノエルも等々限界が近づいてきたのだろうか。

無理もない、かれこれ5時間は勉強している。

普段のノエルは、1時間も教科書とにらめっこをしたら、5時間はパソコンでネットをするのだ。

「実は水兵さんも船を眺めていたのではなくて少年のことを見に来ていたのですね、相思相愛だったのです。二人の想いが実ったのも束の間、水兵さんは戦争に……」

「おい障害、意識がなくなるのと喋れなくなるのどっちがいい？」

「すみません。少し興奮してしまいました。もうしません。だからそのユキアネサを鞘にしまってください。」

ジンはとっくに限界が来ていた。

今までそのユキアネサを手にとらなかったただけでも奇跡である。

ノエルも限界が近かったとはいえ、流石に反省し、真面目に机に向かい、視線をプリントに向けた。

はあ……ここからがようやく始まりなのか……とジンは改めて覚悟を決め、ノエルの方に視線を向ける。

「水兵リーベ……先輩ひとつ質問があるのですが？」

「なんだ？言ってみろ……」

「他のものはなんとなくわかるんですが……何で水兵がHHeなんですか？」

一瞬ジンには、ノエルが何を言っているのかわからなかった。

少しばかりの沈黙の後、ジンは思わず気の抜けたような顔で返した

……

「は？」

「いや、Hが何で水になるのかなー、と……」

「……………は？」

「兵がHeなのはわかるんですけど、Hと水に一体何のつながりが

……………」

「そこから教えるのかああああああああああああああああああああああああああああ……」

どうやらノエルは、“Hが何で”、“Heが何なのか”など、その“表す意味”そのものがまずわかっていなかったようである。

ここまでくれば、手のつけどころがない……ジンは断末魔のように

叫んだあと無言でその場を立ち去った。

しばらくの間、ジンとの連絡がつかない状態が続いたという、いわゆるノイローゼであろう。

冬休みであるというのに、ずっと寝込んでいたらしい、哀れジン、おまえはよくやったよ……

「キサラギ先輩、大丈夫かな……とりあえず明日からは……ツバキにでも教えてもらおう」と

ノエルの次の標的は、ツバキに決定した。

逃げるツバキ、捕まったらお前の冬休みはそこで終わりだ。

番外編：はーとふる教師現る。（前書き）

ハーデス先生初の番外編ですね。
本日はアークより”あのゲーム”が発売するということで、宣伝部長が登場します。

番外編：はーとふる教師現る。

いつも平和なブレイブルー学園。

そんなブレイブルー学園に、1日限りの教育実習生がやってくるといふ。

「教育実習生とかめんどくせーな……なんで俺がそんなやつ面倒を見なきゃいけないだよ」

ラグナは本日、その教育実習生の世話係をすることになっている。面倒事はいつも押し付けられる。主人公は大変である。

「にしてもこねえな、遅刻たぁいい度胸だ……来て早々俺が教育してやらあ」

「あー遅刻遅刻ー！！！」

ラグナがそんなことを思っていた時、遠くから何かがこちらに走ってきた。

噂の教育実習生である。思ったとおり遅刻のようであった。

「おい教育実習生、そのねじ曲がつた根性を叩き直してやる……と思っていたが、なんだよガキじゃねえか」

「すいませんすいません！あゝこんな大事な日にまで遅刻しちゃったよ……」

そう言つて少女は、そのアホ毛を揺らしながら何回も頭を下げる。
見たところ若く、というか若すぎる。

20代前半とかいうレベルではない、明らかに中学生であつた。

いやいやまでまで、この高校には実年齢100歳を超えた幼女がいる。あながちこいつも……

「何か言つたかしら？」

「つて校長！？」

噂をすればレイチエル校長がそこにいた。

人が心で思っている愚痴すら聞きとれるとは、物凄い地獄耳である。

「まあいいわ、あなたが教育実習生ね？名を名乗りなさい」

「はい！私はアルカナ女学院から来ました、愛乃はあと宣伝部長です！！」

一応説明しておこう、この愛乃はあとは”ブレイブルーのキャラではない”

アルカナハートという、エクサムが作りアークシステムワークスが関わっている格闘ゲームの主人公である。

なぜ他作品のキャラが出ているのか、それにはこんな理由があるのである。

「おいおい校長、こいつはブレイブルーのキャラじゃねえぞ？変なクロスオーバーは嫌われる傾向があっぞ」

「その件だけれど、きちんとした理由があるわよ、彼女がいるアルカナ女学院はここブレイブルー学園の姉妹校なのよ」

アルカナ女学院とブレイブルー学園は、学校法人が同じの姉妹校である。

ちなみに他の姉妹校には、ギルティギア学園、世紀末学園、戦国学園、バトルファンタジア学園という四つの姉妹校がある。

「それで、アークシステムワークス法人の森っていう人が、とりあえずブレイブルーと組ませれば宣伝になるんじゃない？という感じでラジオでも共演させていたので、この小説でも使うわ」

「なんだそりゃ！？」

「ってことでよろしくおねがいしまーす！！」

はあとはゲームが違うという違和感をも無視して元気よく挨拶をする。

あと300字もあれば馴染んでしまいそうな勢いであった。

「ではラグナ、1日この子の世話を頼むわよ、主人公同士仲良くなさい……あつ、変な気は起こさないように」

「誰が起こすか！つつかはあとか言っただな？てめえ本当に教師なのか？」

確かにアルカナハートのキャラの平均年齢は低いが、この愛乃はあとが教師なのはぶっちゃけて違和感しかない。

本編でも立派に学生をやっている。学生ではないキャラだっているはずである。

「私は生徒ですよ、でも教師という職業がどんなののかを体験してきなさい、ついでにゲーム宣伝してきなさいってグラサンかけた人に言われたんだ。」

「それ多分目的は後者だろうな」

ちなみにそんな1月13日は、家庭用アルカナハート3の発売日である。

前作のすっごい！アルカナハート2は、家庭用ではとんでもないくらい移植ミスでひどいことになっていたために今作は力が入るなにより格闘ゲーム界の宝庫、アーケシステムワークスが関わるのでなおさらである。

「とりあえずよろしくねラグナ先生！私今日一日すっごいがんばるからー！」

「まあがんばるのはいいが、あくまで主人公は俺だからな？おめえはゲストだからな」

ラグナはとりあえず自分が主人公であることをアピールしつつ、学校を回り案内を始めた。

「つつてもよお、おめえらあんまし男と話しないんだろ？つつか男いねえだろ」

「あゝ確かにねえ、私達のゲームって男子基本お断りなんだよねえ」

たくさん性の癖を持った女性キャラが多い、それがアルカナハートシリーズのモットーである。

男子などご法度、熱い男の友情などご法度、かつこいいイケメンやかわいいシヨタキャラもご法度。

あるのは女性、あるのは百合、それがアルカナハートである。ちなみにそれが恥ずかしいって人は、とりあえず神依選んどけ。

「でも別に私は男の人苦手ってわけじゃないよ、先生とだって作品が違えば恋人同士になったはずだよ」

「あれか？超機人とかタイラントオーバークレイクとかうますぎウエー……イブ！！みたいな感じか？」

二人の中の人、他作品では恋人役をやってるんだよ。

ス。ロボっていうんだけどね。

「そうそう！愛があればなんだって解決だよ！私は愛というものは世界さえ救えるって信じてるんだ！！」

「おいおいいつの時代だよそれ？おめえそれを世紀末学園のサウザーに言ってみろ、「愛などいらぬ」って帰ってくるぞ」

愛、それこそ愛乃はあとの真骨頂である。

愛さえあれば全てがうまくいくと信じて疑わない彼女、現に愛でなくても生きてきましたはい。

そんな他愛もない話をしていたら、あつという間に教室についてしまった。

「ってことでアルカナ女学院から来た愛乃はあと先生だ。みんな仲良くするように」

「愛乃はあとです！みんなよろしくね！！」

はあととは元気よく3年B組の面々に挨拶をする。

変わり者が多いこのクラスの奴らにこうも軽く挨拶をすますとは、怖いもの知らずとはこういうことを言うのだろうか。

「ちょっと先生、この子別作品のキャラじゃないですか？大丈夫なんですか勝手に作品増やして」

「番外編なんだから気にすんじゃねえよ、そんなことよりおめえはもう少しその胸を気にしろ」

「言われなくても気にしています！毎日胸のことばかり考えてますよ！！それも全部でめえのせいじゃ！！」

ノエルとラグナによる相変わらずのお約束を終えたあと、はあとに對しての質問タイムが始まる。

特にマコトあたりが目を光らせている、最初にあてると長くなりそうなのでまずは特に問題のなさそうな奴にあてることによろう。

「じゃあカルル、お前から行け」

最初に当たったのは、ここ最近出番のないカルルである。
最初の頃は出番多かったのに……

「はい、ええと……愛乃はあと教官殿でしたっけ？」

「なんでおめえそんな堅苦しいんだ？あれか？BBとアルカナの両作品を背負っている中の人のプレッシャーか？」

カルル・クローバー CV：沢城みゆき
ヴァイス CV：沢城みゆき

「違いますよ先生、僕の中の人は今とっても人気の声優です。ぶるらじも出たかったな」

「おいおいなに言ってるんだおめえ？」

わけのわからないことを言い出すカルルに、ラグナは思わずツッコミを入れた。

「ところでさカルル君、先にこっちからいいかな？」

「え？まあいいですけども……」

はあとはニコニコしながらカルルの方を向いている。
いったい何を言い出すのだろうか……

「うちの学校にね、カルル君みたいな格好をした人と、人形を姉さんと言ってる人がいるんだけど、ひょっとして知り合いかな？」

アルカナハートにはカルルに似たキャラが2人ほどいる。
ちなみにヴァイスはカウントされない。

「え？いいや知りませんよ、にしても人形を姉さんと……僕の姉さんを奪おうとしてる？……ゆるせないな……」

「え？いやいやそんなことは言っていないんだけど……」

突如ヤンデレモードになるカルル、はあとは思わず戸惑う。

ラグナ先生は、「心配するないつもだ」と言ってくれた。いつもあんな感じなんだ彼は……

はあとは気を取り直して、次の質問にうつる。

「じゃあ次はノエル、おめえが行け」

次に指名されたのはノエルである。
ブレイブルーのメイン女性キャラの威厳を見せる時がきた。

「ノエルちゃんか、え」とノエルだから……あだ名どうしようかな」

愛乃はあとの真骨頂その2、”あだ名”

今まで数々の人たちにあだ名をつけている格闘ゲーム界の有吉でもある彼女。

ちなみにその多くは迷惑しているとのこと。

（おいはあと、ちょっと耳を貸せ……）

（え？なにになに？）

そんな彼女に、ラグナ先生は突如耳打ちをする。

ノエルの顔が歪んだのがわかる。この銀髪は口クなことを言わないと……

（あいつのあだ名なんだがな、もう定番なのがあってな）

（え？なにになにおしえておしえて？）

（ナイチチ……っていうんだg）

「聞こえてっぞ銀髪こらあ」

ノエルは一つも聞き逃さず、鋭いツツコミを入れた。

毎度毎度、1日1回は胸のことを馬鹿にするラグナ先生。

「ナイチチ？ノエルって名前と特に関係ない気がするんだけどなあ」
「ばっかおめえ違うよ、あだ名って言うのは名前だけじゃねえよ、その人の特徴を見てつける場合もあるんだよ、そうすりゃあそいつのいい部分が見えてくることもある。あれ先生いいこと言っただけじゃね？」

「言っ
てねえよ！つか先生のは単なる侮辱じゃないですか！！」

なんとなくそれっぽいことを言うラグナ。ノエルにとっては迷惑でしかない話である。

はあとラグナの黒い部分など気づくこともなく、その言葉は愛にあふれていると信じて疑わず目を光らせて話を聞いていた。

「ラグナ先生すつごい！尊敬しちゃう！よしじゃあナイチチちゃんよろしくね！！」

「おめえもおめえじゃ――――！！」

ノエルはそのまま走って教室から出て行った。

みんな特に騒ぐことはしない、いつものことである。

「ナイチチちゃんよっぽど嬉しかったのかな、走りに行くほどだもんなあ」

「いや……それは違うと思うけれども……」

能天気ですべてを良い方向に考えるはあとに、ツバキが珍しくツッコミを入れた。

そんなツバキは、後で”ツバツバ”というあだ名をつけられ苦笑したという……

「じゃあ最後にはあと先生、何か言っておきたいことはあるか？」
「えつとね、私が言いたいことは……えつと、人という字は……」
「あゝそれな、別の有名な先生が言ってるから」

はあととは有名な方の3年B組の教師の名台詞を言おうとしたみたいである。

他には腐ったミカンとか有名なセリフが多い。
ちなみに作者は、どっちかというとGTOの方が好きである。

「じゃあ、とりあえずみんな、愛を大切にしようってことかな。」

そう言つて、はあと先生は語り出した。

愛があれば全てがうまくまとまる。愛は世界さえ救えるということ。当然現実では愛だけではどうにもならない、逆に愛が何かを壊すことだってあるであろう。

愛すること、だがそれを超越した時、それは憎しみとなるby八ザマの中の人が演じた何か

所詮は綺麗ごとすぎなかった、だがこの少女は……その少女の笑顔は……本当に愛で全てをどうにかしてしまいそうであつた。

「困った時は、愛つて言葉を思い出してみてほしいな……これは教えというより、私の願いなのかもしれないね」

教えではなく、それは願いだとはあとと言う。

はあとの講演が終わった時には、皆がそれに拍手をしていたという。ちなみにノエルも帰ってきている、そんでもって涙を流していたという。

こうして愛乃はあとの1日は終わった……

「今日一日いろんな事をやったけど、教師って大変な仕事なんだね。」

「まあな、てめえなんかまだ半人前だよ。」

ラグナは厳しめにキツくそう言った。

「私って教師向いてない？」

「んなことは言っていない、そうだな……おめえが教師になるんだとしたら……みんなから愛されるいい先生になれんじゃねえか？」

「ラグナ先生！やったー！！先生に褒められた！！」

愛乃はあとにとって、その言葉こそがなにより嬉しい一言だったという。

彼女の言葉、その願いはラグナにも十分伝わっていたのだろう、ラグナ自身、教わったことも多いとのこと。

ラグナもその笑顔を見て、思わず笑顔を見せる。

「あ、先生笑った!」

「ばっか、ちげえよ……」

そしてはあとは、少し間をおいてこんなことを言い出した。
感謝と愛を、その思いを込めた一言を……

「ねえ先生、握手しようよ!」

「ああん?めんどくせえな……握手なんてする必要ねえよ。」

「そんなこと言わないでよ、あのね、握手ってすつごく素敵なんだよ。武器とかなにかを持っていてもできないし、グーを握っていてもできない。相手を信じる気持ちがあって、初めてできることなんだよ。」

愛乃はあと言った、握手は他人を信じ合う心の現れだと。

武器を持っていたり、グーを握るということは戦っているということ、それは人と人が敵対していること。

でも、それらを手放し、握った拳を自ら開く握手は、戦う意思もない……信じあっているという証でもある。

ラグナはその目を、まっすぐなその目を見て、その手を開いた。

「はあ……しゃあねえな……がんばれよな!」

「うん!そっちもね!」

こうして、二人は握手を交わした。
作品が違えどジャンルは同じ、熱き友情が二人を取り巻く。

アルカナハート3、2011年1月13日発売。

「でもさあ、ブレイブルーの人気もすごいよねえ、私たちよりもあ
とからでてるのに男女問わずに人気があるなんて、エクサムなんて
婦女子向けに格ゲー作って大失敗してるくらいなんだよ、デモンブ
ライドっていう……」

「おめえ、それは言わない約束だろ……」

デモンブライドは、黒歴史である……

ちなみに私はジャッジが好きでした。

番外編：はーとふる教師現る。（後書き）

作者はB B以外の格闘ゲームは得意ではないのでアルカナは買いません、3月発売のCS2ポータブルに期待しています。

第44話：ラグナ、天国と地獄のギャルゲー（長編注意）（前書き）

第44話です。

結構書き込んだのでかなり長くなっているかもしれません。

44……不吉な数字ですね。

第44話：ラグナ、天国と地獄のギャルゲー（長編注意）

ある日ラグナは、ココノエに呼び出された。

最初はめんどくさかったので、無視してやろうと思ったのだが……
「来なければこの間の飲み会でのピーをピーしてピーしたことはらすぞ」とココノエ先生に放送で脅され、泣く泣く行くことになった。

「んだよ、たいした用じゃなかったらマジで怒るぞ」

ラグナは不機嫌そうに言った。

こちらとらてめえに関わってるほど暇じゃねえんだ。と言わんばかりの実際はぐーたらしているラグナ。

「実はな、最近私はゲームを作るのにハマっていてな、つい最近知り合いから、コミケとかで売ってはどうですか？と言われたのだ。」

そういつてココノエ先生は、真っ白なパッケージのゲームソフトをラグナに手渡した。

「んで、なんだよこれ？」

「世に売り出すのだ、問題があったりしてはまずいだろう？3日ほどお前にこの試作品を貸してやる。なのでプレイして毎日感想を私に言いに来い」

ラグナは最初は断ろうとしたが、そう言いだそうとした直後のココノエ先生の表情が怖くしびしび引き受けた。

無理に断ろうとしたらなにされるかわかったものではない、ココノエ先生はこの学校でも悪魔的な扱いを受けている。

ラグナ自身も、ココノエ先生に今までされてきたことを忘れてはいなかった。

「んで、これはどういったゲームだ？アクションか？ロープレか？それともパズルゲーか？」

「ギャルゲーだ。お前も好きだろ？」

ココノエ先生は普通に言った。

まあ確かに、二次創作の定番はギャルゲーであろう、絵やシナリオの独自性で売っていくのだ。

ちなみにココノエ先生は科学的な術を使い、ある程度一人で作つたらしい、この先生は本当に万能である。

ただ、その万能さをくだらないことに使わず、もっと良いことに使ってくれば本当に完璧なのだが。

「俺、ギャルゲーはあんましゃんねえぞ？俺の中の人ならやるかもしれないけども……てかおめえそういうのちゃんと作れんのか？」

「はっはっはラグナ先生、私の中の人にはな、国民的有名なあの”ときメモ”にも出たことがあるのだ。だからその方向ではプロフェッショナルだ。」

とまあ中の人とキャラ本人はあまり関係のないことではあるのだが、ココノエ先生はとても自信満々のようだ。その後20ページほどの説明書もらい、ラグナは授業が終わった放課後、少しやってみることにした。

「恋愛シミュレーションなあ、かれこれもう半年はやってねえからな……とりあえず説明書と……」

ラグナはゲーム前に、とりあえず説明書を読むことにした。そしてラグナは、その説明書を見て絶句した。というにも……

「こ……このゲームに出てくるキャラって……全員俺達ブレイブルー学園のメンバーじゃねえか……！！！」

そう、ココノエ先生はこの学校の面々を使ってギャルゲーを作っていたのだ。

まあここまで個性的なキャラが揃っている学校も珍しくはないのだが、なんでわざわざうちの学校なのだろうか。

……というかあの先生は、毎日一人一人を観察でもしてるのだろうか……そう思うとラグナ先生の背筋は凍りついた。

「おいおい勘弁してくれよ……てか主人公のデフォルト名”ラグナ”って……主人公は俺かよ……」

おそらく試作品のテストプレイを任されたのも、主人公がラグナだかららしい。

自分だと思ってやることで、リアル感が得られるとでも思ったのだろうか……

確かにギャルゲーは、自分の名前を付けることで満足する場合もある。

中には適当に名前を付けて、自分とは違う別の自分を作って満足する人もいる。

「はあ……とりあえずやってみるか……」

ラグナは主人公の名前や性別もすべてデフォルトにして（というかデフォルトが自分のままだったので）早々とプレイした。

ゲームが始まり、この学校を基にしたであろう舞台”蒼九重高校”の外見が移る。

そして主人公の後ろ姿が映り、そこで主人公が一言……

『ここが俺の新しいステージか……よっしゃあ！俺のデッドスパイクが火を噴くぜー！』

「ってなんだこの中二病全開の主人公は！？俺そんなこと言わねえよー！姿や技名はそうかもしれないけどさー！ー！！」

ラグナはさっそくこの主人公の不満をぶちまける。

ココノエ先生からは、ラグナは救いようのないくらいの中二病患者に見えているのだろうか……

とてつもないくらい嫌な思いを感じたラグナであつたが、これを見ると俺がどんな風にこれから হচ্ছে ちゃけていくのか気になったので、続けることにした。

『お、お主が拙者の隣でござるか、拙者はシシガミ・バングと申す！』

どうやら主人公の親友という役はバング先生らしい。

バング先生もまた充実に再現されていた。というかまあ語尾に「ござる」とかければ大抵バング先生になる気もするが……

『お、よろしくな！俺はラグナ・ザ・ブラッドエッジって言うんだ。』

ゲームの中もラグナもバングに挨拶をする。

なんのためらいもなしに積極的に人と付き合うことができる主人公、ギャルゲーの主人公は大抵そんなやつであろう。

『あつはつはつは！時にラグナ殿、この学校でさっそく良いおなごは見つかったでござるか？困ったら拙者に言うでござるよ』
「てか、これ人選ミスってねえか？バング先生が女性関係が広いっていうのはなんか引かかる感じが……」

主人公の親友の役は大抵、女性関係が広く主人公の恋をサポートし

てくれるものであろう。

それをバングがやるというのは……なんというか納得がいかなかった。

この小説でいうなら、そういう役はなぜか準レギュラーになっているハクメン先生あたりではなかったのだろうか。

「まあいいや、とりあえず続けるか……」

ラグナは小さなことは気にしないことにした。

とりあえず道なりに会話を進めていく。こういうゲームはまず女性関係を築くことから始める。

そして1日が過ぎ、学校2日目、ついに出会いが訪れた。

『はあ……はあ……おいおい二日目から遅刻だと……!』

ゲームの中のラグナ、いきなり遅刻である。

そういうのもなんというか、原作通りであった。

「ってしねえよ!!俺そんな遅刻魔じゃねえぞ……!」

走るゲームの中のラグナ、そんな時、一人の少女とぶつかった。

『いつつ……おいあんた、大丈夫か?』

少女はラグナの手を取る。その少女は綺麗な金髪を靡かせ、透き通るような緑色の目をしていた。

そう、最初に出会う少女とは、ノエルであった。

「おいおいよりによってナイチチかよ……」

ラグナがどのような女性が好きなのかは知らないが、とりあえずノエルに対しては少し反応は薄め。

ゲームの話に戻るが、ノエルはそのまま立ち上がり、ギャルゲー的な笑顔を見せラグナに話しかける。

『あなたも遅刻ですか？よかったあ、私だけだったらどうしようかな〜って思っていました〜』

「なんとなくだがこの女黒いこと言ってるね？」

ラグナはノエルには厳しいのか、一々その言葉に反応する。

ゲームの中のラグナはというと、『あはは、俺も仲間がいてよかった。』的なことを言っている。

『私、ノエル・ヴァーミリオンといいます。これから見かけたら仲良くしてくださいね』

ゲームのラグナは、『わかったよノエルちゃん』

現実のラグナは、「めんどくせえなこのナイチチは」とまったく正
反対な反応を見せていた。

ラグナ自身ノエルがいないことをいいことにナイチチ発言を連発し
ている。きっと今頃現実のノエルはくしゃみが止まらないであろう。

「とりあえず一人目か……キャラクター次第だが、最初はノエルを
攻略してみつか……」

と、なんだかんだでノエルを選ぶラグナ。

ここまでは学校でプレイしていたが、日も暗くなったので家でやる
ことにした。

ラグナ自身、このゲームにはそれなりにハマってきているようであ
った。

「さてと風呂も入ったしやることもやった。午後10時か……3時
くらいまでならできるだろう」

ゲームの時間もきちつと決め、いざゲームのスイッチを押す。

セーブした部分をクリックし、ゲーム内の時間で3日目からゲーム
は再開。

始まると早々、ノエルが話しかけてきた。

『おはようラグナ君、今日はお互い遅刻しなかったね』

今日は遅刻はなかったようだ。
そりゃあ学校始まっていきなり遅刻常習犯になってはたまらない。

『おいおいするわけねえだろ、朝俺が起こしに行つたんだから』
「って早いなおい！俺がやってない間にてめえらになにあつたんだ！？何おめえらいきなり朝家まで起こしに行つて一緒に登校するまで進展してんだよ！！」

ゲームのラグナは予想以上にフレンドリーであつた。まさか1日で初めて会つた女の子とそこまで行くとは……
話を進めると、たまたまノエルはラグナが住んでるアパートの下に住人だつたらしい、家もすごい近かつた。
始まって早々幼馴染的な感じになつてしまつたラグナとノエルであつた。

『おゝラグナ殿、さつそく女の子と仲良くなつたらしいでござるな』
『……！』

学校に行くと、ゲームの中からもむさ苦しさが出てくるバングが話しかけてくる。

ラグナも満更でもない、まだ付き合つところまでは行っていないが。

『さてとラグナ殿、拙者が3日死ぬ間も惜しんで集めた女子のデータを、お主に特別教えてやるでござるよ』

とまあ実際のバングに似合わぬ行為でラグナにデータを教えるバング。

似合わぬと言っても、その女子をつけまわすあたりは実際のバングと同じ。

ライチ先生辺りが、迷惑してるんじゃないのかな？

『一応聞いておくよ、変な意味じゃねえけど、いろんな人と仲良くなっておきたいし』

もはや女好きのチャラ男に見えてもおかしくないゲームのラグナ。そしてバングのデータを見て、誰々が攻略対象になっているかを見ている。

幼馴染系：ノエル

生徒会系：ツバキ

活発系：マコト

寡黙系：ラムダ

ヤンデレ系：ニユー

”美少年系：ジン”

「なんでジンが入ってるんだよ――――――」

ラグナも思わず突っ込まずにはいらなかったであろう、男であるジンの名前を。

これはココノエの悪意だと感じ取るのにそう長い時間はいらなかった。

そしてやっぱりというべきか地雷臭のするニユーの名前があった。きっとスクールデイズも真っ青な鬱エンドが待っているのだろう。

「このメンツじゃあ最初はノエルだな、ニユーはやめよう……」ココノエ先生のことで、ロクなシナリオ作ってねえだろ」

現実同様、ラグナはニユーを避けた。

どうせクリアするならラストである、嫌なことは後回しなラグナであった。

そんな時、一本の電話が鳴った。

「ん？ココノエ先生か……よう、ゲームやってるぞ」

「そうか、もしモンハンとかやってたらお前の家にも乗り込もうと思っ
っていたところだ。」

いきなり物騒なことを言い出すココノエ先生。

どれだけ俺の感想が欲しいんだこの人は……

「要件はそれだけか？心配しなくても一人くらいは攻略してやるよ」
「ああそのことだが、少しでも攻略しやすいようお前にヒントをやる
ろっと思っ
てなあ」

ココノエ先生が作るゲームだ。きっと複雑な作りになっているのだろっ。

普段は攻略本などに頼らないラグナであつたが、今回は普通に聞くことにした。

「このゲームで一番攻略しやすいのはキャラはだな、ニユーだ。」

ココノエのその言葉に、ラグナは思わず「おめえなんてことしてくれてんだ。」と言いつうになつた。

そりゃあ現実でも彼女はデレデレのヤンデレデレである。パワプロで言う姫野カレンのように告白したら100%YESが帰ってくるようなキャラだ。

それを充実に再現したのか、はたまた嫌がらせなのか、ココノエにしかそれは知らない。

「そうかよ、おめえがなんと言おうが俺はノエルを攻略するからな」
「ほうほうラグナ先生はノエルが好きなのか、メモメモ……」

「メモすんな馬鹿！！ニユー選んで鬱エンド行くよりはマシって意味だ！！」

ラグナの言動に若干焦りが見られる。ココノエは思わずニヤリとしたがラグナは知らない。

ちなみにココノエいわくニユールートは、入りは楽勝だが道を外れれば3日は立ち直れないほどの鬱エンドを用意してあるとのこと。

そしてニュー関連の鬱エンドは、全キャラクターに用意されている
というから驚きである。

「……………」

「まあがんばってノエルを攻略するのだな、ゲームでも……リアル
でもな」

「黙れそして死ね!!」

ラグナは力強く電話を切った。

そして気を引き締め、ノエルの評価を上げようと頑張る。
ゲームを進めていくと、ツバキやマコトとの出会い、そしてラグナ
が思わず身震いしたジンとの出会いがあった。

『ラグナくんか、これからは”兄さん”と呼んでもいいかな?』

ジンの言葉の後に選択肢が出たが、ラグナは迷わず”いやだ”を選
んだのは言うまでもない。

どうやら兄弟設定ではなく、ゲームのジンは男好きのコアな役回り
であった。

兄としては、なんかこう弟が他人にそういう風に思われていること
が兄として少し嫌な気持ちになった。

そして少し進めると、このゲームのラスボスであるニューと出会っ
てしまった。

『久しぶりだねラグナ！小学校以来じゃないかな？』

なんとニユーは小学校の時の同級生という設定であった。しかもその時はかなり仲が良かったという話ではないか。

このパターンは間違いなく”病む”、病む前提のような設定である。ラグナはそれなりの選択肢を選んだあと（ちなみにどれを選んでも評価が下がることはない）、これからはガン無視していくことを決めた。

さらば幼馴染、お前との甘いひと時はもう終わったのだ。

「そうだ、むやみに関わらなければどうってことはない、下手に関わるから変なルートに突入するんだ。」

ラグナは「会話しない」評価値に変動がない」という理論を勝手に作ったあと、ノエルを攻略するため自分のパラメーターを上げた。先生が自分の生徒を攻略するというのは少しかり変な気分になったが……

あの変態弟や関わったら殺されるような女を攻略するよりは我慢できると思い、そしてこのことは自分の中に納めるという形で再度ノエル攻略を決心した。

『ラグナくん、今日は楽しかったです！ありがとうございました！』

ゲーム内の時間が結構進み、ノエルとの関係はどんどん良好になっていった。

普段からからかっているだけあり、あいつの評価を上げるのは思いのほか簡単であった。

そう、現実でノエルに対してやっていることとまったく逆のことをしてやればいいのだから。

そう、逆のことをしてやれば……

『ラグナくん、今日は頑張ってお弁当作って来たんですけど……』
「……………」

攻略法を理解したはずのラグナの腕が止まった。

これは……このイベントは「食べる」を選んでもいいのだろうか……
いやいやこれはゲーム、きつとゲームの中で主人公をやっているラグナは、きつともものすごい味音痴に違いない。

現実ならその弁当をダイナマイトで吹き飛ばしているところだが、評価を上げるため「食べる」を選択することに……

デデデデーン

ノエルの料理を食べたラグナはその後意識を失った。

全治4か月の入院、パラメーターがものすごい下がった。

「ふざけんなあのナイチチー……………!!」

ノエルの高評価と引き換えに、せっかく上げたパラメーターとプレイ時間が台無しに。

4か月もあればそれ相応の評価は上げられたはず、断って下げた評

価をも余裕で取り戻せるほどの時間は十分あったはずである。

ノエルの料理は、パワプロで言う大型トラックに跳ねられ全治4か月の複雑骨折をするのとはほぼ同じ効果があった。

これはまさしく、地雷イベントであった。

「とりあえずちよつくら大きく戻ることになるが……セーブしたところに戻る。もう二度とあいつの弁当イベントに「食べる」の3文字は選択しない！！絶対にだ！！」

ラグナはお弁当イベントにだけ最善の注意を払い、攻略していくことに……

ちなみにあのあとにもお弁当イベントは3回ほどあり、断るたびに評価の下がり具合が大きくなってゆく。

だがラグナは罪悪感を抱くことはない、自分の身が一番なのだ。

それから少し達、一大イベントである告白も終え、物語は終盤に。

このゲームは最後に学校の一番大きい桜の木の下で、もっとも評価の高い女の子から最後の告白を受ければ晴れてゲームクリアとなる。どこかで見たようなシチュエーションだが、それもココノエらしかった。

ラグナ的には、このまま順調に行けばゲームクリアは楽勝なはずであった……

『ねえラグナ？この学校に入ってから全然ニューに話しかけなくなつたよね？ねえなんで？私何か悪いことした？ねえラグナ？どうしたのラグナ？ねえ』

ここにきてラスボスが動き始めた。

ニューに対しては、他のキャラ同様「忙しい」だの「ごめん」といった断りの選択肢ばかりを選んできた。

特に評価値に影響はなく、他のキャラなら自分のことをただのクラスマートフォン扱いをするだけである。

ところがこのニューは……何かが違った。

評価値は特に影響はないはず、だけどこいつの小イベントをやる度に感じた違和感の数々……

最初の方は『うんラグナ、また今度ね!』

ノエルの評価を上げていた中盤あたりには『うん……私とも仲良くしてね……』

そして終盤においては『……』とだんまりを決めこむ始末……

あれ……これって……

「……3時か……ココノエ先生起きてるかな……」

普段はココノエに電話すらしなないであろうラグナ。

だがこの時ばかりは、救いを求めるかのように電話をかけた。

「おう先生、どうやら楽しんでくれているようだな」

ココノエは起きていた。

そもそもこの人は毎日寝ないでなにかの作業をやるような人であった。

ラグナは安堵の表情を浮かべ、ニユーのことについて話す。

「あゝ、お前他の女子そつちのけでノエルばかり評価上げてたな？」
「ああ、だってむやみに関わったら評価下がったり、二股エンドとかそついう最悪な奴になるだろうが」

ラグナの言うとおり、下手に二股や三股をすると最終的にクリアになりづらい、他の女子にかまけるということは、評価値を上げるイベントを減らすことになるからだ。

中には2人同時クリアなど難易度の高いルートはあるものの、今回ラグナはいたって普通の個人ルートを通っている。

なのになぜ、ここにきてラスボスは動いたのだろうか……

「ニユーの場合は私が特に力を入れてあつてな、いわゆる超特殊な攻略対象になっている。」

ココノエのその言葉に、ラグナは嫌な予感しかなかった。

「まずニユーを沈めるために、必要最低限の評価値を上げておかなければならぬ、ニユーには特殊評価値のY値が隠しパラメーターとなっており、評価値が0であっても、そのY値がプラスになっていれば終盤、ニユーちゃん覚醒モードに突入するのだ。」

ラグナにはココノエの言っている意味がよくわからなかった。

要はまとめると、ニューには二つのパラメーターがあり、表で見える評価値と、実は裏でコソコソ変動しているY値。

そのY値がある程度マイナスになっていけば、ニューちゃん覚醒モードは回避できるという。

つまりラグナが何気なく選択していた「ごめん」や「今度な」という選択肢は、ニューのY値を大幅に上げていたのである。

「ちなみにだからと言ってニューにも関わってやれば解決、という甘い考えが私のゲームにはない」

「はあ？おいおいまだあんのか？」

「ニューとも関わってある程度の小イベントを消化する最中、現在付き合っている彼女に鉢合わせ……なんちゅうことがあった場合Y値は急激に上がる。」

「なんだそりゃーーーーーー！！」とラグナは夜中にも関わらず叫んだ。

ニューに対してもある程度の評価を上げておくだけでなく、今の彼女を隠しながら評価を上げるというその難易度の高さ。

それが全ルートに存在するのだから驚きである。気配りこそがこのゲームのクリアに近づくのである。

「にしても3年目の1月、ここでのニューちゃん暴走モードの片鱗を見たとなると……これは神頼みに近いな」

「おいおい、もしその暴走モードが完全に発動してしまった場合は……」

「最後にどんでん返しが待っている。ではラグナ先生、健闘を祈る。」

そういつてココノエは電話を切った。

ラグナはしばらく部屋の天井を見ていたという。

セーブしていた部分も1か月前、しかもそこらにニューとの小イベントは発生していない。

これは……もしかしてのもしかすれば……ニューがノエルを……

「させるか……させてたまるか！！先生としてそれは許せねえ！！先生としてそんなことさせてはならねえ！！」

ラグナは意を決した。

とりあえずここでの選択肢は「うん、そうだな！卒業したらどっか行くか！！」を選択。

少しだけだが評価値は上がる。だが肝心のY値はどれだけ下がっただろうか……

1月の中盤、終盤……2月に入りある程度良好、ノエルとの関係も特に変化はない、マックスな状態である。

ここまでくれば、後は大丈夫……ノエルとの雪山イベントを見終わったあと……その思いは打ち砕かれた。

『……………ラグ……………ナ？』

（見つけた……………！）
……………！！）

最後の最後で映り込んでしまった、ニューの1枚絵。

評価値は - 50、Y 値はもう天井を突破しているのではなかるうか……
そのニユーの眼にハイライトがなかったことを、ラグナは鮮明に覚えて
いる。

「おいおいマジで冗談じゃねえぞ、10時に初めてもう朝の5時だよ、後1時間ほどで出勤なのに寝てないよ、俺のここまでの時間どうしてくれんの」

ラグナにとって最も恐れていること、それはここまでのめり込んで
おいて最終的に鬱エンドに突入することである。

これは俗に言う、最初は乗り気だったのに出だしが悪くてトラウマ
化し、ゲームをやるたびに変な感覚が過ぎりゲームができなくなる
あれ。

それは……なんとしても避けたかった。

「くっそ！あと1か月、あと少して卒業式！そしてノエルからの告白を受け取れば全てがクリアー！！」

ラグナに焦りが見え始める。だが度々移りこむ目にハイライトのないニユーの1枚絵。

下がっていくニユーの評価値、天元突破し続けるニユーのY値。
これは……まさかのヤンデ……なんて思っている矢先。

『ラグナくん……卒業式さびしいな……最後の最後で私……』

と、もはやグッドエンド寸前のノエルの独り言の後……

『ノエルちゃん、今日ちょっと買い物付き合ってくれるかな？』

全てを突き落さんとするニューの一言が画面の外のラグナを凍りつかせる。

「たのむノエルと会うイベントを！！ノエルに会わせてたのむ！！
お願いしまー！！！！すす！！」

そのラグナの思いが通じたのか、学校帰りにその二人と鉢合わせするというイベントが発生。

これは最後のチャンス、ここでもしゲームのラグナが「じゃあ明日学校でな」と選択肢なしの一言を言い放った瞬間アウト確定である。

路地裏でノエルがニューの殲滅されることだろう、ブレイブルー本編のように剣でグサグサだろう。

たのむラグナ、ニューの変化に気づいてくれ！！

選択肢

1『俺もちよつと用事があつて、一緒に行つてもいいかな？』

2『明日学校でな』

3『ニューには伝えておかなければ……』

「選択肢が出た！とりあえず2は選べばアウトだ……1か3……1か……3か……」

1を選べば、ニユーはノエルを襲うチャンスを失いそのまま卒業式イベントに以降するかもしれない。

3は…… どのなのだろうか、もしそれを言ってしまうえば、ニユーはもしかしたら俺ごとノエルを……

出勤時間的に、セーブしている部分まで戻る時間はなかった。もしこのまま学校に行けば、続きが気になり仕事どころではない。

そしてゲームの中とはいえ、ノエルにここまで入れ込んでしまった以上、どうもあいつの顔を見てしまうと何かが目覚めてしまいそうだった。

そしてニューを見るたびに逃げ出す自分が見える。

迷った末にラグナが選んだ最後の選択肢は……

「3だ！この際ニューと完全に決別しよう！！現実の本人にはとりあえず一言謝っておく！！」

現実のニューは関係ないが、ラグナは究極の選択である3を選ぶことに……

そしてその結果、ラグナを襲った結果とは……

『……うそ……ウソって言うてよ!! 嘘だと言うてよ!! ねえ!! 嫌!! いや!!』

案の定壊れました。壊れてしまいました。

ゲームをプレイしているラグナが凍りついたのがはつきりとわかる。そのままニユーはハイライトのない眼で血の涙を流しながら、ソードサマナー型の包丁を取り出した。

「え！ちよっ！？マジでこのルートなのか！？おいおいココノエ先生！！そりゃあなんでもベタつてもんが……」

そんなことを思っていた時、疾風がごとく一人の男が現れた。

『ラグナ殿！！ここは拙者が受け持つ！！だから二人で幸せになつてくるでござるーーーーー！！』

なんと親友役のバング先生であった。バング　な瞬間であった。ゲームの中のラグナは『すまねえバング！生きて帰ってこいよ親友！！』

現実のラグナは「バング！お前が代わりに死ね！！」とまったくもって正反対の一言。

今のラグナは必死であった。ゲームだが必死であった。そして電車に乗った先の丘で、白い仮面を被った聖者に出会い、二人のキスシーンが映し出される。

ラグナ自身、思わずその画面から目をそらしてしまった。

「俺とノエルが……いやありえねえありえねえ!!」

そして卒業式イベント、そこにバングとニユーの姿はなかった。
後から聞くと、二人とも行方不明になってしまったようだ。

まさかのバング×ニユー？そんなことを思いながら、そしてバング
に申し訳ないことをしたとも改めて思いながら……

ラグナは最後のシーンを、目を見開いて見届ける。

『ラグナくん……その……』

顔を赤らめてもじもじするノエル、その姿ははつきり言って可愛かった。

ラグナも眼をそらしたくなかったが、最後なので我慢して見ることに

……

そして運命の瞬間……

『私……ラグナくんのことが……ラグナくんのことが!!』

グサツ……

……あれ？今何か不快な音が……

そして次のシーンに行くと、ノエルの後ろには、血だらけで真つ赤な眼をしたニューがそこにいた。

え？

ラグナは言葉にできないような表情で、一言こぼらした。

「ラグナ……くん……私あなたが……す……」

ノエルは最後にそう言って、静かに息を引き取る。

ゲームのラグナも、画面の外にいるラグナとほぼ同じ表情でその場に立っていた。

動かずしゃべらず、現実を受け入れるにはもう少し時間が必要だ
 といったかのように……ただそこに立っていた。

そして、ゲームをやっている現実のラグナはというと……

「う……うわあああああああああああああああああああああああああ！」

早朝、ラグナの悲痛とも言える叫びがこだました……

助けて、ココノエ博士！！

「そうだな、あの場面は実は2を選べば正解だったんだ。そしたらノエルは少しの怪我で済みニューとも和解できる。ちなみに1を選ぶと二人とも殺されるノーマルバッド。ラグナ先生も運がないな、まさか一番ダメージの来る選択肢を選ぶのだから……」

あの部分は2が正解であつたという、ココノエは非常に鬼畜なゲームを作っていたようだ。

ラグナは生気が抜けたような顔で、学校に行ったという。

昼過ぎあたりにハクメン先生がラグナのヤバさに気づいたのか家まで送ってくれた。

ラグナはその後、次の日の朝まで悪夢にうなされていたらしい……

ちなみに……

「ノエルちゃん、今日はオカルト部の活動をやるよ」

「うん！すぐ行くから待っててニューちゃん！」

現実の二人は、結構仲がいい……

第45話：鬼は外、福は家（前書き）

第45話です。

豆を投げることでおなじみ節分がやってまいりました。
私はどっちかというと食べる方が好きです。

第45話：鬼は外、福は家

2月3日は節分……

ブレイブルー学園の教師たちには、今日1日鬼のお面をつけるというルールがあった。

生徒達の邪気払いを一齐に受けることで、互いに交流をし合おうということらしい。

「にしても生徒から豆を投げられるとは嫌な話だなハクメン先生」

ラグナも教師なので、鬼のお面を頭につけている。

紙と輪ゴムで作られた良くあるタイプのお面、すぐに壊れるあれである。

そしてハクメン先生はというと……

「今日の私はハクメン先生ではない、オニメン先生だ。」

いつもの白いお面ではなく、鬼のお面を被っていた。

ラグナたちの紙のお面ではなくハクメン先生のは特別仕様で、結構強度があり立派なやつである。

なんでも紙のお面だと素顔がバレるとかなんとか、もう1部の人にはバレているというのに……

「あんだなんかいつも以上にこええな、本物の鬼みたいだぜ」

本物の鬼ならティガー先生がいるが、ハクメン先生も十分鬼に等しかった。

ラグナはかなり気楽そうにしていた。適当にそれなりに節分イベントをやっておけばいいというセールス気分。

豆を投げてる生徒に、「がおーー」などそれらしいことをやっていれば良いのだろう、それが仕事である。

そんなラグナに、ハクメン先生改めオニメン先生は忠告する。

「ラグナ先生、言うておくが落花生は当たれば予想以上に痛いものだぞ？ 普段から下らん事ですぐ怒るお前のことだ。少しばかり痛いのが飛んできて本気になったりするんじゃないだろうな？」

その言葉を聞いて、ラグナは珍しく大人な対応で答えた。

「はっはっはオニメン先生よお、俺だってこういうイベントは楽しく生きたいもんだ。ちよつとやそつとじゃ怒らねえよ」

ラグナ先生はニツコリと大人な笑顔を見せた。

余裕に満ちたその顔は、まさしく聖者のようにも見えた。

「そうか、それなら安心だな。」とオニメン先生が言ったその時であつた。

「あ、鬼を発見しました！！」

最初の刺客はカルルのようだ。

豆を紙皿に乗せてこちらに向かってくる。

ラグナは相手が子供なのをいいことに。

「だっはっは！さあこいや！！鬼が相手じゃこらーーーー！！！」

とセールス気分で鬼を演じた次の瞬間……

「鬼を退治して豆をたくさん食うニヤスーーーー！！！」

とタオカカが奇襲をしかける。

タオカカはラグナに向かって全速力で豆を投げる。

必殺ネコ魔球で飛んでくるのが落花生だと思ってくれればいい。

「ちょ！痛って！！ちょおま！！待ておい！！！」

ラグナはタオカカがマシンガンのように投げまくってくる落花生を真正面から浴びる。

オニメン先生は隣で「だから言ったのに」といわんばかりの顔をしている。

さっきまで余裕を見せていたラグナ先生はどこに行ってしまったのだろうか、徐々にラグナ先生の顔が歪む。

「猫さん！後は姉さんに任せてください！！ヴォランテキャノンス
タンバイ！！」

カルルはそう言うと、姉さんことニルヴァーナを正面に召喚した。
ニルヴァーナの手には超巨大な落花生、これをヴォランテの約二倍
の速度でラグナに向かって打ち放った。
落花生とは思えないほどの威力を持ったそれは、とんでもないスピ
ードでラグナに向かっていく。

「ぎゃああああああああああああああああ！！ぎょわあああ
ああああああああああああああ！！」

ラグナは顔を真っ青にしながら、その落花生から逃げることがで
きず。顔面直撃で絶叫しながら遠くまで吹っ飛ばされた。
がしゃーーーーーん！と大きな音が聞こえた。豆を投げられた
というレベルでは済まないだろう。

オニメン先生は、ただそれを遠く見ていたという……

「やった！鬼を倒した！！猫さん次は別の鬼を倒しに行きますよ！
！」

「了解ニヤス！！」

そう言ってカルルとタオカ力は、その場を去って行った。

とてつもなく痛い目にあつたラグナの気持ちなど知る由もなく……
その達成感を抱いたまま、次の鬼の所へ向かった。

「……………」

ラグナはカルルとタオカカがいなくなった後、無言で、どうにも言えない表情でオニメン先生のところまで戻ってきた。
オニメン先生もさすがに心配し、ラグナ先生に話しかける。

「だ……大丈夫かラグナ先生？」

その言葉に、ラグナは静かにこう答えた。
怒りと、その他たくさん感情を込めながら……
ゆっくりと口を開いた。

「……なあ？鬼ってさ、ただ豆をぶつけられるだけの存在じゃねえよな？鬼が襲ってくるから豆をぶつけて退けるんだよな？」

その言葉に、オニメン先生は「まあな」と一言……
そしてラグナは言葉をつづけた。

「つまりさあ、俺達だって奴らに攻撃を仕掛けてもいいってことだよな？」

その言葉に、オニメン先生は「うん」と一言……
ラグナ先生はそれを聞き、先ほどの笑顔とはまた違った笑顔でこう一言漏らした。

「……………殺るわ」

先ほどまで大人対応をしていたラグナ先生が、死んだ瞬間であった。オニメン先生は言うだけ無駄と分かっているながらも、「お前少し前に言ってたこと思い出してみろ？」と一言ツツコミを入れた。

ラグナはすぐさま気持ち切り替え、大人な対応モードから戦争モードにモードチェンジした。

これから自分に豆を投げってくるものは……容赦なく襲うことに……そうしなければ生き残れない、そうラグナは自分に言い聞かせた。

「おら……………鬼だ！！てめえらを喰い殺すぞ
こら……………！！！」

数分後、ラグナは容赦なかった。

豆を投げってくるモブキャラにすら容赦がない、カルルやタオカカのようなプレイヤブルキャラにならまだわかるが、モブキャラすら今のラグナには敵に見えるらしい

ゲージを50消費して、減っていくHPをも気にせず、ただ豆を投げる生徒の所へと襲いかかるその姿は、まさに鬼であった。

「うええええええんラグナ先生怖いよーーーー！！！」

戦いなど知らぬモブキャラの恐怖の雄たけびである。

彼等は戦うことを望んでいるわけではない、ただイベントを楽しんでいるだけである。

はずだが、ラグナはそんな人たちにすら容赦なくなっていた。

「おいラグナ先生、さすがにやりすぎではないか？モブキャラ相手にブラッドカインで突っ込んでいくな」

ハクメン先生は、初期の優しいラグナを取り戻そうと言葉を口にするが、ラグナにはもはや人の心が無い。

鬼の心、それがラグナを支配していた。

殺らなければ殺られるのだ、豆一つにしろそれは狂気なのだとラグナは自分に言い聞かせる。

「うるせえよ、てかあんたはまだ豆投げられてねえからそんな余裕見せられるんだ。なんで俺ばかり狙われるんだよ」

ラグナ先生が言うとおりここ10分ほど、生徒たちはラグナの隣にいるハクメン先生を狙わない。

まあ紙のお面をかぶっているラグナよりも、迫力ある鬼の面をかぶっているハクメン先生を狙う理由はないであろう。

相手にしたら間違いなくただではすまない、それはモブキャラでも理解できることだった。

「まあ私は貴様みたく大人げないことはせんがな、豆が飛んできたら華麗に受け流す。」

ハクメン先生が余裕な発言をしていたその時、とうとうハクメン先生に豆の魔の手が。

モブキャラ二人が、ハクメン先生に豆を投げてきた。

「ハクメン先生！鬼はそとーーーーー！！」

モブキャラがハクメン先生に鬼はそとをしたその時、ハクメン先生は飛んでくる豆を見据えて動作を取った。

そしてゲージを50（勾玉ゲージを4）消費し……

「虚空陣奥儀……雪風！！」

ハクメン先生は飛んでくる豆を当身で取り、刹那の速さでモブキャラ二人をカウンター

モブキャラ二人は綺麗にその場に倒れた。

その間、わずか数秒……豆を投げた故に強烈な一撃をくらう羽目になったモブキャラ2名

「ふう……危なかった……」

「つておい……！……！……！……！……！あんたも人のこと言えねえじやねえかよ！何モブキャラに向かって雪風かましてんの！？こいつら大丈夫なのか！？」

ラグナはハクメンの行動に思わずツツコミをいれた。

モブキャラはぐったりとその場に倒れている。雪風の威力は計り知れないのだ。

ただでさえゲームでも3千ダメージほど食らう技だというのに……

「大丈夫だ。これはみねうち……傷一つ付けずにその迫力だけで相手にダメージを与えたのだ。実際に痛みはないが、そのあまりの迫力で強烈な痛みを受けたと錯覚し、気絶をしただけにすぎん、そのうち眼を覚ますだろう……」

「結構本気じゃねえかそれ！！」

ハクメン先生の長々しい説明にラグナはまたツツコミを入れる。

それから少し歩き、「ここからは別行動をしよう、それでは達者だな」とハクメン先生はどこかへと去って行った。

ラグナはハクメン先生を見送り、辺りを十分に見渡した後、静かに歩き始めた。

そして少し経った後、BGM: Under Heaven Destructionが突如流れ始めた。

「兄さん……ようやく会えたね」

「ジン……てめえ……」

このBGMが流れたとなれば、それはラグナとジンが戦うということ。

沈黙が二人を襲う、ジンの手には大量の落花生……こいつもまた……敵ということであった。

「さて、まずはBGMを止めよう。」

「ってこれラジカセかよ!!」

ジンは律義にラジカセを止めた。

そしてすぐさまラグナの方へと目を向け、落花生を一つつかみ取る。そしてそれを指ではじき、落花生がラグナの頬をかすめる。

「ぐっ!」

頬から血が垂れ落ちる。今のが顔面に直撃していたらアウトだったかもしれない。

ジンが発射する落花生は、氷翔剣に匹敵するほどの威力を誇っていた。

「おいおい、まさかの節分イベントでマジモードってか?上等だぜジン……」

「あっはっはっは、いいねえ……いいよこの感覚本当に忘れて

たよー！！だってこの小説のおほほんとした空気じゃあ、兄さんを殺すとかいうシリアス展開に持っていきづらいじゃないか、いつもいつも兄さんと叫び向かって行つてはシザーで吹き飛ばされるといふテンプレギャグキャラクターのような扱いはもううんざりなんだよ兄さん！！」

この弟は、自分というキャラクターをきちんと理解していらつしやるようで……

ということはいつにこのハーデス先生も、シリアスな展開を迎えることになるということなのだろうか

ただ兄さんを殺す道具が落花生というのが、シリアスなその雰囲気**が**ぶち壊しているような気もするが……

「じゃあねえな、久しぶりに……遊んでやるよジン！！」

ラグナは剣を構えた。落花生VS剣ではジンが圧倒的不利な気もするが。

そんなジンはというと……

「さあ殺ろうか兄さん！！」

まるでそのことに気づいていない、この弟は落花生で剣を持ったラグナに勝てる見込みでもあるのだろうか……

とまあそんなアウェー勝負が始まるうとしていたその時……

後ろから落花生がビュオンと飛んできて、BGM：Awakeni

ng The Chaos が流れ始めた。

「ラグナ？あゝやっぱりラグナだゝ！！」

このBGMが流れたとなれば、それはニューもしくはラムダが登場するということ。

ブレイブルー本編でも屈指の人気を誇るこの曲が流れる中、ニューは静かに降臨した。

「さて、じゃあBGMを止めよう」

「おめえもかい！！」

ニューはしっかりとラジカセを止めた。

そしてよくよく見ると、ニューは落花生を持っていなかった。ということは、さっき飛んできた落花生は……

「あゝ、このことか」

と、ニューが手を前にやると、なんと魔法陣から落花生が召喚されラグナを襲った。

いつもなら剣が召喚されるところを、落花生が召喚されるというななんとコミカルな風景であった。

「剣じゃねえのかよーーーー！！」

「節分スペシャルなんだよ、落花生サマナーっていうんだけど」

ドライブ名を言われると益々調子が狂う、タオカカが聞いたら物凄く喜びそうなドライブ名であった。

ところでみなさん、何かを忘れていないだろうか、ニューが登場したことによって誰かが蚊帳の外状態になってしまったことを……

「貴様！！僕と兄さんの勝負に割って入るなーーーー！！」

噂をしていると、ジンがたまらず入ってきた。

このままではいいところをニューに取られてしまう、ジンはニューを放っておいてラグナに駆け寄る。

「兄さん！こんな眼帯女放っておいて僕と殺し合おうよーねえー」

それを見て、ニューも駆け寄ってくる。

あれ、これっていつもの展開じゃね？

「ラグナーこんな変態ブラコンなんて放っておいて、ニューと殺し合おうよー」

これにはさすがのラグナもたまらず、とうとうプチキレた。

剣を思いっきり振り上げ、そして距離を取って二人へと突撃した。

「てめえらはやっぱりテンプレのまま死ねやシザーーーーーー！
ーーーーー！」

結局シリアスな場面など訪れず、ジンとニューはいつものように遠くまで吹っ飛ばされていった。

にいさーーーーーん！だのらぐなーーーーー！だの聞こえてきたが、ラグナは知らぬふりをしてその場を立ち去った。

節分イベントが始まってだいぶ時間がたち、ラグナも落花生を持つ生徒を見かければ襲いかかるの繰返しをしていた。

今のラグナには、敵はいなかった。

「殺られる前にやるってなあ、次の獲物はどいつだあ……」

「はっはっはオニメン先生よお、俺だってこういうイベントは楽しく生きたいもんだ。ちよつとやそつとじゃ怒らねえよ」と言っていたラグナ先生はどこへやら……

そして廊下の角へさしかかると、落花生を持つ手がちらつと見えた。待ち伏せか……そう感じ取ったラグナ先生は、強行突破作戦に移行することにした。

相手がこちらに落花生を投げる前に、追い払うという我ながらナイスな作戦であった。

「おらあああああああああ！そこにいるのはわかってんだ

ということを思っていた矢先、ツバキとマコトにそれを見られてしまった。

ラグナの顔は一瞬にして真っ青になった、血の気が引いたラグナ。ノエルも頭の痛み、そしてこの状況を認識して、少し間をおき、徐々にその眼に涙を浮かべる。

「え？ちよ……ノエルさん！？」

ラグナはとんでもない表情を浮かべ、すぐさまノエルから離れる。ノエルはというと、泣くというレベルを通り越して泣きじゃくっていた。

「う……うええ……ええええええ……」

今までの「うわああああああああん！」や「ばかやろー！……」などとはまた違った泣き方。この泣き方は、一番最悪な泣き方であった。笑いでは済まされない、そんな泣き方でノエルは泣いていた……

「いやあのよ、その違うんだよ、おいノエル頼むから泣くのをやめ……」

ラグナがノエルをなだめていた時、グイツ……と誰かが後ろから襟をつかんできた。

後ろを恐る恐る振り返ると、節分の日だけに鬼のような形相をしたツバキがそこにいた。

これこそが、本物の鬼なのだろうか……

「先生、ちょっと外出しましょう……三人でゆっくり話しましょう……」

その”ゆっくり”は、どれくらいゆっくりなのだろうか……

いつもは笑顔のマコトも、この時ばかりは真剣に怒っているのがわかった。

ノエルもゆっくりと立ち上がり、ミューになった時とはまた違う、涙を浮かべながらキッとラグナを睨みつけていた。

「ぐす……責任とってもらいますからね……ラグナ先生……」

この時のノエルは、今まで見たどのノエルよりも怖かったという……

「え……ええ……」

ラグナはあんぐりと口を開けたまま、ツバキ達に外へと連れて行かれた。

その後ラグナがどのような目にあっただかは誰にもわからない……

第46話：バレンタイン大作戦（前書き）

第46話です。

誕生日迎えた人があんまし目立ってませんがそこら辺はスルーで。

第46話：バレンタイン大作戦

2月14日、今日は女子が男子のために人一倍頑張る1日。そう、今日はバレンタインデーである。

ブレイブルー学園は、朝からバレンタインで賑わっていた。彼女からチョコを貰う男子、そしてもらえない男子、義理チョコで妥当している男子。

そんな中、この作品の主人公であるラグナ先生はというと……

「未だに……1人からもチョコを……もらえない……」

なんと意外なことに、ラグナ先生は朝が始まってから昼休みまで、一人からもチョコを貰えていないのだ。

顔もそこそこ整っていて、尚且つ人気者のイメージがあるラグナ先生だが、なぜかチョコを未だに一つも貰えていない。

その理由、その真意はもう少ししたらわかることである。

「バレンタインデーキス バレンタインデーキス」

と、落ち込んでいるラグナの元へ、耳障りな声でのバレンタイン・キスが聞こえてくる。

歌っているのはジンである。徐々に笑顔でラグナの元へ近づいてくる。

ラグナは見て見ぬふりをするが、3cmほどまで近づいてきたところで見て見ぬふりも限界が来た。

「兄さーん、今日はバレンタインだねー」

ラグナは、「うん、そうだな」と一言……

ジンはそう言ったあとにラグナの周りを一周、そして一周また一周。ラグナの怒りのゲージが徐々に上昇していくのがはつきりとわかる。

「おい、言いたいことがあるなら言えればいいだろうがこのクソ弟が……」

ラグナはイライラしながらジンを睨む。

ジンは笑顔を絶やさず、そして言いたいことを言った。

「今日はバレンタインと同時に、僕の誕生日なんだよ兄さーん」

「ああそうだったな、おめでとーじゃな」

そう言っただけでラグナはスタコラと去ろうとしたが、ジんがしがみ付いてきたため去るに去れなくなった。

しがみ付くジんを振り払おうとするラグナ、物凄くしぶといジん。数分間の死闘の末、ラグナはとうとう観念して、疲れた顔してジんを見て一言。

「はあはあ……んで何をしてほしいんだよ？プレゼントでもよこせ

ってのか？俺は今ものすごくテンションが低いんだよ……」

ラグナがそう言うと、ジンは首を横に振った。

そして大きな袋から、何かを取り出した。

良く見ると、チョココのようなものである。ジンはそのチョココをラグナに渡した。

「これは僕からの気持ちだよ兄さん、兄さんがチョココ成分が足りてないと思ってさ」

いくら1つもチョココを貰えてないラグナでも、ジンからもらうチョココにはさすがに抵抗した。

男から男にチョココ？それってバレンタインって言わねえんじゃないの？

とか思ったりもしたが、とりあえずチョココが欲しかったので、プライドを押し殺してもらったことにした。

もらったあとにさっさと逃げればリターンも求められないだろう。

「まあ、もらったとくわ……にしてもわざわざ店で買って来たのか？」「いやいやあ、もうかれこれ74個ほど女子からもらったからさ、1つくらい兄さんに分けてもいいかなあなんて思って、兄さん朝から元気ないし、恐らくチョココを貰えてないんだなあと思ってさ」まあ遠慮しないでた」

ラグナはいつも以上の力をこめてシザーをジンにぶっぱなした。

ジンに情けをかけられたこと、自分とジンのモテ具合の差に絶望したこと、チヨコを貰えないで絶望している自分に比べジンは余裕でいっぱいであったことに異様に腹が立ったこと。
そのような感情が混じった、渾身シザーであった。

「もうてめえの顔なんて二度と見たくねえ！！今度その大量のチヨコ俺に見せびらかしたらただじゃおかねえからな！！」

ラグナの魂の叫びがこだまする。非常に情けない叫びだったことは触れないであげよう。

ジンによって予想もしないほどのメンタルダメージを負ったラグナは、フラフラしながら職員室に入り、机でぐったりする。
そんなラグナを見かね、ハクメン先生が話しかけてきた。

「ラグナ先生よ、お前も何かと大変なようだなあ」

ハクメン先生も元気が無さそうであった。

ひよっとしてひよっとしたら、と思いラグナはバレンタインの話題を振る。

「ハクメン先生、もしかしてあんたもバレンタイン関係で……」
「やはりか……私も今日という日は敗北の二文字が重くのしかかっている。」

ハクメン先生もバレンタイン関連で落ち込んでいた。

人の不幸で笑顔になるラグナ、その姿を絵にすると多分殆どの人が幻滅するであろう。

ラグナは同士がいたことに少しばかり元気を取り戻し、ハクメン先生に話しかける。

「んで、あんたは今どんな状況なんだよ？」

「現在、テルミと獣兵衛とヴァルケンハインと私でもらったチョコの数で勝負しているわけだが、獣兵衛は41個、テルミは32個、ヴァルケンは29個……」

「へえ、で？」とラグナがハクメンに質問する。

ハクメンは元気なさそうにこう答えた。

「私はまだ21個しかもらえていない、私が金髪美少年の頃は今頃74個ほどもらっているはずなのだが……全く時の流れというものは恐ろしいものだ。私が学生時代のころはテルミに勝っていたのに、あいつが不良を卒業してから私よりも人気が出始めた。ヴァルケンハインにも負けるとは私も衰えたものだ。ああそう言えば今日は私のたんじ……」

ラグナはブラッドカインのモーションをずっとばし、零距离でハクメン先生の闇を喰う。

同士だと思っていたハクメン先生に裏切られたこと、衰えたと言いながら20個以上ももらっていたこと、そしてそのことに対して落ち込んでいたことに異様に腹が立ったこと。

そのような感情が入り混じった、渾身の闇喰いであった。

「てめえを同士だと思ったのが馬鹿だった……俺の希望を返せー
ーーーー!!」

ラグナの魂の叫びがこだまする。非常に情けない叫びだったことは触れないであげよう。

ハクメン先生によって予想外の追い討ちを受けたラグナは、元気なさそうに次の授業の準備をする。

そんな時、職員室にニューが入ってきて、ラグナの方へ向かってきた。

「ラグナ」

いつものラグナなら追いやるところであろう、しかし今日は違った。きつとニューなら……ニューならチョコをくれるはず!!

そう思って、嫌な気持ちを押し殺し、ニューに笑顔を振る舞うラグナ。

「おう、どうした？」

不器用な笑顔であった。そんな顔にも特に不信感を抱かないニュー。そしてニューは、ためにためていた一言をラグナに言った。

「バレンタインのチョコなんだけど、今回はあえて渡さないことにした」

そんな……

今こいつ、とんでもないことを言い放った。

ラグナの顔が凍りついたのがわかる。

「チョコを渡してもラグナ大した喜ばないでしょう、だからあえて渡さないことで、私の背中を追っかけさせることにしたんだよ。普段からラグナを追っかけている私の行為を再認識してもらおうと思っただけ。ラグナ、だから今回は逆チョコってことにしようよ、そしたら今までの私の気持ちかわかる」

ラグナはニユーをシザーで吹き飛ばす……ことはせずにそのまま走って職員室を飛び出した。

最後の頼みであったニユーからもチョコを貰えず、今だに一つも貰えない負け組のラグナ。

ラグナはうなだれ、廊下を彷徨っていた。

そんな時、ツバキに出会った。

「あ、ラグナ先生……ってずいぶんと元気ないですね」

ラグナは「ああ………」と元気なさそうに答えた。

その姿はゾンビと言ってもよかった。これはゾンビですか？と聞い

てもよいほどのゾンビなラグナがそこにいた。

ラグナはテンションマイナスな状態で、ツバキに話しかける。

「チョコがもらえねえ……去年はまだ5〜6個もらってたのに……
一体なにがどうなってやがる……」

その言葉を聞いて、ツバキはジト目でラグナを見つめた。
少し怖かったので、ラグナは目をそらす。

そしてツバキは、ゆっくりと口を開きこう言い放った。

「ラグナ先生、ひょっとして自覚ないんですか？」

ラグナは「え？」と言った感じでキョトンとした顔でツバキを見た。
自覚？ちよつとまで……一体全体俺が何をしたっていうんだ？
とラグナは本当に覚えがないようで、そんなラグナを見てツバキが
あきれ顔で見つめた。

「はあ……先生、昨日ノエルと何かいざこざがあったりしませんで
したか？」

そう、それはバレンタイン前日の休日のこと……
町でノエルとばったり会ったラグナは、ノエルとこんな会話をして
いた。

「あ、先生こんにちは」
「うっす」

ノエルはラグナに会うや否や、バレンタインの話題に切り換える。

「先生！私、明日頑張りますから、その……期待しててくださいね！！」

その”頑張る”を聞いた瞬間、ラグナは鋭く反応し、嫌な顔してこ
う返した。

「おい、おめえまさか俺に手作りチョコ渡すつもりじゃねえだろう
な？」
「ふえ？」

凶星であつた。

ノエルはチョコを手作りで渡そうとしていたのだ。
恋する乙女の青春、その一言で済むのならラグナも嫌な顔をしなか
つたであろう。

ノエルの手作り、さてみなさん今までの話を振り返ってみよう。
ノエルがカレーを作れば、ラグナは食べて気絶、バングは食べて生
死を彷徨い。

ノエルが卵焼きを作れば、それは未元物質になる。
そう、ノエルの料理は料理ではなく、兵器になるのである。

「てめえバレンタインの俺を毒殺する気か？頼むから買ったチョコにしてくれ」

「ぐ……毒殺って……そんな言い方……」

ラグナはバレンタインに死にたくないため、更に念を押してノエルを注意する。

「お前が頑張ってチョコ作ったって良い結果に結び付かねえよ、どうせ俺が食べて叫んで気絶してっていうテンプレなオチになるにきまつてらあ、そもそもここまで結果が実を結んでないのによくまあ料理を続けようと思うよなお前は……」
「……」

と、ここまで散々言いたいことを言いまくっていたラグナであったが、ノエルの方を見ると、ノエルは涙目になって肩をぶるぶると震わせていた。

あれ？これって……と思い、ラグナはノエルに優しく話しかけた。

「ええと……ノエルさん？」

「うつさい馬鹿死ねー……！！！」

そう言っただけでノエルは泣きながらどこかへ行ってしまった。

ぽかーんと口を開けて呆然と立ちつくすラグナ。

これが二人だけの出来事ならまだよかった。だけどその近くには、

ブレイブルー学園の女子生徒が数人いたのである。

その数人から、「ラグナ先生がノエルをいじめた。」という悪い噂が流れ始め、みんながラグナのような下衆にチョコを渡そうなんて思わなくなった。

そう、それが今回ラグナがチョコを貰えない最大の理由なのである。

「……………」

当の本人であるラグナは、その事実を知って啞然とする。

まさかこんなことになっていようとは……ラグナ自身も予想がつかなかった。

「というわけです先生、今回は諦めることですね。全く……さいっ
つっていです!!」

ツバキが冷たくラグナに言い放った。

しかしラグナにだって言い分はあった。このまま引き下がるわけにはいかない。

「ちょっとまでよ!!じゃあお前だったらどうしてたんだよ!?!もしお前がノエルに「手作りチョコあげます。」なんて言われたらどう答えるつもりなんだよ!?!」

「丁寧に断りますね。」

「断るんじゃねえか!!人のこと言えねえだろうがおい!!」

スパッと切り返したツバキにラグナは鋭くツツコミを入れた。
断るのは皆一緒であった。それはまあ仕方ないであろう、ノエルだもの。

だけど断り方とその場が悪かったのだ。ラグナは本当に運がなかった。

「とりあえず、私はジン兄様とハクメン先生に手作りチョコを渡しに行かなければならないのでこれで失礼します。運がなかったですね、ではこれで……」

そう言つてツバキは冷たくラグナを見捨て、ジンとハクメン先生の元へと向かつて行つた。

この事実を知つたラグナは、しばらくそこに立ち尽くしていた。

その後空元気状態で午後の授業を終え（ちなみに5〜6時間目は家庭科で、ノエルがいたが教室の端で蹲つすくまっていた。）放課後、職員室で頂垂れていた。

「お、ラグナ先生……結局チョコはもらえなかったのか？」

ハクメン先生が話しかけていた。

ラグナは耳を押さえ、机にうつぶせになる。

「最終結果だが、獣兵衛が118個、テルミが65個、ヴァルケンハインが52個、私が54個だった。タッチの差でヴァルケンには

勝ったものの…… 獣兵衛の半分以下とは…… ラグナ先生本当に大丈夫か？」

ラグナのライフはすでに0であった。

だがそれはチヨコを貰えなかったからだけではなかった。

正当防衛だったとはいえ、ノエルに対して少々きつく言ってしまったことに罪悪感を抱いていたからだ。

まさかノエルが楽しみにしていたチヨコを作る家庭科の授業で、端で落ち込んでいるほどのダメージだったとは思ってもいなかった。ひよっとしたら、俺はものすごくひどいことをしてしまったのではないかと、ラグナは本気で落ち込んでいたのだ。

「とりあえずまあ、明日には元気になって学校に来るのだぞ、それと…… 後悔していることがあるのなら、それは早めに解決することだ。」

ハクメン先生は何かを感じ取ったのか、ラグナに一言助言し、先に学校を後にした。

その後ラグナは夜になるまで職員室でぼーっとしていた。

辺りはすっかり暗くなっていた。流石にこれ以上いるとレイチエル校長に怒られると思いさっさと帰り支度をする。

帰り支度を済ませドアの方へと眼をやると、職員室のドアの近くに…… ノエルはいた。

「……………」

ノエルから放たれる無言の圧力、生気を失っていたラグナでさえ思わずビビるほどであった。

きつと何か文句を言われるのだろう、昨日のことでバレンタインを台無しにされたことの怒りを晴らしに来たのだろう。

そう思いラグナは、逃げるように一言いい放ち、その場を立ち去ろうとする。

「……夜遅いから、早く帰れよ」

立ち去ろうとしたその時、ノエルに服をつかまれた。

ああ……きつと耳が腫れるほど文句を言われ続けるんだろうな……

ラグナは覚悟を決め、ノエルの方へと眼をやる。

ノエルは、どうにも言えない表情で、カバンから一つの箱を取り出した。

「おめえ……これ……」

「心配しなくても……買ったやつですよ」

ノエルは顔を赤く染めながら、ラグナにその箱を渡した。

中を開けてみると、買ったやつとは言っているものの明らかに形は崩れており、手作りのものであるのがすぐにわかった。

おぞましい色、どどめ色とまでは言わないが嫌な予感がした。

だが、これはきつと俺に対する贖罪なのだろうと、ラグナはそれを口に運ぶ覚悟を決める。

「そっか、ありがとな……じゃあいただきますわ」
「え!？」

その言葉を聞き、ノエルはびっくりした表情を浮かべ、ラグナの方を向いた。

ノエルからすれば、懲りずにチョコを返してくるものだと思っていたのだ。

だが予想に反して、ラグナはチョコを食べようとしている。

ノエルはとっさに、それを止めようとしたが、もう遅かった。

「……………うめえ」

ラグナからは、意外な言葉が返ってきた。

ノエルは耳を疑った。

初めて、自分が作ったものに「おいしい」と返してきたから。

「え……………？先生……………今なんて……………？」

「ふつつにおいしい、多分俺の味覚がおかしくなってるせいかもしれないが意外とおいしい。ぐす……………おめえ……………やればできんじゃないかねか……………」

ラグナの目からは涙が流れ出ていた。

やっともらえたチョコ、ノエルが初めて作ったまともに食べられるもの、色んなものが混じり合わさったそのチョコは、最後の最後で

奇跡を起こしたのだ。

ノエルもしばらくし、その言葉が偽りではなく本当のものだと実感し、肩が震えた。震えが止まらなかった。

「おいしいって……言ってくれた……初めて……私の料理を食べても何も起こらなかった……う……うう……うううううあああああ……ラグナ先生……」

ノエルは号泣しながらラグナに抱きついた。

ラグナモノエルの頭を撫でる。よくやったよくやったと何度でも。バレンタインデー、2月14日にそれは奇跡をもたらした。

ラグナとノエルに、その奇跡はもたらされたのだ。

「ぐ……チヨコを渡すタイミングを……完全に逃したわ……」

奥でレイチエル校長が悔しがっていた。

だが、今出て行つては空氣が読めない扱いになると思い、そつと眼をつむることにした。

こうして、バレンタインデーは終わりを告げた。

翌日...

朝、ラグナの姿が職員室になかった。

ハクメン先生は昨日のこともあってか、校長に聞いたのだした。

「あれ？ラグナ先生はどうしたのだ？」

「腹痛だそうよ、まったくチョコがもらえなくてやけ食いでもしたのかしら。」

それはきつとやけ食いではないであろう。

結局、あの時のラグナがどうかしていただけであつて、ノエルの作ったチヨコが原因でラグナはひどい腹痛に見舞われた。

奇跡は一夜にして悲劇になってしまった。

「やっぱりか――――い！い！」

ノエルの魂の叫びがこだまする。非常に情けない叫びだったことは触れないであげよう。

第47話：ひなまつりは命がけ（前書き）

第47話です。

ラグナ兄さんの誕生日ですね。

第47話：ひなまつりは命がけ

3月3日のひな祭りは、主人公のラグナ先生の誕生日である。

「ということで、先生の誕生日を祝いたいのですけれども、何をしてあげたらいいか……」

ノエルは普段からお世話になっている先生のために、何かできないかと弟であるジンの元へとやってきた。

ジンは相も変わらずノエルに対して嫌な顔をしながら答えた。

「兄さんを祝おうとするその気持ちには同意だが、貴様は関わらなくていい」

「そ……そんなこといわなくても……」

ノエルは落ち込んだ表情をしていたが、ジンは特に悪びれる様子もない。

それどころかジンは、今まで散々ため込んでいたものを吐き散らすようにノエルにこう言い放った。

「というかこのままいくと、兄さんのために料理作る。無駄に頑張る。それで結局兄さんが腹を壊して倒れる。の三本で終わるパターンじゃないのか？障害？」

「ふえ？いやいや流石に私も常日頃学習していますし」

「もうそのパターンに読者は飽き飽きしてるんだよ!!」

ジンは限りなく正しいことを言った気がする。

バレンタインデーの時も合宿の時も最終的にノエルの料理ネタは食って倒れてジ・エンドである。

ここまでたくさんのお話を書いているが、ノエルの料理ネタでハッピーエンドになったためしはない。

「ひい……ひいゝん!!」

「というわけで3月3日の誕生日ネタは僕と兄さんの感動巨編をやる予定だから、貴様のような障害はさっさと消えさるがいい」

ジンが勝手なことを言っていた時、ラグナが後ろから現れた。

「なにが兄弟の感動巨編だバカヤロー、んなもんこっちからお断りだ。」

ラグナはきつぱりとジンの要望を断る。

ジンは納得いかなそうな顔をしていた。

「それにだ。もう俺の誕生会は昨日田舎でひっそりとやったからもうやらなくていいんだよ」

「え!? そんなの聞いてないよ兄さん!!」

「言っていないもん」

ラグナは言い忘れたわけではなく、言いたくなかっただけである。
ジンは非常に悔しそうにしていた。

ノエルも少しばかり納得のいっていなさそうな顔をしてこう言った。

「んもう呼んでくれれば行ってたのに、先生ひどいです。」

「ちなみに兄さん、その誕生日会には誰々が参加したんだい？」

ジンのどうでもいい質問に、ラグナはめんどくさそうに答えてあげた。

「セリカに、いなかのおふくろ 獣兵衛先生としりあいのおじさん ナイン先生、おばさん ココノエ先生にいとこのねえちゃん ハクメン先生おとうの親戚一同でひっそりと祝ってもらったよ」

「おとうと！？兄さんにとっての弟は僕だよ！？」

ラグナはわざとらしくルビを付けて答えたため、むじつのひとたち 読者にはわかっていてもジンには参加者が良く分かっていない。

ちなみにこの親戚一同の関係性は、正直言つと無理やりとって当てはめたものである。

実際はとくに血のつながりはないので原作を知らない人は間違えないように。

「まあ誰が参加しようがてめえらには関係ねえじゃねえか、そんなことよりも今日はひな祭りだろ？ノエルは”お雛様争奪戦”には出

ないのか？」

「ふえ？お雛様争奪戦？」

ラグナの代わりに説明しよう。

ブレイブルー学園主催、お雛様争奪戦とは！！

毎年卒業を迎える3年生の女子と女性の先生方に参加権が与えられる恒例行事である。

いろんな競技をクリアして、優勝した生徒には……

超巨大ひな壇の、お雛様になる権利が与えられるのだ。

「し……知らなかったです。」

ノエルはそんな伝統ある恒例行事のことを知らなかった。

女生徒ならば誰でも食いつくはずなのに、知らされていなかったのである。

ラグナは少し考えた後、納得のいきそうな一言を漏らした。

「ああそっか、お前は男子生徒だったもんなあ」

「立派な女性です！！」

ノエル「男子生徒だったという可能性は無くなったところで。

参加者募集は当日まで受け付けているということで、ノエルも思い切って参加してみることにした。

「巨大なひな壇のお雛様かあ、素敵だなあ」
「ふん、所詮は幼稚な障害だな。あんなものの上に乗って何が楽しいんだか……」

ジンはノエルを鼻で笑った。

ノエルは少しばかりむっとするも、確かにお雛様になる以上のメリツトはない。

少し考えた後、何かに気づいたかのようにノエルはラグナに質問した。

「あ、お雛様が優勝者ってことは……お内裏様は誰がやるんですか？」

「お雛様になったやつが好きな人指名できるらしいぞ」

ラグナのその言葉を聞いて、ジンが耳を大きくしてぴくりと反応した。

ノエルは少し驚きながら、質問を続ける。

「そうなんですか、じゃあ最終的にはみんなで記念写真ですか？」
「んゝまあそれもあるな、あとは生徒次第なんだが……お内裏様からお雛様に対してのプレゼントもあるらしい、つっても金が絡むもんじゃねえぞ、聞いた話にはお姫様だったことか、あとは”キス”とかもあつたらしいぞ」

「な……なんだと……！！！」

近くにいたノエルよりも先に、ジンが雄たけびをあげた。
そして霧槍に乗りかかりラグナの元へと脅威のスピードで駆け寄る。

「兄さん！それって僕も参加できるよね！？」

「無理に決まってるだろ馬鹿、お前は五人囃子でもやってろ」

ジンはがつくしと落ち込んだ後、ノエルをキツと睨みつけた。

ノエルはそのあまりの形相に怯みながらも、ジンから視線をそらした。

ジンがこちらに向かってくる。ノエルには正直逃げる事ができなかった。

「障害、いやノエル」

「あの……無理に名前を呼ばなくても……」

正直ノエルには嫌な予感しかしていなかった。
きつと理不尽なことを言われると……

「お前今日は素直に帰るがいい、僕がお前になり済まして出場するから。なぐに大丈夫だ。僕とお前は無駄に容姿が似ている。ひよんなことではバレない」

案の定、理不尽なことを言いました。

ジンはいつにもまして鬼のような形相でノエルを睨んでいたが、ノ

エルは丁重に断った。

「あ……あの、いやいいです。色々誤解されるし……」

「この障害グアーーーーー……………ぐふ!!」

ジンはノエルに襲いかかろうとするが、ラグナの1発げんこつを食らいその場に倒れ落ちた。

「まったくバカなこと考えんじゃねえよ、まあキスの話はおいというだ。卒業間近なのでかいイベントだ、楽しんで来い」

「先生……わかりました！私頑張りますから!!」

そう言ってノエルは受付の元へと向かって行った。

こうして午前10時、ブレイブルー学園お雛様争奪戦が今始まるうとしている。

周りを見渡すと毎度のメンバーが揃いに揃っている。

北はツバキにマコト、南はトリニティ先生にナイン先生まで皆気合が入っていた。

「あ、ツバキ、マコト」

ノエルはツバキとマコトを発見し、二人の元へとかけよる。
マコトが手を大きく振っている。

「のえるんも参加するの！？やっぱりお雛様っていいよねえ〜女の憧れだもんね〜」

マコトもお雛様を目指し異様に張り切っていた。
ツバキの方を見ると、普段はおしとやかな彼女もやけに張り切っていた。

「ツバキも出るんだ。めずらしいね〜普段はこういうのあんまり出たがらないのに……」
「当然でしょノエル、優勝したらお内裏様を選ぶのよ。もちろんお内裏様はジン兄様……ああハクメン先生でもいいかしら……ああ悩む！！私がお雛様でジン兄様かハクメン先生がお内裏様であつ！
！ああんもう私！！」

ツバキは意味もわからずに変な妄想をして叫んでいた。
ノエルもさすがについていけず、マコトもやれやれと言った感じで呆れかえっていた。
3人で色々話していると、なにやら受け付けの方からざわめきが聞こえてきた。
見ると、プラチナと先生方が揉めていた。

「なんでルナは参加できないんだよ！！」

プラチナの女の方ことルナが、先生方に文句を言っていた。
その文句に対し、ラグナが大人の対応で答えた。

「だっておめえ、性別詐称の疑いが出てるじゃねえか」
「はあ!？」

ラグナの答えに、ルナはあっけに取られたような反応を返した。
なぜこんなことになってるかを説明すると……

プラチナ・ザ・トリニティは、二重人格である。
男の人格と女の人格を有しているのである。

しかしその外見はどっからどう見ても女の子である。普通ならこ
こで解決するのだが……

このご時世、“男の娘”という存在があちらこちらに散らばってい
るのだ。

女の子のように見える男の子、中にはあきらかに女にしか見えない
男もいるのだ。

公式の発表がまだない以上、プラチナの本体がひょっとしたらひょ
っとして男の可能性もあるために、今回の種目は出られないのだ。
ちなみに公式は病気と名高いアークシステムワークスなので、マジ
な勢いで男にするかもね。前例もあるし。

「なんだその理由は!？ルナは立派な女だぞ!！」

必死に抵抗するルナに対して、ラグナは日ごろの恨みみたいのがあるのかすつとぼけた顔をしてごまかしていた。

しかしあまりにうるさいものだから、ラグナもからかう意味でこんな一言を返した。

だがこれが、ラグナの評価をぐぐーんと下げる引き金になる。

「じゃあおめえ、”証拠”を見せてみるよ」

「は？こ……こい……こいつ変態だぞー……！！！」

まあ当然の反応である。

ラグナも言ったあとによくよく気づいたのであろう、結構やばそうな顔をしていた。

だが時すでに遅し、後ろからバング先生の冷たい一言が炸裂する。

「最低でござるなラグナ先生」

「いやいや！別にそんな意味で言ったわけじゃねえぞ！！」

とは言うものも、そんな意味もへったくれない。

ハクメン先生もあきれ顔でラグナ先生に追及する。

「そんな意味ってラグナ先生、仮に50%の確率でこいつの下に”アレ”がついてなかったら、お前は今すぐに警察に捕まるところだぞ」

「おめえもどさくさまぎれて変なこと言ってんじゃねえよ！！」

正論を言ってるようで実は変態じみた事を言うハクメン先生にルナは全力で突っ込んだ。

マジで泣きそうになっているルナをなんとかしようと、セナが表に出てきてフォローした。

「まあまあ、良く言うじゃないですかあ、こんな可愛い子が女の子のはずがないって」

「それフォローになってねえよーーーーー！！」

ちんぷんかんぷんなことを言うセナにルナはまたも全力で突っ込んだ。

自分に対して自分で突っ込むその姿は、少しばかりおかしく見えたという。

もはやヤケクソになってきたルナは、泣きながらぼそつと一言こう漏らした。

「うう……50%の確率でラグナをクビにできるんなら……」

「おいまてーーーーー！！やめろ！わかったすいませんでした！！謝るからーーーー！！」

スカートに手をかけるルナをラグナは必死に制止する。

というか本人も知らないあたり、プラチナ家には何か特別な事情があるのだろうか……

色々あったが結局、プラチナはお雛様争奪戦には参加できなかったという……

「えー受付にて少々トラブルはあったけれど、これよりお雛様争奪戦を始めるわ。主催者兼参加者のレイチエル校長です」

レイチエルが皆に向かってあいさつをする。

自らも参加するようで、意外と気合いが入っている模様であった。そしてこの競技の説明をするため、教頭であるハクメン先生が現れた。

……そういえば教頭って設定があったんだね。

「ごほん、では今からお雛様争奪戦のルールを説明しよう」

そう言つてハクメン先生は、電子モニターを用意した。

そこにはわかりやすい絵と文字でこう書かれていた。

お雛様争奪戦ルール

参加者の皆様には、アーケエネミーハイランダー：タケミカヅチに匹敵する大きさのひな壇の天辺を目指して駆けあがってもらいます。そして天辺にあるお雛様の席に先に座った参加者が、本日のお雛様となります。

この説明の時点で、高所恐怖症の参加者が2割ほど脱落したという。タケミカヅチといえど本編で出てくる衛星兵器のようなものだ。C

Tのストーリーをやればわかります。

「タケミカツチと同じくらいって……どんだけでかいのよ」

ノエルが読者の気持ちを代弁するかなのようなツッコミを入れたところで、参加者は次から次へと体を整え始めた。

ノエルも参加した以上、目指すはトップである。

この時点でみんなが理解していた。これは……命がけの戦いである。

「それでは、スタートの合図はハクメン先生にやってもらおうかしら」

レイチエルからフラッグを渡されたハクメン先生は、顔をホクホクさせて自信たつぷりにフラッグを掲げた。

「まかせろ……では私がスタートと言ったら開始だ。フライングしたやつは悪滅だぞ」

そして……

今この時より……

お雛様争奪戦が始まろうとしていた……

「よゝい……スタート!!」

ハクメン先生の合図とともに、参加者の女性達は毎年恒例の福男選
びの勢いの如く一斉に走り出した。

中には個人個人の必殺技を駆使する者までいた。
そしてその中で、ひと際目立っていたのが……

「おつとレイチェル校長、己のドライブを駆使して一気に上まであ
がっていったぞ!!」

実況はハクメン先生でお送りする。

主催者でありながら参加者のレイチェル校長は、なんとシルフィー
ドを使用して一気に上まで駆け上がる。

これは正直言つてチートではないのか……とラグナとバングがジト
目で見ていた。

「おほほほほ!!これが戦略というものよ……」
「ふん!!」

バキューン!

その銃声に、この場にいた誰しもが一瞬で凍りついた。

なんとノエルが、シルフィードで舞いあがっていくレイチェル校長
を銃で撃ち落としたのである。

普段のノエルとは思えないほどの不意打ちであった。

「う……嘘でしょ……？」

レイチエルもまさかの展開に、ただただ上から落ちるだけであった。

「ののの……のえるん？」

隣にいたマコトが、恐怖におびえるような顔でノエルの方を覗きこむ。

そのノエルの瞳は……蒼にそまっていた。

「破壊破壊破壊……はっ!？」

我に返ったと同時に、ノエルの瞳は緑色に戻った。

それを見ていたラグナは背筋を凍りつかせながらそっとう漏らした。

「あいつ……中にいる修羅^{ミュー}を出しやがったな……てか封印弱まってきたねえか……？」

どうやらこの競技中に、ノエルの中にいる修羅^{ミュー}が隙を見ては暴走を始める可能性が出てきた。

戦いの最中だからだろうか……それとも「出来たらトップをとりた

いなく」程度の甘い考えのノエルに苛立ちを覚えているからなのだろうか……

周りの参加者が、改めてこの競技の恐ろしさを再認識した瞬間であった。

「えーと……マコト？何があったの……？」

「のののえるん！今日はその……互いに検討をつくして頑張ろうねー……！！！」

そう言つてマコトは逃げるように先に言ってしまった。

ノエルは頭に「？」マークを浮かべるような顔をしてそれを見つめていた。

一応何かあつてからでは遅いと、ラグナはノエルに忠告することにした。

「おーいノエル、もう少し自分に自信を持て……お前の中に眠るあいつが漏れだしてるぞ……」

ノエルはそれを聞いて、なんとなくだが状況が読み込めて来たらしい。

だがなぜか知らないが、生気がないようなのっぺりとした顔でラグナの方を向いて答えた。

「はあ……わかりました。じゃあ……がん……ぱり……」

あれ？もうこれって支配完了してるんじゃない？

ラグナは嫌な予感をしながら、さっきより強きな口調でノエルに対して叫んだ。

「おいノエル……………！！乗っ取られかけてるぞ……………！！！！」
「がんばり……………滅べ……………滅べ……………世界爆発しろ……………」

時すでに遅し、ノエルの中の修羅は完全に目を覚ました。

「ラグナ先生よ、あいつはどうするのだ？」
「ほっというてやれ……………」

ハクメン先生の言葉に、ラグナは疲れたような顔をして答えた。
いつもと違って自分がとばかりをうけるわけではないのだから、よほどのことがない限りは放っておいても大丈夫であろう。
といった、なげやりのようにも聞こえた。

そして1時間ほどして、参加者の8割が脱落（主にモブキャラである。）
残っているのはBB本編に出てくるなんらかの力を持った連中だけであった。

「ううゝん……なんか調子悪いなあ今日は……」

ノエルは時々ミューと人格交代をしながらなんとか生き残っていた。時々記憶を失うので、なにがなんだかわからず上に進むノエル。そんな時、ジン狙いのツバキと鉢合わせをした。

「あらノエル、なにやら調子がわるそうね？」

「ツバキ……」

いつもは親友の二人だが、今日は敵同士……

ツバキは悪いと思いながらも、顔を悪くしているノエルに対し牙を向ける。

「ごめんノエル……私の礎となつて……!!」

「ああツバキ……ってまた私じゃなくなるゝ!!」

ツバキの攻撃が来る前に人格交代を果たしたミューは、その攻撃をすらりとかわした。

そしてツバキはというと、ミューが出てくるのを待っていたかのように笑みをこぼした。

「ふふふふ……相手がノエルじゃないのなら私も全力で戦えるわ……」

ノエルであってノエルではないミューに対して、睨みをきかすツバキ。
そんなツバキとは裏腹にミューは特に興味なさそうな顔をして、立ち去ろうとするのだが……

「待ちなさいよ……なによあんた調子に乗って……」

ツバキは、なんだか知らないがミューに対して因縁をつけてきた。そして今までためてきた何かを吐き捨てるように叫んだ。

「あんた最近、寡黙で純粹でかわいいなんて言われてるそうじゃない！？なのになによ私なんて出た当初から見向きもされないで！！弱キヤラと叩かれまくった反面強キヤラになったら今度はクソキヤラと叩かれるわ！本編での影響で嫉妬深いクソビッチだと叩かれるわ！！後から出たマコトの方が人気高いわ！！てかペロペロ出たせいでさらに私の立場なくなっただじゃないの！！」

もはやミューにはツバキが何を言ってるのかさっぱりわからなかった。

ミューの中にいるノエルも、「え……ええ……」と引くありさまである。

これは下手に関わってはいけないと、ミューはジト目でツバキを見た後にそっとその場を立ち去ろうとした。

「ちょ……ちょっと私の話を聞きなさいよ!!」
「ハバヤーーーーー!!」

ミューはツバキを思いきりハバヤで突き飛ばし、先へと進んだ。
頑張れツバキ、知ってる人は少ないだろうが、お前は最初のBB人気投票で4位を取った結構な人気者だったんだぞ。

でもそれは中の人がぶるらじに出てた影響だっていうのは内緒だぞ

「ううーん……まさかツバキがあれほど病んでるなんてなあ……
というかこの小説のツバキはなにかズレてるような……」

再び意識を取り戻したノエル。

ズレてるというより、なんとなくツバキに暴走女のイメージがあるだけです。

それも、中の人がぶるらじに出てた影響なんですが……

「って寝ては起きてを繰り返していくうちに……天辺が見えて来たんですが……」

ノエルはほとんどミューの活躍で、天辺付近にたどり着くことに成功した。

周りを見渡すと誰もいない、きつともう一人の私が暴れまくって吹き飛ばしたのだろう……

申し訳ないという思いを抱きつつ、ノエルは天辺へと上がっていく。

その時であつた……

「もう好き勝手はさせなくてよ!!」

なんと開始早々ノエルに銃で撃たれたレイチエル校長が、シルフィードで上がってきたではないか。

なんという生命力、これも吸血鬼としての力なのだろうか……

「こ……校長!？」

「あなた先ほどはよくもやってくれたわね、結構痛かつたわよ？」

レイチエルはうつすらと怒りを露わにし、ノエルに攻撃をしかけてきた。

いくら下にココノエ博士オリジナル、超強力反発クッションングランドティガーイグゼクスが敷き詰められていたとしてもこの高さから落ちるのはノエルとしてはご免であつた。

「ひい！すいません校長！！あれは私ではないんですよ!!」

「おだまりなさい！こっから落ちて地獄を味わいなさい!!」

ノエルはひな壇から落ちないようになんとかレイチエルの攻撃をかわす。

こうしてかわしていれば、きっとミューちゃんがでてきて……

(つかれた……)

絶望の一言がノエルの頭の中に響いた。

さっきまで散々暴れておいていざとなったらニートですかこの子は
！！

「ちょっともう一人の私！！疲れたってちょっと……………」
！！」

「終わりよノエル！！」

ここまできて……

敗北を確信したノエルの元へ、もう一つ謎の物体がこちらに飛んできた。

「がはははははは！お雛様はこの私、みんな大好きココノエ先生
だ……………！！」

なんとココノエ先生が、スーパーマリオワールドでクッパが乗って
いそうな”あの”乗物に乗ってこちらに向かってくる。

このままでは私は挟まれてぺちゃんこに……そう思っているいきり
ノエルがしゃがみこむと……

「え！？ちょ……………！？」

「わあああああああ！！今すぐどけーーーー！！！」

なんとレイチエルとココノエが正面衝突。

しゃがんでいたノエルはぎりぎり助かるというすばらしいラッキープレイで、天辺付近にはノエル一人だけとなった。

「え……ということは……」

そのまま何事もなかったかのように、ノエルは天辺へとたどり着いた。

すると巨大ひな壇は極端に小さくなって、地上へとたどり着いた頃には後ろに「おめでとう！！君がお雛様だ！！」というプレートが現れた。

ラグナはノエルの方へと駆け寄ってきて、拍手をしながらこう言った。

「おめでとう、まさかおめえがお雛様とはなあ」

「え……ええゝ私でいいんですかゝ！？」

こうして、お雛様争奪戦は幕を閉じた。

ちなみにノエルがお内裏様に選んだのは……

「うへへへへへゝゝ、ラオチュウ可愛いゝ」

お内裏様に選んだのはラオチュウであった。
ノエルはそのラオチュウをぎゅぐと抱きしめる。ラオチュウは苦し
そうにしていた。

「なんだ、てっきりノエルはラグナ先生を選ぶと思ってたのに……」
「く……くやしいわ……あんなピンクの髪した猫と正面衝突なんて……」

微笑ましそうに見てるマコトに、悔しそうにしているレイチエルであつた。

ラグナは五人囃子となつて、一緒に写真を撮つたという……
みんなが楽しそうにしている最中、ラグナがぼそつとさびしそうにこつ漏らした。

「こいつらも……もうすぐ卒業か……」

卒業式の際は近付く……

最終話・サヨナラの空、そして……（前書き）

最終話です。

最後まで読んで、そして楽しんでくださると私はうれしいです。

最終話：サヨナラの空、そして……

3月某日……

とうとうブレイブルー学園にも、旅立ちの日がやってきました。

「はあ、今日で私も卒業か」

ノエルは改めてこの学園生活を思い返す。
ノエルは中部からこの学園に入学した。
中部部のころの彼女の思い出と言えば……

「んだおめえ？男のくせに女子の制服なんてきやがって」
「私は女です！！」

当時中1だったころのノエルは、当時高3だったころのラグナに出会う。

銀髪でオッドアイで柄も悪くて正直怖かった。だが話してみると結構気さくな人だった。

そしてこれが現在の今に至るノエルいじりの始まりである。

ラグナはこの時から、容赦というものを知らなかった男であった。

「女だったのか、すまねえな……やけに胸が平らだったもんだから、うちの弟の方が胸ありそうだ。」

「私ただ胸ないんだよ！というかラグナ先輩会ってそうそうひ

「どいですよ、今日は中等部と高等部の交流会の日なのに」

ノエルはこの時から自分の胸のことを気になり始めていた。思えばそのコンプレックスを痛く突いてきたのは、ラグナ先生が初めてだったかもしれない。

この男は、最初からこんなにも憎たらしく、そしてそれを憎めない男であつた。

「すまなかつたな、じゃあまたなナイチチくん」

「な……ナイチチって言うな……!!」

その”ナイチチ”という言葉が、どれだけノエルの中に響いたことか。

そしてそれが今に至るまで続く誰が思ったことか……

時は経ち高等部、ノエルが1年生の頃であつた。

「あゝ今日からお前らの担任になったラグナ・ザ・ブラッドエッジだ。この学校の卒業生でもある。」

その男は再びノエルの目の前に姿を現した。教師になって……

教師にしては銀髪で、オッドアイで、柄も悪くて正直あの時とにも変わっていなかった。

よく教師になれたなど、他人のようにノエルはその男を見ていた。

「えーと、ノエル・ヴァーミリオンか……男子生徒のくせに女子の制服着るのは校則違反だぞっと」

「だから私は女ですって……！いつぞやと同じこと言わせんな顔見ればわかるだろJK……！」

「いつぞや？おまえ俺と会ったことあったっけか？」

この男は私のことなどすっかり忘れていた、失礼極まりない男であつた。

クラスの笑い物にされた挙句にこの態度、当初のノエルはラグナのことが大嫌いになった。

それからというものの、色々あつてノエルはラグナのことを少しずつ見直すようになった。

そして、今日はそんな先生とも別れを告げる日がやってきた。

朝、ホームルームでラグナ先生はいつものテンションで教室に入ってきた。

「はいおはよう、今日はいよいよ卒業式だな。暴れるとかやめろよおめえら」

ラグナはそれなりのことを言つたあと、出席簿を取り出し全員の出席を確認した。

今日はもちろん全員いる。そして全員で卒業できる。ノエルも単位をとりこぼしていたけどこの日まで間に合わせた。

出席を取り終えた後、ラグナはすぐさま職員室に戻っていった。

「ノエル、卒業おめでとう。私たちももうお別れね」

「あ、ツバキもおめでとう！最優秀生徒で表彰されるんだって？やっぱりツバキはすごいね！！」

「そ……そんなことないわよ」

ツバキは今までの成績が評価され、表彰されることになった。いつも勉強を教えてくれた優しいクラスメート、そして事あるごとに暴走したこともあった。

「のえるくん！！やだよわたい……みんなとお別れするのやだよー」

「マ……マコト！そんなこと言わないでよ……」

別れを悲しむマコトに、ノエルも思わず泣きそうになった。

今日でみんなと会えなくなると思うと、とても悲しくなってくる。だがみんなこの日を境に大人へとなるのだ。悲しむのは全てが終わった後である。

「ニャー、もうおいしいものは食べないニャスー、学校のご飯はおいしかったニャスー」

別の何かに悲しみを抱くタオカ。

お前の最優先候補は飯なのか……

「みんなと別れるのはさびしいですね、でも僕は大丈夫！姉さんが
ついてるから、ねえ姉さん？」

カルルはつねに姉さんのニルヴァーナと一緒にいる。

カルルはここを卒業したあと、大学に行くらしい。
もちろん姉さんも一緒である。

「なんか僕、出番が極端に少なかったような……（アラクネ翻訳機
あり）」

今になってアラクネは何を言うのだろうか、出番の少なさはお前の
そのしゃべり方にある。

おしかったな、人間のままでいれば多少出番も増えただろうに。

「うえ〜ん！ラグナとお別れなんてやだ〜！！これからずっと
ラグナと一緒に溶け合いたかったのに〜！！」

ニューもラグナとの別れに泣いていた。

お前にはラグナしかないのだろうか、学校生活〓ラグナであった二
ユーのこの3年間。

そんなニューも、最初に比べてずいぶんと明るくなったものである。
最初は引きこもりで学校に全然来なかった彼女も、今では立派な3

年B組の仲間である。

みんなそれぞれの思いを抱き、今日という日で卒業する。
泣いても笑ってもこれが最後、そして3年B組の生徒達は、体育館
へと向かう。

「ただいまより、ブレイブルー学園高等部の卒業式を始めます。」

レイチエル校長の言葉とともに、卒業式は始まった。

周りを見渡すと、今までお世話になった先生方が座ってこちらを見
ている。

後ろでは父兄の方々もいる、だがこの作品のキャラの父兄はあまり
姿を見せないため一応いることだけにしておく。

「まずは教頭先生の挨拶から、ハクメン先生お願いします。」

レイチエル校長の言われ、教壇に立つハクメン先生。

思えばこの学園生活、やたらと出番が多かったハクメン先生。

EDのクレジット的には、3番目に”ハクメン先生：柿原徹也”と
書かれてもおかしくないほどにレギュラーやってたハクメン先生。
ハクメン先生は、ゆっくりとその口を……口がどこにあるかはわか
らないがとりあえず口を開いた。

「えゝ諸君、本日はご卒業おめでとう。この学園の教頭としてとてもうれしい限りです。思えば色々な事があった。嬉しいこともあれば辛いこともあったが、皆協力してそれを乗り越えてここまでやってきたな、私は……いつも……いつも皆のそんな姿を……見て……ぐす」

ハクメン先生も感極まって思わず涙をこぼした。
その涙は仮面から湧き出るほどにドバドバとこぼれおちる。

「みんな本当に成長しゴボゴボゴボ」

仮面に涙が溜まったのだろう、小さい空間でハクメン先生は溺れていた。

だがそれでもハクメン先生は話すのをやめなかった、終始何を言っているのかわからなくなったのは言うまでもない。
というか仮面とって話せばいいのに、そこまでして素顔をさらしたくないのだろうか。

「教頭先生ありがとうございます。とても良い話だったわね」

校長のフォローは半端なかった。良い話かどうかもわからないくらいゴボゴボだったのに。
続いて祝辞祝電のご披露へ、最初に紹介されたのはアークシステムワークス法人の森さんであった。

この学校を含め様々な学校のトップに君臨するその存在は、何者をも凌駕する。

その他色々なゲームの代表からの祝辞祝電が披露された。知りたい方は体育館入口の掲示板を見よう。

「続きまして、校歌斉唱です。」

「校歌？そういえばこの学校の校歌ってまだ聞いたことなかったなあ」

ノエルは校歌があつたことを思い出すが、校歌を歌つたことはおろか聞いたことすらなかった。

謎に満ちたブレイブルー学園の校歌、メロディは特に決まっておりますがお聞きください

途中ノエル・ヴァーミリオンによるツッコミが入るかもしれません。

ブレイブルー学園校歌

はくめんたいこ

作詞：白面太子 作曲：森P 作

「白面太子って誰だよ！？てか森さんの名前が佐藤栄作みたいになつてるぞー!!」

カグツチにそびえ立つゝ蒼い紋章ゝ
仲間と語り合うゝ我らの学びやゝ

C T時代では♪ シューティングが当たり前♪

「おいなんか急に趣旨がおかしくなってますけど!!」

結局アラクネは♪ 火力が高いまま♪

ノエルもノエルで♪ 最初っからクソキャラだし♪

「クソキャラで悪かったな!!」

グラウンドにそびえ立つ♪ ふっとい大きなソーセージ♪

「それ私の中の人のネタだろうが!!」

あゝあゝブレイブルー学園♪ アオニソマルマデー♪

「アストラルヒートかよ!?! てかなんだよこの校歌!?! 途中から学校の伝統とか何一つ感じられないんですけど!!」

「ぐす……相変わらずいい校歌ね……」

「どこが!?!」

レイチエル校長はなぜか涙ぐんでいた。

ノエルにはこの歌に良さが何一つ理解できなかった。理解できる方

がおかしいのだが……

白面太子さんはノエルとアラクネが嫌いなことがわかる、そんな歌詞であった。

えーと、ハザマ使いの作者ですけれども私は別にノエルとアラクネが嫌いなわけではありません。

「次は卒業証書授与、呼ばれた生徒は証書を受け取りに来てください」

へんな校歌を歌ったあとは、いよいよメインイベントの卒業証書授与である。

これを受け取ることすなわち、この学校を卒業した証である。

「はじめに3年A組、担任のテイガー先生お願いします。」

「了解した。それでは読み上げるぞ、卒業証書、ジン・キサラギ」
「はい！」

ジンは返事をして卒業証書を受け取りに行く。

その姿はとても凛々しく美しかった、ツバキが発狂寸前まで自分を抑えている。

「続いて3年B組、担任のラグナ先生お願いします。」

「あいよ」

「A組はキサラギ先輩だけ！？1人だけのクラスだったの！？」

まさかの事実、なんとA組はジン一人だけのクラスだったのだ。なんという特別扱い、というか特別教室？優秀すぎるとかじゃなくて逆に問題があるから？

ノエルは思わずツツコミながらも、思っではいけないのだろうがジンのことを「かわいそう」だと思ってしまった。

「じゃあ読み上げるぞ。卒業証書、ツバキ・ヤヨイ」

最初是最優秀生徒のツバキである。
B組を代表する存在である。

「あなたは優秀な成績を収めましたのでここに評する。卒業おめでとう」

「ありがとうございます先生！」

ツバキはラグナと握手を交わし、こちらへと戻ってきた。

その後みんなも同じように名前を呼ばれ、卒業証書を受け取る。そして気がつけばノエルの番になっていた。

「卒業証書、ノエル・ヴァーミリオン」

「はい！」

ノエルは緊張しながらも、教壇へと上がっていく。

ラグナを前にすると、思わず顔を赤めるノエル。

「以下同文、卒業おめでとう」

「ありがとうございます」

「……よくがんばったな、ノエル」

「え……？あ……うう……」

最後にラグナがぼそつと言ったその一言に、ノエルは思わずため込んでいた涙を見せた。

だがここで泣いてはいけないと思い、その涙を必死の思いで飲み込む。

こうして、卒業式は一通り終わり、全員教室へと戻っていった。そして最後に、担任のラグナから全員に言葉が告げられる。

「みんな、ここまでよく頑張ってきたな、そんなお前らとも今日でお別れとは……本当に”ありえない”よな」

ラグナもみんなと別れるのはつらそうであった。

この3年間、ラグナも仲間の一人として皆と日々を過ごしてきたのだ。

「まったく本当に苦勞を掛けさせやがって、マジで大変だったっつうの……でもそんな日々が俺は好きだった。マジで楽しかった。」

ラグナはこの3年間を振り返り、自らの思いをみんなにぶちまける。楽しかった日々、辛かった日々、そしてその日々を快く受け入れていた自分を、ラグナはどうにも言えない表情でみんなに向かって話します。

「ツバキ、お前は優秀だったよな、いつもテストで100点取るから先生ちよつと意地悪で」ジンが毎日水曜日に食べる朝飯は？」
「って問題出したら、お前だけ答え書いて正解したよな」

「ぐす……目玉焼きですう……」

毎回満点を取り、ジンのプライベートに対しても動じずに満点を取る優秀なツバキ。

「マコト、おめえはいつも元気いっぱいに挨拶してくれたよな。お前のような生徒がいたからこそこのクラスは明るかった」
「うう……せんせーいいいい……」

勉強こそできなかったものの、いつも3年B組のムードメイカーになってくれたマコト。

「タオカカ、お前はいつもご飯だご飯だうるさかったなあ、でもお前が飯食ってる姿に、先生は幾度なく癒されたぞ」
「ニヤスウー、らくなせんせい」

1にご飯2にご飯、3、4が無くて5にご飯だったタオカ力。

「カルル、お前は策士でいつも先生をからかってくれたよな、おめえは強敵だったぜ」

「先生……ありがとうございました!!」

ラグナにとって唯一対抗できる存在であつた賢いカルル。

「ニユー、おめえは最初に比べて明るくなつたよな、明るくしすぎて先生ちよつとだけ後悔したこともあつたが、それもいい思い出だ」
「うう……うえーん!!ラグナ大好きー!ー!ー!ー!!」

最初は引きこもりだったニユー。だが今の彼女には笑顔があふれている。

「アラクネ、がんばれよ」

「うん、がんばる（アラクネ翻訳機あり）」

出番が少なかったアラクネ、正直すまなかつたな。

「ラムダ、お前はいつもおとなしかったけど、たまに可愛いところを見せてくれたよな」

「ラグナ先生……」

寡黙だったが、たまには存在感を見せたラムダ。

「ルナ、セナ、お前らはいっつも先生に迷惑かけやがって、マジでめんどくさかったけど、そう言う日々もいい思い出」

「な、なに言ってるんだよラグナ先生！う……うれしくなんかねえぞ！！」

「ラグナ先生、色々と楽しかったです。」

獣兵衛先生をめぐって、いつもラグナと競い合っていたプラチナの二人。

「すう……ジーンン！てめえはマジで面倒な弟だったが！兄としてお前は良く出来た弟だと思ってっぞーーーー！！」
「がしゃーーーーん！！」

「兄さーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！ん！！」

ラグナの言葉を聞き、壁を突き破ってきたジン。もちろんしっかりとシザーされました。

「さて……最後は……ノエルか」
「はい、先生」

ノエルは涙目になりながらラグナを見ていた。
もう何を言われてもいい、それらが全て彼女の思い出なのだから。

「お前は最後の最後まで迷惑ばっかかけやがって、お前の料理で何
度殺されかけたことか……」

「はい……」

「からかってもらっても飽きないやつだ。たまにミューになっ
て暴れることもあったなあ」

「ぐす……はいい……」

「だがよ、俺からすればノエル……お前と過ごしたこの日々が一番
楽しかったぜ、俺が高校3年生の時に初めてお前に会った時なあ、
こいつは面白いやつだっと思ってたんだわ」

「え……先生……あの時のこと……覚えて……」

「まさか俺の教え子になるとはな……ありがとうノエル、そしてあ
りがとうみんな！！最高の教え子だったぜお前らーーーーー！！
ーーーーー！！」

ラグナのその言葉と共に、全員が一斉にラグナへと向かっていく。
みんな涙をボロボロ流しながらラグナと抱き合う。途中ハクメン先
生方もやってきた。

ラグナはこの瞬間が最高の幸せだった。感謝しなかった。みんな
が彼の宝物だった。

今のラグナは、恐らく世界の誰よりも愛される最高の先生であった。
いつもぶっきらぼうで、いつもめんどくさそうにしていた。

だがなんだかんだで彼はいつもみんなの力となって、みんなを助け
た。

ラグナ・ザ・ブラッドエッジ、ブレイブルー学園3年B組の担任。

みんなは忘れない、彼という教師のことを……………

数日後……

ガラガラ……

「あゝ今日からお前らの担任になったラグナ・ザ・ブラッドエッジだ。この学校の卒業生でもある。」

ラグナはそう言って出席簿を取り出した。

「ノエル・ヴァーミリオンか、男子が女子の制服を着るな」
「私は女ですー!」

ノエルは”いつものように”ラグナにツッコミを入れる……
いつものように……

……あれ？何かがおかしい

「先生？ちよつと質問いいですか？」

「おお、なんだ？」

ノエルは息をのんで、禁断の質問をラグナにぶつけた。

「私たちって、つい”先日”に卒業したはず”………ですよね？」

ノエルのその言葉に、ラグナは不気味な笑みを浮かべ答えた。
とても面白そうに、そして嬉しそうに……

「だから言っただろうが、「そんなお前らとも今日でお別れとは……
…本当に”ありえない”よな」ってな」

今思えば、どうしてあの時ラグナは”ありえない”と言ったのだろうか。

その直後、レイチエル校長が教室に入ってきた。

「おはよう諸君、とても間抜けな顔をしてるわよ？」

レイチエルも何かを知っていそうな顔をしていた。

そしてレイチエルから、衝撃の一言がノエルたちを襲った。

「”ループ”は完了したようね、また3年間お願いねラグナ先生」

「ったくめんどくさいがしょうがねえな」

「ループ……だと……？」

ノエルが某オサレ漫画風に返したあと、ラグナは一からそれについて説明を話し始めた。

「お前らはな、”この学校を卒業したと同時に”、”再び1年生からやり直しになる”。そう、この世界はループしてるんだ。」

「ナ……ナンダッテ……!?」

ノエルはその言葉をしばらく理解できなかった。

というか、ループ設定がこの話の中でも適用されていたとは……
そっちの方が驚きであった。

「要はあるだ。お前らは一生卒業できないってわけだ。」

「どこのエヴァ。ジェリンだそれは――――」

衝撃の事実、彼等はこの学園に永遠に閉じ込められたのだ。

ブレイブルー学園、それは蒼が交わる学園。

全てが謎に包まれた、不思議な不思議な学園。

ハーデス先生の伝説は、終わることなく続いてゆく……

「つうわけで読者、またいつか会おうぜ」

「もうやだこの学校――――！！」

最終話・サヨナラの空、そして……（後書き）

ここまで読んでくださって、本当にありがとうございました――
――！！！！

あとがきinハーデス先生（前書き）

作者によるあとがきです。

あとがき in ハーデス先生

みなさん、トッシーです。

ハーデス先生もついに完結です。

え？ いや完結ですよ……”第1部”は。

ジヨ。ヨなんで何部あると思ってるんですか皆さん〜

この小説は私の大好きなスレを元に書いたもので、昔はスレでも話を書かせてもらっていました。

今はあまり書き込みも少なくなってきた、ちょっとでも知ってもらえればいいなといった感じで書いていました。

ブレイブルーで学園パロ、今思えば相性抜群ですねこの組み合わせは。

ラグナが某ジャンプ漫画の主人公に似てるからなのでしょうが、原作にとらわれずにここまで書いてくれました。

キャラはほとんどがキャラ崩壊しちゃっていますが、若干イメージできるようにしてます。

モロに銀。んなラグナ、ツツコミをするノエル、人情深いハクメン先生、暴走するツバキ、かわいそうなバング先生、憎みきれないハザマ先生。

イメージで出来てるのにながち間違っていないような、そんな感じがします。

そんなこんなで終わってしまったわけですが、終わるとまた始まるようにできてるわけであの学校は。

ここでひと段落付けますが、時が経ったらまた、書こうかなと思っています。

そうですね、ブレイブルー3が稼働したあたりにまたお会いしましょう。

この作品関連の短編やちょい長編は、なんの前触れもなく書くかも知れません。

前触れなく作品始めることで定評のあるトッシーですんで、そこら辺は優しい目で見てくださいね。

ではみなさん、ここまで読んでくれて本当にありがとうございます
たーーーーー！！！！

ブレイブルー……起動！！

キャラ紹介フェイズシフト1（前書き）

フェイズシフト1特別版です。

ネタバレ嫌な人とかは避けてくださいね

キャラ紹介フェイズシフト1

？カズマ・クヴァル

六英雄らが高校生だった頃のブレイブルー学園2年B組の生徒、記憶喪失の気弱な青年。

おとなしい性格で押しに弱く、読書が好きなインドア派、人付き合いが苦手で人と話すときは笑顔でごまかす癖がある。

好物はゆで卵、どんな料理よりも大好きであり彼にとっては至福の一時。

同じクラスのトリニティのことが気になっており、彼女に近づくために他の六英雄らに相談をするのだが……

現在のハザマとは似通う場所が多い。

？トモノリ

ミツヨシの弟でカズマの後輩、だらしないカズマをバカにしている節がある。

しっかりものの兄よりもさらにしっかりしており、一度己が決めたことを最後までやり通す努力家でもある。

兄弟仲は悪いが、時としてはミツヨシとの友情を見せることもある。

先輩のカズマをどちらかというと毛嫌いしており、今回の彼の行動

もどつでもいいと思っていたのだが……

多分この小説で1、2を争うほどの堅物キャラである。

特別編：ウロボロス少年の青春（前書き）

この話は特別編です。

ハーデス先生が最終回を迎えた後にフェイズシフト1が発売してしまい、作者的にこのネタをどうしても使いたかったため、特別に復活させました。

今後もしこういうことがあるかもしれませんがね

特別編：ウロボロス少年の青春

ラグナ達が平和な学園生活を送っている現在よりもずっと前の話。現在では教師となっている、ハクメン達六英雄がまだ学生であった頃。

このころから時代はかなり進歩しており、特にこのブレイブルー学園は現代の進化の象徴と呼ばれていた。

数年後にカグツチに移転することになるのだが、この頃はイシャナと呼ばれる空中都市に存在していた。

ブレイブルー学園の治安は現代と変わらず、今と何も変わらなくとも平和であった。

学生達にも最高の環境が与えられており、特にこのころ最も盛んとなっていた”魔法”の授業では他の学校を寄せ付けぬほどに発展していた。

だがそんな平和な学園にも、もちろん治安を乱す者も存在する。

そんな個性溢れる学園の中で、少年”カズマ・クヴァル”はひっそりとこの生活を満喫していた。

「はぁ……もう朝か……」

緑色の髪の毛をした、体育系というよりは読書が似合いそうな華奢な体つき。

カズマ・クヴァルとは、まさにそれを体現したような少年であった。彼はあまり他の人達とは付き合わず、授業が終わると図書館に行くか、家にまっすぐ帰るかである。

数年前からこの学園の寮に住んでおり、この学園での生活は長い方である。

だが特に部活などにも入らず、こうやってそれなりに過ごしてきた

のだ。

そんな彼の楽しみはというと、学食のランチについてくるゆで卵くらいであろうか。

刺激のない生活、カズマはそんな生活を続け、いつのまにか高校2年生になっていた。

「毎日朝起きて授業に出て、たまの休みも家でゆっくり……僕はこんなんで大丈夫なのだろうか……」

高校2年生というと、そろそろ長い学園生活にも別れを告げる時期である。

就職や進路についても考える時期であるし、カズマの成績は特に飛び抜けているわけでもない。

有名な大学に入れるわけでも、一流企業に就職できるわけでもない。先も不安ながら、今の生活にも不安がいっぱい、こういう時期にうまく学生生活を過ごせない人間がこれから先の未来をどう生きていけばいいのだろうか。

悩める少年カズマは、恋いもしたことも無いのだから……

だが、そんな彼にも女性と全く接点が無いわけではない、一人彼とそこそこ話をしてくれる少女がいる。

と、カズマの部屋のドアがトントンとなる。そのドアの向こうに噂の彼女がいるわけだが。

「カズマさん、トリニティ・グラスフィールですけど」

カズマがそのドアを開けると、プラチナブロンドのふわふわとした髪にのほほんとした雰囲気、眼鏡の少女が立っていた。

”トリニティ・グラスフィール”……

カズマの同級生であり、この学園トップの主席のナインこと”コノエ・マーキュリー”の唯一の親友でもある少女である。

彼女はナインほどではないが、錬金術の授業ではトップの成績を取っており、その髪の色に肖り、人々は彼女を「白銀の錬金術師」「ブラチナ・ザ・トリニティ」と呼んでいる。

いわゆる影の薄いカズマにはもつたいないほどの少女がそこにいるわけである。

「これはこれはトリニティ・グラスフィールさん、おはようございます」

カズマはトリニティにそれなりに挨拶をする。

話しかけてきた相手にはそれなりの笑顔を見繕うのが彼の癖であった。話しかけてきた相手を嫌な気分になせないようにと配慮していたらこうなってしまうのだという。

そしてトリニティの用事は、前にカズマに貸したノートを返しにもらいにきたとのことであった。

カズマはそういえばといった感じで、きちんと本棚に収納してあったそのノートをトリニティに返す。

「今回は助かりました。ありがとうございますトリニティ・グラスフィールさん」

「いえいえ、困ってる人は放っておけませんからあ」

お礼をするカズマにトリニティはのほほん口調で言う。

トリニティはいつもそんな感じである。笑ったときも怒ったときもいつも語尾に波線を引いたようなしゃべり方をする。

マイペースと言うべきか、それとも人が良いだけなのか、カズマから見たトリニティはそのどちらでもあった。

そんなトリニティは帰り際、カズマにこんなお誘いをした。

「そうだカズマさん、今度一緒にお茶でも飲みに行きませんかあ」

「？ナインとその妹さんも誘うんですけどお」

トリニティのゆったりとしたそのお誘いに、カズマは一瞬戸惑う。トリニティと二人でお茶をするのでさえ緊張するというのに、あのナインにその妹さんまで来るといふのだから。

いや、トリニティと二人でお茶というなら、日頃お世話になってるお礼程度でお付き合いできるのだからまだいい、問題はその場にナインがいることである。

ナインことコノエ・マキユリーは、この学園でも特に恐れられている存在であった。

その正確はキツイの一言にあり、告ってきた男の心を完全粉碎した数は数知れず。話しかけてきた若干エリートな同級生達も、その性格のせいでダジダジに。

とまあ正確に言つと、ナインにとって親しい人物は妹のセリカとトリニティくらいだけなのだ。

親しいというわけではないが、隣のクラスの生徒会長であるハクメンは彼女とは唯一口喧嘩が出来る生徒で、この学園一の不良であるユウキ・テルミは彼女にちょっかいをかけれる唯一の怖い者知らずである。

同級生のヴァルケンハインは彼女のプレッシャーに一切動じず、そしてナインが唯一認めた男子生徒はというと、獣人のミツヨシである。

ナインに関わってる人物は、青春真っ直中の女子高生を除けば、化け物に等しい男子生徒しかいないのである。カズマが関わって無事で済む相手ではないのである。

「い……いやぁトリニティさんとお茶ならまだしも、僕みたいなさえない学生があんなナインさんと関わるなど恐れ多いですよ、すいませんが今回はちょっとお断りします。ああいえ！勘違いはしないでくださいよ！！あなたがナインさんと仲が良いからとか、そんなこ

とはまったく関係ないですからね！ただ僕の度胸というか気持ちがいさいつてだけでその……」

と、断り文句を悩み言葉がうまく回らないカズマ。

だがトリニティは、そんなカズマに対しても笑顔で、得意のマイペースで返した。

「いえいえ、そんな気を遣わなくてもいいですよお、じゃあまた今度お願いしますね」

トリニティはそういつて、カズマの部屋から去っていった。

トリニティを笑顔で送り届けた後、カズマはしばらく後悔をする。ナインがいるからとか関係なしに、カズマはいつも何かにつけて人からの誘いを断ってきた。

学園祭の打ち上げも、転校生の歓迎会も、クラスメートの飲み会も、全部彼は断ってきたのである。

今回のような女性からの誘いというのはチャンスのはずなのに、カズマは一歩前に進むことが出来ずにいた。

こんな時期だし、少しのチャンスでも生かさなければ、そう思いながらカズマは今日も学校へ行く。

数日後……

この日はカズマが待ちわびていた、木曜日のランチYが学食で出ている日であった。

木曜日のランチYには、サンドイッチやハンバーガーに、ゆで卵が

一つついてくるランチである。

カズマはそのサンドイッチやハンバーガーに惹かれた日など1日も
ない、彼が笑顔を見せるのはちょこんとそこにあるゆで卵だけ。

カズマはサンドイッチやハンバーガーを味わうことなくぺろっと平
らげ、そして残ったゆで卵を取り出す。

その形、そのシンプルさと満足できるその味、カズマにとってはゆ
で卵は至高の一品であった。

この瞬間、ゆで卵を食べるこの瞬間こそが、カズマの生きる全てで
ある。

そしてその瞬間が訪れようとした時、遠くからふわふわのプラチナ
ブロンドがこちらに近づいてきた。

「あ、カズマさん、これからお昼ですかあ」

「あつ……」

そのふわふわのプラチナブロンド、トリニティ・グラスフィールは
人の唯一の楽しみにまでマイペースで介入してきた。

そしてその隣には、噂をすればこの学園トップの成績を誇る、ナイ
ンがいた。

ピンクの長い髪を靡かせ、魔法使いのようなとんがり帽子をつけて
いて、その顴からはキツイ視線がカズマに向けられていた。

その目は弱気なカズマからすれば、ゴミを見るような……そんな目
に見えた。

だが目がいくのはそんなニンだけではない、トリニティとニン
に並ぶ三人目の姿。

茶色のポニーテールをした、いかにも元気だけが取り柄ですとアピ
ールしている少女がそこにいた。

その少女の名前は”セリカ・A・マーキュリー”、前にトリニティ
が言っていたニンの妹である。

ニンに妹がいると知ったときは、最初はどんだけキツイ妹なんだ

ろうと悪いイメージを抱いていたが、その姿はあのナインからは想像もできないような可憐な姿で、とても姉妹には見えなかった。

「トリニティさん、もしかしてこの人が前に言ってたカズマさん？」
「そうですよぉ」

セリカはカズマを興味津々の眼差しで見ている。

カズマにとってその眼差しは、ナインとはまた違った意味で恐怖を感じた。

真つ直ぐすぎて、全てを信じて疑わない、その誠実すぎる眼が逆に怖かったのだ。

そんなセリカに、姉であるナインが容赦なくこんな言葉を投げかける。

「ちょっとセリカ、そんな胡散臭そうなやつに近づかないの！絶対頭の中で卑しいことしか考えてないわよこいつ」

本人が目の前にいるというのになんという言いぐさ、人を見かけで判断するような人間の典型的な例である。

カズマはそんなナインの言葉に、思わず苦笑いをする。

悪口を言われるのはナインが始めてではない、根暗だの付き合い悪いだの、あげくの果てにはなんかキモイだの長い学生生活で色々言われてきている。今更そんなこと言われても傷つくはずはないのだが、面を向かって堂々というものだからさすがにちよつとダメージはでかった。

一方でカズマにそんなことを言うナインを、セリカは必死に否定している。どうやったらここまで姉と妹の性格に差が出るのだろうか。そしてセリカが何か言つとナインがさらに何かを言つものだから、それは次第に喧嘩となり、ヒートアップしていく。

カズマはとても居づらくなったので、この場を離れようとする。

「あの、僕もう昼食終わったので、すぐにこの場を離れますから、喧嘩はその……やめてください」

と、弱々しく言うカズマにナインが、「私たち姉妹の喧嘩に口出ししないでちょうだい！」と怒号、じゃあどうしろって言うんだ！とカズマは心の中で叫ぶ。

そしてこの場を離れようとするカズマを、トリニティは優しく引き留めた。

「すみませんその、ナインは超弩級のシスコンなものですからあゝ、そんなカズマさんだけじゃないですよ、今までセリカさんに近づいてきた男達は9・5割ナインに始末されてますから」

ああやつぱり……とカズマはナインのシスコンを確信する。

しかしさすがの姉あつての妹、しかも性格も最高に良いのでこれはモテモテだろうなあとかズマは頭の中で思う。

そしてモテモテなのは確かだが、姉の存在がそれを邪魔しているとカズマは頭の中で思う。

そんなカズマの心を見透かすかのように、ナインは「今なんか失礼なこと考えなかった？」とかズマにメンチを切ってきた。この姉ちゃんこっわー！！とかズマ心の中で顔真っ青。

なんやかんやで結局、ナインをトリニティとセリカが説得し、カズマと4人でお昼をすることに。だが選り取り見取りの3人の昼食に混じって白い何かがポツンとかズマのテーブルに転がっているのはいうまでもない。

カズマはもう昼食を終わらせている、メインディッシュを残して、そのメインディッシュを笑顔で頬張る姿を今時の女子中学生で見せるのも気が引ける。

カズマはゆで卵のカラを、こっそりとちょびちょび取っていたとい

う。

「にしてもこの海鮮丼、どうもコクが足りないわね、すいませーん」と、海鮮丼を頼んだナインが学食担当の職員を呼ぶ。

コクがどうか言っていたから、何か付け足すのだろうか……

そして数分後、店員はたくさんの調味料を持ってきた。その半分が砂糖やガムシロップである。

ナインは「あんがと」と言うと、まずはマヨネーズを容器が空になるまでぶっかける。

「げっ!？」

と思わずドン引きしたのはカズマ。

他の二人はというと、まるで日常茶飯事ですと言わんばかりにスル！。

その次に砂糖を大量にかける。もはや海鮮丼のネタが見えなくなっていた。

次にガムシロップを、そして足りないと一言呟いてケチャップまで容器が空になるまでぶっかけた。

その結果、ナインの目の前にあるものは、海鮮丼とは遠くかけ離れた違う何かになっていた。

そしてナインが満足げな顔で、それを一口食べると。

「うまあーーーーー……い!!」

と高らかに叫んだ。

今のって具乗ってた？ケチャップとマヨと砂糖の塊を救って食ってただけでは……

カズマは今にも吐きそうな顔で、ナインのそれを見ると、ナイン

がまたも不機嫌そうな顔で……

「なによ？」

と睨んでくるので、カズマは「こっちのほうかなによ！？」と言いつ返したい気持ちを抑え口に手をやっていた。

「というかあんた最初「コクが足りない」とか言っていたが、それもうコクとか関係ないし。」

マヨラーとかケチャラーとかそういう物では表せない、甘党を乗り越した何か、それがナインにつけられる唯一の呼称であった。

気持ち悪そうな顔をしているカズマに、その甘党を乗り越した何かの妹であるセリカは……

「ごめんね、お姉ちゃんいつもこんな感じなんだ」

と、その顔は呆れるとかではなく、当たり前前の光景と理解したような、何かを悟ってしまった後のような顔をしていた。

よくよく思えば先ほど調味料を大量に持ってきた職員も、なんの違和感も覚えずそれらを持ってきて、それを見ても何食わぬ顔をしていた。

もはや職員の中ですら「甘党を乗り越した何か」と思われ有名になっっているのだろうか、ナインとは恐ろしい人物であった。

だがこんな光景を見られ、なにかとカズマは楽しそうにしていた。

これが学園生活の楽しみなのだろうか、こうやって団らんすることは学生でなければ味わえない至福なのだろうか……

今改めて、カズマはトリニティに感謝をする。

「トリニティさん、今日はありがとうございます。おかげで面白いものが見れましたよ……ちょっと衝撃が強すぎましたが……」

「うちの妹のこと？ だったら後であんたを全力で切り刻むから」

「いやどちらかというと妹さんよりもあなたのほうが衝撃度が高すぎました!!」

警戒するナインにカズマはきっぱりと否定する。

そのやりとりを、トリニティとセリカも笑って見ていた。

そしてトリニティは、カズマの手を取りこつ笑顔で一言。

「じゃあカズマさん、また機会があったら、次こそお茶飲みに行きましようねえ」

その時であった。

トリニティの笑顔と、その言葉を聞いた時、カズマは一瞬顔を赤らめる。

そして、心臓がトクントクンと鳴り響いた。

この感覚は、もしや青春というやつなのでは……カズマはそんなことを頭の中と思う。

カズマは前とは違い、その誘いをなんのためらいもなく引き受けた。その瞬間ナインの顔が引きつったのが見えたが、今のカズマにはどうでもよかった。

もしかしたら、学生のこの大事な時期に、ようやく自分は青春できるのか……

カズマはそう心を躍らせ、今日は家へと帰っていった。

翌日……

と、昨日の胸の高鳴りが嘘のように、カズマのテンションは落ちて

いた。

青春するといったって、自分はまともに男性はおるか女性となんか話したことなんてない。

そう、カズマに足りていなかったのはそう、”自信”である。

人とうまく付き合うための”自信”、常に笑顔で対応するだけでは決してうまくいくものではない。

カズマは深く悩んだ。トリニティと二人つきりでもしも言ったときには、あのマイペースにさえ軽くひねられてしまいそうなほどのカズマ自身の心の弱さ。

かといってトリニティの側にいるのは、元氣印のセリカは良いとしても、あのナインがいる。

ナインの顔色を伺いながらなど、一回どこかへお茶に行くだけで疲労がマックスになりそうだ。

なんとか、トリニティと二人だとしても、ナインがいたとしても、うまく自分を出せるようになるためには……

「相談……するしかないか……」

カズマはぼそつと呟く。

カズマには必要があった。あの3人と仲良くなるために、まるで接点のない人達と一度絡んで見る必要があった。

そういえばあの3人は全員が女性、思えばカズマには相談するための同姓の友達がいらない。

そう、うまくつきあえる男子の友達がいらないのだ。

まずは同姓とうまくつきあえるようになる。それと同時にどうやったら女性の前でうまく自分を出せるのかを相談する。

こうしてカズマの戦い、青春という名の戦いが始まった。

最初に相談する相手は決まっていた。

カズマ的に、最も接する機会の多い後輩。

名は”トモノリ”、あの”ミツヨシ”の弟である。

白い毛並みを持つ猫獣人で、兄と同じく厳しい家で生まれ育ったとてもしっかりとした後輩だ。

トモノリとカズマは役員の仕事で一緒になることが多い、だが優秀に仕事をこなすトモノリに、カズマはいつも一歩下がって仕事をしていた。

いやそれではだめだと、後輩一人に強気に接することが出来ない先輩はだめだとカズマは自分に言い聞かし、トモノリに話しかける。

「や……やあトモノリさん、お仕事どうですか？」

「ああん？」

最悪の出だしだった。

元々トモノリはカズマのことが嫌いであつたため、話しかけられたトモノリは不機嫌そうに返事をする。

ナインといいトモノリといい、なんでこう周りにいるキツめの方達はこのオーラが絶大なんだろう……

そんなことを思いながらも、カズマは勇気を出してトモノリと接しようとする。

「ト……トモノリさん、僕ちょっと今悩みがあるんですよ、女の子との関係的な……なんというんでしょうその……トモノリさんにはモテモテのお兄さんがいますし、トモノリさんもそういうことには自信をお持ちかと……」

「兄と俺は関係ない、なんだ貴様は俺を茶化しにきたのか？全くみんな揃いも揃って俺を兄と比べやがって、殺されたくないれば去れ」

と、トモノリは去っていった。

殺されたく無ければって……ちょっと話をただけじゃないですか……

とまあトモノリは兄のミツヨシとは仲が非常に悪く、兄の話はするべきではなかった。

カズマは自分の人間関係の悪さに多少の絶望を感じながら、じゃあ今度はその兄の方に……と気持ちを入れ替える。

思えば兄のミツヨシは、カズマと同級生であった。

「俺と契約して魔法使いになってくれよ」

「どこのインキュベーターですかあなたは!？」

兄のミツヨシに話しかけると、先ほど話していた弟とはうって変わってものすごい気さくな人だった。

黄色いパーカーを着ている猫獣人である。その愛くるしさに心奪われた女性は数知れず、あのナインですら例外ではない。

そしてさすがはクラス一のモテ男、色々な話題を知っていた。

「がははは!どうだ昨日思いついた口説き文句だ。名前も近々ミツヨシから獣兵衛に変えようかと思っているのだが」

「いやいや名前は似てますけども、近くににいる魔法少女の中の人と同じですけども!あんたの中の人とは違うでしょ!」

話してみるとあのカズマでさえも気楽にツッコミを入れられる仲になってしまった。

まさかミツヨシくんがこんなにも話しやすい人だったとは……獣臭いとか思ってたごめんね、とカズマは心の中で謝罪をする。

思えばミツヨシくんは、あのナインと唯一それなりに仲良く接している男子生徒であった。

学園のニュース板には、二人のツーショットの写真が掲載されていたこともあったなど、二人の仲はとても良好のようであった。

この人なら、女性との付き合い方など1から100まで知っているだろう。カズマはトリニティのことで相談する。

「おお、まさかカズマがこれほどまでに青春を謳歌しようと前向きだったとは、図書館で本ばかり読んでいる根暗くんではなかったんだなあ」

やっぱりミツヨシもカズマにそんなイメージを抱いていたようであった。

そしてミツヨシは、己の青春を、これからカズマがどうしていいかを必死に語り出した。

「いいかカズマ、何事も最初は肝心だ。トリニティは基本のほほんとしているが根はまじめなやつだ。間違ってもいっちゃん最初から飛ばさない方がいい、家に連れ込んでインフェルノディバイダーをヘルズファングして、トリニティのカーネイジシザーをブラッドカインするような真似だけはするな」

「ぼぼぼ、僕はそんなこと一切喝采思った事なんてありませんよ！！」

若干ラグナの技名で隠れているが、要は男の欲求話である。

カズマは見たまんま奥手な少年である。なので最初から間違いが起きるようなことはないだろう。

そして最後にミツヨシは、「自分の思ったように行け！」とアドバイスした。

そしてもう一つ、近くの食い物屋に今ハクメンとナインがいるから、そいつらに自分から声をかけていって、やつらの覇気に慣れをつけてこいと言った。カズマにとってとてつもないほどの無茶ぶりであ

った。

「んで？なんの用よ？」

「私たちは話がある。まあ仕事の話であってこの女とプライベートな話などこれっぽっちもないのだが」

二人を見つけ声をかけると、いきなり二人は戦闘を開始する勢いでそこにいた。

ナインの向かいに座ってる白い仮面を被った筋肉ムキムキの、なんか鎧っぽい物を着てるのが”ハクメン”である。

ハクメンの言葉の後に、ナインが反論し、その反論にハクメンも乗っかる。

「ただ仲悪いんだこいつら、そしてなんちゅう気迫だ……とカズマは帰りたい気持ちを必死に抑える。

ちなみにナインが「まあミツヨシから話は聞いてるし、本当に仕方ないから少しだけならあんたの相手をしてあげる」と言ってた。ミツヨシくんまたなんという気の利かせようで……

「んで、相談つてなによ？ああその親子丼食べたいなら食べていいわよ、私のおごりだし……」

相談事があることまでナインは知っていた。ミツヨシくん、君の後押しは無駄にはしませんよ。

ちなみにその親子丼と言われ見てみると、黄色と赤い”何か”がミックスしており、大量のチョコチップの上に白い粉が大量に降り被さっていた。

「親子丼ナイン様スペシャル」である。新手的嫌がらせか！とカズマはツツコミを入れつつ、食わないと殺されると一口食ったつけ死にそうになった。

「トリニティさんとお茶に行くことになったら、どうやって接すればいいですか？」

と、カズマは今までに比べてとても単純に質問した。

おそらく大抵の悩みはミツヨシのおかげで解決しており、この場から立ち去りたいという気持ちの方が強かったのもある。そんな質問に、ナインとハクメンは口を揃えて言った。

「自分で考える」

ですよね、とカズマは笑顔で「わかりました。」とその場を立ち去ろうとする。

そして店から出ようとした瞬間、ナインがぼそつと一言、アドバイスの口調で言った。

「一つだけ教えといてあげる。トリニティね……怒らせたら大変だから……そこらへん気をつけて」

あのトリニティが、怒ると大変……

カズマはその言葉がうまく想像できず、「気をつけます」と一言言っただけで去っていった。

こうして、カズマは学園生活で初めてそれなりの人達と話をし、また一つレベルが上がった気がした。

こうして数日後……

トリニティに、「今度二人でお茶飲みに行きませんかあゝ」とお誘いが。

これはひょっとして最後のチャンスでは……カズマはミツヨシに言われたこと、自分からたくさんの人達に話しかけた経験などを思い出し、いざ学園生活最初の青春へと足を運ぼうとしていた。

そして待ち合わせ場所の公園に、お互い休日だというのにカズマは制服、トリニティはフードとおしゃれの「お」の字も見せずに二人で歩き出した。

「いやあ鳥のさえずりが聞こえてきますねえゝ」

公園を歩いている最中での自然の声にもトリニティはゆったりと干渉するのだから、歩きながらもカズマに眠気が襲ってくる。

しかしあまりぼあくとしてしていると、トリニティが怒るかもしれない。

前にトリニティが言った、「トリニティは怒らせたら大変」という言葉が今での頭の中から離れない。

だが逆にカズマとしては、怒ったトリニティを見てみたいという欲望も少なからずあった。

ひょっとしたら急激に早口になったりするのだろうか、そんなことを思っていると、隣から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「トモノリゝ、ボールが行ったぞゝー!!」

「おい兄貴、そんな笑顔は見たく……」

一瞬、カズマとトモノリの目が合う。

カズマの中で「ん!?」という言葉が大きく表示された。

そして少しの沈黙の後、トモノリはというと……

「ミ……ミツヨシゝ!!」

といかにも仲良し兄弟ですとアピールをする。
演技にしては臭すぎる、というか下手すぎる。

兄弟でこんな公園までわざわざこんな日に遊びにくるはずがない、
いやでももしかしたら偶然か…… そう思っていると……

「あらカズマさん、あれ……」

トリニティに言われて前を見ると、隠れている…… にしては隠れ切れていないセリカを発見。

そして左を見ると、ナインがなにやら指示を出しているように見える、その隣にはハクメンが腕を組んでいる。

セリカとカズマ達の目が合う、ナインとハクメンもそれに気づいたようだ。

と、セリカとナインとハクメンが不自然なくらいガチガチな動作でこちらに近づいてきた。

「や、やあカズマさんとトリニティさん、ぐ…… 偶然だねえ」

あきらかに偶然には見えない、先ほどの動作を見るに、ずっつと見られていたよう……

カズマが「いやあの……」というとナインが「ほ…… 本当に偶然ね！」と横から入ってきた。

隣のハクメンが「そんな演技せんでも、素直に言えばゼエエエエエー！」と何かを言い足そうにしていたが途中ナインに殴られ悲鳴に変わった。

もしかしたら僕たちのことが気になってつけてきたんじゃないかとカズマは思ったが、気を悪くしてはいけないと思い、「ぐ…… 偶然ですなえ」と笑顔で返した。

トリニティも「偶然ですなえ」とゆったりと返している。

こうして偶然であったナイン姉妹＋ハクメンに別れを告げ、トリニティが指定した喫茶店へ……

「うわ、結構おしゃれなところですねえ」

とカズマが言うとおり、トリニティの行きつけの喫茶店はとても綺麗なところだった。

よくナインとセリカと3人で行っているらしい、特にテラス席で飲むロイヤルティーは格別なんだとかで……

あの時は4人だったが、今はトリニティとカズマの二人だけであった。

二人は今まで色々話せなかったことを話す、まるでトリニティはこの時を待っていたかのようにであった。

例えばトリニティとは中学時代から一緒のクラスで、ちよくちよく話などもしていたが、こうしてゆっくり話すのは初めてであった。これが青春か……カズマは若干緊張した面持ちでお茶を啜っていた。

「でも、こうやってカズマさんと話せる日が来るなんて、私、ずっと怖かったんですよ……カズマさんがいつかどこかへ行ってしまうんじゃないかって……」

「どうして……ですか？」

「記憶……戻られないんでしょう？」

そう、カズマ・クヴァルは記憶喪失なのだ。

気づいた頃にはこの学園にいて、今をこうして生きている。

トリニティが怖かったというのは、カズマが記憶を取り戻したらどうなるのかということであった。

記憶が戻ったら、元いた場所に帰る……最悪道はずす何かのきっかけになってしまうのではないのか……

だが、今この時までカズマにはそういう予兆は一切ない、記憶が無

くとも”現在”を作っている。
トリニティは優しくカズマの手を取りこう言った。

「最悪記憶が戻らなくても、これから作っていけばいいんですよ、だからあせらないでください、焦ったら……大事な物まで失ってしまうかも知れませんか……って私ずっとカズマさんに言いたかったんです」

大事な物を失っていたかも知れない……

そういえばいつのまにかカズマにとって昔の記憶などどうでもよくなっていた。

だがもし、何かの拍子に記憶を取り戻したいと強く願っていたら、そういう自分が生まれてしまっていたら……

カズマは胸に手をやり、そして強く握りしめた。

そしてゆっくりと息をし、トリニティにこう……今までの笑顔を見繕っていたカズマとは違う、本当の笑顔で言った。

「僕は今、カズマ・クヴァルとして、とても楽しく幸せな日々を過ごしていますよ。これもあなたのおかげですよ……トリニティ・グラスフィールドさん」

そのカズマの言葉に、トリニティも笑顔で返した。

二人が最高にいい雰囲気になっている。そうか……この瞬間が青春の……気持ちが暖かいと本気で思える瞬間なのか……

ゆで卵を食べるときとは違う幸せと思える瞬間、自分で成し遂げた達成感にも似た気持ち。

カズマはこの最高の瞬間を噛みしめていた。

そしてトリニティは、この瞬間の中蔓延の笑みでこう言った。

「それで、こんな私たちを見て楽しいですか？」あなた達」？」

一瞬で場が静まりかえった。夏が冬に一瞬で変わったような、そんな感じがした。

周りを見ると、ものすごく遠くの席でコーヒーを吹き出しているミツヨシとトモノリが、その隣の席でフォークを持ったまま固まるセリカとガムシロップ容器を持って固まるナインと腕を組んでいるハクメンが……

この5人はカズマとトリニティの事が気になって、今この瞬間までずっと目をこらして、胸を高鳴らせて見ていたという。

トリニティはそんな5人の元へ、笑顔で近寄っていった。そして離れ、

「カズマさん、”真の恐怖”というものを見たくないのでしたら、耳をふさいであつちを見てることをオススメしますよ。」

カズマはすぐさまトリニティの忠告を受け入れ耳をふさぎ視線を後ろに向ける。

先ほどまでトリニティの怒りを見たが、ついていた自分はどこへやら……だが確かにトリニティがキレるその瞬間を、カズマは異様な覇気を感じ取ってしまったのだ。

見たらきつと三日は飯が喉を通らないだろう、見ておけばよかったという後悔よりも、見なかった方がよかったという後悔の方が強く出るだろう。

こうしてカズマは耳をふさいだ、だがふさいだ穴から「ぎゃあああ
あああああああああああああああああああああああああああ
！！」という叫び声が大音量で聞こえてくる。

ちらつと見てみると、あのナインやハクメンが正座で首を下へと向けていた。カズマはすぐさま視線を後ろに戻した。

そしてカズマは、一言こう呟いた……

「ああ……これが青春ですか……」

カズマ・クヴァルの青春は、まだ始まったばかりである……

「んで、なんで俺様出てないの？」

「俺も出てねえぞ、主人公なのに……久々のハーデス先生なのに……」

境界の向こう側で、ハザマとラグナの声が寂しく響き渡った……

特別編：ウロボロス少年の青春（後書き）

どんどん書いてるうちに、「もしもカズマがテルミと出会わず、平凡な学園生活を過ごしていたら」というIFストーリーっぽくなっ
ていました（笑）

そのせいかメインキャラのハザマが登場せず、主役のラグナが登場
させる場所を作ることができませんでした。

フェイズシフト1は元々学園物という面が強いストーリーになって
ましたから、ハーデス先生に乗っけるのはそんなに難しくはありま
せんでした。

今までのハーデス先生とはまた違った部分があっただけかもしれませ
んね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2781m/>

3年B組ハーデス先生

2011年5月15日04時23分発行